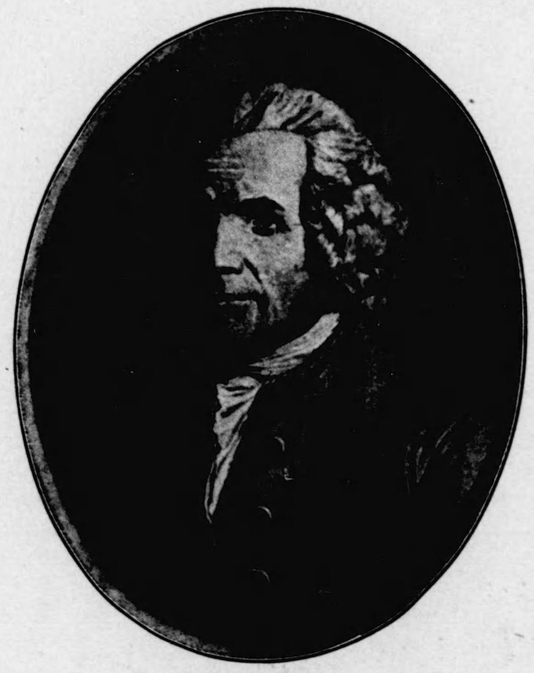
設

著オソル

懺悔錄

譯江長田生
榮杉大



新潮社出版

解説

ルソオは千七百十二年六月二十八日、ジュネエヴの一時計屋の子として生れた。母は、彼を生み落すと間もなく死んで了つた。父は自分勝手な享樂家で、他人とのいさかひが絶えなかつた。しかも氣が弱くて眞面目に子供等を教育することが出來なかつた。この親子は夕食後共に一册の書物を讀み出して思はず徹夜して了ふ事などがよくあつた。それはルソオが七つ位の時のことで、書物と云つたらプルタアクの英雄傳や、その他烈しい感情の盛られた小説類だつたのである。そんな早熟的な讀書は當然ルソオの想像力を過度に刺戟したり、その感性を過敏にしたりした。千七百二十二年、父はある軍人を傷つけた爲めにジュネエヴから身を隱した。缺席裁判で有罪となつた父は三ヨンに逃れて再婚した。そしてルソオは、從兄弟のベルナアルと共にボッセエの牧人ラムベルシエのところへ寄寓させられた。其處での生活こそは、彼を自然の美しさにあこがれさせた。その後、ジュネエヴへ歸つてから、彼は裁判所の書記のところへやられたが、末の見込みがないとて追ひ返された。次にある彫刻師のところへ徒弟となつて行つたが、散々に虐待され、その結果彼はものをごまかしたりする惡癖がつくやうになつた。この時、彼の唯一の慰めは、讀書だつた。何の選擇もなく、たゞ狂ほしい程の亂讀であつた。千七百二十八年三月十四日、彼は遂にジュネエヴから逃れて、數日間郊外を彷徨し、ある僧侶に救はれて、カトリックに改宗すべくアヌシイのド・ワレンス夫人のところへやられた。夫人は若くて美しかつたので、ルソオは忽ち魅惑され、自分をカトリック教徒と信じるやうになつた。彼女は開けつ放しで、笑ひ上戸で、永久に朗らかな女だつた。同時に、何等主義方針のない、貞操觀念に缺けた、多趣味でふしだらな女だつた。

国立国会図書館蔵書
国立国会図書館
25.2.21
200522

ルソオは彼女の紹介でトリノの救護所へ行き、改宗した。そして二十フランきりの金をポケットにして再び街頭に立つた彼は、トリノをさまよつた。毎朝王の彌撒に出席して初めて音樂に對する趣味を覺えた。が、嚢中一文もなくなつたので、店から店と渡り歩いて器物類にしるしを彫らせて貰つたりした。ある若い女商人に可愛がられて數日間その家に置いて貰つたが、彼女の夫に追ひ出されて了つた。次いで從僕となつて、ある老伯爵夫人の所へ行つたり、また別の伯爵家に住み込んだりした。後者では大いに優遇されながら、彼はバアクルといふあるジュネエヴ人の道化者に心醉して了ひ、彼と一緒にトリノを立ち去つた

かうして千七百二十九年の春、ルソオは再びワレンス夫人の許に歸つた。夫人の交際するあらゆる方面の人々と彼も口を利く樣になつたし、とにかく夫人の雜多な教養は彼に色々の事を教へた。彼はアヌシイの神學校へ入學させられたが二ヶ月で歸され、次には寺院の音樂師の所へやられたが、音樂師がある修道士と爭つて町を去るに及び、ルソオもリヨンまでついて行き、彼が通りのまん中で倒れて了ふと、ルソオは彼を見捨てゝまたアヌシイへ歸つて來た。ワレンス夫人は不在だつた。彼女の侍女のメルスレエがフリブウルの父親の所へ行く事になつてゐるといふので、彼は彼女を其處まで送りとゞけた。それからは冒險の連續だつた。そして千七百三十年の冬をヌウシャテルで過したが、其處で窮乏のどん底に落ちた。

翌三十一年四月のある日、ブウドリイのある宿屋で知り合つた一師傅に隨いて、彼はフリブウルやベルヌやソルウルへ行つたが、佛國大使はこの師傅の詐欺取財を知り、ルソオを不憫に思つて、彼を引き止め、次いで、巴里のある家庭へ世話をした。が、ルソオは主人の叔父が强慾な男であり、また巴里をいやな町だと思つて、當時ワレンス夫人の移り住んでゐたシャンベリイへ歩いて行つた。それは彼の最後の徒歩旅行だつた。そして、さうした長途の旅を彼はどんなに快活に喜び樂しんだか知れないのだつた。かくて千七百三十二年の春、ルソオは三度ワレンス夫人の客人となつた。彼女から知事に紹介されて、彼は官廳につとめたが程なく其處を退き、今度は作曲家になる積りで翌三十三年六月、ブザンソンへ行き、師傅ブランシャアルの講義を聽いた。併し師傅が巴里に永住する事となつたので、ルソオはシャンベリイに歸つて教鞭を執り、大いに歡迎された。それ以來、ワレンス夫人とその家僕クロオド・アネエとルソオとの三人は樂しい戀愛生活を送つた。二人の男は夫人を共有して互ひに嫉妬する事なく、不思議にも幸福だつたのである。が、三十四年三月アネエは旅よりの歸途肋膜炎にかゝつて死んだので、ルソオは家扶たる彼の役を受け繼いだが、彼の樣に事務を處理する事も出來なければ、夫人の過度の浪費を防ぐことも出來なかつた。輕率で傲慢な彼は逃亡を試みたり、何かと無分別だつた。夫人はそれに對して寛大だつた。が千七百三十七年九月、遂にルソオは夫人に愛想をつかされて、モンペリエへ送られて了つた。尤もそれは、彼自身心臟に粘膜瘤が出來てゐるものと思ひ込んでゐるので、醫者にみて貰ひに行くのであつた。途中、彼は自ら英國人と詐稱して、ある夫人を弄んだりした。翌三十八年三月、モンペリエの醫者達に嘲笑されて、彼はまたしてもシャンベリイへ歸つて來た。しかし、ワレンス夫人には既にルソオに代る情人が出來てゐた。彼等はシャンベリイの近くのシャルメットに移り住んだ。ルソオは、もう夫人の愛の分配は拒絶したが、三人で共同生活することには同意した。かうして、こゝで三十八年の冬と三十九年とを過した彼の生活は『懺悔錄』に書かれてある樣に幸福なものではなかつた。が、彼はこゝで組織的な讀書をする樣になり、自ら理論を展開し得るやうになつたのである。

四十年四月、ルソオはリヨンのマブリイ家に家庭教師となつて住み込んだ。兒童教育の試みは失敗だつた。一年の後、更に又彼はシャルメットに歸り、四ヶ月を過した上で、四十一年の夏、音譜の新しい記號法を發明して、希望に燃えながら巴里に向つた。彼の新音譜法はアカデミイの宣言する所では決して新發明でもなければ、有效でもなかつた。ルソオは絶望して將棋に熱中し始めた。そしてその名人にならうとした。

その後、ルソオはヴェニスの佛國大使の祕書官となつた。けれども、僭越や狂氣染みた行ひの爲め、やがてそこを出されて、再び晉樂に歸つた。が、成功するどころではなかつた。

悲慘な境遇にありながら、彼は下宿の女中テレエズと通じて了つた。彼女はその家族の扶養を彼に求めた。彼は彼女の父親を養老院へ入れた。次々に生れた五人の子供等はみんな育兒院へ追ひやつた。彼の言葉に從へば、子供等は公衆教育に委ねられたのである。

そのうちにルソオはデュパン夫人とその養子フランキュイユの許で祕書役をつとめ、財政界の人々、特に婦人達に愛されるやうになつた。又文學者達、特にダランベエルやディドロオやグリムに歡迎された。ディドロオは彼を『百科辭典』編纂者の中に加へた。

千七百四十九年の夏、ディドロオがヴァンサンヌの獄に投じられてゐた時、ルソオは彼に會ひに行つた。途中で一册の『メルキュル・ド・フランス』の頁をめくつてるうちに、彼はディジョンのアカデミイが提出した、『科學及び藝術の發達は、道德を腐敗せしむるか、若しくは純良ならしむるか』といふ懸賞論文の題目を見出した。ルソオは夢中になつて考へた。否、藝術と科學は風俗を改良しはしなかつた。我々の社會組織は矛盾だらけだ。人の性はもと善であるのに、我々の教育とその濫用とこそは人間を邪惡にしたのだ。彼は限りない靈感を覺えて涙に浸つた。ディドロオに面會して助言を求めた時、ディドロオは彼を大いに鼓舞して呉れた。翌年その論文が賞に入るや、ルソオは一躍有名になつた。更に、五十四年、『人類不平等の起原』に關する論文で、彼は社會組織以前の善も惡もない幸福な人間を描き、道具の發明、農業、收穫等によつてだん〳〵に所有權が制定され、弱肉强食が行はれ、主君と奴隷との極端な差別が生じ、少數の人間が財產と權勢とを享樂し、多數の人間が貧困に苦しむ樣になつた過程を力强く述べた。「愚かなる者よ、君達は絕えず自然に對して不平を鳴らすが、すべての惡は君達自身から來るといふ事を悟るがいゝ！」と彼は叫ぶのだつた。人類が知らず〳〵自然狀態から文明狀態に移つて、社交的になると同時に奴隸となつてゐたり、自分自身の物の見方を失つて、自分の惡を光榮としてゐたりする愚かさを指摘したのである。五十五年の夏、彼はこの論文をジュネエヴの共和政府に送つた。

翌五十六年、エピネエ夫人の好意によつて提供されたモンモランシイの森の入口にある小屋に移つた彼は幸福だつた。大自然が彼の書齋となつたからだ。が、妻や彼女の母達は何とかして彼を巴里に連れ戻さうとした。ディドロオはその中に立つて骨を折つた。と、それはルソオの誤解を招き、この二人の哲學者達の友情は、エピネエ夫人の仲裁にも拘らず到底回復し難きものになつて了つた。更に、ルソオは夫人の從妹で養女のウォドト夫人を熱烈に戀し、その狂ほしい最後の情熱の爲めにエピネエ夫人をさへ全くの猜疑心で忌み嫌つて了つた。この戀と共に、彼は當時彼に最も親切だつたエピネエ夫人やディドロオやグリムを失ふに至つた。

五十七年十二月、彼は財政官マタ氏が提供して呉れたモンモランシイの小さな家に移り住んだ。翌五十八年『ダランベエルに與ふる書』を發表して、彼はジュネエヴに劇場を建てる事に反對した。彼によれば、演劇は無用の長物だつた。特に理想的な風習をもつてゐるこの小都會に於ては、劇場は害毒を釀すだけのものだつた。この熱烈な論文によつて彼は『百科辭典』編纂者達と完全に袂を分つて了つた。翌五十九年、リュクサンブウル公爵夫妻の好意を受けて、彼は城の離れに寄寓した。其處は前後に水を眺め、森の中にでもゐる樣に柑橘類の香氣の漂る中で、あらゆる種類の鳥の囀りを聞きながら勉强する事が出來た。しかも傲慢なルソオは寄寓するに當つて、公爵夫妻に自分の絕對の自由を承認させた。この滯在中に『新エロイズ』(一七六一)、『民約論』(一七六二)、『エミイル』(同上)の三大作品が相次いで現はれた。これらは同時期に作られたものでありながら、それ〳〵の文體と性質とを持つてゐる。『エロイズ』で、ルソオは、自然と情熱を讃美する彼が如何に自然を見、如何なる生き方を好むかを具體的に示してゐる。サンプルウと

ジュリイとの戀愛、ウォルマアルとジュリイとの家庭生活、子供を救はうとして水に溺れて死ぬジュリイの母性愛等の委曲には、ルソオ自身の體驗に裏づけられた恍惚感や憧憬が生き〳〵と描かれてゐるので、これは非常な好評を博した。

『民約論』は云はゞ一社會契約の論理的制定に關する抽象的研究だ。社會に住む爲めに人間は規則に從はねばならない。その契約の性質及びその契約の下に設けられる諸種の政體の形式並に性質、それらが腐敗して契約を破壞する傾向、それを防ぐべき種々の手段を研究し、その手段は、國家の宗教に叛逆する者を死刑に處さうとするほど專制的なものとなつてゐる。そしてルソオ自身、兒童教育論の『エミイル』に於て展開した宗教思想の故に、告發されて、國から國へ逃げ廻らねばならなかつた。彼はスウィスへ出かけた。が、千七百五十五年以來ヴォルテエルと相爭つてゐたので、彼はジュネエヴへ行かずにヴォオ地方のイヴェルドンに住む舊友の所に身を寄せた。次いでモティエで三年を過し、千七百六十五年、ビエンヌ湖のサン・ピエエル島で六週間の幸福な日を送つたが、こゝからも追はれてストラスブルグに一ケ月以上逗留した。そして同年十二月巴里に出て、コンティ親王の好意で僧院内に住み、旅行免狀を手に入れるや、彼は英國の哲學者ヒュウムに迎へられて、ウートンのダアビイ伯爵領内に居を構へた。けれども彼の過度の猜疑心にはヒュウムも遂に腹を立てゝ了つた。で、六十七年五月、ルソオはひそかにウートンから逃れて、フルウリイ・スウ・ムウドンで半月暮した後、ジゾオルに近いトリイで、一年間ルヌウといふ名の下に身を匿した。千七百六十八年六月、彼は其處にも居たゝまれないで逐電した。が、リヨンに行つてもグルノオブルに行つても、又はシャンベリイに行つても、彼が周圍の人々を疑つたり、迫害の强迫觀念に襲はれたりすることに變りはなかつた。彼は更に轉々としてゐる間に『懺悔錄』を書き上げ、千七百七十年六月の末に巴里へ歸り、其處で再び彼は貧しい樂譜寫しの仕事を始めた。同年から翌年にかけて、『懺悔錄』を代表的な著作家達に向つて朗讀したが、エピネエ夫人が不平を云つたので、警視總監は以後その朗讀を禁じた。ルソオには、當局者や名望家や哲學者やすべて代表的な人々が共謀して

自分を迫害してゐるものゝ樣に思へた。『ルソオ、ジャンジャックを裁く』と題した對話は、千七百七十五年頃のルソオの不思議な心的狀態を表してゐる。また『孤獨な散步者の夢想』は昔の思ひ出に耽つたり、樂しい植物採集のことを語つたりしてゐる。

七十七年、彼は神經發作や膽汁嘔吐の爲め田舍へ行き、更に翌七十八年五月、醫者に連れられてエルムノンヴィルのジラルダン侯爵の居城に住み、七月二日、遂に中風で死んだ。死の七日前、ジラルダン侯爵はルソオの爲めにプウプリエエル島で演奏會を催してやつた。その時ルソオは非常に感動して、其處へ自分を埋葬して呉れるようにと頼んだので、侯爵はその願ひを叶へてやつた。が、千七百九十一年八月二十七日、立憲議會はルソオの遺骨をパンテオンに移す事を命令した。葬儀は共和第三年檐月二十日に施行され、ルソオはヴォルテエルと並んで改めて埋葬された。千八百十四年、狂人達が深夜この二人の偉人の遺骨を盜み出して、塵埃捨場へ棄却したことは有名な話だ。

以上、彼の傳記の略述は、ルソオの『懺悔錄』を讀む者にとつて、最も必要であり、且つ又考へ方によれば無用でもある。何故なら、彼の生涯のうちで最も動搖的な放浪時代一七六五――一七七〇年の六年間に於て書かれた『懺悔錄』は、決して正確な傳記ではないと同時に、それは純粹の詩としての眞實性を持つてゐるからだ。彼は第五章までを英國のウートンで書き、第六章をトリイで、そのあとはモンカンで、第十二章は巴里で書いた。そしてそれらは彼の死後初めて現れたのである。前半の六章は千七百八十一年に、後半の六章は千七百八十八年に出版された。

ルソオは書肆の勸めにより、千七百六十四年以來自叙傳に筆を染めてゐた。が、六十五年、ヴォルテエルは匿名で『市民の感情』を書いて彼の過去の色々の不品行を暴露した。彼はエピネエ夫人がその材料を供給したものに違ひないと思つた。そこで彼は自叙傳の原稿を破棄して了ひ、新しくこの『懺悔錄』を書き始めたのである。次いでヒュウムとも不和になつて了つた彼は、贖罪たるべき著作を自己辯護の物とせざるを得なくなつた。彼は敵に喰つてかゝり、何

者をも容赦しなかつた。自分の犯した罪惡を告白することは、その他の點で自己を辯護するに都合よい爲めだつた。リボンの切れ端を盜んだことを四十年後になつても悔いてゐる男が、自分の子供達を捨てたことは、自分をプラトンの共和國の一員と看做すことによつて是認してゐる。偏見と惡德とが珍らしくなかつた時代に於て、彼こそは最も有德な人間でさへあつた。彼の感覺と想像力とは、しかしこの現實の改訂を無邪氣に信じて了つて、飽く迄も事實そのものと看做すのである。かくて、『懺悔錄』の前半は美しく華やかに描かれ、後半は眞黑に塗り潰されてゐる。

前半にあるものは、たゞ若々しい欲念と恍惚とさせる樣な希望と輝やかしい企畫ばかりだ。其處には青春のありとあらゆる光彩がまばゆく描かれてゐる。戀の佗住居たるシャルメットの生活は、時期も違つてゐるし、事情も異る事は既に述べたが、この快美な印象に充ち滿ちてゐる前半の情熱に動かされない讀者があらうか？　この豐富な想像力こそは、些末な事實を無視することによつて何の傷も負ふどころか、香はしい抒情詩を創り得てゐるのだ。

が、後半はこつそりと、しかも急いで書きなぐつたものであり、不安な、緊張した心を抱きながら、探偵や廻し者共の爲めに頭を惱まされながら、たゞ悲しげな事象をのみ書いてゐる。晴れやかな描寫は殆んど何處にもなくて、例へば不和悶着、壓制者達の陰謀、嘲罵と汚辱、胸を抉る苦惱等、彼はすべての人々が自分を裏切るのを目前に見た。そして彼はグリムやエピネエ夫人等、その最上の友に向つてまでも毒舌を弄してゐる。

けれども、彼を苦しめる種々の惱みや邪惡の中にゐても、彼は自然に接すれば自分の不幸を忘れ、唯一の怡樂を見出すのである。其處にこそ『懺悔錄』の不朽の魅力がある。自然は生々と味はゝれ、その廣やかさ、快さ等はあるがまゝの感觸を以て描かれてゐる。梁の下で疲れ亡びる彼の想像力は、木の葉の繁みに、また草や花の中にあつて活々と蘇へる。彼は常に眼の前に綠色を眺めてゐたいのだ。そして彼は野に、また濃密な森林に逃れる爲めにはまるで盜賊のやうに人目を避けて足を早めるのである。

彼の思ひ出の中に生きてゐる繪畫的な土地といふ土地は、適切な、細緻な筆によつて、はつきりと描き出されてゐる。木立や蔭や、サヴォアの風景、ビエンヌ湖畔、クウの瀧、急流や斷崖、また黎明や落日の美しさ等は巧みに表現されてゐる。更に、村の鐘の音に、遠く彼方に散らばる獸の群に、故もなく心を動かされて足を止める詩人の空想や、陶醉や、また寂寞の中で靜思する爲めに岩だらけの道に分け入る瞑想者の忘我等は、正に後年のロマンチシズムの華やかな開花を思はせるものである。

しかもさうした叙述に、實生活の逸話や、簡明な描寫などを織り込んで一層魅惑的にしてゐる所に、ルソオの現實を愛する心を見逃してはならない。彼は最も美しい世態畫を彼の思ひ出で飾つてゐるのだ。

全體としての印象によつても眞實であり、細部に亙つても結局不正確だとは云へない程、純眞な感動と情熱とに滿ちてゐるこの『懺悔錄』は、かくしてルソオの全面貌をうかゞひ得るものである。『不平等論』『エミイル』『民約論』等によつてこそ、より理論的に彼の思想が述べられてゐるとは云へ、佛蘭西革命の豫言者、準備者としてのルソオ、ロマンチック文學の始祖としてのルソオ、全世界的に深大な影響を及ぼさないではゐなかつた彼の主要な活力は、正に想像力であり、その想像力がこの『懺悔錄』に於ては寧ろ驚異に近きまで驅使されてゐればこそ、前述の樣に最も惱ましい時期に於て、これだけ力强い抒情詩が創り出されたのである。

更に附言するならば、想像力によつて事實を修飾し、自己辯護に意を注いだ彼は、結局如何なる嚴正苛酷な傳記作者もうかゞひ得ない深奥の彼自身の正體を暴露してゐるのである。傲慢で臆病な、病的にまで神經質でわが儘な、眞實放蕩無賴でもあつたし、同時に常に最も淨らかな神と理想の思慕追求者だつた彼の姿は、體驗を材料にしてのこの純粹の物語に於て浮彫にされたのである。この氾濫する力の創造にルソオの功績のすべてがあると云ふも過言ではないであらう。彼の論敵ヴォルテエルは、その點で彼に遠く及ばなかつたのである。（神部　孝）

目次

前編……一
第一章……一　第二章……三四
第三章……七二　第四章……一一二
第五章……一五一　第六章……一九六

後編……二四三
第七章……二四三　第八章……三〇九
第九章……三五六　第十章……四三九
第十一章……四九〇　第十二章……五二九

カヴーの絵……サン・ピエエル島に於いて回想に耽る晩年のルソオ（五七三頁）

懺悔錄

前編

ルソオ著
大田江長
杉榮譯

（一）

私がやらうとしてゐるのは、嘗て先例のない事で、これからも恐らく眞似手があるまい。それは、人間ひとり素裸にして、世間の人達の目の前に、晒者にしようと云ふのだ。さうして、その人間が私自身なのである。

私の他に誰もない。私は自分の心をも知り、人間と云ふものをも知つてゐる。私はこれまで、自分のやうな人間を見た事がない。こんな人間は決してゐないとさへ思ふ。立優つた人間でないまでも、少くとも私は普通の人と異つてゐる。大自然が、私を鑄るときに用ゐた鑄型を、潰してしまつたのは善い事か悪い事かは、これを讀んだ上で、始めて判斷のつくことだ。

いつの日、最後の審判の喇叭が鳴り渡るとも、私はこの一册を携へて、審判者たる神の前に出で、高らかに聲を擧げて言はうと思ふ。——斯く予は爲しき。斯く予は思ひき。斯く予はありき。善きをも悪しきをも憚らず述べたり。何等の悪事をも包みたるところなく、何等の善行をも誇大したるところなし。くだらなき裝飾の加へられたることあらば、そは唯だ、記憶の足らざるに基く間隙を塡充せむとしたるのみ。眞實なるを得べしと思惟せしものを、眞實となしたること或はあらむ。虚妄と知りしものを、眞實となしたることは斷じてあらず。時には、低劣下賤なる人間として、時には善良なる、寛大なる、上品なる人間として、ありのまゝに自らを暴露せり。汝自らの見給ふごとく予は予の胸を打開けり。神よ、予の周圍に、同胞の群を召び集めよ。彼等をして、耳を予の懺悔に傾けしめ、予の果敢なさを哀しましめ、予の慘めさを羞ぢしめよ。その一人々々を、順次、汝の御前に跪き、同樣の誠意をもてその胸を打開き、言ふを敢てせば言はしめよ、予は彼よりも善人なりきと。

私は公民イザック・ルソオとその妻シュザンヌ・ベルナアルとの間に、一七一二年ジュネエヴに生れた。僅かばかりの財

產を、十五人の兄弟が分けたので、父の分前は何程もなく、時計匠を職業にして、一家の暮しを立てゝゐた。時計匠としては、なか〳〵胸があつたものらしい。母は牧師ベルナアルの娘で、父よりは少し氣の利いた身上を有つてゐた。嗜みの善い、淑かなところを有つてゐた。父が彼女を貰ふ時、一苦勞したのも無理はない。二人の間の愛情は、殆んど生れ落ちるとからで、八九歲の頃既に、夕暮每に手を引合つて、ラ・トゥレエユの岸邊を漫歩いたものだ。十歲にもなると、お互にもう離れがたなく思はれた。性格の類似と一致とが、習慣の生んだ感情を、ひとしほ力强いものにした。やさしく感じ易く生れた二人は、それ〴〵に同じ氣質を、相手に見出す時を待つばかりであつた。或は寧ろ、さうした時が二人を待つてゐたとも言へるわけだ。そして何れも自分の心を、先づ初めに受入れようとした相手の心に獻げたのである。彼等の熱情をせき止めようとした運命は、却つてその熱情の焰に、新しい薪を加へたに過ぎぬ。戀の叶はぬ若者は、身も痩せるばかり悲んだ。彼女は、自分のことを忘れるように旅行にでも出て呉れと勸めた。旅行はしたが、なんの役にも立たず、前よりも一層、愛着の情を增して歸つて來たのである。戀人も亦、むかしに變らない戀人でゐた。かうなつた上は、末長く愛し合ふより外はない。二人はそれを誓つた。天もその誓ひに祝福を垂れた。

母の弟のガブリエル・ベルナアルは、父の妹の一人に懸想した。彼女は、自分の兄が彼の姉と一緒になるならと云ふ條件で結婚に同意した。戀が萬事を圓く治めて、同じ日に、二組の結婚式が擧げられた。かう云ふわけで、伯父は叔母の良人となり、その子供等は二重の關係で、私のいとことなつたのである。一年と經たない內、双方ともに子供が生れた。それからまた、別れなければならない事情が出來た。

伯父のベルナアルは技師であつた。彼は、その當時ウウジェエヌ公の支配下にあつた帝國と匈牙利とから召されて、ベルグァラドの攻圍にも、その合戰にも、天晴れなる功名手柄を立てた。父は唯だ一人の私の兄が出來た後、コンスタンティノオプルへ向けて旅立つた。土耳古宮殿の時計師として召ばれたのである。その留守の間、母の容色と機智と才能とが、多くの景慕者を引寄せた。取分け熱心であつたのは、佛蘭西の公使ド・ラ・クロジュウル氏である。それから三十年經つた後までも、彼が母の名を口にする時の悲しげな樣子から考へると、氏の執着は隨分激しいものであつたに違ひない。この誘惑を禦ぐのに、母はその淑德よりも强いものを有つてゐた。——彼女は心から良人を愛してゐたのである。さうして良人の歸國を促した。彼は一切の事を打棄てゝ歸國した。この歸國の傷ましき結果が私である。十月經つて生れた私は、虛弱な、病身な小兒であつた。母

の命と引換へにした私の誕生は、私の第一の不幸であつた。

私は固より、どうして父がこの痛手に堪へたかを知るものではない。それが竟に、癒されないでしまつたと丈けは知つてゐる。彼は私の上に、再び母を見るの思ひをした。私が母を彼の手から奪ひ去つたといふことも忘れ得なかつたことだらう。彼が私を抱く度に、その歎息の中に、震ひわななくその手の中に、いよ〳〵熱烈となるばかりの愛撫に混り、苦い哀しみのあるのを見た。彼が私に、「ジャン・ジャック、お母さんの話をしようよ。」と言ふとき、私は彼に、「お父さん、そんな話をすると、また二人とも泣けて來ますからね。」と答へると、この一言でもう、彼は涙をさそはれた。やがて彼は、歎息をつきながらかう言ふ、「あゝ、彼女を返して呉れ。あれがゐなくなつたのを慰めてくれ。あれが私の胸に開けて行つた、この穴を埋めてくれ。私一人の子であるならば、どうして、こんな可愛がり方をするものか。」

——母が亡くなつてから四十年目に、後妻の手の中に息を引取つたけれど、唇の上には前妻の名があつた、胸の奥底にはその姿があつた。

「かう云ふ人達が、私の生涯を造つてくれた。天が彼等に與へた素質の中で、私に遺された唯一のものは、動かされ易い感情である。それが、彼等にとつては幸福の源であつた。が、私にとつては、一生を通じて不幸の源となつたのだ。

私は、生れたてから身體が弱く、とても大きくはなれさうにもなかつた。持つて生れた苦みの幼芽は、年と共に伸びて來て、今や折々の小休みもあるけれど、その都度別の、一層堪へ難いものにならないでは濟まなかつた。愛くるしい發明な娘の、父方の一人の叔母が、精一杯の介抱をしてくれた。私の命はその叔母が拾つてくれたのだ。私がこれを書いてゐる今も、叔母は尙ほ生きてゐる。八十と云ふ歲で、自分よりも若い良人の、酒で身を持崩したよぼ〳〵の男の世話をしながら生きてゐる。なつかしき叔母上よ。私はあなたが、私の命を拾ひ上げてくれたのを咎めない。たゞ殘念なのは、私の生涯の發端に、あなたから受けた心盡しの介抱を、あなたの生涯の結末になつて、報いられないと云ふことだ。乳母のジャクリイヌもまだ生きてゐて、丈夫で元氣だ。生れたときこの目を開けてくれたその手に、死ぬるときも塞いで貰へるだらう。

私は考へるよりも先づ感じた。それは人間に共通の運命である。私はそれを人並はづれて經驗したのである。私は五六歲の頃まで何をしたとも覺えない。どうして、書物が讀めるやうになつたかをも知らぬ。唯だ私の始めて讀んだ本と、それが私に與へた影響と丈けを記憶する。この時分から斷えず自分といふものを考へるやうになつた。母は幾

冊かの小說を遺してゐた。父と私とは、夕飯のあとでそれを讀み出した。最初は唯だ、面白い書物を宛てがつて、讀み方の稽古をさせようと云ふのであつた。が、その內に、無暗と興味が湧いて來て、二人が代る〴〵に絕間もなく讀み續け、幾度か夜を徹したほどであつた。一冊讀み切つてしまはねば、どうしても止めることが出來なかつたのである。折々はもう東が白んで、燕の囀る聲を聞き、父も全くきまり惡さうに言ふのであつた、「寢よう、寢よう。俺はお前よりも子供だなア。」

かう云ふ危い事をして、私は間もなく、讀み方や意味の取り方に、非常な熟達を獲た丈けでなく、年に似合はず、早くから欲情をも解し得た。實際の物に對する觀念は、まだ〳〵出來てゐないのだけれど、感情の世界にはもう踏み込んでゐた。何物をも思考しなかつたけれど、あらゆる物を感得したのである。あとからあとから取入れた不分明な感動は、私のまだ有つてゐない理性を、損傷することはなかつたけれど、兎に角その爲めに、私の理性が全然特殊のものとなり、人生に對する非常に幻怪なる概念を齎らすに至つたのは爭はれぬ。さうした概念は、經驗も內省も竟にこれを醫し得ないでしまつたのである。

小說は一七一九年の夏まで讀み續けた。その冬からは、別の事をやり出した。母の藏書にも、もう新しい物がなくなつたので、母の父から傳はつた書物に轉じた。仕合せとその中には、いゝ書物があつた。牧師で、その上學者で、——學者と云ふと當時の人々から、大に重んぜられたものである——しかも趣味のある、才氣のある人が、仕入れたものだから無理もない。ル・シュウルの敎會、及び獨逸帝國の歷史や、ボシュエの『世界史講話』や、プルタアクの『英雄傳』や、ナニの『ヴェネチア史』や、オヴィヂウスの變形や、ラ・ブリュイエエルや、フォントネルの天體研究や、また『死人の對話』や、並びにモリエエルの二三冊を父の仕事部屋に運び入れ、每日々々、父が仕事をしてゐるそばで、私はそれを讀み上げた。その面白かつたことは一通りでない。あの齡で、恐らくは例のない事だらう。特にプルタアクが愛讀書になつた。くり返しくり返しして讀んだその樂みは、やゝ私の小說病を醫してくれた。そして間もなく、アゲシラオスや、ブルゝスや、アリスティデスや、オロンダアトや、アルタメエスや、ジウバよりも好きになつた。この面白い讀物によつて、それがまた私共の間に惹起した會話によつて、自由を愛する共和主義の精神を、馴らしがたき矜恃のある性格を作られた。その精神と性格とが、束縛壓制を甘受し得ないで、私の一生を、殊に最も飛躍の許されない場合に於て、惱ましたのである。常に羅馬やアテネに往來し、云はゞその英雄達と不斷の交際をつゞけて行く

上に、身みづから共和政府の市民と生れ、愛國心の强い父の子と生れた私は、彼等の示した手本によつて煽り立てられた。私は、自分が希臘人か羅馬人でゞもあるやうに思つた。私の讀んだ傳記の主人公の位置に自分を置いた。自分の動かされた忍耐と勇氣とを物語る場合には、私の目が輝いて、聲に力が籠つた。或る日食卓でスケウォラの物語をした時は、彼の勇ましい身振りを眞似する爲めに、火鉢の上に腕を突き出して、居合はす人々を驚かしたこともある。

私には七歲ばかり年上の兄があつて、父の職業を學んでゐた。私の可愛がられやうが過ぎたので、彼はやゝ閑却され氣味だつた。これはたしかに善くない事であつたと思ふ。この閑却は敎育の上に現はれた。卽ち彼は年の行かない癖に、道樂者の眞似をし出したのである。他の師匠につかせて見たが、自家に居た時と異らない。私は時偶逢つたばかりだから、親密の間柄とも云へなかつたが、それでも心から愛さないでゐられなかつた。彼もまた、自墮落者には精一杯の愛を以て私に酬いた。今に覺えてゐる、或る時私は、父が手嚴しく、癇癪を起して彼を折檻したとき、夢中でなかへ飛込んで、彼をしつかり抱き緊めた。かうして私は、自分の身體で彼を庇ひながら、彼の受くべき笞を受けた。私が强情にさうしてゐるので、父も止むなく我を折つた。私の泣聲に和らげられたからでもあらうし、私を餘計に痛めたくなかつたからでもあらう。兄はとう〳〵手の附けられない者となり、不意に姿を隱してしまつた。しばらく經つて、獨逸にゐると聞いたこともあるが、唯だの一度も手紙は來なかつた。その後どうなつたともたよりを聞かぬ。こんなわけで私は一人息子になつたのだ。

この可哀相な若者は、そんなに野育ちにされてしまつたけれど、弟の場合は違ふ。王侯の子弟と雖も、私の小さい時周圍の者から氣を附けて貰つた程、それほど親切に氣を附けて貰へるものではない。一層希しいと思ふのは、いくら可愛がられても、甘やかされなかつたと云ふことだ。只だの一度も父の目を離れて、他處の子供等と遊ぶことを許されなかつた。抑へ附けるにも滿足させるにも曾てかの氣隨な心持を起す事はなかつた。さうした心持は、性格に基くと見られてゐるが、實際は專ら敎育の結果である。私は年齡相應の缺點を有つてゐた。私は饒舌で、意地穢で、折々虛言も吐いた。果物や、菓子や、食料品を盜むのに躊躇しなかつた。しかし、ひとを苦めたり、傷つけたりして、他人に責任を塗附けたり、動物を虐待したりして悅んだことはない。尤も今以て忘れないのは一日近所のクロオ夫人と云ふのが、寺參りの留守の間に、その釜の中に小便をしてやつた一件だ。序でながら、その時の事を想ふと、今でも

可笑しい。なぜと云つて、結局は全く善い人なのだが、凡そ世の中にこのクロオ夫人くらゐ、がみ〳〵と云ふお婆さんは見たことがないからだ。子供の時分に私のやつた、惡事の概略を白狀すれば、先づかう云つたやうなものである。

目の前には溫順しい人の模範ばかりを見、周圍には善い人ばかりを見て居りながら、どうして私が惡くなれようぞ。父も、叔母も、乳母も、親類の者も、友達も近所隣の人達も、一口に言へば私の周圍全體が、私は服從しないけれど私を愛してくれ、私も亦彼等を愛した。私は滅多に、自分の思ひ通りにしようとしたことがない。別に制められもせぬからして、自分を身勝手と思ふ筈がない。懸値のないところ、師匠取をして、その意志に從はせられるまで私は全く、我儘なむら氣といふものを知らないでゐた。父と一緒に讀み書きをして過す時や、乳母に連れられて散歩に出る時の外、私はいつも叔母とゐて、その側に腰かけながら、立ちながら、叔母が刺繍をするのを見たり、歌を唄ふのを聽いたりして滿足した。その陽氣さや、柔しさや、快い容貌が當時の私に強く印象されて、今尙ほまざ〳〵とその物腰や眼付や姿が眼に見るやうだ。甘い言葉を聞くやうだ。その着物や、頭の物をも覺えてゐて、その頃の流行で顳顬のところへ垂れた、二房の黑い髮をすら忘れない。

音樂に對する私の嗜好、といふより寧ろ熱情は、だいぶ後になつてから現はれたが、この叔母に依つて養はれたものであると思ふ。彼女は無數の節廻しや歌の文句を知つてゐて、低いながら非常に好い聲で唄つた。この可愛らしい少女の晴やかな調子は、彼女自身からも周圍の者からも、陰鬱な空氣を拂つてしまつた。その唄の面白かつたことは並大抵のものでなく、その中の幾つかゞ引續き記憶に殘つてゐるのみならず、子供の時分からすつかり忘れてゐたものも、年をとるに從つて、何とも云へぬなつかしさを感ずる。心配と苦勞とで磨耗された私のやうな老耄者が、折々力のないぶる〳〵聲で、その唄の一つを口吟むとき、子供のやうに涙を流して、自ら驚くのであるとは誰が思はうぞ。中にも或る一つの歌は、完全にその節廻しを覺えてゐる。が、どんなに骨折つて見ても、その韻をぼんやりと念頭に浮べるばかりで、後半の文句を思ひ出すことが出來ぬ。その始めの方と私の知つてゐる部分とはかうなのだ。

いとし戀しいチルシスさま、
もうこの私は、そなたの笛を
楡の木蔭で聞いてはならぬ、
村に浮名が
立ちました。
……
……羊飼ひ

……思ひは募る
……まゝならぬ
薔薇の蔭には刺のある世や。

この唄の回想が、どうしてかうも私の心を悅ばすのか。どうしたわけとも知らないが、その終りまで行かない內、いつも涙に妨げられてしまふ。私は、幾度か巴里へ手紙を出して、もし知つてゐる者があるならば、あのあとの言葉を知らせて貰はうと思つた。けれども私の叔母より他の人間も、矢張り唄つたと分つては、この唄の回想に伴ふ樂みが、半ば消え失せるであらうと思はぬでもない。

これが世の中へ足を踏み入れた私の第一の感情である。かくして、尊大であると共に柔和な私の心が、弱々しいと共に攬め難い私の性格が、出來掛つた、或は現はれ出した。その性格や心が絕えず、柔弱と勇氣との間を、遊惰と節操との間をぐらついて、とう〳〵私を自分自身と矛盾させ、禁慾と享樂とを、放逸と節制とを、同樣に行はれ難くしてしまつたのである。

かうした敎育の進行は、一の出來事に邪魔された。この影響はその後の私の全生涯に及んでゐる。私の父は、ゴオティエ氏といふ佛蘭西の士官で、市會の誰彼に緣故のある人と喧嘩をした。處がその人は厚顏無恥な人間で、それを根に持つて復讐する爲め、父が市內に於て劍を拔いたと云つて告發した。監獄へ送られさうになつた父は、法律上原告も同樣監獄へ送らるべきことを要求した。これが要求通りにならなかつたので、彼はその名譽と自由とを失ふよりはましだといふので、ジュネエヴを去り、その儘異域に餘生を過した。

私はその頃、ジュネエヴの築城工事に傭はれてゐた叔父のベルナアルの監督の下に居殘つた。彼の總領娘は亡くなつたけれど、私と同年ぐらゐの息子があつた。私共二人は、ボッセエの牧師ラムベルシエの處へ寄宿させられた。其處で拉丁語その他の、正式の敎育に缺くべからざるものとされてゐる、いろ〳〵の下らない事を習はせられた。

この村に過した二年間は、やゝ私の羅馬人風の荒いところを和らげて、再び子供らしくして呉れた。なんにも課せられなかつたジュネエヴでは、好んで勉强もし讀書もした。それが殆んど唯一の娛樂であつたのだ。勉强を强ひられるボッセエでは、遊んで身體を休めたくなつて來た。田舍の生活は隨分珍らしいもので、私はその樂みに飽くことを知らなかつた。それに對する私の熱情は、竟に冷却させることが出來なかつた。そこで過した幸福な時代の追憶は、その後絕えず憧憬の心を以て私を充たし、再び出掛けさせた程である。ラムベルシエ氏は、誠に解りの善い人で、私共の敎育を等閑にもしないが、さればとて荷の勝つた事をやらせ

もしなかつた。その遣りかたの悪くなかつた證據には、束縛と云ふ束縛を蛇蝎の如く嫌ふ私でさへも、この時分の事を回想するに不愉快の念を起したことがない。それにさう多くの事を學びもしなかつたけれど、學んだ丈けのものは易々と學んだし、今に尙ほ覺えてゐる。

この田園生活の單純さは、友情に對する私の胸を開いて吳れたので、どれ丈け利益になつたか分らない。それまでの私の友情は、いくら高尙であつても空想上のものたるを免れなかつた。共に共に安らかな日を送つて行くと云ふ習慣は、私の心を從兄弟のベルナアルに結び附けた。間もなく私は彼に對して、兄に對して抱いたよりも更に親密なる感情を抱いた。この感情は竟に滅ぼすことの出來なかつたものである。從兄弟は脊の高い、瘦せぎすの、弱々しい少年で、身體が弱々しいやうに心も柔しかつた。監督者の息子として、自分に向けられる最眞目をも、格別濫用しなかつた。私共の勉强や、娛樂や、嗜好は皆同一であつた。私共は二人共友達がなく、また同年であつた。何れも遊び仲間が欲しかつた。私共を引離すのは、大袈裟に云ふと、息の根を止めるやうなものであつた。お互にその愛着を示すべき、澤山の機會もなかつたけれど、兎に角それは一通りならぬもので、啻に片時も離れることが出來なかつた丈けではない。離れることが出來るなぞと考へられもしなかつた。

二人とも溫情に動かされ易い、無理强ひをされない限り禮讓を失はない性分なので、私共はどんな問題にも意見が合つた。目上の人達の居るところでは、從兄弟の威勢がいゝ代り、私共丈けでゐるときは、私の方に强味があつて、うまく權衡が保たれた。勉强時間に彼がその諳誦に行きつまれば、私は彼に助言した。自分の日課が濟めば、彼の分をも手傳つた。遊び事ではいつも、私の活潑な興味が音頭を取つた。一口に云ふと、私共二人の性格は、誠に調子が善く合つて、人を繫いだ友情は、誠に切實を極めてゐた。ボッセエとジュネエヴとに過した五年間と云ふもの、二人は殆んど引離し難きものであつたのだ。勿論、時々喧嘩はしなかつたと云はぬ。けれども竟に私共を引離してしまふやうな場合はなかつた。その喧嘩が十五分と續いたこともない。唯だの一度も人に訴へたことがない。こんな事を言ふのは、子供らしいと云へば子供らしいやうなものゝ、兎に角、子供等の間に於ては、稀に見るべき事柄なのである。

ボッセエに於ける生活は、隨分愉快な生活で、あれを續けて行きさへすれば、私の性格を固めてしまふことが出來たのだ。その土臺になつてゐるものは、やさしい、ねんごろな、おだやかな感情である。私はどんな人間でも、私くらゐの虛榮心は有つてゐようと思ふ。私は感奮した刹那には高尙な感情にもなるけれど、直ぐにまたもとの怠慢に歸つ

てしまふ。自分に近づいて來る總ての人々から愛せられると云ふのが、私の第一の願ひであつた。私もおとなしく從兄弟もおとなしかつた。二人を監督する人達もおとなしかつた。滿二ヶ年の間と云ふもの、私は暴烈な感情の目擊者にも、犧牲者にもなつたことがない。總ての物が私の胸に植ゑられた本然の傾向を養ひ育てた。私は人が自分と相和らぎ、あらゆる物と相和らぐのを見ることより、大きい悅びを知らなかつた。いつも教會の問答示教で、私が諳誦に行き詰まつたとき、何よりも惱まされたものは、ラムベルシエ孃の顏にありゝと見える、心配と不機嫌との樣子であつた。私はそれをいつまでも覺えてゐるだらう。唯だその事丈けが、大勢の前に恥をかくよりも辛かつた。尤も大勢の前に恥をかくのは可なり苦しい事だつた。褒められようと云ふ氣はそんなでもないが、羞恥は隨分鋭敏に感じられたからである。それでも私は斷言する、ラムベルシエ孃が叱るかも知れないと云ふことは彼女を心配させると云ふことほどに、恐ろしいものではなかつたと。

彼女も亦その兄くらゐには嚴しいことがあつた。たゞその嚴しさに大抵の場合道理があつて、うまく手加減をされてゐた爲めに、それ丈け辛いには辛かつたけれど、反抗の心は起さなかつた。私は罰を食ふよりも、人の心持を悪くするのがいやで、不機嫌な顏をされるのを、折檻されるより恐かつた。これ以上說明するのは少々具合の悪い事ではあるが、言はずにもしまはれぬ。始終見境なしに、無暗矢鱈と用ゐられてゐる、今日の懲罰の遠い時日を隔てた悪影響が、今少し明かになるならば、若い者に對する取扱も一變されることだらう。ありふれた、しかも恐るべきこの實例の中に、抽き出すべき大なる教訓があらうと思ふから、思ひ切つて話すことにする。

ラムベルシエ孃は、慈母の愛を以て私共に臨んだ丈けに、それに相應する權威を揮ひ、私共が悪い事をしたとき、折檻は、子に對するやうな折檻をした。可なり長い間、恐嚇す丈けにしてゐたが、耳新しい罰は聞いたゞけでも恐ろしかつた。けれども、實際にやられて見るとそれほどでもなかつた。のみならず、更に奇態な事には、この罰が、罰する人をいよ〳〵好きにした。その愛着の眞情と、私の本來の溫順しさとが、故らに悪戲をして、同じ報いを受けようとするのを僅かに制めた。苦痛の中にも、羞恥の中にも一種の肉感が混じてゐて、同じ人の手からもう一度經驗することを、恐怖するよりもむしろ、願望させたのである。これは疑ひもなく、早熟なる性慾的の衝動に基くもので、同一の折檻を彼女の兄弟から受けたなら、何等の快感をも買ひ得なかつたであらう。しかしながら、彼の性格から考へて、彼に折檻役の代理をされるのも、さうまで恐ろしくは

なかつた。そして私が折檻されるやうな事を慎んだのは、一に唯だラムベルシエ孃を怒らせたくないからのことだつた。その愛着の強さと云つたら、それがたゞ肉感の流出に過ぎない場合でも、素晴らしい勢力を有つてゐて、私の心の中で始終肉感を制へて行つた。

私が、恐ろしいのでもないのに、避けるやうにした體罰の反復は、自ら求めずして來たもので、私は何の疚しさもなく、人知れぬ嬉しさを以てそれに堪へたと云ひ得られる。けれども、二度目がやがて最後でもあつた。ラムベルシエ孃も何かの樣子で、この折檻の役に立たないことを氣づいたらしい。こんな懲罰は面倒臭いから止めると言つた。それまで私共は彼女の部屋に、冬は折々その床にさへ寢かされた。それから二日經つて、別の部屋へ移された。爾來私は、彼女から大きくなつた子供として取扱はれる有難くもない名譽を獲た。

八つの歳に三十歳の婦人の手から受けたこの懲罰が、私の嗜好や、私の欲望や、私の欲情や、その後の私の全生涯を決定したと云ふことを、あまつさへ豫期されたとは正反對の結果になつたと云ふことを、どうして人が信じよう。肉感の目が覺めてから、私の欲望はすつかり向きを變へ、自分の經驗したものにのみ限られて、他に求めようとしなかつた。殆んど生れ落ちるとから、肉感に沸き立つ血を有ちながら、どんなに冷かな、發育の遲い體質でも、發育して來ると云ふ年頃まで、私は竟に總ての不潔から免れた。何故とも知らず、長いこと私は苦められて、火のやうな目で、美しい女の姿を貪つた。想像が絶えずそれを幻に描いて、折檻をしてゐる人と見せ、それ丈けの人數のラムベルシエ孃にしたのである。

結婚の出來る年になつてまで竟に消え失せなかつた、特有の腐敗した、狂氣じみたこの私の趣味は、道德上の純潔を剝奪しさうに見えながら、實際はそれを護つてくれた。世の中に純潔な教育と云ふものがあるならば、それこそは私の受けた教育である。三人の叔母は行儀が正しかつた丈けでなく、女の人達が久しく忘れてしまつてゐる控へ目なるものを知つてゐた。父も陽氣な人ながら、古い作法を尊んで、彼の愛する婦人達の前に、處女の顏を紅くさせるやうな言葉を、かつて漏らしたことがない。私の家では他で見ることの出來ないほどの注意が拂はれ、私の前では子供に對する敬意が拂はれた。この點はラムベルシエ氏の處も同樣で、他に落度のない一人の女中が、私達の前にうつかり喋つた、猥褻な言葉の爲めに暇を出された。私は唯だに年頃になるまで、兩性の結合に對する明白な觀念を有たなかつた丈けではない。その漠然とした觀念が、唯だいやな厭はしきものとしてのみ現はれた。賣女に對して抱いた憎

惡の念は、今に尙ほ消えないでゐる。道樂者は侮蔑の情なしに、否寧ろ、恐怖の情なしに見ることが出來なかつた。道樂に對して、かうまで反感を有つに至つたのは、或る時クライン・サロネクッスの拔裏で、それ等の人達が遊興すると云ふ窩を、兩側に見てからのことである。あれを考へる度毎に、起水の附いた犬の動作が聯想され、その觀念をもつ丈けで私の反感を誘ふに十分だつた。

教育によつて接芽をされたこの觀念は、それ自體が既に、燃え易い性情の第一の激發を制へる上に、前にも言つた通り、肉感の第一の覺醒が惹起した、例の一件で補助された。自分の考へで常に唯だ、經驗の範圍をのみ彷徨しながら、惱ましき血汐の沸き起つに拘らず、自分の知つてゐるやうな恥樂の上にのみ欲望を向けて、厭はしく思ふものゝ方へは向けなかつた。尤も、自分でこそ全く氣づかなかつたけれど、この二つは非常に接近してゐたものだ。私の馬鹿馬鹿しい妄想に於て、色情的の狂態に於て、それが度々私にやらせた淺間しい行爲に於て、異性の想像が私を手傳つたけれど、その異性を私が夢中になつたより、他の事に用ふるものだとは、思ひ及ばないでゐたのである。

かう云ふわけで、私は非常に熱烈な、淫縱な、早熟な素質を有ちながら、ラムベルシエ孃が無意識に思ひつかせたものより外に、何等の肉感的享樂を願望することもなく、春機發動期を過した丈けでない。年を經て一人前の男となつたとき、私を滅ぼしさうに見えたものが、却つて私を護つて呉れた。即ち私の舊い子供らしい趣味は消えないでゐて、もう一方の趣味と融合し、肉感的の欲望から離されなかつた。この痴愚は生れつきの內氣と一緒になつて、總ての事を言ひ切れない、總ての事をやり遂げられない私を、いつも婦人の前に引込み思案の人間にしてくれた。もう一方の趣味が、最終の標的とのみ思はれたやうな享樂は、渴望する人間からして要求されることも出來ず、それを充すべき人間からして、忖度されることも出來なかつたからである。それで、私は自分の熱愛する人々に對し、淫慾の情を有ちながら、默つてその日を過して來た。自分の願望を口に出す事が出來ないで、私は僅かにその願望を私に起させた人と交際して、それを滿足させてゐた。權柄な愛人の膝下に跪き、一々の命令を聽き、或は宥恕を仰ぐのは、私に取つて何よりの樂みで、活潑な想像が血を沸き立たせれば沸き立たせるほど、私は益々意氣地なしの戀人らしくなつてゐた。かうした戀愛のやり方は、目ざましい進行をもしなければ、相手の德操をも危くしない。それ故、實際に獲たものはいくらもないが、私らしい空想上の享樂は可なりにあつたのだ。要するに私の肉感が內氣な性質や、空想的な精神と相俟つて、感情を淸潔に、道念を純粹に保つて

異れたのである。そして、それを手傳つた同一の趣味は、今少し私が厚顏であつたなら、恐らく醜陋極まる淫蕩の中に引込んだものであらうと思ふ。

私は、私の懺悔の暗い、穢い螺堂に於て、何よりも難かしい第一歩を踏み出した。人の最も苦痛と感ずるは、極惡非道を告白することでなく、馬鹿々々しい、きまりの惡い行爲を打明ける事である。もうこれからは大丈夫だ。これ丈け言へれば、あとは樂なのだ。かうした告白にどれ丈け骨が折れたかは、目も見えず耳も聞えぬほど、前後を忘却して、全身を震ひわななかせるほど、狂熱を以て愛した人々に、自分の痴愚を打明けることがつひに出來なかつたので推察されよう。親密を極めた場合にも、私にはまだ與へられないでゐる所の、唯一の寵愛の保證を、彼女等に求むる勇氣がなかつた。その保證は子供の時分に唯だ一度、同年くらゐの少女から與へられた。しかもその少女から持ち掛けて來たのであつた。

かうして感情生活の最初の印象を振返つて見るときは、一見往々にして相和せざるが如きも、互に相結んで同一の效果を生ずる要素を見出す。さうかと思へば又、外觀は同じでも、一定の條件が集まつて、全然無關係だと想像されるやうな、異つた結合を來す要素をも見出す。例へば、私の血の中へ流れ込んで來た、淫樂と肉感との根源に、私の魂の最も力强い動機が溯るとは、誰が果して信じようぞ。この題目を棄てるに先だち、それが別の、非常に異つた印象を作り出した場合を話して見よう。

或る日私は、臺所に接した部屋で勉强してゐた。女中はラムベルシエ孃の櫛を煖爐の上に干して置いた。その女中が取りに來て見ると、その中の一枚の齒が折れてゐる。誰がしたのであらう。私の外に這入つて來た者がない。みんなが私を審問する。私は、その櫛に觸りもしなかつたと言ふ。ラムベルシエ氏兄妹は一緒になつて、私を諫めたり、叱つたり、嚇したりする。私はどこどこまでも無實だと言ひ張る。しかしながら、一同私に違ひないときめてゐるので、私がかくまで圖々しい虛言を吐いたのは、初めての事であつたけれど、全然私の抗議を肯き入れない。事態は容易ならざるものと考へられた。さう考へられたのは無理はない。その惡戲も、その虛言も、その强情も皆一樣に、處罰に値するものと考へられた。しかし今度は、それを加へたものがラムベルシエ孃でなかつた。叔父のベルナアルは手紙を貰つてやつて來た。從兄弟も亦私に讓らないほどの不始末とあつて、二人とも同一の懲罰に附せられた。それは嚴しい懲罰であつた。それに依つて與へられる、苦痛そのものゝ中に救治を求めて、腐敗した私の心持を、根絕しようとしたものならば、全然無益の沙汰だつた。長い間

私は、何事もなしにゐられたのである。

彼等は私に白狀させることが出來なかつた。幾度も繰返されたけれど、隨分酷い目にも合はされたけれど、私はびくともしなかつた。私は死んでもいゝと思つて、その覺悟をした。暴力も子供の惡魔のやうな强情を攻めあぐんだ。私の相も變らぬ態度を惡魔のやうだと皆の者が言つたからである。遂に私は、この拷問の中から寸斷になつて、しかし勝誇つて出て來た。

この出來事があつて後、今や殆んど五十年が過ぎ去つた。最早、右の行爲に對して罰せられるやうな氣遣ひはない。今私は天帝の前に、私が無罪であつたこと、あの櫛を壞しもしなければ、觸つても見なかつたこと、まるで煖爐の近くへ寄り附かなかつたこと、そんな心を起しもしなかつたことを公言する。どうして櫛が壞れたかは私にきかないがいゝ。私はそれを知らぬ。それを考へることも出來ぬ。私が確かに知つてゐるのは、唯だ私が無罪であつたと云ふことだけだ。

平生は內氣でおとなしいが、激して來ると猛烈な、傲慢な、執拗な一つの性格を想像したまへ。常に理性の聲に導かれ、常に溫情と、公平と、親切とを以て取扱はれてゐた一人の兒童を想像したまへ。彼はまだ不正と云ふことの觀念すらも分つてゐない。それが始めて人もあらうに、最も敬愛するところの人々から、あんな恐ろしい奴を經驗させられる。何と云ふ觀念の顚倒であらう。何と云ふ感情の混亂であらう。彼の胸に於ける、彼の頭に於ける、彼の僅かに發展し始めた智的生活道德生活の全體に於ける、何と云ふ變動であらう。出來るならば、この總ての事を想像して見たまへ。私自身の場合を云ふと、その時分の私はどんな心でゐたものか、全然見當が附かないやうに思ふのである。

如何ばかり外觀が私を罪に定めたかを洞察し、他人の地位に自分を置いて見る爲めに、私の理性はまだ十分でなかつた。私は自分の位置を去らなかつた。私の感じた總てのものは、犯しもしない罪惡に對する恐ろしい刑罰の酷たらしさである。肉體の苦痛は、激烈であつたにかゝはらず、それほどにも思はないでゐた。私は唯だ反感と、憤怒と、絕望とを感じただけである。從兄弟も大抵似たやうな事件を起してゐたが、偶然の過失を、故意の所行にして懲罰されたので、私と同樣憤慨し、謂はゞ私と同一の熱烈な興奮の中に激昂してゐた。私共は一つの床の中で、胴震ひのつくやうな感情の激發を以て抱き合つた。私共は口が利けなかつた。二人の若い胸が、やゝ安らかになつたとき、その感情を漏らし得た。それから床の上に起き直り、二人とも力の限り、幾度となく叫び始めた、——「カルニフエックス、カルニフエックス、カルニフエックス！」と。

今この筆を執りながらも、心臟の鼓動が高まるやうに思ふ。あの時の事は、千萬年生き延びても今が今の事のやうに忘れないだらう。この暴惡と不正とに對する最初の感情は、それに關聯する總ての觀念が、私の最初の激昂を呼び返すほど、深く魂の中に刻み込まれてゐる。そしてこの感情は、もと〳〵私一人に關係したものであるけれど、非常に力强いものになり、個人的の利害を離れてしまひ、あらゆる不正の行爲を見聞する毎に、それが誰に對してなされ、何處でなされたと云ふことを問はないで、さながら私自身がその被害者でゞもあるやうに憤慨する。無慈悲なる暴君の殘虐や、邪惡なる僧侶の奸計陰謀を讀む時は、百度死んでも構はぬから、あんな奴原を刺殺してやらうと思ふ。鷄や、牛や、犬や、そんな動物なぞでも、自分が强いと云ふだけで、他の奴をいぢめてゐるのを見ると、幾度か汗水垂らして追つかけたり、石を投げたりしたものだ。かうした激昂し易い感情は、或は私の生れつきなのかも知れぬ。私は生れつきであると信ずる。しかしながら、始めて受けた暴行に對する打消し難き追憶は、隨分長く、隨分深くそれに結びついて、少からずそれを强めたに違ひない。

これで私の子供らしい晴れやかさはなくなつた。爾來私は純粹の幸福を享けないのだ。仕合せな子供の時分の追憶は、こゝまでしか續いてゐないと今でも思ふ。私共はその後數ヶ月をボッセエに止まつた。それは丁度、享樂をなくしてからのアダム等が、エデンにゐたやうなものである。外見には同一の境遇ながら、實際はすつかり變つてゐた。愛着や、尊敬や、親密や、信任が、私共を先生に結附けなくなつた。私共は最早彼等を、私共の心を讀んでくれる、神樣のやうには考へなくなつた。私共は惡い事をするのを從前のやうに恥ぢないで、叱られることをいよ〳〵恐れた。隱しだてをしたり、不平を言つたり、虛言を吐いたりしはじめた。私共の年頃のあらゆる惡事が、私共の無邪氣を腐らせ、私共の遊戯を醜くした。田園そのものが胸にしみるやうな優しさと素直さとを失つて、索然たるものに思はれた。その上に面帕が掛かつて、美しいところを包んでしまつた。私共は小さな圃を耕したり、草木を植ゑたりすることをやめた、最早土を刮げて見て、播いた種の芽生えてゐたとき、歡呼の聲を上げるといふやうなことをしなくなつた。私共はさうも生活に厭いて來た。私共も厭かれて來た。叔父は私共を連れに來た。そして私共はラムベルシエ氏、兄妹に別れたが、名殘惜しくも思はれなかつた。

ボッセエを去つてから三十年近くと云ふもの、つひぞ一度も快い感情を以てあの土地を思ひ出したことはない。けれども一生の盛りを過ぎて、だん〳〵老年に近くなつた時、他の追憶が消えて行くにも拘らず、この追憶は新しく生き返り、日毎にそのなつかしさ鮮かさを加へて來る。さながら感情生活の凋落するのを知るにつれて、その發端を再び捕捉しようとするやうだ。その時分の極々つまらない出來事でも、それがその時分の出來事だと云ふだけで私を悅ばせる。時と處と人とに關し、いろ〳〵の事を殘らず思ひ出す。部屋の中で仕事をしてゐる下男や下女や、窓から這入つて來る燕や、私が日課を誦する時、手の上にとまる蠅などを、まざ〳〵と目の前に見るやうだ。私共のゐた部屋の全體の構造を見るやうだ。——右手にラムベルシエ氏の書齋があつて、歷代の法王を描いた銅版畫や、晴雨計や、大きな曆が見える。家の背の高いところから翳しかけてゐて、折々部屋の內まで這入つて來る懸鈎子が見える。讀者諸君に於て、こんな事を殘らず知る必要は固よりない。けれども、私にはそれを言ふ必要がある。思ひ出す度毎に、胸の躍るやうな悅びを感ずる。あの時代のいろ〳〵の小さな出來事を、諸君の前に話さうとするのが何故惡いのだ。取り別けその中の五つか六つを——まゝよ、双方で折れ合はう。私は五つを棄てゝ、たつた一つで我慢する。その代り、それを永く樂しむことを得るやうに、出來るだけ詳しく話さして貰ひたい。

諸君の滿足せられるやうにとばかり心掛けるなら、ラムベルシエ嬢が牧場の緣から落ち込んで、通り掛つたサルディニア王に、素裸なところをお目にかけたと云ふ一件でも、選んだ方がいゝだらう。けれども私には、平場の胡桃の樹一件が面白い。この場合には自分が役者だが、あの驚筋斗の騷ぎには、見物人たるに過ぎなかつたからである。それに打明けた話が、いくら滑稽な事柄であるとは云へ、母とも思つて愛した、或はそれ以上に愛した人の爲め、手に汗を握らせた災難を、お笑草にする氣は出て來ないのだ。

平場の胡桃の樹一件なるものに對し、好奇心を惹起された讀者諸君よ。その恐ろしい悲劇を聞いて、もし出來るものならば、戰慄の情を抑へて見たまへ。

中庭の門前の向つて左手に平場があつて、午後によく皆の者が出て行つて坐つた。けれども、日當りがよ過ぎて、蔭のないのが缺點であつた。この缺點を補ふ爲めに、ラムベルシエ氏は胡桃の樹をそこへ植ゑさせた。その植附けはなか〳〵嚴かに行はれた。二人の塾生は教父になつた。そして穴の埋められる間、私共は凱旋の歌を唄ひながら、各自片手で樹を支へた。水を注ぐ爲めに、根元に一種の凹所が作られた。この灌漑を毎日々々見てゐたので、私共は自から裂目に旗を立てるより、平場に樹を植ゑる方が洒落れてゐると云ふことを考へ出した。そしてこの名譽を誰とも分つことなしに、私共だけで獲ようと決心した。

そこで私共は、柳の一枝を切り落し、堂々たる胡桃の樹

を距ること、一間か一間半の平場へ植附けた。私共のにも、凹所を作ることを忘れなかつた。厄介なのはたゞ水をやることだつた。水は可なり遠くもあるし、それを汲みに行くことを許されなかつたのである。兎に角どうしてもやらなければならぬ。そこで私共は、二三日の間それに水をやる爲めに、あらゆる策略をめぐらした。そしてそれがうまく成功して、小さな芽を吹き出した。私共は絶えまなくそれを計りに行つて、まだ一尺にもなるやならずだけれど、程なく私共に涼しい蔭を拵へて呉れようと樂んだ。

私共はその樹にばかり心を奪はれて、勉強には一向身が入らなかつた、その事情を知られないからして、一層監督を嚴しくされた。水のなくなる時が近づいた。私共の樹は枯れてしまふだらうと思はれて悲しかつた。遂に、必要と云ふ發明の母が、私共と胡桃の木に九死の中に一生を與へた。すなはち、地下に一條の溝を掘り、内密に胡桃の樹から柳の樹へ、水の一部分を引かうと云ふのだ。この試みは隨分熱心にやつて見たけれど、直ぐには成功しなかつた。勾配がうまく附いてゐない爲め、水が通らなかつた。土が落込んで溝をせきとめた。入口には泥がたまつた。すつかり事が間違つた。それでも私共は落膽しなかつた。オムニア・ラボル・インシイト・イムプロブス（忍耐は一切をなしとぐの意）。私共は勾配をよくする爲めに、土を掘り柳の周圍の溝を深くした。

箱の底板を小さな狹い板に切り三方板の三角な溝で水道を拵へた。入口の處へ格子のやうな、簀子細工のやうな物を拵へて、水を通しながら泥や石の流れ込むのを防いだ。巧みに蔽ひ隱した土の上を、しつかりと私共は踏み固めた。すつかり用意が出來た日には、いよ〳〵灌漑の時のやつて來るのを、恐怖と希望との間を往來しながら待つてゐた。何百年も待たされたやうに思つた後、遂にその時がやつて來た。ラムベルシエ氏は平生のやうに、その仕事を手傳ひにやつて來た。その間私共二人は私共の樹を匿す爲め、それと氏との中間に這入つてゐたが、仕合せと彼は背向きになつてゐた。

最初の一杯を注ぐや否や、直ぐにそれが柳の方へ流れて行つた。これを見ては私共も、うつかり歡びの聲を擧げてしまつた。その聲を聞き附けて、ラムベルシエ氏は不思議さうにあたりを見廻した。氣の毒なこと！　彼は、胡桃の樹を取卷いた一帶の土がいゝ土で、うまさうに水を呑むのを見て悅んだ。その水が、二つの池に分たれるのを見た時は、今度は彼が驚きの聲を擧げた。吟味して、奸策を看破した。早速斧を持つて來させて一擊を食はせ、板片二三枚を宙に飛ばせた。そして、「水道だ、水道だ。」と呼ばはりながら、片端からやツつけた。その度毎に、私共の胸にそれが徹へた。見る〳〵板片や、水道や、池や、柳や、總ての物が打壞され、總ての物が掘返された。この恐ろしい處分の間、彼の繰返した叫びの外は、如何なる言葉も聞かれなかつた。「水道だ。」私共の總ての望みを滅ぼしながら彼は叫んだ。「水道だ、水道だ。」

この出來事は若い技師等にとつて、定めし厄介な結末になつたであらうと、想像されるかも知れないが、事實はそれ限り事なしに濟んだのである。ラムベルシエ氏は何等の叱責をも加へず、格別いやな顏もして見せず、その事に關しては何も言はない。のみならず、少時經つてから妹さんのところで、聲高に笑ひながら話してゐるのを聞いた。ラムベルシエ氏の笑ふのは、隨分遠くまで聞えたものだ。それよりも不思議なのは、最初の恐怖がなくなると、それほどにも思はなくなつたと云ふことである。私共は、又もや別の樹を植ゑて、「水道だ、水道だ。」と呼ばはりながら、幾度か最初の樹の悲しい最後を回想した。そのころまでも私は折々、自分をプルッスかアリスティデスのやうに考へる野心の發作に罹つてゐた。けれどもこれが私の虚榮心の最初の現はれなのである。自分の手で水道を拵へたり、小枝を大きな樹木を養ふと同樣に養つてやつたりすると云ふのは、私に取つて、最高の名譽と思はれた。この點に關しては、十歳の兒童なる私の方が、三十歳のシイザアよりも正しい判斷を有つてゐたのだ。

この胡桃の樹と、それに關聯した小事件とに對する記憶は、そのまゝに保存され、絶えず呼び起されたので、一七五四年にジュネエヴへ行つたとき、何よりも樂みにした計畫の一つは、このボッセエを訪れて、子供らしい遊び事の記念碑を見たり、又特に、その時分もう一世紀の三分の一を年取つた、なつかしい胡桃の樹を見たりすることだつた。私はいつも色々の事に煩はされて、思ふやうにこの希望を充たすべき機會がなかつた。これから先きにもさうした機會が來さうに見えぬ。けれども、この希望は決してなくならぬ。もしどうかして、あのなつかしい所へ行き、私の好きな胡桃の樹が枯れずにゐるのを見出すならば、私はきつと自分の涙を、それに灌ぐに違ひない。

ジュネエヴに歸つてからは、私の將來の決定せられるのを待ちながら、二三年を叔父の家で過した。叔父はその息子を技師に仕立てる積りで、少しづゝ製圖を習はせ、自分でもユウクリッドの初歩を敎へた。私はそれをみんな彼と一緒に敎はつて、その内に面白味を見出した。とりわけ製圖が好きだつた。ところで私を時計師にすべきか、辯護士にすべきか、或は僧侶にすべきかゞ問題であつた。私は何よりも僧侶が好きだつた。說敎すると云ふのが、甚だ氣の利いた事のやうに思はれたからである。けれども、母から遺された僅かな收入は、兄と分けなければならないし、私の學費を

支辨するに不足であつた。職業の選擇を急ぐと云ふほどの離でもないので、その間殆んど何もしないで、叔父のところに逗留したが、可なり高い賄料を、きちん〳〵と拂はせられた。

叔父は、父と同樣の遊びずきで、私共の事なぞ面倒がつて構つて呉れない。叔母は凝り固まりの信心家で、私共の教育に氣を附けるより、讃美歌でも歌つてゐるのが好きだつた。私共は全然自由の身だつたが、その自由を濫用することをしなかつた、いつも離れることなしに、互に滿足をしあつてゐたので、同年輩の街の子供と一緒に遊びたいと云ふ氣にならず、怠惰者の陷り易い、放縱の習慣にも陷らなかつた。のみならず、怠惰者と云ふさへ當らない。一生を通じて、これより勉强家であつたと云ふときもないからである。そして仕合せな事には、取りかへ引きかへてやつて來て二人の心を奪つた娛樂が、いづれも家の內の娛樂であつて、街へ出たいと云ふ考すらも私共に起させなかつた。私共は鳥籠や、笛や、紙鳶や、太鼓や、家や、突手銃や、弩などを拵へた。人の善い祖父の道具を臺無しにして、時計を拵へる眞似をした。私共の別して好きなのは、紙の上に物を書いたり、圖を引いたり、彩色をしたり、繪具をよごしたりすることだつた。或る時、ガムバ・コルタと云ふ伊太利の香具師がジュネエヴへ來た。私共も一度は亂に行つたけれど二度とは行かうとしなかつた。所で、その香具師が人形芝居を見せたので、私共も人形を拵へ始めた。彼の人形が喜劇がゝつた物を演つたので、私共も私共の喜劇を仕組んだ。この面白い喜劇を演ずる爲めに、痛くなるほど喉を絞つて、道化者の嗄聲を誤魔化した。それを人の善い家族らが、我慢して見もし聞きもした。然るに、一日叔父が家內の者を集めて、自作の面白い法話を朗讀してからは、私共も喜劇に背を向けて、法話の文章を書き出した。實のところ、こんな管々しい話が、それほど面白からうとは思はない。けれども、私共の最初の教育がどんなにうまく行はれたかといふ事、年の行かない私共二人が、どんなにでもなる境遇ながら、それを濫用しなかつたといふ事はこれでもつて分るのだ。私共はこれほど遊び仲間を作る必要がなく、さうした機會を見出さうともしないでゐた。散歩の途上、彼等の遊んでゐるのを見ても、格別羨ましくもなく、仲間に這入りたいとは思はなかつた。私共の心には友情が一杯になつてゐて、二人一緒に居りさへすれば、最も單純な娛樂の中にも、最高の悅びを見出すことが出來たのだ。

私共はいつも一緒にゐたので注意を惹いた。從兄弟は非常に脊が高く、私は非常に脊が低く、可笑しな一對をなしてゐたので愈々注意をひいた。彼のひよろ長い身體や、小さな、萎びた林檎のやうな顏や、弱々しげな樣子や、のろ

のろとした步調が、子供等の嘲笑を招いた。

土地の方言でバルナ・ブルダンナ（頓馬な驢馬の意）の綽名をつけられた。一步外へ出ると、私共の周圍には、バルナ・ブルダンナより外の言葉を聞かなかつた。彼はそれほどにも思つてゐなかつたが、私は癪にさはつて堪らない。喧嘩も買つた。それは丁度惡童共の願ふところであつた。私は擲合をして擲られた。從兄弟は懸命に加勢をしたけれど、元來の弱蟲で、たゞ一擊で打倒された。手負獅子のやうになつて、私が暴れたのはそれからだ。隨分ひどく擲られるには擲られたが、相手の奴共は私より、バルナ・ブルダンナの方を狙つたのである。兎に角私が暴れ廻つた結果はいよ〳〵いけなくなり、學校の授業時間より外は、すつかり外出することが出來なくなつた。その生徒等から侮辱され、迫害されることを恐れたのだ。

私は已に、壓抑せらるゝものゝ保護者となつた。眞正の騎士となる爲めには、淑女が一人あればよい。私にはそれが二人あつた。私は折々、ヴォオの小さな市なるニョンに父を訪れた。父はなか〳〵持てゝゐた。そしてそこの人々の厚意が息子の上にも配たれた。私のそこにゐた暫時の間、誰からも親切にされた。とり分けヴュルソン夫人と云ふのが、可愛がり過ぎるほど可愛がつてくれた。その上にまた夫人の娘は、その愛慕者にしてくれた。十一歲の愛慕者が、二十二歲の娘に對する關係は、固より知れたものである。けれども、かうした浮氣な人達は、小さな人形を前へ据ゑて、大きな人形をかくしたり、或は大きな人形が面白くすることを知つてゐるやうな一つの遊び事を見せつけて、彼等を釣寄せたりして喜ぶものだ。私の方では、何等の不釣合な點をも知らないから眞面目に取つた。そして胸の全體を、或は寧ろ頭の全體を、傾倒してしまつた。なぜと云つて私は、氣も狂ふほどに思つたけれど、私の熱情や、興奮や、激昂が、抱腹絕倒の幕を演じさせたけれど、要するに唯だ、頭の中で思つてゐたに過ぎないからである。

私は全然異つた二通りの愛があるものだと思ふ。それは同じやうに眞實で、同じやうに親密なる友情とも異つてゐて、しかも互には似てゐない。私は一生の間、かくも異つた二つの愛情に身體を裂かれた。のみならず、同時にその二つを經驗したのである。例へば今、ヴュルソン孃を我物顏に振舞つて、誰にも側へ寄らせないと云ふやうにしてゐる時に、果敢ないながらも淺からぬ交りを、ゴトン孃と云ふのに結んだものだ、その人は私に對して、學校の先生のやうな態度を取つた。それが總てゞあつた。けれどもこの總ては、事實私に取つて總てのもので、無上の幸福と思はれた。そしてもはや祕密の値を知つてゐたので、それを唯だ子供らしく用ゐたに過ぎなかつたのだけれど、あてにしてゐないヴュ

ルソン孃が、他の情事の假託にして呉れたその骨折に私は酬いた。しかしながら殘念な事に、私の祕密は露顯した。或は私が守るほど、私の小さい先生が、それを守つてくれなかつた。私共は直ぐに別れなければならなくなつた。ジュネエヴへ歸つてから、クータンスの方へ行く道で、私は小娘たちがひそ〳〵聲で聞えよがしにかういふのを聞いた、「ゴトンとルソオ、こそ〳〵やつてるわ。」

このゴトン孃は全く變つた少女であつた。美しいと云ふのでもないが、一寸忘れられない顏をしてゐた。この年になつてゐて始終私は思ひ出す。取りわけその目が、齡にも、からだにも、全體の姿勢にも不似合であつた。その役割相應に、勿體振つた、上品な樣子をしてゐた。そしてそれが抑も私の心に留まつたのである。けれども彼女の第一の特徵は、不思議にも無遠慮と控目とが、ごつちやになつてゐると云ふことだつた。自分では勝手氣儘に振舞ひながら、私には決してさうさせぬ。まるで赤坊のやうに、私を取扱つた。あれで見ると、彼女はもうすつかり赤坊でなかつたとも考へられ、それと反對に、崖緣で遊んでゐたいから、只だ面白がつてゐるほどの赤坊であつたとも考へられる。

私はこの二人の中の各〳〵に沒頭して、その一方と一緒に居れば、片一方の婦人を思はないでゐた。のみならず、二人に對する感情は全然異つてゐた。私はゴルソン孃の側に一生涯くつゝいて居たいとまで思つた。その癖側へ行つて見ると、歡びの情は平かになつて、何等の激動をも來さない。私は取分け大勢の會合に於て彼女を愛した。その諧謔や、涙眦や、嫉妬の情までが私を引附けた。大人の競爭者共が、冷遇されてゐるらしく見えるそばで、特別の待遇を受けてゐるのを誇らはしく感じた。私も苦しい思ひはしたけれど、その苦しみが樂みだつた。賞讃や、激勵や、微笑が私を燃え立たせた。私は熱烈になりきつた。會合のとき私の愛は前後を忘れた。差向ひになると氣詰りで、氣乘りがしなくて、面白くなかつた。それでも私は、彼女が病氣をすれば心を痛めて、身代りになつてもいゝとさへ思つた。身體が丈夫だとか、丈夫でないとかいふことが何であるかを、私は經驗によつて知つたのである。離れてゐると、彼女の上を思うて逢ひたくなつた。逢へばその寵愛が、柔かに胸を包んだけれど、肉感を動かすことは決してなかつた。何事もなく親近してゐたのである。私の空想は、與へられるものだけで滿足した。けれども、他の人達にも同じやうに與へられるのは辛かつた。私はつまり兄弟のやうに愛したが、戀人のやうに嫉妬したのである。

ゴトン孃に對しても同じであつたらう。のみならず、彼女が私に許した同樣の待遇を、他の人にも許したと想像する丈けでも、私はもう土耳古人のやうに、狂人のやうに、虎の

やうになつたであらう。なぜと云つて、その待遇は跪いて求めたものであるからだ。ヴルソン孃に近づくときは、著しい歡びを感ずるけれども不安がなかつた。ゴトン孃の姿は、一目見た丈けで他のものが目に這入らなかつた。何が何だか分らなくなつた。一方は、遠慮なくしてゐても、胸がざわついて取り亂した。あまり長くあの人と一緒にゐたならば、死んでしまつたかも知れないと思ふ。心臟の鼓動が息の根をとめたに違ひない。兩方とも機嫌を損ねまいと思ふのは同じであつた。けれども、一方は私の方から氣を迎へるのであつたが、他の一方は、命これ從ふの姿であつた。私はどんな事があつてもヴルソン孃に餘計な心配をさせたくなかつた。けれども、ゴトン孃が飛込めと命令すれば、火の中へも、その場で飛込んだに違ひない。

ゴトン孃に對する私の戀は、或は寧ろ一緒にゐることは、双方にとつて仕合せにも、長く繼續しなかつた。ヴルソン孃との關係は、さほど危險でもなかつたが、それよりもう少し續いたあとで穩かならぬ大詰を見せた。かうした事柄の結末は、いつでも一寸芝居がゝりになるものだ。ヴルソン孃との關係は、目覺ましくなかつたけれども、深かつた。私共は、別れる毎に涙を流した。別れた後の私の心の堪へられない淋しさは、とても想像して貰へない。私は他の事を話すことも、考へることも出來なかつた。その哀みは痛切であり眞實であつた。けれども、その奥底へ這入つて見ると、彼女に對する感情丈けでもなかつたやうだし、無意識ながら又、彼女を中心にする悅びが、可なり一緒になつてもゐたやうだ。獨居の淋しさを忘れる爲めに、二人は互に石をも熔かすやうな熱烈な手紙を書いた。そして私の男振を上げたのは、遂に彼女が堪へかねて、ジュネエヴへ逢ひに來て呉れたと云ふことだ。私の頭が顚倒してしまつたのも無理はない。彼女の逗留した二日間といふもの、私は陶然として醉つてゐた。彼女の去つた時は、その後を追うて、水の中へも飛び込み兼ねない心であつた。空には長く私の叫びが留まつた。八日經つて彼女から、糖菓や、手袋なぞを贈つて來た。同時に彼女の結婚したことを聞かなかつたら、私を假託にやつて來たのが、婚禮の衣裳を買ふ爲めであつたのを聞かなかつたら、どんなに嬉しがつたことだらう。私の憤激はわざ〳〵書くに及ばない。十分に想像し得られることだ。私は決然として自ら誓つた、——あんな奴にはもう二度と會つてやるまいと。これが彼女に對して加へられる、最も恐ろしい罰だと考へられたのだ。けれども、その爲めに彼女は死なゝかつた。二十年の後、私が父を訪れて、父と湖上に遊んだとき、近くの端艇に乘つてゐる、あの婦人達は誰かときいた。「あれかい、」と、父は笑ひながら答

へた。「思ひ出せさうなものだがな、お前の昔の戀人のクリスタン夫人さ。あのそれヴュルソン孃だよ。」この殆んど忘れられ掛つた名前を聞いて、私は全く愕然とした。けれども、私は舟を引返させた。復讐するのには好い折だが、我と我が誓ひを破つて、二十年前の爭ひを、四十女と繰返しても始まらないと思つたからである。

かう云ふ有樣で私は、職業が決定されるまで、少年時代の最も貴重なる時間を空費した。私の性質を色々に考へた末、全然、私に適しないものを選んで呉れた。そして私は市の登記係、マッスロン氏の處へやられ、叔父のベルナアルが言つた通り、(吝嗇者と綽名の附いた)代辨人の職業を習はせられた。この綽名が堪らないやだつた。下品な事をして金を溜めようと云ふのは、少からず私の矜を傷つけた。その仕事が面倒臭くなり、我慢がしきれなくなつた。更に時間上の束縛がとゞめを刺した。いつでも事務所へ這入るとき感ずる一種の恐怖は、日を追うて愈々加はつた。マッスロン氏はマッスロン氏で、甚だ私が氣に入らない。侮蔑の態度で私を取扱ひ、絶えまなく私のぐづ〳〵とぼんやりとを責め、毎日のやうに繰返した、私の叔父が好い加減なことを言つて、碌でもない奴を背負込ませたと。結局私は物にならないとあつて逐ひ出された。其處の書記共に言はせると、私は束にした書類の持運びくらゐより外に、何一つ出來さうにもなかつたのである。

かうして私の天分は見極めが附いたので、見習奉公にやられる事となつた。併し私のやられたのは、時計師でなくて彫刻師であつた。登記所の方で男振を惡くしたので、私はおとなしく服從した。師匠のヂュコンモン氏は、野鄙な荒つぽい青年で、間もなく私の晴やかな子供らしさをなくさせ、溫かな生々とした天性をなくさせて、私の心持をすつかり丁稚相應のものにして呉れた。拉丁語も、古代の知識も、歴史の類も、久しい間忘れてゐた。羅馬人が曾つてこの世界にゐたと云ふことさへ思ひ出さなかつた。父を訪ねて行つたとき、彼はもはや私の上に彼の偶像を見出さなかつた。女の人達も當年のジャン・ジャックを見なかつた。ラムベルシエ氏兄妹も昔の教子だとは氣が附くまいと思つて、流石に私は逢ふのを恥ぢた。そしてそれつきり逢はないでしまつた。思ひ切つて下劣な趣味が、私の床しい娯樂に代り、その記憶をさへもなくさせた。教育の良かつたに拘らず、私は餘程墮落し易い傾向を有つてゐたらしく、急轉直下の勢を以て墮落したのである。斯くも早熟なるシイザアが、斯くも速かにラリドンになつた例はあるまい。

技藝その物は私も嫌ひでなかつた。製圖は大に好きだつた。鑿を使ふのは面白い職業でもあるし、時計の外側を彫刻するには、大した腕前も要らぬので、一人前になつて見

ようと云ふ氣を出した。師匠の蠻行と、法外な束縛とが、仕事を嫌はせなかつたら、多分一人前になれたと思ふ。私は師匠の目を盜んで、自分のやりたいと思ふ仕事をして見た。氣儘にやつてみるのが嬉しかつた。自分や自分の朋輩が、騎士の勳章としてかけるべきメタルを刻つた。その勝手な仕事を師匠に見附かつてしたゝか打たれた。その上私共のメタルに共和政府の紋章があつたので、贋金を拵へるつもりだつたと言はれた。正直私は、贋金か何だか知らなかつた。眞物も碌々知らなかつた。今日の三スウ銀貨より、まだしも羅馬の一アアス銅貨を拵へることを知つてゐた位のものだ。

師匠の暴虐が、本來ならば好きになるべき仕事を堪へ難く思はせ、虚言を吐くとか、懶けるとか、盜みをするとか云ふやうな、本來ならば嫌ひであるべき筈の不德に走らせた。骨肉の者にたよつてゐるのと主人持ちをするとの相違を、私の身の上に起つた當時の變遷の回想ほどに痛切に敎へたものはない。生れつき內氣で臆病な私は、私の缺點のどれに較べても圖々しさは寧ろ少なかつた。然るに、私の有つてゐた適度の自由は、それまで唯だ次第々々に狹められて來たのに過ぎなかつたが、遂に全くなくなつた。父の處では向うみずに振舞つた。ラムベルシエ氏の處では氣儘であつた。叔父の處では前後を考へた。師匠の處ではびくつき出した。そしてそれ以來私は駄目な子供となつたのだ。私はそれまで長上の人達と、全く平等の生活をして來たものである。自分に許されないやうな娯樂を知らず、自分に食べさせて貰へないやうな御馳走を見ず、欲しい物を欲しいと言へないやうな、そんな不自由を知らずにゐたのである。心の中のどんな事でも口に出すのを憚らなかつた。それがどうだらう、今度の家へ來てからは、私はまるで口を利かずにゐる。やつと三分の一ばかりで、まだ食べたいところをも我慢して食卓を離れなければならぬ。用がなくなれば、さつさとその部屋を去らなければならぬ。始終仕事をさせられづめで、他の人だけが面白くやつてるのを、私一人指をくはへて見る暇もない。師匠や師匠の手傳共が樂々とやつてるのを目に見ると、自分の重荷が一層重くなる。自分のよく知つてゐる事柄が論ぜられても、私は口を利かない。一口に言ふと、私の目に觸れる總ての物が、自分だけ仲間に加はれないばつかりに、渴望の對象になると云ふ有樣ではないか。屈託のない心や、快活な動作や、氣の利いた落想もなくなつた。その落想で前には幾度か、過失を罰せられないで濟んだものである。思ひ出す度に、ふき出さずには居られないやうな事件もあつた。父と一緒にゐた或る晩のこと、惡戲の罰として、晩食をたべないで寢かされることになつた。見窄らしいパンの片をもつて臺所を通るとき、金串の

上に炙けてゐる炙肉が、目にも留まり鼻にもとまつた。皆の者は圍爐裡を取卷いてゐた。私はその一人々々にお休みなさいと言はなければならなかつた。それを濟まして、ちらりと一目、旨さうな匂ひの炙肉を見たときは、その炙肉にも腰を屈めて、「炙肉さん、お休みなさい、」と、悲しげな聲で言はざるを得なかつた。この罪のない諧謔が愛嬌になつて、晩食の仲間入りを許されたのである。師匠のところでも、同じ調子で行けば可いかも知れぬが、あゝした落想は浮ばなかつたであらう。よし浮んでも口に出せなかつたであらう。

斯くて私は、人知れず物を欲しがることを覺え、隱立てをすることを覺え、人前を繕ふことを覺え、虛言を吐くことを覺え、遂に盜みをすることを覺えた。これはその時まで思ひも寄らなかつたもので、また、その時以來十分に癒されないでしまつたものである。欲しがつても獲られないと云ふことの結果は、いつでもかうなる。總ての奴僕が泥棒であるのはこの爲めだ。總ての徒弟が泥棒であるのもこの爲めでなければならぬ。もつとも彼等が大きくなつて、欲しいと思ふ物の手に入るやうな身分になれば、この恥づべき性癖を失つてしまふ。私はさう云ふ好運に會はなかつたから、さう云ふ利益をも收めないでしまつた。

子供等をして不善に踏み入らしむるものは、大抵の場合、善良なる、されど憇しく導かれたる意志である。絶間なき缺乏と誘惑とを感じつゝも、一年以上私は、師匠の家で食物をすら取ると云ふ氣になれないでゐた。私が盜みをした第一の動機は好意であつた。けれどもそれが感心の出來ない、他の盜みの序幕になつた。

師匠の手傳にヴェルラアと云ふ近所の男がゐた。その男の家に可なり離れた圃があつて、上等の石刁柏が出來た。いつも金のないヴェルラアは母の目を偸んで、その出たてを取り、それを賣つて一つ旨い物を食はうと考へた。自分ではその實行を私に押附けた。初めはお世辭を言つてゐたが、そんな氣で言ふとは知らないので、一層わけもなく煽て上げられた私に對し、その場で思ひ附いた事のやうにそれを言ひ出した。私はきつぱりと斷つたが、彼はなか〳〵强請んで止まぬ。私は追從を斥け果せたことがない。とう〳〵負けた。毎朝々々出掛けて行つて、上等の石刁柏を取り、それをモラアル婆さんのところへ持つて行つた。その婆さんは盜んで來たのを感附いてそれを廉く買はうとした。私は此方に弱味があるのでいくらでも構はず賣飛ばし、その金をヴェルラアに渡してやつた。それが直ぐに朝飯になつた。私は賄方をしたばかり、それを食べたのは彼と彼の同僚との二人であつた。私はほんの少しばかりの賄賂に滿足し、

酒に手を觸れても見なかつたのである。

私が泥棒の泥棒をしてやらうと思ひ附いたのは、ヴェルラアの上前をはねてやらうと思ひ附いたのは、四五日經つてからのことである。それまで私は正直一方でやつてゐた。私は唯だ、煽動者を喜ばさうと云ふだけの心であつた。しかしながら、若しや私が捕まつたらば、どんなに打たれ、どんなに罵られ、どんな酷い目に遭はされることだらう。その癖彼奴は私を見棄てゝ、口の端をぬぐつて通せるだらうし、私は彼奴を誣告したと云ふので、二重に罰せられるだらうぢやないか。なぜと云つて彼奴は手傳だし、私は只だの見習だもの。いつでもかう云ふ鹽梅に、力の强い惡黨は、罪のない弱蟲を踏臺にして置いて逃げるんだ。

かくて私は盜みをすると云ふことが、思つた程恐ろしいものでないのを知つた。間もなく私は非常にうまく經驗を利用したので、私の欲しいと思ふ如何なる物も、手の屆く限り危くなつた。私は師匠の家でも、相應の物を食べてゐた。そして、飲食物を節してゐるのが私に辛かつたのは、たゞそれが盜み易かつたからに外ならない。若い者達を最も誘惑する物の持出されるとき、彼等を逐ひ拂ふと云ふ習慣が、そも〳〵彼等を意地穢くもし、泥棒にもする原因であると思ふ。私は幾程もなく兩方になつた。そして多くは上首尾であつた。尤も折々は見附かつて、ひどい不首尾もあつた。

私は今でも、高い價を拂はせられた、あの林檎取りの一件を追想する度毎に、戰慄と微笑との雙方を同時に感ずるのが常である。その林檎は、高い格子窓を通して臺所から明りを取つた、食料室の底にあつたのだ。一日私は家に一人でゐたので、揑槽の上へ上つてエスペリイド家の庭の、手の屆かない林檎を見たものだ。私は炙串を持つて來て屆くか屆かないかを測つたが、それは短くて駄目だつた。私は更に、小さな獲物に使ふ炙串を接ぎ足した。師匠は獵が好きなのである。私は幾度か突刺したが成功しない。最後に一つの林檎を突き當てた時の悦びと云つたらなかつた。私は大に氣を附けて引き寄せた。已に窓とすれ〳〵に來た。私は手を伸べて摑まうとした。しかし、その時の私の當惑はどんなであつたらう。林檎は大き過ぎて格子をくゞらない。それを引き入れる爲めには、どんな手數をも厭ふものか。炙串をかうして支へる物がなければならぬ。林檎を割るに足るほどの長い小刀がなければならぬ。俎になるものがなければならぬ。いろ〳〵にして、やつと割れた。割れた片を一つ〳〵引き入れようと云ふのであつた。然るにそれが、割れたと思ふ間もあらばこそ、雙方共に食料室の中へ落込んだ。同情ある讀者諸君よ、私の胸中を察して下さい。

勇氣は失はなかつたが、大分時間がたつたので、不意擊

を食つてはと云ふ心配から、樂みなあとの帳場を翌日に延ばした。そして何食はぬ顏をしながら仕事をしてゐた。食料室の中に二つの證據物件が轉つてゐて、それから足が附かうとは思ひ及ばなかつたのである。

翌日更に折を見て、私はまたもや帳場を開いた。腰掛の上に上つて、炙串を伸ばして、狙ひを定めて、將に突き刺さうとしたその刹那、……運惡く龍が寢てゐなかつた。突如、食料室の戸が開いた。師匠がそこへ現はれて、腕組をして、私を見て、「ざまを見ろ」と浴びせたものだ。……書きながら筆が落ちさうに思へる。

私は絕間なく虐げを受けたので、やがてそれ程にも感じなくなつた。それが竊盜に對する一種の賠償のやうに思はれた。そしてそれを繼續すべき權利を私に與へた。退いて刑罰を思ふより、進んで復讐を考へた。泥棒として打擲されるなら、泥棒をしてもいゝわけだと思つた。盜みと罰とは脊中合せをしてゐるもので、謂はゞ一種の取引で、私は自分の受持をやればいゝ、あとは主人が受持つと思つたのである。かう思つて私は、前よりも一層落着いて盜みをした。「結果はどうなる、」と自ら問うて、直ぐに私は自ら答へた。「たかゞ打たれるくらゐのものだ。構ふものか。どうせさうと決つてるんだ。」

がつ〳〵とやらない限り、物を食べるのは私も好きだ。私は肉感的だけれども意地穢しではない、他の好きな物が有り過ぎてその慾を紛らはすのだ。私は一體に、胸の暇な時だけ舌の方へ心を向ける。それが又極めて稀で、旨い物を食べようと思つたことは滅多にない。それで私は、いつまでも食料品ばかり盜むことをせず、直ぐに欲しいと思ふ總ての物の上に手を擴げた。そして私が正式の泥棒にならなかつたのは他でもない、金錢がそれほど私の心を惹かなかつたからである。共同の仕事部屋に、師匠だけ使ふ錠前のかゝる押入があつた。私は、その戸をこつそりと開閉することを知つた。其處で私は彼の大事な道具や、上出來の製圖や、印證や、總て私の欲しい物、彼が始終私に近寄らせまいとしてゐる物を徵發した。この泥棒はもと〳〵罪のないものだつた。それが彼自らの爲めになるやうに用ゐられたからである。けれども、それ等のこま〳〵とした物を自分の自由にして見た時は、何とも云へない嬉しさであつた。私は彼の製作品と共にその技倆をも盜んだと思つた。のみならず、小さな筐の中には、金銀の截ち屑や、小さな寶石や、賞牌や、貨幣があつた。私の懷には、高々四五スウくらゐしかなかつたであらう。それにも拘らず、それ等の物に觸つても見なかつた。まるで見向きもしなかつた。私はそれに對して、樂みよりも恐れを感じたのである。かくも金錢や、金錢上の價値ある物を盜むのを恐れたは、大部分教育の結

果であると思ふ。それには恥辱とか、牢獄とか、懲罰とか、絞首臺とか云ふ觀念が附き纏つてゐて、誘惑されるときに戰慄させた。そして私は自分のやる事を唯だの惡戲だと思つてゐた。また事實、唯だの惡戲であつたのだ。要するに師匠の手から、少々ばかり痛棒を食へば濟むのである。そして私はもうその準備をしてゐたのである。

けれど、更に一言を加ふれば、私は格別、己に克たうと云ふやうな念慮もなかつた。克服すべき何物ももつてゐなかつた。綺麗な畫用紙のたつた一枚が、その五百枚を買ふほどの金よりも欲しかつたのである。こんな妙なところは、私の性格の一面から來たもので、一應の說明を要するほどに私の行動に影響してゐる。

私は非常に激烈な熱情を有つてゐる。それに動かされてゐる間は、何物も私の狂暴に敵はない。私はもはや何等の手加減をも、遠慮をも、恐怖をも、禮儀をも知らない。私は無作法で、鐵面皮で、亂暴で、手が附けられぬ。羞恥も私を支へることが出來ぬ。危險も私を抑へる事が出來ぬ。自分の心を向けてゐる物のほか、世界全體が私にとつては何物でもないのである。けれども、これは唯だほんの一刹那しか續かない。次の刹那に鬼憑が落ちたやうになる。

平靜な時の私は怠慢と臆病その物だ。どんな事でも恐ろしくて、しりごみする。蠅が飛んでもびつくりする。唯だの一言口を利くのでも、一寸手先を動かすのでも、身震ひがする程いやだ。恥かしさ恐ろしさに、人のゐない處へ隱れたい。何かしなければならぬ時は、何をしていゝか分らない。何か話さなければならぬ時は、何を話していゝか分らない。顏を見られるとどぎまぎする。情が熱して來ると、可なりに言ふこともあるのだが、平生の會話では、まるで口が利かれない。口を利かなければならないと云ふことが、愈々口を重くするのである。

その上、私の大きな欲望は、金で買はれるやうな物に向はなかつた。私の求めるのは純粹の歡樂だ。そして金はそれを汚してしまふ。例へば私に御馳走を食べたいといふ欲望がある。けれども、私は窮屈な宴會や、料理屋の馬鹿騷ぎに堪へないからして、唯だ一人の友人とのみうまく食べられる。なぜと言つて、自分一人ではやれないからだ。自分一人だと他の事ばかり考へて、御馳走がお留守になるからだ。燃え立つた私の血が、婦人を要求する場合にも、動悸の高まつた私の胸は、より多く戀愛を要求する。賣買される婦人等は、私にとつて何の味もない。そんなものを役に立てようと云ふ氣が、出たか出ないかも疑はしいのだ。これは私の手の屆く總ての樂みに於てさうである、無代價のものでなければつまらない。私は唯だ、特別の享樂をなし得る心にのみあてがはれたやうな事物を愛する。

私は世間の人達が考へてゐるやうに、金錢を貴い物と思はない。のみならず、便利な物とさへ思はない。金錢それ自體はつまらぬものだ。それを役立てる爲めには、他の物と換へなければならぬ。買はなければならぬ。取引をしなければならぬ。屢々欺かれなければならず、碌でもない世話をされるため、馬鹿々々しい高價を拂はなければならぬ。上等の品が欲しいと思つても、金で買へばきまつて惡い物だ。高い價を拂つて、蹇みたての卵を買へば、古くなつてゐる。果物の良いのは熟してゐない。若い女は汚れてゐる。旨い酒が飲みたいと思ふ時、どこから持つて來させるか、酒屋から取寄せるとするか、どんなにしても身體の毒になる。行屆いた世話をされようとするか、どんなに面倒臭くうるさいことだらう。友達や同僚を拵へなければならぬ。責任を分擔したり、方々を駈け廻つたり、人を待つたりして、結局は度々また欺かれなければならぬ。金と云ふ奴ほど厄介なものがあらうか。私は美酒を愛するよりも遙かに金錢を恐れる。

見習奉公の時代にも、それから後にも、私は幾度となく旨い物を買ひに外へ出た。菓子屋の近くまで行くと帳場のところに女共の姿が見える。私はもうその女共が笑ふのを、この意地穢い子供を見て、面白がつて笑つてゐるやうに思ふ。果物屋の前を通ると、旨さうな梨がちらりと目に留まる。その匂に引寄せられる。二三人の若い人達が側から私を見てゐる。知り合の人が戸口に立つてゐる。むかうの方から若い女がやつて來る。家の下女ではないか。私の近眼が幾度となく私を迷はせる。通り掛りの人は殘らず皆知り合のやうに思はれる、到る處に邪魔が這入つて、私は二の足を踏む。恥かしさにつれて欲しさは募る。そして遂に私は、白痴のやうになつて再び家へ行く。渇望に身を燒かれて、それを充たすべき物を懷中しながら、何一つ買ひ得ないで、すご〳〵と歸つて行くのである。

若し私が、自分の手でさへも、他人の代理でさへも、金を使ふときに經驗した、あの當惑や、羞恥や、嫌惡や、反感や、各種の不愉快を說明しようとするならば、一向に面白くもない事柄を細々と述べ立てるべきところであらう。しかし、そんな面倒臭い事をしないでも、私の生涯を讀み進んで行つて、だん〳〵と私の性格が分つて來れば、讀者諸君は十分に會得せられることだと思ふ。

これが分れば容易にまた、私の表面上の矛盾撞着が解せられる。殆んど穢らしいほどの吝嗇が、非常なる金錢の蔑視と、ごつちやになつてゐる所以が解せられる。金錢は私に取つて、それを持たないとき持ちたいと、夢にも思はないほどつまらない物だ。そして多少でも持つてるときは、思ふやうに使ふことを知らないから、久しく使はずに置く。

けれども好い折があれば、財布が空になるのも知らないで使ふ。もつとも、見得から金を使ふやうな、吝嗇者の特質は私にない。それとはまるで反對だ。私はこつそりと自分の樂みに使ふのだ。これ見よがしに散財するとは大違ひで、私はそれを隱すのだ。私は金錢が自分に用のないものだと思ひ、自分で金錢を持つのを恥ぢ、より多くそれを使ふのを恥ぢる程である。もしも私が、樂に暮せるくらゐの收入を有つてゐようなら、けちな考を起さうとは思へない。私はそれを殖さうなぞと考へないで、殘らず使つてしまふであらう。けれども、不安な私の境遇が遠慮をさせる。私は自由を憧憬する。束縛や、心配や、服從に對して恐怖を感ずる。私は懷に金のある限り、獨立を保證される。その金は新しく儲ける爲めの心遣ひを除いて吳れる。その心遣ひがたまらなくいやなのだ。それで私は、金のなくなるのを見る恐怖から、その金に執着もするのである。持つてゐる金は、自由を獲るの手段であるが、儲けようとする金は、束縛に至るの資料である。私が持つてゐるものを大切にして、しかも尙ほ、その上を欲しがらない理由はこれだ。

だから、私の無慾は懶惰に外ならぬ。所有の樂みが獲得の骨折を値しないのだ。私の浪費も亦懶惰に過ぎぬ。面白く使ふ機會があれば、どんなに利用しても構はないのである。私は品物に誘惑されるより、金錢に誘惑される方が少い。金錢と欲しい物の所有との間には、いつでも距りがあるけれど、その物とその享樂との間には、隔りがないからだ。物を見るときは誘惑される。その物を獲得すべき方法をのみ見るときは誘惑されぬ。かう云ふわけで、私は盜みをしたものだ。今以て折々、下らない物を盜んでゐる。そしてそれをせがむよりもましだと考へてゐる。しかし若い時分にも年を取つてからも、銅錢一つ盜んだことはないやうに思ふ。いや、たつた一度だが、まだ十五年とは經つてゐない、七リイヴルと十スウとを盜んだことがある。あの出來事は話して置くだけの價値がある。私自身の上でなかつたら信じられさうもない破廉恥と愚劣との混淆が、その中に見えてゐるからだ。

それは巴里での事だつた。私はド・フランキュイユ氏と一緒にバレエ・ロアヤアルを散步してゐた。五時頃だつた。彼は時計を取出して、それを見ながら私に言ふ、「オペラにでも行かうか」と。私も望むところだ、行くことになる、彼はアムフイアタアの切符を二枚出し、一枚を私に吳れ、もう一枚を持つて、先に立つて這入る。そのあとから這入つて見ると、戸口まで一杯になつてゐる。あたりを見ると、皆の者が立つてゐる。そこで私は、この人込の中にまぎれ込んでしまはう、少くともド・フランキュイユ氏には、まぎれ込んでしまつたと、思はれようと考へた。私は外へ出て、

切符を買つて、それを金に換へて駈出した。私が戸口をも越さない内、ちやんと座席が定まつて、ド・フランキュイユ氏が私のゐないのに、氣附いたかも知れないと云ふやうなことは、考へるひまもなかつたのだ。

この行爲ほど私の本性に反するものはないのであるから、私は人が、その行爲に依つてのみ判決さるべからざる、一種狂妄の瞬間のあることを證據立てる爲めに、これを書く。これは金錢その物を目當でなく、その效用を盗まうとしたのに過ぎぬ。泥棒でなければないほど、いよ〳〵以て陋劣だ。

徒弟時代に於て、偉人の高潔より無賴漢の下劣に至るまで、私の通過した道筋を殘らず書かうとするならば、こんな話には止度があるまい。しかし私は、私の身分に相應な大抵の不德は犯したけれど、その不德にすつかり慣れ切つてしまふことは出來なかつた。同僚の者と一緒に慰み事をするのがつまらなくなつて來た。餘りに嚴しい壓迫が、仕事に對する反感を起させ、もう何もかも面白くなくなつた。それが私に、長い間なくしてゐた、讀書の趣味を取り返してくれた。この讀書が仕事の一部分を犧牲にしたので、新しい犯罪となり、新しい刑罰を招致した。この傾向は禁制に遭つて益々募り、激烈なる熱情となり怒りとなつた。ラ・トリビュと云ふ有名な貸本屋は色々な書物を貸して呉れた。

私は善惡の差別なく、選擇なしに、同じやうにこれを貪り讀んだ。仕事場でも讀み、使ひ歩きをしながらも讀み、雪隱の中でも讀み、幾時間も幾時間もぶつ通しに讀んで、頭がぼんやりとしてしまひ、他の事はなんにも出來なかつた。師匠は見張つてゐてとつゝかまへて、打つて、書物を取上げた。幾册の書物が引裂かれ、燒棄てられ、窓から投棄てられたか。幾册の書物が疵物にされてラ・トリビュに返されたか。その辨償の金の足りない時にはシャツや、ネクタイや、着物を渡した。毎週給料の三スウだけはきまつて拂はされたものである。

それぢや矢張、金がいるやうになつたと云はれるだらう。全くだ。けれどもそれは、讀書が私から一切の活動を奪ひ去つた後の事である。私は讀書より他の事は何もせず、しようとも思はない。これがまた私の性格上の特質の一なのだ。何でもない一つの事が、平日の生活から私を引離し、私を變へ、私をつかまへて、竟に熱情の中に置く。さうなると、あらゆる事を忘れてしまふ。私は唯だ當面の新事物をのみ考へる。心臟は懷の書物を讀みたさに鼓動する。ひとりになるや否や引出して讀む。もはや師匠の仕事部屋を狐鼠つくやうなことを考へない。慰みにもつと金がかゝつても、盗みをしたらうとは思はれぬ。現在に沒頭する私には將來を慮る暇がないのである。ラ・トリビュは信用して呉れる。

それに拂ふ金はいくらでもなかつた。書物さへ懷に這入つてゐれば、その上に何をも考へなかつた。這入る金は右から左へ、貸本屋へ拂つてしまひ、愈々詰つて急ぎ立てられると、唯だ自分の持物にのみ手を掛けた。前以て盗まうといふには用心が足りない。金を拂ふ段になつてから、盗まうと云ふ氣になつたこともない。

絶間なき小言や、打擲や、人目を忍んだ選擇のない讀書が、私を無口な、内氣な人間にして呉れた。私の趣味は味のない、下らない書物をも斥けなかつたけれど、私の好運が不潔な書物、品の惡い書物から私を保護して呉れた。もつとも何から何まで氣の附く女のラ・トリビュがさう云つた書物を貸して呉れるのに躊躇したといふわけではない。唯だその値上をする爲めに、内密事らしい樣子をして勿體振るのが、私にそれをきつぱり斷らせた。反感からでもあり、羞恥からでもある。偶然が内氣を手傳つたので、私は三十を越えて後、始めて、かの浮氣な婦人達が片手でしか讀めないのを不便だと嘆ずるやうな、危險な書物に目を觸れた。

一年と經たない内、私はラ・トリビュの小さな店を讀み盡した。そして今や仕事のない時が苦しくなつた。私の腕白なふしだらな惡癖は、書物によつて癒された。手當り次第に惡いものも讀んだのだけれど、私の現在の境遇が喚起するよりも、高尚なる感情を復活させた。そして自分の手の屆く一切の物がいやになり、自分を悦ばせさうな何物も近くにないやうになつた。私の氣に入るものは何も見出せなかつた。長いこと鼓舞されてゐた官能は、曾つてその對象を想見することすらも出來なかつたやうな享樂を求めた。實際の享樂からは、中性でゞもあるかのやうに遠ざかつてゐた。そして已に年頃にもなり、戀愛を求めるやうにもなりながら、折々從前の馬鹿な眞似をも思つたけれど、唯だそれだけの事だつた。かう云ふ妙な位置にゐて、私の不安なる想像は、私自身から私を救ひ、だん〳〵と熾になつて來る肉感を取鎭めるやうな方向を取つた。それは、讀書に於て私を煮附けたところの光景を考へ、それを回想し、それを變更し、それを結合して、私自身がその中の一人となれるやうに空想することであつた。そして私は自分に最も好ましい境遇に置いた。竟にそれも極端になつた。それが私に取つて非常に面白く、私の不滿足なる實際の境遇を忘れさせた。想像の事物に對するこの溺愛と、それに親近することのたやすさとが、全然自分の周圍をいやなものにして、孤獨を好ぶの風を生じさせた。その風は爾來永く私を去らなかつた。かう云ふ人間嫌ひの氣味惡さうな傾向も、實際は屢々人情のあり過ぎる、溫か過ぎ優し過ぎる心に溯くもので、自分に近い者のない爲めに、想像の事物の中に逃げるのである。この傾向の特有なる效果は、あとでまた

記述される場合があらう。こゝでは唯だ、私の總ての欲情を制限したところの、また欲情で欲情を抑へ附け、激烈に過ぎる願望によつて、行爲の上に怠惰ならしめたところの性癖の、第一の原因を明かにしただけで滿足する。

かうして私は十六になつた。――何物に對しても、私自身に對しても不安で、不滿足で、職業に對する樂みもなく、その年頃の慰みもなく、標的を知らない渴望に血を吸はれて、何が悲しいと云ふこともなしに涙を流して、何の爲めと云ふことなしに歎息を吐いて、一口に言へば自分の周圍に、同じ價を有つた物を見ないので、空想に耽つてばかりゐる中に十六になつた。日曜日に友達が說敎のあとで私を遊びに連れ出した。逃げられるものならば私は逃げたであらう。その癖遊びが始まると、誰よりも調子附いて來たものだ。始めさせるのもむづかしければやめさせるのもむづかしい。これが私の性分であつた。市外の散策にでも出る時は、他の者が氣を附けて吳れない限り、歸ることなぞ考へないで、いつも眞先になつてゐた。二度ばかり私はしくじつた。市の門が私の歸るまでに閉つたのである。翌日どんな目に遭つたかは御想像に任せる。二度目の時は、もうどんな事があつても三度目をすまいと決心したほどで、恐ろしい制裁の豫告を受けた。その恐ろしい三度目が矢張り起つた。ミヌトオリと云ふ門衞の隊長はけしからぬ奴で、他の奴よりも半時間づゝ早く閉めるのが癖たつた。その爲めに私の用心が無駄になつたのだ。私は二人の同僚と共に歸りかけてゐた。市へ半里ばかりの處で喇叭を聞いた。私は足を早める。太鼓の音が聞える。懸命に走る。息を斷らしながら、汗でびしよ〳〵になりながらやつて來る。胸はどきどきとやつてゐる。見ればもう兵卒がむかうにちやんと立番をしてゐる。私は駈け寄つて、苦しい息の下から呼び掛けた。後の祭りであつた。外衞から二十步ばかりのところに、第一の吊橋が上るのを見た。脫れ難き運命の前觸とでも云ふやうな、あの恐ろしい喇叭が鳴り渡つた時、私は身慄ひをしたのである。

口惜しさに前後を打忘れ、斜堤の上に身を投げて土を嚙んだ。私の同僚は、その不幸を笑ひながら、卽座に覺悟をきめてしまつた。私も覺悟をきめたけれど、私のは異つた覺悟であつた。私はその場で二度ともう師匠の處へは歸るまいと誓つたのである。明くる朝門が開いて、彼等が市へ這入るとき、私は彼等に永久の暇乞ひをして、唯だこつそり從兄弟のベルナアルに私の決心を知らせ、もう一度會見すべき場所を知らせるやうにとだけ頼んだ。

見習にやられてからは、さう度々も會へなかつた。それでも、少時の間は日曜日毎に一緒になつた。その中お互に異つた習慣が出來て來て、だん〳〵と會ふ折が少くなつた。

この變遷を來すには、彼の母の考へが與つて大に力のあつたものだと思ふ。彼は良い家の大切な子供であつたし、私はつまらない丁稚小僧で、サン・ジェルヴェの貧乏町の子供に過ぎなかつた。生れは兎に角、現在の身分はもう同じでない。私と交際するのは顏に關ることなのだ。けれども私共二人の關係は全然斷絕したのでない。やさしく生れ附いた彼は、母の言含めにも係はらず、折々彼の心に從つた。私の決心を聞いて駈着けた彼は、私の決心を飜さうとするでもなければ、同意するでもなく、唯だいくらかのものを私に與へて私の出奔をたやすくしてくれた。私自身の工面では餘り遠くまで行けなかつたからである。彼の吳れた物の中一口の短劍は、非常に私の氣に入つて、チュランまで持つて行づたけれど、そこで止むを得ない事情から、よく人人の言ふ通り、身を切る思ひで賣拂つた。後になつて、危險な當時の彼の態度を考へて見れば見るほど、彼がその母の指圖に、恐らくは亦父の指圖にも從つたのであることをいよ〳〵思ふ。なぜと云つて、若し彼が彼自身の心情に從つて進退したならば、私を引留めようと努めたに違ひない。或は誘はれて私と同行しようとしたに違ひないのである。然るにそんな事は全然なかつた。彼は私の計畫を思ひ止まらせるよりも勵ました。そして私がいよ〳〵の決心をした時は、格別の涙をも見せないで立去つた。それつきり、互に會ひもしなければ手紙の遣取もせぬ。殘念な事だ。彼は本來善良の性格を有つてゐた。私共は互に相愛するやうに造られてゐたのである。

取返しのつかぬ運命に這入る前、假りに私が、もう少し氣の利いた師匠の處に居たならば、どう云ふ事になつたであらうかを、少時の間考へさせて貰ひたい。職人も特に、ジュネエヴに於ける彫刻師のやうな、穩かな、卑い身分ほど私の心持に適つたものもなく、仕合せにして吳れさうだつたものもない。樂々と暮して行くだけの事は出來ても、金持と云ふほどの者にはなれさうもないこの職業は、將來の野心に一定の範圍を作つたであらうし、又、中庸の德を養はしめるだけの餘裕を與へて、僭越なる考へを出すやうな手段を提供せず、自分の領分に滿足させることが出來たであらう。私の想像力は如何なる身分をも美しくするほどに豐富であり、甲から乙へと飛移つて行かせるほどに强烈であつたから、私が實際に何をしてゐるかはどうでもよかつた。何をしてゐても、私の築く蜃氣樓に這入つて行くのは容易であつた。それ故、苦勞や心配の最も少い、精神上の自由の最も多い、最も單純な職業が、私に取つて最も適した職業であつた。そしてそれが全く私のあの職業であるべきだつた。私は私の宗敎や、私の祖國や、私の家族や、私の友達の懷に、私の性格が要求するごとく、趣味に合した

勞働と、心に適した社交とを以て、安樂な生涯を送つたであらう。私は善き基督者で、善き市民で、善き父で、善き友人で、善き勞働者で、如何なる點から見ても善き人であつたらう。私は自分の身分を愛し、また恐らくはそれを敬したであらう。そして單純で微賤な、しかし平和で樂しい生涯を送つた後、安らかに家族の胸に瞑目したであらう。間もなく忘れられてしまふのは勿論ながら、少くとも思ひ出される限りは、永く哀悼されたことだらう。

さうならないで私は、——如何なる畫を描かうとしてゐるか。嗚呼、私の悲慘なる生涯を前以て吹聽したくない。讀者諸君はいづれこの傷ましい題目と、親しみ過ぎるほど親しまれるであらうと思ふ。

（二）

恐怖の念から出奔を思ひ浮んだその瞬間が悲しかつたやうに、その計畫を實行した瞬間は、それだけ面白く思はれた。少年の身で以て鄕里をすて、親族をすて、身寄りの扶持者をすてる。自分で食へるだけの腕もまだ出來ないのに中途で飛出してしまふ。それを乘り越す何の用意もなしに浮世の荒海へ乘出して行く。弱い、罪のない年頃を、墮落と絶望との誘惑にゆだねる。とても背負ひきれないやうな重い軛を負うて、遠い國へ災厄や、過失や、陷穽や、束縛や、死滅を求めに行く。——これを私はしようとしたのだ。そしてこれを私は覺悟すべきところであつた。しかも私は、まるで方角違ひの事を考へてゐた。私が獲たと思つた獨立が、私を支配した唯一の感情であつた。自主自由の人間となつたからには、何でもやれる、やり遂げられると考へた。一たび地を蹴れば、直ちに空高く舞上れるものゝやうに考へた。私は晴やかな心を抱いて世の中へ出た。私の天分はやす〳〵とそれを通らせるもの、一歩毎に饗宴や、財寶や、めざましい事件や、懇ろな友達や、柔しい愛人がゐるものと思つた。私の姿が現はれるや否や、全世界の眼が私に注がれると思つた。もつとも、全世界でなくつたつて私は何とかなるだらう。そんなに澤山のものは要らないのだ。一つの面白い社會があればそれでよい。私は狹くとも、十分に選擇された社交に於て、もてゝさへ居れば澤山だ。たつた一つの城が私の野心を滿足させる。貴族やその奥方の寵人であれば、その姫君の戀人であれば、その兄弟の友人であれば、その近隣の保護者であれば、私はその上の不足を言はぬ。

かう云ふ謙遜な未來の夢を待ちながら、私は二三日市の周圍をぶらついて、知り合の百姓の家に泊めて貰つた。其處では皆が市の人々よりも懇切な位、行屆いた待遇をして呉れた。報酬を目當てにはとてもやれない眞情で、彼等は

私を迎へ入れ、私を泊めて呉れ、私に御馳走をして呉れた。これは慈善だとも云はれない。私に對して毫も、優勝者の態度を取らなかつたからである。

かうしてぶら〳〵と渡り歩きながら、私はジュネエヴから二里ばかり離れた、サヴォア領のコンフィニョンまでやつて來た。牧師の名前をド・ポンヴェル氏と云つた。共和政府の歴史に有名なこの名が、私の注意を惹きつけた。私はかの食匙の騎士の末孫が、どんな人であるかを見たかつた。私はド・ポンヴェル氏を訪ねて行つた。氏は歡んで私を迎へ、ジュネエヴの異端や、羅馬正教の權威に就いて話をし、食事をもさせてくれた。かう云ふ結末になつた議論に對しては、格別どう答ふべき言葉をも知らなかつた。そして、こんな結構な食事をさせてくれる坊樣は、少くとも私共の牧師くらゐ善い人であらうと判斷した。ド・ポンヴェル氏は全く善い人であつたけれど、私の方が氏よりも確かに學者であつた。しかし私は、そんなにまで結構な神學者であるべく、餘りに結構な賓客であつた。そして氏の、上等らしく思はれたフランジィの葡萄酒は、不可抗の論據を彼に提供した。私はかういふ結構な主人を、言ひ負かしたところで餘り名譽でもあるまいとかんがへた。それゆゑ私は讓歩した。すくなくとも面と向つては反對しなかつた。私の用ゐた總ての顧慮を見たならば、私を不正だと思ふ人があるかも知れぬ。それは間違ひである。私は唯だ、禮儀を守つたと云ふ丈けだ。阿諛するは、寧ろ卑下するは、必ずしも常に不德でない。却つて德である場合が多い。取別け青年に於てさうなのだ。人が溫情を以て取扱へば、こちらも彼に對して愛着の心を生ずる。彼に讓るのは、彼を欺く爲めでない。悲しませまいとするのである、惡を以て善に報いまいとするのである。私を饗應する上に、懇切に待遇する上に、說得しようとする上に、ド・ポンヴェル氏がどれ丈けの興味を有つてくれたか。私の胸より外はない。私の若い胸がそれを知つた。私は、この人の善い僧侶に對する感謝と尊敬の念に捕はれた。自分の優越を感じながらも、彼の歎待に對する報酬として、彼を壓服しようとしなかつた。此等の行爲に於ては、何等の僞善的動機もなかつた。私は決して改宗しようなぞと考へなかつた。さうした考へには親しくなるどころか、一種の恐怖を抱いて、それを長く私の心から逐ひ拂つた。そんな目的があつたにせよ、兎に角、私に好意を示した人々を惱ましたくないと云ふ丈けの事だつた。私はその好意を無にすまいと思つたのである。そして私自身を實際よりも無用心に見せかけて、成功の希望を有たせようと思つたのである。この場合に於ける私の過ちは、あの正直な婦人達が、折々その目的を達する爲めに、何物をも許さず、約束せずして、尙ほ且つ自らの實現しようと思ふより、

多くの物を希望せしなることを知つてゐるところの、その媚びに似てゐた。

理性や、同情や、秩序に對する愛は、私の愚かな考へに同意することなく、私を家族の處へ送り還して、沒落の危險から救ふと云ふことを要求したに違ひない。眞の有德の人ならば、誰しもさうしたであらうし、或はさうしようと努めたであらう。けれども ド・ボンヴェル氏は、善い人ではあつたが有德の人ではなかつた。寧ろ唯だ聖像の禮拜と、念珠をつまぐることゝをのみ知つた信心家であつた。ジュネヴの僧侶に對して反駁書を作るのを、最善の事と思ふやうな傳道師であつた。私を家に送り還す代りに、私が自分で歸らうと云ふ氣が出ても歸ることの出來ないやうに、彼は、離れて行きたいと云ふ私の願ひを利用したものである。彼はまさしく私を、窮迫に陷るか墮落するかの、危險に曝したものと云はねばなるまい。そんな事は彼の念頭になかつた。彼は唯だ異端から脫れて、正敎に立歸つた魂をのみ見た。彌撒祭にさへ出るならば、私が正直な人間にならうと惡人にならうと、彼の頓着する事でない。かうした考へ方を唯だ、加特力敎徒にのみ特有のものと思つてはならぬ。行ふよりも信ずるに重きを置く、總ての獨斷的宗敎に免れ難い傾向なのだ。

「神樣がお召しになることぢや。」と、ド・ボンヴェル氏が私に言つた。「アヌシイへ行つて見よ。人の好い、誠に慈悲深い婦人が居られる。その婦人は王樣からの御助力で、御自分の脫れた過失から、他の人間をも救ひ出さうとして居られる。」それは近頃の改宗者、ド・ワレンス夫人の事だつた。事實はかの信仰を賣り物にする女どもとサルディニュの王樣から貰ふ二千法の年金を分つべく、僧侶どもに餘儀なくされてゐる婦人であつた。私は人の好い、誠に慈悲深い婦人と云ふのに倚りすがつて行くのが辛かつた。入用な物を人が與れるのは結構だけれど、施與を受けるのが面白くない。そして信心家と云ふ奴があんまり好きでなかつた。しかし、ド・ボンヴェル氏からもせがまれるし、飢渴も眼前に迫つてゐるし、旅行をするのに目標も欲しいので、いやいやながら私は決心し、アヌシイへ向けて出立つた。一日でやす〳〵と行ける道ながら、急がないで三日を費した。途上の右や左に別莊を見る毎に、自分を待つてゐるに違ひないめざましい事件を搜さうとした。誠に內氣な性分だから這入ることもせず、案內を乞ふこともしなかつた。私はただ最も早く目に附くと思つた窓の下で歌を唄つたものだ。そして肺臟が勞れるまで唄つたあとで、意外千萬にも、私の聲に聽き惚れて、歌の文句に引き寄せられて、出るべき筈の貴婦人も、その令孃も出ては來なかつた。私は、同僚の奴が敎へて與れた、面白い歌を知つてゐて、おもしろく歌

つたのだつたが。

遂に私はアヌシイへ來て、ド・ワレンス夫人に會つた。この時期が私の性格を決定したのである。私はそれを輕々に看過しようと云ふ氣になれぬ。私は十六になつてゐた。美少年とも云へないけれど、釣合の取れた發育をして、華奢な足や、細い脛や、さつぱりとした樣子や、生々とした容貌や、可愛い〳〵口元や、黑い眉毛や髮の毛を有つてゐた。小さな凹んだ目ではあるけれども、その中に私の血を燃え立たせる焰が映つてゐたものだ。不幸にして私は全くこれを知らないでゐた。そして私は自分の身體と云ふものを、後の祭になつてから、始めて考へたのに過ぎない。それに亦、私の年頃に有り勝ちな內氣の上に、人を愛したい性質で、いつも他人をいやがらせはしないかと恐れてゐた。そして、滿更の野育ちでもないけれど、世間へ出た事のない爲めに、社交上の勝手がまるで分らない。それに知識が進むに從つて缺點がおぎなはれること〳〵思ひの外、ます〳〵その缺點がはつきり浮き上がるやうに思はれて來て、臆病は更に臆病となつたのである。

それ故私は、初對面で拙くしてはと云ふ心配から、他の便利な方法に訴へて、法律家風の氣取つた手紙を書いた。それには、讀んだ書物の名文句と、小僧らしい口の利きやうとをこねまぜて、ド・ワレンス夫人に取入るべく、私の文才を倒したのである。私はド・ボンヴェル氏の手紙を私の手紙に卷き込んで、恐々ながら拜謁に出掛けて行つた。ド・ワレンス夫人は留守だつた。今しがた敎會へ行かれたと云ふのだつた。一七二八年の棕櫚の日曜日（復活祭の前の日曜日）の事である。私はその跡を追うて、姿を見、近寄つて行つて口を利いた。私の心はいつまでもあの場所を思ひ出す。その後私は幾度か、この場所を涙を以て濡らし、接吻を以て覆うたものだ。全く出來るものならば、この幸福な場所の周圍に、黃金の垣根を作りたい。世界中の人々に拜ませてやりたい。あゝ、救世の記念碑に、敬意を拂ひたい人々は、膝を屈めてのみそれに近づくことが出來るだらう。

それは家の背後の通路であつた。右手には小さな流が花園との間に流れてゐる。左手には墓地の壁が立つてゐて、その端の門からフランシス派の敎會へ這入れる。丁度この門を這入りかけた時、私の聲を聞きつけてド・ワレンス夫人が振り向いた。その刹那、私の驚きはどんなであつたらう。私は非常に氣むづかしげな、凝固りのお婆さんを豫想してゐた。他に想像のしようもなかつたのだ。然るに今や愛嬌のこぼれるやうな顏を、優しさの籠つた美しい靑い目を、まぶしいやうな顏の色を、恍惚とするやうな頸首を見た。何一つこの年若い改宗者の敏捷い眼を脫れなかつた。私は忽ちにして彼女の虜になつた。宗敎もかう云ふ傳道師

から說かれるならば、天國へ連れて行つてくれること間違なしと思つたのである。わな〳〵と震ふ手で私の差出した手紙を、微笑しながら彼女は取つて、それを擴げて見て、ド・ボンヴェル氏の手紙に一瞥をくれて、それから再び私の方に歸つて最終まで讀んだ。若しその從者が禮拜式の始まることを思ひ出させなかつたら、今一度讀返したであらうと思ふ。「まあ、可哀相に。」と云ふ夫人の聲が、私の身體を震はせた。「この年でもう、方々を流浪するなんて。全く、可哀相だわねえ。」私の答を待たないで、更に續けて夫人は言つた。「私の家へ行つて、朝餐でも食べてゐて頂戴な。禮拜式が濟むと歸つて行つて、私も話をしますから。」

ルイズ・エレオノオル・ド・ワレンスの生家はラ・トウル・ド・ピルでヴォオ州のヴヴェエと云ふ市の古い家柄である。極く若い內、ロオザンヌなるド・ヴィラルダン氏の總領息子、ロア家のド・ワレンス氏へ嫁いた。子供の出來ぬこの結婚が、餘り幸福でなかつた爲め、家庭のごた〳〵に煩はされて、ド・ワレンス夫人はヴィクトル・アメデ王がエヴィアンに居るのを機會とし、湖水を渡つて王の膝下に身を投じた。そして彼女も私自身のに似た、始終泣いてゐるやうな輕卒から、良人を棄て、家を棄て、國を棄てたのだ。好んで戀心なる加特力を標榜した王は、彼女の保護を引受けて、ピエモンの千五百リイヴルを年金とした。それほど氣前の好い方でもない君王に取つて、莫大の金額なのである。けれどもその爲めに、好色の謗を招いたと知つた時、彼は近衞から一隊の警護を附してアヌシイの方へ彼女を送つた。彼女はその地の聖母訪問院に於て、ジュネエヴの名譽監督、ミシェル・ガブリエル・ド・ベルネエの指導の下に、その信仰を宣誓した。

私がアヌシイに來た時、彼女はもうそこに六年もゐた。この世紀の初年に生れて、二十八歲になつてゐた。その美しさは、目鼻立よりも表情にある故、久しく衰へない方なので、今尙ほ盛りを見せてゐた。心持の好い溫かさうな樣子で、誠にやさしさうな目で、天使のやうな笑顏で、私の位な口だつた。珍らしく綺麗な灰色の髮は、餘り手入れをされないで、却つて風情を添へてゐた。脊丈は寧ろ小さい方で、醜くない位に橫もあつた。しかし、あれより美しい頭を。あれより美しい胸を、あれより美しい手を、あれより美しい腕を見られるものでない。

彼女の教育には、種々の要素が混ぜられてゐた。私と同樣、生れた時に母をなくして、何の差別もなく、漫然と教育されたので、家庭教師からもどれ丈けか學び、父からもどれ丈けか學び、學校の先生からもどれ丈けか學び、戀人からも少からず學んだ。中にもド・タヴェル氏と云ふのは、趣味もあり、學殖もある人で、對手の婦人達の飾にそれを分けたのである。しかしながら、そんなに色々の教育は、

互に相害ふものとなり、そんなに無方針な勉强は、天分の豐かな精神力の發展を妨げるものとなつた。それ故に彼女は、哲學や理學の初步を多少心得てゐたけれど、尙ほ且つその父の、神醫術と錬金術とに對する趣味を受けついで、錬金液や、長命液や、板爾撒漠や、妙藥なぞを用意してゐた。そして自ら祕法を心得てゐると稱してゐた。彼女の弱點を利用する詐欺師共は、彼女をつかまへて、取り圍んで、引きずり下ろして、坩堝や乳鉢の中に、彼女の才氣や、天分や、風韻を減ぼした。それらのものに依つて彼女は、社交界の花形と謳はれたでもあらうのに。

けれども、賤劣な惡漢どもが彼女の間違つた教育を惡用して、健全な理性を離れさせようとしたに係はらず、彼女の優秀な心情はたしかなもので、いつまでも變らないでゐた。人好きのする柔しい性格や、不仕合せな者に對する慈悲心や、限りなき溫情や、眞直に打明けた心もその儘でゐた。そして、晩年に及んで貧困や、疾病や、種々な災厄に陷つた時すらも、彼女の美しい魂の平靜と純潔とが、幸ひなりし日の晴やかさを保存し得たのである。

彼女の過失は、始終何かしらしてゐなければならぬと云ふ、活動好きなところから生じたものだ。彼女は婦人らしい奸計や陰謀を要求しないで、仕事らしい仕事の計畫や指導をしたかつた。生れつき大事件向きの人なのである。彼女の地位に置いたなら、ド・ロングヴィル夫人は唯だの惡戲者であつたらう。ド・ロングヴィル夫人の地位に置いたなら、彼女は國を治めたであらう。彼女の才分は置かるべきところに置かれてなかつた。そしてその名譽を一段と高める筈のものが、その地位に於ては彼女を減ぼした。その手の屆く限り常に彼女は計畫を立て、常にその對象を大きく心に思ひ浮べてゐた。しかも用ふるところの方法が、實力よりもより多く見込と釣合つたので、實力の不足から失敗した。失敗した時も、他の人々ならば殆んど何物をも失はないで濟むべきところを、彼女は破滅に遭つた。彼女の上にそれ程まで災厄を齎らした、活動好きの性分は、少くとも彼女がその餘生を、僧院生活の中に沒頭しようとするのを、恰もそれに興味を感じてゐるらしく、そこへ引留めて置くだけの役には立つた。尼僧の變化のない單調なる生活や、客間に於けるその下らないお喋りや、總て此等のものは、每日新計畫を立て〻、自由にそれに沒頭することを要求するやうな活動的の精神を飽かせないでは居らぬ。人の善いド・ベルネエ僧正は、才分に於て稍々劣るところはあるが、多くの點に於てフランソア・ド・サアルに似てゐた。ド・ワレンス夫人は彼に娘と呼ばれてゐたが、また別の多くの點で、ド・シャンタアル夫人と隨分よく似てゐた。その趣味が僧院の懶惰なる生活を斥けなかつたら、隱遁に於ても彼女と似た

ことであらう。その愛すべき婦人に、教長の指導の下に立つところの改宗者に必要な、勤行の些末事に專心するのを妨げたのは、信仰の不足といふことでない。改宗の動機が何であつたにせよ、彼女は自らの奉ずるところに誠實であつた。前の宗旨を棄てたのを過失として悔いたことはあるかも知れぬ。再びそれに歸らうとは願はなかつた。啻に善き加特力として死んだばかりでなく、善き加特力としての生涯を送つた。自ら彼女の魂の奥底までも、讀み得たと思ふ私は敢へて言ふ、彼女は一に外觀の醜さを厭ふ心から、信心家らしく振舞はないでゐたのであると。彼女は信心家ぶるべく、餘りに眞實なる信心を有つてゐたのである。併しながら、今は彼女の立場に關して詳說すべき時でない。

靈の感應を否定する人達は、若し出來るならば說明して見るがよい、ド・ワレンス夫人が最初の會見で、最初の言葉で、最初の一瞥で、啻に烈しい愛着の情を私に起させたのみならず、その後永く維持されたやうな、信賴の念をも發させたのはどうしたわけか。彼女に對する私の情が、眞實戀愛であつたとしても、——私共の關係を引續いて見る人達には、その戀愛が少くとも疑はしいものと思はれるに違ひない——この熱情が惹起しさうにもない感情を、平靜や、休息や、快活や、安心の如き感情を、その最初からして伴つたのは何故か。優しい、淑かな、肢いやうな美人に初めて近づいた時、私よりもずつと身分の高い、側へ寄つたこともないやうな婦人に近づいた時、或る程度まで、その人の心一つで私の運命がきめられるやうな人に近づいた時、彼女の氣に入るといふことを確信してゞもゐたかのやうに、誠にゆつたりとした、のんびりとした心持になり得たのは何故だらう。一寸の間でも狼狽いたり、ためらつたり、びくついたりしなかつたのは何故だらう。生れつき內氣で、あわて者で、世の中を知らないこの私が、第一の日、第一の瞬間から彼女に對して、その後十年の親交で當り前の事になり得たやうな、落着いた態度を取り、物柔かな言葉を用ゐ、樂々とした調子になつたのは何故だらう。人は抑も——欲求なしにとは云はぬ。私は實際欲求をもつてゐたから——不安なしに、嫉妬なしに戀をすることが出來ようか。人はその戀の相手から、少くとも、自分が愛せられてゐるかゐないかを、聞いて見たがるものではないか。しかしそんな質問を、まるで自分に、自分が自分を愛してゐるかどうかを聞かないやうに、私は絕えて一度も胸に抱いたことがなかつた。彼女も亦私に對して同樣であつた。この人に對する私の感情はだいぶ變つたものだつた。尙ほさきへ行つては、諸君の豫想しきれないやうな妙な事があるだらう。私をどうしたらよいかゞ問題であつた。そして、ゆつく

りその話をする爲めに、彼女は一緒に食事をさせた。これが私の生涯に於て、食慾のない食事をした最初である。お給仕に出た腰元も、私位の年格好で、こんなに食べない人は見ないと言つた。この言葉は女主人の前に私の男振りを下げたわけでもなかつたが、私共と一緒に食べて、少くとも六人前を平げた、無骨漢の大男には嚴しく當つた。私はもう恍惚としてしまつて、食事を思ふ餘裕がなかつた。私の心は全く新しい感情を食べものにしてゐた。その感情が全身に漲つて、他の何物をも考へさせなかつたのである。

ド・ワレンス夫人は私の身の上を詳しく聞取つて呉れた。私はそれを話しながら、師匠の處で失つた總ての熱を再び見出した。この立派な婦人は、私に同情を寄せれば寄せるほど、私の前途を危ぶんだ。やさしい思ひ遣りの心は顏色にも、眼付にも、身振にも歷々と見えてゐた。彼女は私をジュネエヴへ歸るやうに忠告することをなし得なかつた。彼女の立場からいふと、それは加特力の教會に對する叛逆罪であつたのだ。そして彼女は、自分がどんなに注目されてゐるか、その言葉がどんなに吟味されてゐるかと云ふことを、十分に承知してゐたのである。けれども彼女は、私が父の心を安める爲めに、歸つて行くのを悅んだに違ひないと思はれるほど、父の心配を氣の毒がつた。彼女は自分の言葉が全然反對の結果を來すと云ふことに氣が付かなかつた。前にも已に言つたと思ふが、自分で決心を固めたと云ふことは暫く措いて、彼女が上手に說き聞かせてくれゝばくれるほど、その言葉が身にしみればしみるほど、愈々私は別れられなくなつたのだ。ジュネエヴへ歸れば、もう一度前の企てを繰返さない限り、彼女と私との間に、殆んど踰ゆべからざる障壁を築くものだ。從つてこの際、私の決心を固執するのが上分別と考へた。そしてそれを固執した。

ド・ワレンス夫人は、とても駄目だと覺つて、損な骨折を思ひ切り、同情の目で私を見ながら言つた、

「仕樣がないねえ。神樣のお召しになる處へ行くんだわ。でも、大きくなつたとき、私の事を想ひ出すでせうよ。」この豫言があゝも殘酷に實現されようとは、彼女自身も思ひ及ばなかつたことだらう。

困難は依然として私を去らない。私の年で、遠く鄕里を離れて、どうして自らを養ふか。見習奉公の半分をも濟ましさなかつた私は、まるで技術が分らない。よしやそれが分つてゐても、サヴォアのやうな貧乏な土地柄では、そんな技術でやつて行くのは難しい。私共と一緒に食べてゐた例の無骨漢も、少時の間顎骨をいたはつて休息しながら、私に助言を與へてくれた。彼はそれが天から來たものゝやうに言つたけれど、結果に依つて判斷するに、全く反對の方面から來たものらしい。彼の助言に從へば、チュランへ行け

ば、改宗者の教化を目的として建てた收容所がある。そこで以て、善男善女のお情により、相應の地位が獲られようと云ふのだ。「旅費の事も、」とその男が言葉をついだ。「それを夫人から話して戴けば、情深い司祭様がどうにかして下さるだらう。それにあの男爵夫人も、あゝした慈悲深い人だから」と、皿の上に凭りかゝるやうにして、「きつと本氣に世話をして下さるよ。」

かうしたお情にあづかるのは辛かつた。私は胸が張り裂けるやうに思つた。そして何も言へなかつた。ド・ワレンス夫人は右の動議を提出者ほど熱心に聞取らないで、誰に係はらず、應分の慈悲善根はすべきもの、兎に角司祭と相談して見ようと答へたゞけだ。ところがこのおせつかいなので、旁々この事件から多少の旨い事をしようと考へたので、早速本山へ駈付けて、宜しく僧侶を丸めて置いた。それ故、私の旅行を喜ばぬド・ワレンス夫人が、司祭に會つて話さゝとしたとき、その一件はもう片附いてゐて、私の旅費として決定された金額が、卽座に彼から渡された。夫人は流石に、私を引留めなければならぬと言ひ張るだけの勇氣がなかつた。私はもう夫人くらゐの年配の人が、側に引附けて置きたいと口に出して言ふのを、遠慮するやうな年頃になつてゐたのである。

今やこのやうに私の旅行が私の面倒を見て呉れた人の手で決定されたので、私は讓歩せざるを得なかつた。のみならず、それほどの反感もなく讓歩した。チュランはジュネエヴよりも遠いけれど、私の想像によると首府の事でもあり、別の政府を戴き、別の宗教を奉ずる市に比べて、アヌシイと一層密接の關係を有つてゐた。その上私はド・ワレンス夫人の言ふ事を聽いて出掛ける故、矢張り夫人の指圖の下にある身の上として自らを見た。それはたゞ彼女の近くにゐるといふよりもましだつた。結局、大なる旅行と云ふ考へが、その頃もう芽を出し始めた私の放浪癖の氣に入つた。私くらゐの年齒で山を越え、アルプスの絕頂から仲間の奴等を見下ろすと云ふのが、面白さうな事に思はれた。廻國はジュネエヴ人士の斥け難い誘惑である。それ故に私は同意をしたのだ。例の無骨者も妻子を連れて、二日の内に出掛けると云ふことになつてゐた。私は彼等の手に託されて伴れられることになつた。ド・ワレンス夫人によつて脹まされた私の巾着も引渡された。けれども、この外に尙ほ彼女は少しばかりを内密に呉れて、詳しい注意を附け足した。そして私共は、復活祭の前の水曜日に出立したのである。

私がアヌシイを立つた翌日に、父はリヴァル氏と云ふ、同じく時計師の友人を連れて、私の跡を追うて來た。その

人は、頭のある男で、文才もなか〳〵あつて、ラ・モットより上手なくらゐに詩も作り、彼に讓らないくらゐに喋りもした。その上まことに正直な人物ではあつたが、その間違つた文學趣味は、息子の一人を役者に仕立てる上にのみ役立つた。

これ等の人達は、ド・ワレンス夫人を索し當てゝ、彼女と共に私の運命を涙を流して悲しんでくれたゞけだつた。彼等は馬上だし、私は徒歩の事だから、追駈けて來られないものでもなかつたのに。叔父のベルナアルも同じだつた。彼はコンフィニョンまで來たけれど、私がアヌシイにゐると聞いて、其處からジュネエヴへ引返した。親族の奴共は私の運星と共謀になつて、私を待ち構へてゐる運命の方へ、私をうつちやり放しにして呉れたものらしい。私の兄もかうして姿が見えなくなり、まるで行方知れずになつてしまつたのである。

父は實に正直な人間であつたばかりでなく、嚴密にまた誠實な人間で、大なる德操の根源であるところの、濶達な氣象をも有つてゐた。その上彼は、父として、とりわけ私の爲めに善き父であつた。彼は非常に私を愛してゐたけれども、彼は自分の道樂をも愛してゐた。そしてその他の種種なる事情が、私と別れて後、父としての愛情を冷却せしめた。彼はニョンで後妻を迎へた。その後妻はもう、私の兄弟を生むやうな齡でもなかつたが、幾人か親族の者を有つてゐた。それが新しい家族となり、生活の對象も變るし、家庭も新しくなつて、父が私を思ひ出す機會を少くした。父はだん〳〵と年を取るけれども、その老年を支へるべき財産がない。私共兄弟は、少々ばかり母の遺産を有つてゐたが、私共の留守中その利子は父の懷へ這入つたわけだ。これに對する考へが、直接彼を動かして、その義務の遂行を怠らせたと云ふ譯でもないが、暗々裡に、意識しないところに働いて、もつと強く現はれねばならぬ筈の愛情を生溫いものにした。思ふに理由はこれである。彼が始めアヌシイまで私を追駈けて來ながら、大丈夫つかまると思ふシャンベリイまで來なかつたのは。又私が出奔の後度々會ひに行つたとき、いつもやさしくはもてなすけれど、格別引留めようとしなかつたのは。

柔しい人だとも、善い人だとも知りぬいてゐる、父なる人のこの行爲は、私自らを反省する動機となつた。その反省が私の心情を美しく保つ上に、少からず役立つた。私はそれからして大なる道德上の教訓を引出したのである。恐らくは、實際の效用ある唯一の教訓であらう。卽ち我々の本分が我々の利益と衝突するやうな、また他人の災難と引換へに我々の仕合せがつかめるやうな、さうした境遇に立つなと云ふ事だ。さうした境遇に立つてゐると、德操に對す

る我々の愛がどんなに誠實であらうとも、無意識の間に、早晩墮落するを免れぬ。心中は矢張り正直で、無邪氣でゐるやうな積りでも、事實不正直な、横着な人間になると云ふ事だ。

私の心に深く印象された、そして、やゝ後の事ではあるが、私の行爲をも支配したこの教訓は、啻に大勢の中へ出た時ばかりでなく、殊に親交ある人々の間にゐる場合に、變な間の抜けた人間として私を見せたものである。私はよく、奇を衒ふとか、變つた事をしたがるとか言はれたものだ。しかし事實は、私は他人の眞似をするのでもなく、他人と異つた事をしようとするのでもない。唯だ常に眞直な事をしたいと思ふばかりだ。私の利益が他人の利益と衝突するやうな、從つて無意識ながら、その人の傷害に對する祕密の願望を生ずるやうな、さうした境遇からは極力逃げようとしたものだ。

二年ばかり前に元帥卿は、その遺言狀の中に私の名前を書入れようとした。私は極力それに反對した。彼の處へ書面をやつて、遺言狀の中に名前を書入れて貰ふなぞは眞平だ、誰の遺言狀でも御免を蒙る、彼の場合は尙ほ更の事だと言つた。彼も遂に聞き屈けた。今は彼一代を限りの年金を與れようと言ふ。それに對しては私も否を言はない。世間では、この引換で埋合せをしたと言ふだらう。埋合せをしたかも知れぬ。けれども、嗚呼、我が恩人よ、我が父よ、不幸にして私があなたの後に生き殘るなら、私はあなたを失ふと共に、あらゆる物を失つて、何等の得るところなきをも思ふのだ。

私はこれが最善の哲學、眞實人情に適ふところの唯一の哲學だと思ふ。日を追うて愈々この感を深くする。そして近頃の私の述作に於て、種々の方面からこの哲學を推奬しようと努めた。けれども淺墓な人々は、それに氣附かないでしまつたやうだ。この述作を仕上げたあとで、更に別の物に取掛るだけの餘命があるならば、私はエミイルの續きを書いて、讀者諸君がどうしても氣附かないでゐられないと云ふやうな、面白い實例を、右の教訓に對する適切な實例を、お目にかけたいものだと思ふ。けれども今、旅人となつた私に對しては、これだけ考察すれば十分だ。再び旅行を續けなければならぬ。

旅行は思つたほどいやでなかつた。例の無骨者の道連も、見掛けほどに意地惡くもなかつた。彼はその黑い、胡麻鹽になり掛つた髮を髷に結んだ中年者で、どつかに兵隊らしい樣子があつて、大きな聲で、快活で、健脚家で、更により多く健啖家である。そして、何一つ物に成らなかつた故、あらゆる職業をやつて見た。思ふに彼はアヌシイに於て何等かの製造場を設立しようと思ひ附いたものらしい。ド・ワ

レンス夫人が同意して呉れたので、今彼は大臣の認可を得る爲めに、夫人の出費でチュランへ行くところだ。この男は僧侶達にうまく取入ることを知つてゐた。そして熱心に彼等の御用を勤めるやうな風をして出入する内、追々僧侶らしい口眞似をし出し、一廉の說教家を以て任ずるやうになつて來た。その上彼は拉典語譯聖書の一節を覺えてゐて、日毎に千度も諳誦したので、千箇所も覺えてゐるやうに思はれた。彼は他人の巾着にあることさへ知つて居れば、滅多に金に困らなかつた。それでもずるいと云ふよりは怜悧なのであつた。そして彼が熱心な傳道師口調で以てお談義をやる時は、劍を帶びて十字軍に說いた、遁世者ペテロの概があつたのである。

細君のサブラン夫人はと云ふと、先づ〳〵人の好い女で、夜分よりも晝間がおとなしかつた。私はいつも彼等と一室に寢たので、屢々細君の不眠の騷々しさに醒された。そして、その原因が知れてゐたならば、一層目が冴えたことだと思ふ。けれども私は全く氣が附かなかつた。かうした事柄に關しては、自然の開發に須つより外なき、愚昧者だつた。

かうして私は、信心家ぶつた先達と、氣爽なその同行者とに連れられて、面白可笑しく旅行を續けた。道中誠に無事で、身體にも精神にも二度と經驗しないやうな滿足を經驗した。人生の活力の充實が、謂はゞ我々の全存在を感覺の極限にまで押擴げ、我々自らの生存の妙趣によつて、我々の目に全自然を美しくするところの、かの短いけれども、値ある人生の一瞬時に於て、私は若く、强く、安心して、健かに、自他何れをも信賴して、生きてゐたのである。私の甘い不安には對象が出來て、以前のやうに動搖しない。空想にも一定の方向を與へてくれた。私は自らをド・ワレンス夫人の製作品のやうに、弟子のやうに、友人のやうに、いや殆んど戀人のやうに考へた。彼女が私に對して述べた懇切な言葉や、私に對して示した溫情や、私の事を心に掛けて呉れるらしい優しい樣子や、私に勇氣を與へるその情を含んだ目や、これ等のものが道中絕間なしに私の魂を往來して、溫かな空想に耽らせた。來るべき運命に對する如何なる恐怖も、如何なる疑懼も、この夢心地を擾さなかつた。私の考へでは、私をチュランへ遣はすところの者が、そこで糊口の道をも搜して呉れ、相當の地位をも當てがつて呉れるわけなのだ。私は何も心配しない。他の人が引受けてゐるのである。それで私は身も輕く氣も輕く、足を運んだ。若々しい願ひや跳び立つやうな望みや花々しい企てが心を充たした。目に觸るゝもの悉く、近づいて來るところの幸福を保證するやうに思はれた。家々に祝宴が張られ、牧場には爽快な遊戲が行はれてゐるやうに思つた。川に沿

うては沐浴や、散策や、漁獵を思ひ、梢には旨き果物を思ひ、樹蔭には愛人の密語を思ひ、山の上には乳やクリイムの盛られた桶を思つた。越きのある閑散や、靜寂や、單純や、何處へとも知らずして行くことの悅びを思つた。要するに、觸目するところ、一として私の心を滿足させなかつたものはない。送迎するところの光景が、壯大で、多樣で、實際に美しかつたので、この滿足の感情が理性によつて承認された。のみならず、虛榮の念が新しい藥味を添へた。こんなに若い內から伊太利へ行き、こんなに種々の土地を見るのは、ハンニバルを追うて山々を越えるのは、齡に似合はぬ名譽の事と考へられたのである。それに又、度々結構な旅館に宿つたことや、食慾の熾であつたことや、十分にそれを滿足させたことをも忘れてはならぬ。全くのところ、私に遠慮させて見てもつまらなかつた。私の食べた物を、サブラン氏のに比べると、言ふにも足りなかつたからである。

私の全生涯を比顧つて見ても、この旅行に費した七八日間ほど、どこまでも、呑氣で氣樂であつたことはない。何故と云つて、私が步調を合して行かなければならないサブラン夫人の步みぶりが、まるで長い散步だつたからである。思ひ出してみると、あれに關聯した總てのものが、別して山路の徒步が今でも私はなつかしい。私が徒步で、いつも愉快に旅行をしたのは、若い時分の事だけだ。後には色々の仕事が出來、用件が出來、お荷物が出來、紳士らしく振舞つて車を傭はざるを得なかつた。さうなると世話が燒けて、氣骨が折れて、面倒で、前のやうに道中を樂しむよりも、さつさと行着いて仕舞ひたくなるのである。私は巴里で長いこと、各自五十ルヰと、一年の月日とを奮發して、夜着を入れた囊を持つたつた一人の人足を連れ、私と一緒に伊太利へ出掛けようと云ふやうな、二人の相棒を搜したものだ。誰でもこの計畫の外見を面白がつて、話の種にはしたけれど、實際にやつて見ようとは思はない。一日私は熱心に說いて、遂にディドロオとグリムとを說得した。そしてもう片が附いたと思つてゐた。けれども結局はそれも紙上の旅行となつてしまつた。その旅行に於てグリムは、ディドロオに何か不埒な事をやらせ、その吟味役を私に押附けると云ふ、それほどの面白味をも見出さなかつたのである。

そんなに早くチュランへ着くのを殘念に思ふ私の心は、大きな市を見ると云ふ悅びや、そこで間もなく、自分に相應した役柄をつとめると云ふ、望みによつて和らげられた。野心がもう煙を吐き出してゐたのである。見習の小僧なぞよりもずつと高い身分を見てゐたのである。間もなく自分がそれよりもずつと低い地位に置かれようなぞとは思ひも

かけなかつた。

話を進めるに先だつて、私が、餘り面白くもない色々なつまらない話をし、又これからもすると云ふ事を、讀者諸君の前に分疏し、辯解して置かねばならぬと思ふ。一旦讀者の前に赤裸々にならうと決心したからは、如何なるものをも曖昧に匿して置くべきでない。私は常に諸君の目の前に立つてゐなければならぬ。諸君の目は私の心情のあらゆる岐路、私の生活のあらゆる片隅までも私を追うて來て、一刹那も私の影を見失はないやうにしなければならぬ。いくら小さくとも、私の談に間隙や空虛があつて、「この時彼はどうしてゐたらう」と言はれたり、「萬事を打明ける氣はなかつた」と言はれたりするやうでは困るのだ。私は自分の告白に依つて、惡評の餘地を十分に與へるのである。それ故、沈默に依つてそれ以上を與へないやうに用心しなければならぬ。

ド・ワレンス夫人から內密で貰つた、僅かばかりの錢もなくなつた。私はうつかりそれを喋つてしまつた。そして私の道連れはこのぼんやりを利用せずには置かなかつた。サブラン夫人は色々に言ひ掛りを作つて、何でもかでも捲上げた。ド・ワレンス夫人が刀の總にとて吳れた、銀白のリボンをさへ捲上げた。私はそれが、何をなくしたよりも惜しかつた。のみならず、もう少し弱腰でゐたならば、刀まで取られたであらうと思ふ。道中の費用は成程彼等が拂つて吳れた。その代り、何一つ私には殘さなかつた。錢もなく、着物もなく、亞麻布もなくなつてチュランへ着いた私は、自分の價値一つで以てめざすところの、好運の道を開くより外はなかつたのである。

持つて來た手紙を差出すと、すぐに改宗者の收容所へ連れて行かれた。そこで私は、自分の衣食と引換へにした宗教を敎へ込まれるのである。這入りがけに見た鐵の格子戶は、私が這入るや否や、二重に錠をかけられた。この新しい生活の發端は、どちらかと云へば重苦しくて面白くないものだつた。そして、私が可なり大きな室へ連れ込まれたとき、全くのところ私は考へ込んでしまつたのである。室の內の道具は、ずつと向うの方に木造の神壇があつて、その上に大きな十字架が立つてゐて、その周圍に、これも同樣木造の椅子が四五脚置いてある。その椅子が蠟を引かれたやうに見えたのは、長い事使はれて、擦れて澤が出た爲めである。この廣間に、四五人のいやな浮浪人共が控へてゐた。一緒に敎を受ける連中である。神樣の子にならうと云ふ信心家よりも、惡魔の家來とでも云ひたい連中である。その中の二人は、自ら猶太人やモオル人だと稱してゐるスラヴォニア人で、西班牙や伊太利あたりを放浪して、商賣になりさへすれば、いつでも基督敎に這入つたり洗禮を受

けたりしたものだと云ふ。庭に臨んだ大きな露臺を二つにしきつてゐる、今一つの鐵の扉が開かれた。其處から我々の姉妹が這入つて來る。私と同樣、洗禮よりも、その信仰の莊嚴なる宣誓によつて復活が出來ると云ふ連中だ。それはもう手の着けられないやうな自墮落者や、良民を毒する賣女どもであつたらう。その中の一人を、一寸綺麗だと私は思つた。ほゞ私と同年くらゐ、或は一つ二つ上かも知れない。その人の惡さうな目が、折々私のとかち合つた。それから私は心安い間に成りたくなつた。けれども彼女は、已に三月も前からゐた收容所に、なほ二月近く逗留してゐたけれど、看守人のお婆さんが手離さず、いつも傳道師達が附いてゐて、勉强と云ふより以上の熱心で、その改宗を手傳つたので、遂に話し掛けることが出來ないでしまつた。彼女は見掛けによらず、餘程足りない女であつたらしい。あれほど教育に暇取つたものもないからだ。傳道師は彼女を宣誓が出來るまでになし得なかつた。そして彼女は、僧院の束縛が堪へられなくなつて、基督者であつても、基督者でなくてもいゝから、解放して貰ひたいと願ひ出でた。せめて、基督者にならうと云ふのを反對しないでゐる間にでも、解放するより外はなかつた。もしか强情を張り出して、無信仰を標榜するやうになつては堪らないからである。

新入者の爲めに小集が催された。我々に對して一場の訓示が爲された。私に對しては、神樣の恩寵を無にしないようにと云ふのであつた。他の連中に對しては、私の爲めに祈り、私の手本になるようにと云ふのであつた。それが濟んで、我々の童貞達がその別房に退いた時、後に殘つて私は、徐かに自分の周圍と云ふものを考へて驚いた。

次の朝早く、我々は復び訓戒の爲めに呼び集められた。そして私は自分の這入らうとしてゐる境涯や、それに這入らうとする動機やを、初めて考へた。

私は繰返して言ふ。この後も、幾度となく繰返して言ふだらう。日を追うて愈々切實に感ずる事だから。若しも世の中に道理ある、健全な教育を受けた兒童なるものがあるならば、それが私であつた。と云ふのは私は非常に立派な習慣の家庭に生れた上、親族の誰からも善い方へばかり導かれ、立派な手本を示されて來た。父も遊びの好きな人ながら、實に正直で通つてゐたゞけでなく、宗教的の感情にも富んでゐた。外觀だけ道樂者で、內實基督者である彼は、夙くから自分の感情を私の心に植付けた。揃ひも揃うて道德的な賢明な三人の叔母の中、年上の二人は正札附きの信心家であつた。實に嫻雅なばかりでなく、才能もあり、分別もある三人目のは、表面にこそ見えないけれど、一段とまた信心家であつたらしい。私はかうした立派な家庭からラムベルシエ氏の許へ移された。その人が又僧侶の身に似もやらず、衷心からの基督者で、言ふことゝ行ふことゝに一致があつた。彼と彼の妹さんとは、優しい正當な教育で私の心にあつた宗教心の萌芽をうまく育てゝ呉れた。立派な二人の用ゐたその方法は、誠實で、虔ましく、また理性的だつたので、私はかつてその說法に退屈するやうな事はなく、衷心から動かされて、立派な行ひをしようと思ふのが常で、それを記憶してゐる限り、滅多に背いた事もない。叔母のベルナアルの家では宗教が稍々つまらないものになつて來た。形式的の仕事になつてゐたからだ。師匠の處へ行つてからは、全く宗教の事なぞ考へなくなつた。それでも、情操は前と同じであつた。私には私を墮落させるやうな友達がなかつた。私は腕白者になつても、惡少年にまで落込まなかつた。

それ故私は、あれくらゐの年頃で持ち得られるだけの宗教心を持つてゐた。何も隱すには及ばない事だ。より多くの宗教心を持つてゐた。私は子供の時分から子供でなかつた。いつも大人のやうに感じ、また考へたやうだ。大きくなるにつれて普通の人間になつたので、元來は人と異つてゐたのである。私が眞面目な顏をして、神童かなんぞのやうに自分を言ふと笑ふ人もあるだらう。笑ふ人には笑はせる。しかし笑ひたいだけ笑つたあとで、試みにさがして見るがいゝ。六歲やそこいらで、熱い涙をこぼすほど牽きつけられ、興味をもち、現を拔かして小說に讀み耽る子供があらば、その時は私も自分の自惚の笑ふべきを覺り、自分が間違つてゐたと思ふであらう。

他日人に宗教心を持たせようと思ふなら、子供の時分宗教の話を聞かせないがいゝと私は言つた。子供は我々のやうに神を認めることが出來ないと言つた。それは私の經驗よりも、觀察によつて言つたのである。私自身の經驗は他の人に當てはまらないものだと知つた。やつと六歲になつたばかりのジャン・ジャック・ルソオがゐたならば、七歲から神樣の話を聞かして見給へ。私は、何の危險もないと云ふことを保證する。

誰も知つてゐることだと思ふが、「信仰がある」と云ふことは、子供に於ても、乃至また大人に於ても、生得の宗教を奉ずると云ふだけのものである。信仰の內容を減ずることは間々あるが、加へることは滅多にない。教義の信仰は教育の結果だ。私を父祖の宗教に從はせた、一般的の原理を外にして、私はその頃の鄕里の市に特有な、加特力嫌ひの情を持つてゐた。加特力は恐ろしい偶像崇拜として敎へられ、その僧侶達は非常にいやな色で畫き出されたものである。その爲めに初めの中は、敎會の內部を一瞥しても、白い袈裟をかけた僧侶に會つても、行列の鈴を聞いても、恐怖と戰慄の身慄ひをしないでゐられなかつた。流石に市へ

出てからは、そんな感情も消え失せたけれど、前にそれを經驗した處と似てゐるやうな、田舍の寺へ行くと、また度度繰返された。全くのところ、この印象はジュネエヴ附近の僧侶達が市の子供等に示した親切の記憶と、奇異な對照をしたものだ。臨終油禮式の鈴が恐怖を私に充すと共に、朝夕に撞く寺院の鐘は朝の御飯を思はせ、夕方のお點心を思はせ、鮮しい乳脂や、果物や、乳なぞを思はせた。ド・ボンヴェル氏方の御馳走は、大なる影響を及ぼした。かうして私の心持が知らぬ間に變つて來た。私は羅馬教を娛樂や饗宴に聯想するだけであつたから、その中に居ると云ふ考へに我慢が出來た。けれども眞面目に改宗しようなぞとは滅多に考へなかつた。よし考へても、それを避けようとし、ずつとさきへ行つてからの事と考へた。この時分それより以上の變化を來すことは出來なかつた。私は自分の結んだ契約と、その避け難き結果とを見て身を慄はせた。周圍にゐる未來の新發意は、その實例によつて私の勇氣を保持させる事が出來なかつた。さうして私は、自分のやらうとしてゐる神聖な行動が、事實たゞ惡黨の行動に過ぎないことを思はざるを得なかつた。子供ながらに私は思つた、——如何なる宗教が眞正の宗教であるにもせよ、兎に角私は自分の宗教を賣らうとしてゐる。又よし選擇が宜しきを得るにもせよ、聖靈を欺き、人間の侮辱を招かうとしてゐると。

さう思へば思ふほど、自分で自分が腹立たしく、かうした運命になつたのが、自分の業ではないかのやうに、嘆息を吐いたものである。折々は、この考へが猛烈になつて、一寸の間でも戸が開いてゐたならば、きつと逃出してやらうと考へた。けれどもそれは到底望みがたい事だつた。その決心も十分に固まつてゐたと云はれない。

その決心を弛めないで濟ますには、內密の願望が多過ぎた。それに又、どうしてもジュネエヴへ歸らぬと云ふ意氣込や、山越しをして引返す面目なさや、苦しさや、遠く鄕里を離れて來て友達もなく金もなしにゐると云ふ心細さや、これ等の事情が一つになつて、良心の苛責を手後れの悔悟とあきらめさせた。私はこれからやらうと思ふ事を辯解する爲めに、これまでにやつた事を非難するやうな風をした。過去の過失を大きくすることに依つて、將來の行動を止むを得ざるものと見做すことが出來ると思つた。これ迄の事は何でもない、これからの心掛次第でどうにもなると、さうは自分に言はなかつた。お前の犯した罪惡を、碌でもない種を蒔いたのを、歎息せよと自分に言つた。

全くのところ私の齡で、それまで當てにしてゐた物を悉く思ひ切り、自分自らを繫いでゐた鎖を破り、その結果がどうあらうとも頓着なく、父祖の宗教を棄てまいと、憚らず公言するのには、どんなに勇氣の要つたことだらう。私

なぞの齡で、そんな勇氣のあらう筈がない。またそれが仕合せな結果を來さうとも思はれぬ。事態は已に引返し難いところまで進行してゐた。そして私が頑張れば頑張るほど、いよ〳〵以て周圍の者は、手を代へ品を代へしてそれに打克たうとするのを常としてゐたのである。

私を滅ぼした似而非理窟は、もう間に合はなくなつてから、力の足りないのをこぼすと云ふやうな、大多數の人々の似而非理窟である。發奮が必要になる前に、我等には缺陷がある。そしていつも氣を附けて居りさへすれば、滅多に奮發を要するものでもあるまい。然るに、容易に制へられるやうな衝動が、譯もなく我々を引きずつて行く。我々は、その危險を輕く見て何でもないと思ふ誘惑に打ちまかされる。我々の知らず識らず落込む危險な狀態は、前以てそれを免れるに難くない。しかしながら、一旦落込んでしまふと並大抵な努力で拔け出せるものでない。それ故我々は、最後に深淵の底へ落込んで行くとき、神樣の前に辯解して言ふのである、「なぜあなたはこんなに弱く私共をお作りになりましたか。」と。ところが神樣はそんな辯解を取上げないで、我々の良心にお答へになる、「私はお前達がその淵から這上ることの出來ないやうな弱いものに作つた。それに落込まないで濟むくらゐに強く作つたからである。」

私は加特力にならうと云ふ、しつかりした決心をしなかつた。そして、まだ〳〵さきの事と思はれたので、その考へに馴れて來るのに暇取つた。同時にまた、何か待設けない事件が起つて、救つて呉れるとも思つてゐた。ぐづ〳〵と暇取らす爲めに、私は出來るだけ自分の立場を防禦しようと決心した。しかし間もなく私の虚榮心がこの決心を用のないものにしてくれた。私が傳道師等を手古摺らせたとき、すつかり彼等を征服してやらうと云ふ、大それた望みをすぐに起したからである。そして、私はこの企てに夢中になつた。人に教誨されながら、人を教誨しようと思つたのだから可笑しい。彼等をたゞ、說伏せることさへ出來たなら、新教徒にしてしまへるものだと思つたなぞ、隨分お目出度い話だつたと云はざるを得ぬ。

それ故彼等は、私の知識に關しても、私の意志に關しても、豫想したより以上の困難に會つた。新教徒は一體に、加特力よりも善く教育されてゐる。その理由は、他でもない。一方の教義は論證を要求するのに對し、他方は忍從を要求する。加特力は他人の與へる決定を受容れなければならぬ。新教徒は自ら決定することを學ばなければならぬ。彼等もこれを知らないではなかつたが、私の境遇や年齡から考へて見て、世故にたけたる人々を、それほど手古摺らせようとは思はなかつた。そして、私はまだ最初の聖體拜受をしてゐなかつた。その豫備になるやうな教育を受けた

こともない。これをも彼等は知つてゐた。知らなかつたのは、その代り私がラムベルシエ氏に十分教育されてゐた事である。並びに私が、彼等に取つては氣の毒ながら、教會歴史や帝國歴史を學んでゐたと云ふことである。私はそれを父の許で、殆んど諳誦するまでに學んだものだ。そしてその後、大方忘れてゐたけれど、論爭が激しくなればなるほど、いよ／＼それを想ひ出したのだ。

小柄ながらに可なり貫目のある年取つた一人の僧侶が、始めて談話會を開いて我々を呼んだ。他の者等にはこの談話會が思想の交換であるよりも、問答體の訓諭であつた。そして彼は彼等の辯駁を片附けるより、彼等に教へ込むのに骨折つた。私の場合はさうでない。順番が來ると私は、一つ／＼の問題で彼を引き留めた。手古摺らすことの出來る限りは、遠慮なく彼を手古摺らしたものである。その爲めに會が長びいて、出席者一同を退屈がらした。僧侶は長談義をして激昂して、岐路へそれて、最後に自分は、佛蘭西語が十分に解らないと云ふ言譯で、その場の難關を切りぬけた。私の無分別な辯駁が他の者等に迷惑を及ぼさないようにと、翌日私は別室へ引き入れられ、別の僧侶に引渡された。前のほど年寄りでなく、長い文句の喋れる辯舌家で、これは學者にだけ出來る藝だと云ふやうな、得意の色も見えてゐた。けれどもその勿體振つた樣子が私を服せしむるに足りない。そして結局私は自分の義務をなしてゐると信じたので、答ふべきことは明瞭に答へ、片端から彼をやりこめた。彼は聖徒オオガスティンや、聖徒グレゴリオや、その他の教父を以て私を沈默させることが出來ると思つた。そして、私も彼に讓らないくらゐ、此等の教父を容易に利用し得るのを知つた時、その驚きは言語に絶した。私とても彼と同樣、いくらも讀んではゐないのだけれど、ル・シュウルの教會史に拔書きした物を覺えてゐて、彼がその一つを引證すると、それに就いて押問答するよりも、同じ教父の言つた他の文句を引いて彼に報いた。それが少からず彼を惱ませた。しかしながら終局の勝利は彼に歸した。それには二つの理由がある。第一は、彼の方が强者の地位にあつたと云ふことだ。さう思ふと私は弱年ながら、程々にして置かなければならぬことに氣が附いた。あの年寄りの小柄な僧侶は、私の物識りなのをも、私と云ふ人間をも、甚だ好まないと云ふ事を明かに知り得たからである。第二の理由は、彼が私より餘計に教育されてゐたと云ふことだ。その爲めに彼は、私に取つて眞似の出來ない藝當をやり、自分の持て餘すやうな反駁に會ふと、私が岐路に這入つたと云ふのを假託に、その解決を翌日へ延ばした。そして、彼は折々、私の引いた文句を間違つてゐると言張つた。そして、その書物を持つて來させて、指摘して見ろと私に迫つた。彼は

さうしても、たいした危險のないことを知つてゐたのである。又私がいくらこの學問をしてゐても、本當に書物を使ひ馴れてはゐないと云ふことを、拉丁語の知識が貧弱で、大部な書物から一箇所を、見出し得るものでないと云ふことを知つてゐたのである。その中にたしかにあると思つても仕方がなかつた。その上、我々の牧師を不正直だと云つて難ずる彼が、同じ不正直をやつてゐるやうに思はれた、又折々、自分の都合の悪い反駁を覆すべく、文句の捏造をやつてゐるやうに思はれた。

かう云ふ屁理窟をこねまはしてゐた中に、議論をし合つたり、祈禱の長文句を諳誦したり、色々の悪戯をしたりして、日を送つてゐる中に、私はいやな、非常に不愉快な出來事に遭遇しなければならなかつた。その出來事は私の上に悪い影響を及ぼしてゐるだらう。

どんなに卑俗な魂でもどんなに荒つぽい心でも、何等かの愛情を解しないものはない。かの自らモオル人と稱する無賴漢の一人が、私に思ひを寄せて來た。彼は私と話をしたがり、ちんぷんかんの饒舌をふるつて無駄口をきゝ、多少の厚意をも私に示した。食事の際には、折々自分の皿のを分けてくれた。そして特に屢々熱烈な接吻を私にした。私に取つては甚だ心持が悪かつた。長い切疵で醜くなつた、蕎麥餅のやうなその顏や、並びにまた、やさしいよりも怒つたやうに見えるその光る目を、どんなにか恐れたものだつたらう。私は接吻を我慢して私自らにかう云つた。「この男はまことに親切に私を思つて呉れる。それを斥けるのは悪からう」と。その内彼はだん／＼と馴々しげな態度になつて、折々私が、正氣の沙汰ではあるまいと思ふやうな妙な事を私に言つた。或る晩彼はどうしても私と寢ようと欲つた。私は自分の床が狹いからと云ふ口實を作つて、斷つた。すると、彼は自分の床へ來るようにと迫つた。それに對しても私は逆らつた。何故と云つて、それは胸の悪くなるやうな嚙煙草の匂がぷん／＼とする、きたない男であつたからである。

次の朝可なり早く、我々は二人きりで廣間にゐた。彼は又もや可愛がり始めたが、全く氣味の悪いやうな情熱を伴つてゐた。遂に彼はだん／＼と、たまらなくいやな馴々しさに移らうとした。そして無理に私の手を取つて、同じ事をやらせようとした。身を振千切つた私は、聲を擧げて、一歩あとへ飛びのいた。固よりそれが何の積りだとも知らぬ故、憤怒の情を示すことなく、私は自分の驚愕と嫌惡とを、はつきり彼に表示した。その結果彼は私を離した。けれども、彼が暴れるのをやめて蜂窩の方へ行つたとき、私は何かねば／＼とした白い物の下へ落ちるのを見た。それが私の胸を悪くした。それまでに覺えのないゝらゐ、はつと

して、面喰つて、そして青くなつて、私は露臺へ飛出して行つたが、殆んど氣が遠くなるやうに思つた。

私にはこの不幸な男が何をしたのか解らなかつた。私は彼が瀾漫かなんぞの發作に罹つたのであらうと思つた。そして全く冷靜な人々に於ては、この無作法な淫縱な振舞と、この恐ろしい獸慾の火に燃える顏付よりも、無氣味な樣子と云ふものを考へることが出來ぬ。私はつひぞ他の男子をさうした場合に於て見たことがない。けれども我々がさうした場合に於て、婦人の前にゐる時は、婦人の怖毛立つことのなからん爲めに、その目をすつかりつぶつてゐなければならぬ。

私は先づ、自分の身の上に起つた出來事を吹聽せざるを得なかつた。看守人の婆さんは、沈默を私に命じたけれど、だいぶ驚かされたものらしく、「カン・マレデー・ブルタ・ペスチア！」と呟くのを聞いた。私は何故に沈默すべきかを知らないから、禁止されてゐたのに拘らず、何も氣にかけないで喋つて廻つた。その結果翌日の早朝に、看守人の一人がやつて來て、嚴しい譴責を私に加へた。私が神聖なる家の名譽を傷つけ、つまらない出來事の爲めに人騷がせをしたと云ふのである。

彼は更にその非難を進めて、私にわからない色々の事を話したが、それを先づ私に教へなければならぬとは知らなかつた。私が何も彼も知つてゐて、唯だ同意しようとしなかつただけだと思ひ込んでゐたからだ。彼は大眞面目で私に言つた。あのことは正しく不行跡同樣の宜しくない事ではあるけれども、しかしその相手の人間に取つては屈辱とすべきものではなく、且つ又、可愛いゝと思はれるのをそれ程にまで怒るべきものではないと。彼は直截に、自分自身の若い時、同樣の名譽を擔つたと云ふことや、脅された爲めに抗拒し得なかつたと云ふことや、その事柄自體は何も恐ろしいものではないと云ふことを語つた。彼は構はず恥づべき事を口にして、それにふさはしき強い言葉をも使用した。そして、私の抗拒した原因を、苦痛に對する恐怖とばかり合點して、その恐怖の謂れなきものであると云ふことや、それ故に心配するには及ばないと云ふことを保證したのである。

私はこの破廉恥な奴が、己自身の爲めに言つたのでない故、いよ〳〵以て驚いた。彼は唯だ、私自らの爲めを思つて、教訓しようとしたゞけのものらしい。彼に取つてはその說明が、まことに何でもないものであつたと見えて、內密の對談を求めたことなぞ曾つてない。我々の側には第三者として、今一人の僧侶がゐた、それも同樣この出來事に對して平氣であつた。かうした態度を目擊して私が信じ始めたのは、これが世間普通の習慣で、私だけがそれにならふべき機會を有しなかつたと云ふことだ。それで私は、いや〳〵ながら、蟲を抑へて彼の云ふことを聞いてゐた。私の出會つた出來事は、とりわけ私の目擊した光景は、隨分力强く記憶に殘つて、それを思ふ度每に、いつでも心持が惡かつた。私は解らないでゐて、その出來事に對する憎惡を辯護者の上にまで及ぼした。さうして私自らが、その教訓の惡い結果を氣附かないで濟むくらゐ、私自らを制し得なかつた。彼はやゝ不興氣な眼付を私に投げた。爾來この收容所に於ける私の逗留を不快ならしむべく、あらゆることを試みた。それが立派に成功した結果、私は他に施すべき方法もなかつたから、それまで遠ざかる爲めに勞したと同じ程度に於て、その唯一の方法へ近寄らうとあせるに至つた。

この騷ぎは後日の私を、同じやうな好色漢の企てから護つた。そして好色漢と云はれる人々を見ると、あの無氣味なモオル人の顏付や擧動を追憶して、いつでも包み切れないやうな恐怖を以て充たされた。これと反對に婦人の方は、甚だ引立つて私に見えた。私の感情の優しさや、私の性狀のまめ〳〵しさは、男性の暴虐さを償つた、婦人達に負ふ所のものらしく考へた。そして、あの不都合な阿弗利加人を想起する時は、最も醜惡な賣女すら、禮拜の對象として私の眼に映じたのである。

今、我が不都合千萬な阿弗利加人に關しては、人々が彼の所行に對して、何と言ひ得たかを知らない。けれども私には、ロレンツア夫人を除くの外、誰一人彼を前よりもわるく思ふものがないやうに見えた。しかしながら彼は私を避けて、二度と話をしなかつた。それから一週間經つて、莊嚴な儀式の下に彼は洗禮を受けた。その時彼は蘇生した靈の淸らかさを表す爲めに、上から下まで白い物を着せられた。翌日彼はその收容所を去つた。それつきり私は彼に逢はない。

一月經つて私の番が來た。教誨師等が困難なる改宗の名譽を擔ふことを敢てし、また私の新しい從順さを贏ち得て、信仰箇條を殘らず諳誦させるまでには、それだけの時を要したからである。

遂に十分に教育を施されて、私の教師等の考へに從へば、精神上にも十分に準備をされて、聖徒約翰管長教會へ、私は行列で連れ込まれ、其處に舊い信仰を誓絕し、洗禮の確認を受取つた。實際の洗禮は施されなかつたけれど、その場合同じやうな儀式が行はれるので、人々をして、新教徒は基督者でないと云ふことを思はせる上に役立つた。私はさうした場合の慣例として、白い笹緣をつけた、灰色の上着を着せられた。私の前後には二人の男が、撥で銅盤を叩きながらそれを運んだ。その中へ人々が、それ〴〵信心のこゝ

ろから、改宗者に對する好意から、その施しを投げ入れた。一口に言ふとその儀式が、いよ〳〵公衆を化導するものとなり、ます〳〵私を銷沈させるものとなる爲めに、加特力のありとあらゆる虛飾を用ゐ盡したものである。たゞ例の白い着物は非常に役に立つたであらうのに、モオル人と同じく私も貰へなかつた。不幸にも猶太人でなかつたからである。

これで濟んだのではない。あとで私は審問所へ行つて、異端の罪のお赦しを受け、アンリ四世がその使節によつて列したと同樣の儀式で以て、教會の懷へ歸らなければならなかつた。位の高い審問僧の顏付と樣子とは、その家へ這入る時に感じた內々の恐怖を少くしてくれなかつた。私の信仰や、私の境遇や、私の家族などに就いて色々と問うたあと、彼はうちつけに、私の母が地獄へやられたかどうかときいた。恐怖の念がむつとする私のこゝろを抑へた。私は唯だ、さうでないことを望むと答へ、彼女がその息を引取ると云ふ間際にも、御辭儀を蒙つたかも知れない、と答へて我慢した。僧侶は沈默したけれど、それに同意したらしい顏付でなかつた。

これ等の儀式が殘らず濟んだあと、いよ〳〵私の望み通りの地位が與へられると思つてゐたとき、人々は私の爲めに集めた小さい貨幣を二十法餘り私に與れて、私を門外へ連れ出した。彼等は純粹の基督敎的生活を送るよう、いつまでも恩寵を無にしないようにすゝめてくれ、私の好運を祈つてくれて、私の背後に戸をしめた。そして誰も見えなくなつた。

かく忽ちにして、私の大なる希望は悉く消え失せた。そして私には、今の今まであれほど骨折をしたその事から、教をすてると共に欺かれたと云ふ追憶の外に何物も殘らなかつた。私が立派な幸福の見込みから悲慘なる現實の窮迫に陷るのを見たとき、朝には自分の住むべき宮殿の選擇に心を用ゐ、夕には街上にねむるを餘儀なくされるやうなのを見たとき、私の考へに於て如何に急激な變動が起らなければならなかつたかは、たやすく想見し得られるだらう。私が悪いばつかりに、かう云ふ始末になつたと云ふ意識によつて、過失の悔恨が激しくなれば激しくなるほど、いよいよ甚だしい絕望に落ちたと、諸君は推察するだらう。ところが實際はさうでない。私は生れて始めて二箇月以上禁錮されてゐた。私の獲た第一の感情は自由の囘復された悅びである。久しく奴隷の境涯にゐたあとで、再び自分自身と、自分の行爲との主宰者になつて、私は今資財もあり立派な人物にも富んだ、大きな市の眞中にゐる自分を顧みた。やがて私は認められ、それらのものに近づく道を、私の才能が、直ぐにも開いて與れさうに思はれた。そして、

それを待つだけの餘裕もあり、懷にある二十法は、使ひ切れない金のやうに思はれた。それに、これは誰とも相談しないで費つていゝ金である。その時ほど自分を金持と思つたのは、これまで曾つて無い事だつた。落膽沮喪するやうなことは一向になく、私はたゞ、希望の形を變へたばかりだ。私の自尊心がそれに依つて失ふところは何もない。私はこんなにまで自信を有ち快活だつたことはない。もう已に出世したかのやうに思つた。又その出世が自分の腕一つで出來たのを嬉しがつてゐた。

私は先づ市中をぶらつき廻つて、私の好奇心を滿足させた。それが唯だ自分の自由を確めるだけのものであつたけれど。私は兵隊の立番するのを見に行つた。軍樂が大に氣に入つた。私は行列のあとから附いて行つた。僧侶達の不調和な歌が面白かつた。私は王宮を見に行つた。私は恐る恐るそれに近づいた。そして他の人の這入るのを見てその眞似をした。誰も咎めないで入れてくれた。それは恐らく私の抱へてゐた、小さな荷物のお蔭であつたらう。何は兎もあれ、王宮へ這入つたとき、私は自分自身をえらい者だと考へた。殆んどその中に住む人かなぞのやうに考へた。遂に私は歩きくたびれた。腹もへつたし、暑くもあつた。そこで、とある乳屋へ這入つて行つた。その時の乳とクリイムと、私の何よりも好物の、ピエモン麵麭の二片とは、僅か五六スウの御馳走で、しかも又滅多にたべたことのないやうなおいしい物であつた。

そのうち私は宿を捜さなければならなかつた。私は相應にピエモンの言葉が出來たので、それをさがすのにたいした困難もなかつた。その上私は、自分の趣味よりも自分の蟇口を標準にして、選擇するだけの分別があつた。私はボオ街の軍人の細君のところを敎へられた。その家は暇の出た奉公人を、一晩一スウ宛でとめてゐた。私はそこに空いた床を見出して、それを占領した。細君は年も若く、結婚してから間もないが、それより前にもう五六人の子供を有つてゐた。我々は、細君も、子供も、お客もみんなひとつ室に寢た。そして私のゐた間ずつとさうだつた。細君は馭者かなんぞのやうに怒鳴りたて、いつも髮を亂してだらしのない恰好をしてゐたけれど、誠に親切な、世話ずきな、よく出來た女であつた。とりわけ私にはやさしくしてくれて、私の爲めにもなつたのである。

數日の間私は、心の儘に羽をのばして、私の好奇心を滿足させた。市の內外をぶらついて、目新らしく、珍しさうな物を殘らず見て歩いた。そして、曾つて首府と云ふものを見たことのない、ぽつとでの若者にとつては、あらゆる事物が珍しかつた。とりわけ宮廷へは缺かさず行つて、每朝王家の彌撒に列つた。この君主やその侍臣等と同じ禮拜

堂に這入つてゐると云ふことが嬉しかつたのである。しかしながら、續けて行つてゐる中に、そろ〳〵と頭を持上げかかつた音樂の趣味が、宮廷の壯觀と云ふことよりも、より多くそこへ惹きつけるものとなつた。宮廷の壯觀は變化がなく、見馴れて來れば來るほど、興味を惹かなくなつたのだ。サルディニュの王は、當時歐羅巴に於ける第一等の樂堂を有つてゐた。ソミイや、テジャルダンや、レ・ベジッチィ等の諸星が列び坐してゐた。極々つまらない樂器の響でも、それが間違つてさへゐなければ、立ち處に有頂天にならせるやうな若者を引き寄せるには、それは勿體ないくらゐのものであつた。そして、私は自分の眼に映ずる壯觀に、羨望の念をまじへざる歎賞をのみ拂つたのである。宮廷のあらゆる壯觀の中、私に取つて一番大切なのは、私の恭敬を値するやうな、共に一つの小說を演じ得られるやうな、若い姬君をその內に見出さうと云ふことだつた。

その實私は、それより少々光彩の少い舞臺に於て、その一つを演じようとしてゐたのである。それでももし大團圓まで行つたのなら、百層倍、千層倍もの悅びを見出したであらうと思ふ。

隨分つゝましくはしてゐたけれど、財布が知らない間に輕くなり出した。しかし私の節儉は、用心の結果と云ふよりも、質素の趣味と云ふべきで、またその趣味は、今日に至るまで如何なる贅澤な食事の習慣も、それを變へなかつた。私は曾つて、つゞまやかな田舍の御馳走より、すぐれな御馳走を知らなかつた。今日も尙ほ知らない。乳の料理や、卵子や、サラダや、チイズや、黑パンや、可なりの葡萄酒で、立派に私を歎待することが出來る。執事や下男等がうるさく世話を燒いて吳れないでも、纖な食慾が他のものを補ふのである。當時私は六七スウを費して、その後六七法を費つたよりも遙かにうまく食事をした。すなはち私の節制は、不節制をしたいと思はなかつたのである。節制と云ふさへも謬りだ。その場合出來るだけの肉感的享樂は貪つてゐたからである。梨や、乳や、チイズや、バタや、小刀で切れるやうなモンフラアの葡萄酒四五杯が、私を最も幸福な美食家にしてくれたからである。しかし、そんなにしてゐても二十法の金は殘り少なになつた。それが日一日とだん〳〵痛切に感じられる。そしてまだ無分別な年頃であるにも拘らず、將來に對する不安の念が、やがて恐怖に近いものとなつて來た。總ての蜃氣樓が消え失せたとき、自分の生活を立てるべき職業を求めると云ふことより外に、何の望みも殘つてゐないと私は覺つた。然し、これもまた容易に實現されなかつた。私は以前の職業を想ひ起した。けれども、それで以て雇はれようとするには、修業が出來てゐなかつた。その親方もチュランには澤山なかつた。そ

こで私は決心した、何か氣の利いた物の見附かるまでは、軒別に歩き廻つて、印版や紋章を板金の上に彫らして貰はうと。そして非常に安くして、その報酬をも先方定めにして賴まうと。この思ひ附きも餘りうまくは行かなかつた。私は殆んど到る處で斷られた。たまに賴まれても、つまらない仕事で、二三度の食事をするのがむづかしかつた。ところが一日朝早くコントラ・ノオヴァの通りを歩いてゐたとき、私は帳場の窓硝子を距てゝ一人の若い女を見た。餘りの美しさと愛嬌があるのとに、平生の內氣な性分に似げもなく、私はつか〳〵と這入つて行つて、例の如く仕事を賴んだ。彼女は私を斥けないで、腰をかけさせて、一通り身上話をさせて、同情を寄せて、勇氣をつけさせて、更に尙ほ、善良なる基督者は私を棄てないと言葉を添へた。それからまた、私に入用の道具を、近所の金銀細工をする家へ取りにやつた間に、臺所へ行つて、朝飯を運んで來て吳れた。この前兆は甚だ善かつた。事實も決して惡くなかつた。彼女は私のつまらない仕事に滿足したらしかつた。それよりも尙ほ、私がやゝ元氣を恢復したときに、私の活潑なお喋りに滿足したらしかつた。彼女の樣子が際だつて晴やかになつた。その顏付のやさしげなのにかゝはらず、それが最初私を壓迫したのだつた。けれどもそのねんごろな歎待や、同情のある話の調子や、おだやかな、情の籠つた振舞が、間もなく私を寬いだ心持にして吳れた。私は自分が失敗しなかつたのに氣がついた。すると、益々ことがうまく運んだ。しかしいくら伊太利の女でも、そして全然媚を見せずにはゐられないくらゐ美しくても、彼女は非常に遠慮深く、私はまた臆病な性質なので、容易に二人の關係は捗どらなかつた　この出來事の結末をつけるべき時も來なかつた。私は愈々大なる悅びを以て、彼女と過した短い間の事を追憶する。そして自ら言ふ、あの時分私は初めて、戀愛の最も甘美なる、最も純潔なる歡樂を味つたのであると。

彼女は褐色の髮の、非常にはき〳〵とした女で、尙ほその綺麗な顏に現れた溫情が、いき〳〵とした樣子を手傳つて、ひとしほ人を惹附けた。彼女の名をバジル夫人と云つた。彼女よりもだいぶ年上で可なりやきもちやきの良人は、彼女を自分の旅行中番頭の監督に委せて置いた。その番頭は險呑がられるべく、餘りに醜男であつたのだ。それでも自分には自信があつて、それをまた不機嫌によつてのみ表示するのが常だつた。私は隨分、その表示の的にされたものである。彼がその得意の笛を吹くのを聞くのは好きだつたけれど、この新しいエジストは、私が彼の女主人のところへ行く度每に、いつもぶつ〳〵と不平を言つた。彼は私を取扱ふに侮蔑を以てした。すると彼女は遺憾なくそれを彼に報いた。彼の目の前で私にやさしくして、彼を苦めて面

白がつてゐるやうに思はれた。かうした復讐は、固より私の顧ふところだが、たつた二人つきりの時にあゝしてくれたなら、更に〳〵嬉しかつたであらうと思ふ。しかし彼女は、そこまで行つてはくれなかつた。少くともさう云ふ具合には進行しなかつた。私を餘りに若いと思つたからか、どうして第一歩を踏出すべきかを知らなかつたからか、嚴重に品行を慎まうとしたからか、彼女は一種控目な態度を取つてゐた。私は悲觀はしなかつたけれども、妙に氣がひけた。彼女に對しては、ド・ワンレス夫人に對して感じたやうな、痛切な敬意を感じなかつた。けれど、より多くの畏れと、より親しさとを感じた。私は狼狽し、まごついた。彼女の面を見ることが出來なかつた。その前で呼吸することが出來なかつた。しかもなほ彼女に別れるのを死ぬるよりも恐ろしがつた。私は彼女の目を避けて、貪るやうな一と目で、私の見ることの出來るあらゆるものを見た。上衣の花や、綺麗な足の爪先や、手袋とカフスとの間に露はれる、ふつくりした白い手や、頸巾の下から折々のぞく部分をも見た。新しいものを見る毎に、印象が重なり合つた。自分が見ることの出來たもの、忖度したものによつて、私の眼は方角がわからなくなり、私の胸は押しつけられた。刹那々々に苦しくなつた私の呼吸は、今にもつまりさうだつた。そして私の力に叶ふ事は、屢々二人だけでゐる沈默の中に、そつと苦しい溜息を漏らすことだけだつた。仕合せとバジル夫人は、自分の仕事に氣を取られ、それに心附かないでゐたやうだ。しかし私は、一種の同感でゞもあらうか、彼女の頸巾が幾度となく、弛んで解けかゝるのを見たものだ。この危險なる見物が私の忍耐力をなくさせた。けれども、私がまさに情熱の狂奔に身を任せようとしたときに、彼女は何か穏かな調子で私に話した。それが直に私を正氣にかへらせた。

私はかうして幾度となく、差向ひになつて彼女を見た。その時、一つの言葉も、一つの身振りも、一つの眼付も、それはあまりに表情に滿ちすぎて、互にうなづき合ふやうなことはなかつた。私に取つて甚だ苦しいこの關係が、尙ほ且つ私の悦びとなつた。そして單純な私の心には、どうしてさうまで苦められるのかを思ひ當てることが出來なかつた。この小さな密會は彼女にも格別いやではなかつたやうだ。少くとも、度々その折を拵へて呉れた。それも彼女が自分で用ゐる私に用ゐさせた方法から云ふと、何も彼女の側に於て、疚しい事はなかつたに違ひない。

一日彼女が番頭の談がうるさくなつて、自分の居間へ逃げ込んだとき、私は裏店で大急ぎに自分の仕事を片附け、彼女のあとを追うて行つた。その部屋の扉は半ば開いてゐる。私は氣附かれないように中へ這入つた。彼女は入口とは反

對の方を向いて、窓際近くで刺繍をしてゐた。私の這入つて來たのが解らなかつた。表を通る荷車の響に消されて足音も聞えなかつた。何時も服裝に氣を附ける方ではあるが、この日は氣を附けるより一歩を越えて、だいぶおめかしの方だつた。あくまでも優美な姿勢で、心持前にかしげた頭は、白い頸首をのぞかせ、噛みよく結ばせたその髪には花をかざしてゐた。彼女の全身を包んだ不思議な幻を眺めるだけの暇はあつたのだけれど、私の目がくらんでしまつた。私は部屋の入口に身を投げて跪き、情熱に現もなく、彼女の方へ雙手を伸べた。大丈夫聞えはしないと思つたからで、彼女が私を見ようとは夢にも思はなかつたからである。けれども、煖爐の上には鏡があつて、すつかり私の裏をかいた。私は、かうした狂熱が彼女の上に如何なる影響を及ぼしたかを知らぬ。彼女は私を見もせず、口もきかなかつた。僅にその横顔を見せて、その足下にある蓙を指して見せたばかりであつた。震ひ上つたのと、叫んだのと、示された場所へ飛んで行つたのとは、全く同一の刹那であつた。しかし、一寸信じられさうにもないのは、その場合私がそれより外に何一つなし得なかつたと云ふことだ。たゞの一言も言へず、目を上げて見ることも出來ず、隨分無理な姿勢をしてをりながら、一刹那彼女の膝にもたれる爲めに、彼女に觸れると云ふことすらもなし得なかつた。私は默つて動かないでゐたけれど、決して落着いてはゐなかつた。私の激昂や、悦びや、感謝の念や、標的こそきまらないけれど、熱烈な願望が明かに現れてゐた。その願望は、人の氣を惡くしてはと云ふ懸念から束縛された。世慣れない私の心は、その懸念を取除くことが出來なかつたのである。

彼女は私より落着いてゐるとも、大膽であるとも見えなかつた。私を足下に見るのが氣になつて、私を引き寄せたのを當惑して、また無分別にした眴の結果を考へ出して、彼女は私を抱き上げもしなければ、突き離しもしない。眼を仕事の上から離さないで、さながら私がその足下にゐるのを、知らないかのやうに裝うた。しかし世間知らずの私でも、なほ推測することが出來たのは、彼女が私と狼狽を共にし、或は更に私と願望を分つてくれたと云ふことだ。また私と同じ羞恥によつて束縛されたと云ふことだ。その癖この推測が、右の羞恥に打克つ勇氣を與へて呉れたわけでない。私の考へでは、私より五つ六つ年上であると云ふことが、私の有つてゐたよりも、より多くの勇氣を彼女に與へた筈である。然るに彼女が私の勇氣を鼓舞しようともしないのは、私に勇氣を出させたくないのだと、私は自分で自分に言つた。今日尙ほ自分の判斷が間違つてゐなかつたと思ふ。そして彼女が、私のやうな初心者には、宜に激勵が必要であつたばかりでなく、手びきも亦必要であつたこ

とくらゐ、知らないでゐた筈はないのだ。

私はこの激しい、しかし沈默の一幕が、どうして濟んだかを知らない。又若し邪魔が這入らないならば、いつまで私がぢつとして、滑稽な、しかも惡くない立場に踏み止まつたものだかも知らない。私の情熱が絶頂に登りつめたとき、我々の室の次になる、臺所の扉の開くのを聞いた。そしてバジル夫人は、その言葉にも態度にもあり〳〵と見える、恐怖の情を以て私に言つた。「さ、お起ちなさい。ロジナが來るから。」急いで身を起しながら私は、彼女の差伸べる手を握り、その上に二つの燃えるやうなあつい接吻をした。二度目に接吻をしたときは、そのなつかしい手が心持私の唇を押したやうに思つた。私は一生を通じてこの刹那ほど嬉しかつたことがない。しかしながら、一度失つた機會は、二度と歸つて來なかつた。そして我々の若々しい戀物語はこれで終りを告げたのだ。

恐らくはこれが爲めである、この愛すべき婦人の姿が、かくもなつかしく私の胸に印象されてしまつたのは。そしてそれは、私が世間と婦人とを、だん〳〵と知つて來れば知つて來るほど、そのなつかしさを添へて來た。彼女にしてもう少し經驗があつたらば、その場合少年を激勵する爲めに他の態度を取つたらう。しかし、彼女の心は弱かつたけれど、尙ほ且つ純潔なものだつた。彼女は無意識の衝動に襲はれたのだ。それは疑ふべくもなく、明かに彼女の初めての不貞であつた。そして私は、自分自身の羞恥に打克つよりも、彼女の羞恥に打克つ上に、より多く骨が折れたに相違ないと思ふ。そこまで行かないでも、私は彼女の側で何とも云はれない悅びを覺えた。婦人の占有が私に與へた如何なるものよりも、彼女の上衣にすら觸れないで過したあの二分間の幸福な感じに及ばない。いや全く、我々の愛する純潔な婦人が、我々に與へるやうな幸福は、決して他にあるものでない。その側に居れば何一つよくないものはない。ほんの一寸指で合圖をしたのが、手で以て心持私の唇を押したのが、バジル夫人から蒙つた唯一の愛情である。しかもこんなつまらない愛情の思ひ出が、それを思ひ出す毎に私を恍惚とさせる。

私は翌日と翌々日と、二度目の密會を空しく待つた。その機會を見出すと云ふことが、私の力に及ばなかつた。彼女の方に全くそんな氣がないと云ふことも分つた。そして彼女の私に對する態度は、前より冷淡でないまでも、控目になつて來た。そして、それから私の目を避けたのも、自分の目を十分に支配し切れない懸念からだと思ふ。番頭の奴は一層意地惡くなつた。その上陰氣な皮肉屋になつて、私が婦人達の間にうまく成功するだらうと言つた。私は何か無分別な事でも爲でかしたかのやうに身慄ひした。そし

て既に彼女との間に內密事が出事てゐるものゝやうに考へたので、それまで格別祕密にしようとも思はなかつた心持を、氣取られまいと努めた。これが私を一層用心深くして、その心持を滿足させる機會を捕へる上に手間どらせた。そして大丈夫間違ひのないものをとばかりさがしたので、遂に唯だ一つをも見出さなかつた。

これが又、私の遂に癒すことの出來なかつたもう一つの變な癖で、本來の內氣と相俟つて番頭の豫言と甚しく矛盾したものである。敢て云ふならば、私は容易に幸福となるべく、あまりに眞實過ぎる戀をした。私のくらゐ、猛烈でしかも純潔な熱情はあるものでない。私のより一層愛情の濃かな、より眞實な、より私心のない戀愛はない。私は、自分の幸福を千度でも、愛する人の幸福のために犧牲にしたゞらう。愛人の體面は自分の生命よりも貴重であつた。彼女の平和はその一瞬をでも、私は如何なる悅樂とも代へなかつたであらう。この爲めに私は非常に小心に、非常に控目に、非常に用心深くなり、戀をする度毎にしくじつた。私の不成績は、あまりに眞劍すぎる戀から來た。

話は笛吹きのエジストに歸るが、あの曲者が、不平を增せばますほど、いよ〳〵慇懃になつたのは妙だつた。女主人が私に目をかけて吳れた最初の日から、彼女は私を店の方に使はうと考へた。私は算術が可なりに出來た。彼女はあの男から簿記を習はせたいと云ひ出した。けれども彼は、自分が逐ひ出されると云ふ心配からか、彼女の提案を受入れなかつた。そこで私の仕事と云ふものは、例の彫物を濟ました後は、勘定書や覺え書のやうな物を書き直したり、少しばかり帳簿の淸書をしたり、取引上の書面を伊太利語から佛蘭西語に飜譯したりするのであつた。突然彼は、前に斥けた提案を、受入れようと考へ附いた。そして、私に複式簿記を敎へ込み、主人のバジル氏が歸つて來たとき、その下に働くことが出來るやうにしてやると言つた。その調子にもその顏付にも、一種わざとらしい、意地の惡い、皮肉なところがあつたので、私はどうも本氣になれなかつた。私の答へを待たないで、バジル夫人は素氣なく答へた。それもいゝが、これだけの才分を有つてゐて、手代なぞに朽ちさせるのは惜しいから、もう少し氣の利いた運に向つて行つてほしいものだと。

彼女は私を、私の爲めになるやうな人々に、紹介しようと思つてゐると度々言つた。用心深い彼女は、私を遠ざけるべき時だと考へたのだ。それとない布告は木曜日に行はれた。日曜日には宴會が開かれて、私はそれに加はり、立派な容貌のドミニカン派の僧侶もやつて來た。それに私は紹介された。その僧侶は親切に私をもてなして、私の改宗を慶んでくれて、私の身の上のために、色々と話してくれ

た。バジル夫人から詳しく聞いてゐたものらしい。尙ほ二度ばかり私の頰邊を撫でながら、良い人になれよ、確りしなくてはいけないなどゝ云ひ聞かせ、ゆつくり話をする爲めに、訪ねて來いと言ひ足した。皆なの拂ふ敬意から、偉い人に違ひないと私は思つた。バジル夫人に對して、父親が娘に對するやうな口を利くところから、夫人の懺悔僧だなと推定した。その品の好い馴々しさに、彼女に對する敬意が、大なる敬意が伴つてゐた事を記憶する。もつともその時分には今日のやうに感じなかつた。もう少し譯が分つてゐたならば、懺悔僧から尊敬されるやうな若い婦人に心を動かさせたと云ふ事を、どんなに身にしみて感じた事だらう。

食卓がお客の數に對して狹かつた。そこでもう一つ小さい食卓を持出して、番頭と私とは樂しく語つた。私は氣を配る方も食べる方もぬからなかつた。多くの皿が我々の方へ來たけれど、彼にとて送られたものではなかつたやうだ。この邊までは萬事がうまく行つてゐた。婦人連も陽氣に浮かれ立ち、紳士連もなか〳〵慇懃にやつてゐる。バジル夫人は主人役として愛嬌をふり撒いてゐた。御馳走の眞最中に、一臺の客馬車が戸口にとまるのが聞えた。誰かゞ階段を昇つて來た。それがバジル氏であつた。私は、今にも彼が金ぼたんの附いた眞赤な上衣をきて、こゝへ這入つて來るのを見るやうに思ふ。——あの色はその時以來たまらなくいやなのである。バジル氏は脊の高い、美しい、押出しの非常に立派な人だつた。彼は騷々しい音を立てゝ、そこにゐるのは知り合の人ばかりではあつたけれど、不意打を喰はせるやうな樣子で這入つて來た。夫人はその頸に抱き附いてその手を取つた。いろ〳〵切愛の情を示したが、彼は一向それに報いない。彼は會衆に挨拶をする。彼の皿が運ばれる。彼はそれを食ふ。彼の旅行が話題に持出されるや否や、彼は小さい食卓をじろりと見やつて、險しい調子でたづねる、あそこにゐる小僧は誰だと。バジル夫人は包まず答へる。家に泊つてゐるのかと彼がきく。さうぢやないと誰かゞ答へる。なぜさうでないのか、と返した彼の言葉は荒い。晝間來てゐる者が、夜分泊つて行かぬ筈はないと突込む。見かねて僧侶が言葉を挾んだ。眞面目に夫人を辯護したあと、二言三言私をかばひ、何も不都合な事はないのだから、バジル氏たるものは、夫人の善根を咎めるよりも、むしろ手傳ふべきであると附け足した。良人は腹立たしさうな調子で答へた。僧侶の前だから、だいぶ控へてゐたのであらうが、それでも私には十分呑込めた、あの番頭が私の一件を知らしてやつたのだと、——餘計な世話をやいて呉れたのだと。

一同席を離れるや否や、番頭は主人の使者で、私が即座

にこの家を立ち退いて、二度と闕をまたがれないと云ふことを告げに、得意然としてやつて來た。彼はその使命に、つけられるだけ侮辱の苦い味をつけて來た。私は一言も口を利かないで、しかし胸苦しい思ひを抱いて去つた。この愛すべき婦人に別れると云ふことよりも、あんな野蠻な良人の犧牲にして置くと云ふことが辛かつたのである。固より彼が、その妻をして不貞ならしめざるよう心掛けるのは當然の事だ。しかし、いくらその氏を云ひ育を云ふも、伊太利の婦人は伊太利の婦人だ、——感じ易くて執念深い。思ふに彼は彼女に對して、自分の恐れる災厄を、招致するのに最も適したやうな、まづい手段を取つたのである。

私の初めての戀物語は、先づ〳〵かうして結末となつた。私はバジル家の前を往きつもどりつして、せめては、私の心が絶間なく渴望するその顏をもう一度見ようと思つた。しかし私の目にとまつたのは、その良人と、張番をしてゐる番頭だけで、彼は私の姿を認めるや否や、その尺度を振りあげて、誘寄せると云ふよりも、もつと判然した合圖を示した。そんなにまで待伏されてゐると分つては、私も元氣がなくなつて、それつきり行かなくなつた。そこで私は、せめて彼女が紹介してくれた、僧侶を訪ねて見ようと思つた。殘念な事にはその名を知らない。もしや會ふかと、幾度も幾度もお寺の近所をぶらついて見たが駄目だつた。遂に他の事件が起つて、バジル夫人に對する樂しい追憶を驅逐した。そして、幾許もなく私は、全然彼女を忘れてしまひ、從前通りの初心者、世間知らずでありながら、美しい女を見て肉感を動かすなぞと云ふことが、一度もないと云ふやうになつた。

兎もあれ、彼女の心遣ひが私の身のまはりをいくらか見直すやうにして呉れた。もつともそれはどこまでも氣をつけた、行き屆いた婦人のやり方で、見てくれよりも着心地のよいのを先きにし、着飾らせると云ふよりも、不自由をさせないと云ふのを主にしたものだ。ジュネエヴから持つて來た着物は、まだ〳〵着られた。彼女は只だ帽子一つとリンネルの幾枚かを呉れたに過ぎない。私にはカフスが一つもなかつた。大分それを欲しがつたけれど、彼女は呉れようとしなかつた。彼女は私を身綺麗にさせて置くだけで滿足したのだ。けれども、私が彼女の前にゐる限り、さうした心遣ひはしなくともの事だつた。

この悲しい結末の後二三日經つてから、前にも述べた通り、優しくしてくれた宿屋の主婦は、私の行きどころが出來さうだと云ふこと、或る貴婦人が私に會ひたがつてゐると云ふことを語つた。さう聞くと直ぐに私は、非常な大事業にでも差掛つてゐるやうに考へた。いつもの辯なのである。ところが今度のは、思つたほどに華々しいものでなか

つた。私を連れて行つた召使の者が、私の事をその貴婦人に話してくれた。彼女は私の物言ひ振りをも見、樣子をも見た。そして氣に入らないこともなかつたので、即座に置いて貰ふ事に極つたけれど、寵者と云ふわけでは固よりなく、只だの從僕たるに止まつた。他の從僕と同じ色の着物を着せられたけれど、私の肩に彼等のもつてゐる組糸のないだけが、違つてゐた。そして飾紐の附いてない制服は、街の職人の服裝に近かつた。輝かしい私の希望を悉く葬り去つた、意外の末路はこれだつた。

私が奉公することになつたド・ヴェルセルリイ伯爵夫人は子供のない後家さんで、その良人はピエモンの人だつた。私は始終彼女をサヴォア人であらうと思つてゐた。ピエモンの女が、あんなにうまく抑揚の正しい佛蘭西語を話さうとは、考へられなかつたからである。中年の、上品な容貌の婦人で、立派な教育があり、佛蘭西文學を愛し、またそれに通じてゐた。筆まめな人で、佛蘭西語でばかり書いてゐた。その手紙には立派な樣式が出來てゐて、ド・セヴィニェ夫人に讓らないほどの品位もあつた。どうかすると取違へないとも限らない。餘りいやでもない、私の主な用向は、彼女の口授を筆記して行くことだつた。彼女は胸部の癌腫をわづらつてゐて、自身筆を執ることが出來なかつたからである。

ド・ヴェルセルリイ夫人は、當に才分の豐かな人であつたのみならず、高尚な、强烈な精神をも有つてゐた。私は最後まで彼女の病に侍した。私の見た彼女は、病苦の前に、死の前に、何等の弱味をも見せず、何等の不自然な矯飾をも示さなかつた。少しもその婦人らしい性質を失はなかつた。又この場合に、哲學が入用なものと考へなかつた。——哲學と云ふ言葉は、その頃まだ流行してゐなかつた。そして彼女は、今日の如き意味で謂ふ、哲學なるものを知らないでゐたのだ。この强烈な性格は往々にして無情に近かつた。彼女は常に、自分自身にも他人にも、冷淡なやうに思はれた。不幸な者の世話をするのでも、可哀相に思つたからと云ふよりも、爲すべき事を爲すと云ふ樣子であつた。私が側にゐた三月の間にも、この冷淡な性質を私はだいぶ見たものだ。多少の見所があつて、彼女の側に置かれてゐる靑年に、どれだけか好意をもつてやると云ふのは、愈々死ぬものと覺悟をした時、後々の援助や支持を考へて置いてやるのは、彼女の立場として當然の措置であつたらう。それにもかゝはらず彼女は、私の爲めに何一つして吳れなかつた。彼女が私を特別の注意に値しないものと思つた故か、それとも亦、彼女の側にくつゝいてゐた人達が、自分達の事ばかり考へさせたからなのか。

しかしながら私は、彼女が私を知らうと云ふ好奇心を有

つてゐたことを十分に記憶する。彼女は折々私に質問をむけた。私がド・ヴレンス夫人への手紙を見せて、私の胸中を漏らしたときは、それが彼女を樂ませた。けれども、彼女は私の祕密を十分に打ち明けさせようとしなかつた。そして自分の祕密も一向に打明けなかつた。私の心は、同じ心があると思ふや否やゝ、洪水のやうに溢れて出る。私の答に賛成するとも非難するとも見當のつかない、乾燥した冷淡な質問では、私の心が本氣にならない。自分のお喋りが氣に入るか、氣に入らないかも分らねば、私は始終不安の氣持で、思つた事を言はうとするよりも、損の行く事を口にすまいと思ふに忙しい。後になつて氣附いた事だが、かうした素氣ない探りの入れ方は、分別を鼻にかける婦人等の常套手段と云ひたいのである。彼女等は自分の感情を包んで置くのが、他人の感情を洞察する上に良法であると考へてゐる。これで以て、それを打ち明ける勇氣をなくさせてしまふことに氣が附かぬ。きかれる方の人は、それだけでもう警戒し出す。そして、同情されてゐるのでなく、たゞお喋りをさせられてゐるのだと思ふとき、彼は虛言をつくか、默つてしまふか、或は一層用心をするかする。そして、好奇心の玩弄物になるよりも、馬鹿者になる方がましだと思ふ。要するに、他人の心を讀まうとする場合、自分の心を包み隱すと云ふことより拙劣な方法はないものだ。

ド・ヴェルセルリイ夫人は私に對して、溫情や憐憫や親切を表はすやうな、只だの一言をも漏らさなかつた。彼女は冷かに訊き、私は遠慮深く彼女に答へた。私の答へが餘りに遠慮深いので、彼女はそれをつまらなく思ひ、退屈せざるを得なかつた。遂に彼女は質問をしなくなり、用向の事しか口を利かなくなつた。彼女は私の實質よりも、自分の拵へ上げた形で私を批判した。そして私は、從僕としてのみ見られた故に、それ以上人物を上げるわけには行かなかつたのである。

私は、私の全生涯をいぢめ通した利己心と云ふものゝ惡戲を、既にその頃から經驗し、それから生じた見せかけの制度をたまらなくいやに思つた。ド・ヴェルセルリイ夫人は子供がないので、いつも缺かさず御機嫌を伺ひにやつて來る、甥のラ・ロック伯と云ふのに遺產が渡るのだ。彼の外にも重立つた奉公人共は、彼女の臨終の遠くないのを見て取つて、我も〳〵とつめかけたので、彼女をして私の事を思はせる暇がなかつた。家事上萬端の指圖をしてゐるのは、ロレンチイ氏と云ふ如才のない男で、それに輪をかけたやうな細君は、うまく夫人に取り入つて、奉公人と云ふよりも、友達に近いやうな地位を占めてゐた。彼女は姪のポンタルと云ふ少女を仲働きに上げた。それがまた拔け目のない奴で、侍女のやうに振舞つて、伯母と共にすつかり夫人

を籠絡した結果、夫人は唯だ彼等の目で見、彼等の手で行ふに止まつた。私は不幸にもこの三人の氣に入るものを有つてゐなかつた。彼等の命令を聽くだけで、爲めになるようにとはしなかつた。我々共同の主人に仕へる以上、奉公人の奉公人とならなければならぬとは思はなかつたのである。そして、私は彼等にとつて面倒な人間だつた。彼等は私が適處に置かれてゐないことを見て取つた。そして、主人が同樣にそれに氣附いて、適處に置かうとするならば、自分達の配當を狹められるであらうと氣遣つた。かうした我利々々の連中は、他人に渡る遺産を見る度に、自分の財産を削られたやうに思ふものである。そこで彼等は心を合せて、私を主人から遠ざけようとした。彼女は好んで手紙を書いた。それが病中の樂しみであつたのだ。彼等はそれを面倒がつて、病氣に障ると云ふ口實の下に、醫者の口をかりてやめさせた。私を役に立たないと云ひたて、、輜夫見たやうな二人の男を彼女の側へ連れて來た。一口に云ふと、彼女が遺言狀を拵へるまで八日間と云ふもの、私を這入らせないようにしたものだ。それから後には、前のやうに這入つて行くのを許された。そして誰よりも屢々這入つて行つた。なぜと云つてこの憐れなる婦人の苦しみが私の心を惱ましたからである。その苦しみに對する彼女の忍耐力は、非常に尊むべきもの、敬ふべきものに思はれた。そして私は、彼女の室で、彼女も他一人も氣附かなかつたが、眞心からの涙を流した。

我々は遂に彼女を失つた。私は彼女の息を引取るのを見た。彼女の生涯が才氣あり、識見ある婦人の生涯であつたなら、その死はまた哲人の死とでも云ふべきであつた。私はかの加特力教徒の本分を、等閑にもせず、衒ひもしなかつた、平靜なる彼女の心によつて、その加特力をしたはしきものと思はせられた。生れつき彼女は眞面目であつた。病氣の終りに近くなつては、矯飾せられるには落着き過ぎた、一種の晴やかな氣持を生じて來た。それはその境遇の痛ましさを理性が抑へつけようとしたものに外ならなかつた。彼女はたゞ最終の二日だけ床に就き、床に就いてからも、靜かに皆と話をし續けた。愈々もう話も出來なくなつて、面前に死を見ると云ふときに、ほつと一といき息を吐いた。「嬉しい。」と寢返り打つて彼女は言つた、「息の出る中はまだ死なぬ。」これが最終の言葉であつた。

彼女は下級の從僕共に、一年分の給料だけ遺してやつた。しかし私は奉公人の名簿に記入されてゐなかつたので、何一つ貰へなかつた。それでもラ・ロック伯は三十リイヴルを私に拂はせた。そして私の着てゐた新しい平常服を、ロレンチイ氏が取り上げようとしてゐたのを私に與れた。その上彼は私の爲めに、口を捜してやると約束し、彼のところ

へ會ひに行くのを許してくれた。私は、二三度訪ねたけれど、話をすることが出來なかつた。わけもなく力を落す私の事故、それつきり訪ねもしなかつた。それが私の失錯であつたのは、まもなくお解りになるだらう。

ド・ヴェルセルリイ夫人の處に滯在中の、記述すべき出來事が是だけであつたなら——。表面上の地位こそ同じでも、私は彼女の家へ這入つた時と、別の人間になつてそこを出たのだ。罪惡の打消し難き回想を懷いて、悔恨の堪へがたき重荷を脊負つてそこを出たのだ。その重荷は四十年の後までも私の良心を離れなかつた。その苛責は減少するよりも、年と共にいよ〳〵增して來た。たかゞ知れた子供の過ちに、斯くも恐ろしい結果が來ようとは誰が信じて呉れようぞ。かうした結果に對しては、人には信じられないほどではあるが、私の心はどうしても慰められないのである。私よりもずつと價値のある、愛すべく敬すべき純眞な一人の少女を、屈辱と窮乏との中に葬り去つたのは、思ふに私の責任である。

家政の革命に際しては、必ず何かの紛糾が起つたり、いろ〳〵の品物がなくなつたりするものだ。ところが奉公人一同の忠實と、ロレンチイ夫婦の用心とで、財産目錄の、何一つ見えなくなつた物もない。たゞボンタル孃が、小さなもう古くなつた白と薔薇色とのリボンを一つ失つた。種種の他の善い物にも私の手は屆いた。しかしこのリボンだけが欲しかつた。私はそれを盜んだ。そしてうまく隱して置かなかつた故、間もなく私は見附かつた。どこで手に入れたかと問ひたゞされた。私は間誤ついて、口籠つて、遂に顏を赤らめながら、マリオンが呉れたと言ふ。マリオンはモオル人の血を承けた若い娘で、ド・ヴェルセルリイ夫人が食卓の樂みを斷念して、手のこんだラグウよりも上等のスウプが入用になつて、それまでの料理番を出したとき、そのあとへ來たものである。啻に目鼻立が整つてゐるだけでなく、山の中でゞもなければ見られないやうな生々とした顏色を有つてゐた。又特に、一度見た人には誰にでもなつかしがられるやうな、貞淑な樣子を備へてゐた。その上人の好い、氣の附く女で、正直一方に出來てゐた。それ故に、私が彼女の名を擧げたとき、皆の者は驚かされた。私とても彼女に劣らないだけの信用があつたので、どちらが泥棒かと云ふことを、決定しないでは濟まされなかつた。そこで彼女が呼び附けられることになる。寄り集まつた大勢の中には、ラ・ロック伯もゐたのである。さて彼女がやつて來る。リボンが目の前につきつけられる。大膽に私は彼女を彈劾する。彼女は當惑して、口をつぐんで、惡魔でも動かされさうな眼付を私に投げた。しかしながら殘忍な私の心には何の手答をも見出さぬ。彼女は遂に知らないと云

ふことを、きつぱりと、しかし徐かに言ひ放つ。私の方へ振り向いて私を諫める。よく考へて見てくれと、私に對して、どうもしない潔白な少女を、凌辱せぬようにしてくれと。そして私は、鬼のやうな厚かましさで、自分の申立を頑張つて、彼女がそのリボンを奥れたと云ふことを、彼女の面前に主張した。可憐なる少女は遂に泣き出した。しかしこれだけを私に言つた、「まあ、ルソオさん。私はあなたをそんな人だとは思ひませんでした。あなたは私を非道い目に遭はせます。しかし、私はあなたの眞似をしますまい。」これが總てであつた。彼女は更に言葉をついで、決然としてまた率直に辯解をしたけれど、私を讒謗するやうな事は一つもしなかつた。この落着いた態度が、せき込んだ私の調子に對して損をした。一方にかうした、惡魔のやうなあつかましさがあり、他の一方にかうした、天使のやうなやさしさがあらうとは、想像に及ばない事である。はつきりした事は判らなかつたやうだが、臆斷は私に有利であつた。場合が場合でもあるし、事件の眞相をつきとめるだけの暇がなかつた。そこで、ラ・ロック伯は、我々二人に暇を出し、罪あるものゝ良心が、罪なきものゝ爲めに復讐するだらうと、さう言ふだけで我慢した。彼の豫言は無意味でなかつた。それが私の身の上に、一日と雖も實現せられなかつたことはない。

私はその後、私の讒誣の犧牲者が、どうなつたかを知らない。しかし、再び、たやすく善い地位を見出し得たとは思はれぬ。事毎に彼女の名譽を傷つける、彈劾が附き纏うたに違ひない。竊盜したのは極くつまらない品物だが、兎に角竊盜に相違なかつた。それよりもいけないのは、若い者の墮落の動機となつたことである。虚言と强情とがいろいろの惡名をその者に負はせて、その希望を悉く奪つたからである。私は決して彼女の窮境を、私の爲めに彼女の陷つた、最大の危險とは思はない。寃枉にもとづく落膽が、うら若い彼女をどこへ連れて行つたらう。不仕合せにしたと云ふだけの悔恨が、既に堪へがたいものであるとするならば、私よりも惡い者にしてしまつたと思ふのはどんなであらう。

この痛ましき追憶は、折々私を惱まして、非常に私を苦めて、寢附かれぬ夜の私の床へ、昨日のことでゞもあつたかのやうに、私の罪を責めに來るやうだ。無事に暮してゐるうちはそれほどにも苦しめなかつたが、恐ろしい患難の眞中に於いて、自らを潔白と思ふ、甘い慰めを取上げる。私が何かの作中に述べて置いたと思ふこと、即ち悔恨が得意の時にはぢつとしてゐて、失意の時にあばれ出すと云ふことを、深く深く思はせる。それでも私は、友人の前に打ち明けて胸を輕くすると云ふことが出來なかつた。どんなに親

密な間柄でも、ド・ワレンス夫人に對しても、竟に私はなし得なかつた。私のなし得た精一杯は自ら責むべきことをしたと云ふ告白たるに止まつて、それが何事であるかを言つたことはない。さればこの重荷は、今日に至るまで輕くならないで、私の良心を抑へてゐた。そして私は、多少でもそれを取り除かうと云ふ願望が、私をしてこの『懺悔錄』を書かしむる上に、與つて大に力のあつたことゝ言つてもよいのだ。

私は先程の記述に於て、包まず眞實を打ち明けた。その場合私が、自分の犯罪を修飾したとは、定めし誰も思ふまい。しかしながら若しも私が、内部の心持をも說明せぬならば、事實を以て自らを辯解するを憚るやうであるならば、本書の目的を遂行したとは云へないだらう。私は何もあの時だけ、特別に惡氣があつたわけでない。私があの憐れなる少女を彈劾したのは——變なやうだが事實である——彼女に對する親愛の情が、その事の原因をなしてゐるのだ。彼女は丁度私の考への中に這入つてゐた。私はたゞ、思ひ浮んだ最初のものに、自分の責任を塗附けたのだ。自分のしようと思つたことを、あのリボンをやらうと思つたことを、彼女がしたと言ひ立てた。それから彼女が出て來たときは、胸の張りさける思ひであつた。けれども、大勢居合はすと云ふことが、私の悔悟を押しのけた。處罰はむしろ恐れなかつた。恐れたのは一に恥辱であつた。しかもそれを死ぬよりも、犯罪よりも、世上の何物よりも私は恐れた。私は地の底へ落込んで、息がつまつてしまひたいと思つた。打克ちがたき恥辱の念が一切のものを征服した。私を鐵面皮にしたものは、この一念の外に何もない。自分の立場が危くなれば危くなるほど、服罪しなければならぬと云ふ心配が、いよ／＼私を厚顏にした。服罪してしまつてまのあたり、竊盜として、虚言者として、讒誣者として宣告されると云ふ考へだけが、私の心に充ちてゐた。狼狽しきつた私の胸には、他の感情がゐられなかつた。幸にもし、もう少し落着かせてくれたなら、私はきつと總てを白狀したに違ひない。ド・ラ・ロック氏が味方をしてくれて、「罪のない者を、可哀相な目に遭はすな。果してお前がしたのなら、さうだと私に言ふがよい。」と、言つてくれたなら、私はその場で、彼の足下に身を投げたであらう。——きつとさうしたと私は思ふ。けれども私は鬪まされなければならない時に寧ろ脅かされた。それにあれ位の年頃では、それだけの手加減もあるべきだつた。その時分私は、やつと子供でなくなつてゐた。或はまだ／＼子供であつたのだ。若い中の邪惡は大人になつてからのより恐ろしい。けれども、薄弱に原因する罪ならば、それほど恐るゝに足りないものだ。そして私の過ちは、全くそれに外ならなかつた。それ故に、右の追憶も、

過ちの結果に關して私を惱ますほどに、過ちその物に關して私を惱まさぬ。そして、それは私の殘生を終始して、犯罪になりさうな行爲の前に、いつも私を護つて呉れた。私の唯一の犯罪が殘した、恐ろしい印象のお蔭であつた。そして、虚言に對する私の憎惡は、自分があんなひどい罪を犯したと云ふ、悔恨に基くところ少くなかつた。若しこれが、自分の敢へて希望するごとく、賠償し得られる罪惡ならば、晩年に近く私を襲うた、色々の不幸なる事件に依つて、難境の中に誠實と正直とを維持して行つた、四十年の生活に依つて賠償されねばならぬ。憐れなるマリオンの復讐者は、隨分と世の中にあつたので、私の加へた損傷がいかばかり大きいものであらうとも、私はあの罪障を脊負つたまゝ、未來の世へ行くのだとは思はない。この題目に就いて、言はうと思つたのはこれだけだ。二度ともう、話さないでいいことにして貰ひたい。

（三）

私はド・ヴェルセルリイ夫人の家を、まづ〳〵やつて來た時と同樣の身の上になつて去り、以前の宿へ歸つたが、そこに五六週間を過してゐると、健康の爲めに、若さの爲めに、何もせずにゐる爲めに、屢々遺瀨ないやうな氣持になつた。私はそは〳〵したり、ぼんやりしたり、深く考へ込んだりした。泣いたり、歎息を吐いたりした。自分の思ひも及ばない、しかし明かに、それが自分に缺けてゐることを感ずるやうな、一の幸福にあこがれた。その狀態は一寸筆紙に盡されぬ。又たゞ少數の人々だけが想見するを得るものだ。なぜと云つて大抵の人々は、願望の沸き立つ中に享樂の豫感を與ふるところの、この苦く且つ甘き生命の充實をせきとめてしまつたからである。熟くなつた私の血は、絶間なく私の頭を少女と婦人とで一杯にしてゐた。けれども事實どうしていゝか知らない爲めに、私は從前の癖をその儘で、空想の材料にのみ彼等を使つた。その上の使ひ方を知らなかつたのである。そしてこの異性と云ふ觀念が遣瀨なく官能を刺戟した。仕合せと私は、それから脱れる道を敎はらなかつた。僅か十五分の間でも、ゴトン孃のやうな女に會へるなら、喜んで命を投出さうとまでに思つたけれど、それはもう子供らしい戯れに、あれほど自らを忘れるやうな時代を過きてゐた。良心の苛責に伴ふ慚愧の情が年と共に現はれた。それが生來の內氣を高めて、打克ちがたいものにした。そして、その時分もそれより後も、相手の婦人がさきへ踏み出さない限り、かつて私は自分から、淫猥な提言をしたことがない。先方が二の足を踏むやうなことは、決してないと解つてゐても、十中の八九まで、言

ふなりになるだらうと思つたときも、尙ほ且つ私はさうだつた。

私の昂奮が高まつて來た結果、私は自分の願望を滿足させることが出來ない爲めに、甚だ奇怪なる手段で以て、いよ〳〵それを刺戟した。私は微暗い列樹路や、奥まつた場所などを搜して行つて、その恰好で女性に接したいと願つたやうな恰好をして、遠くから彼女等に自らを示した。彼女等が見ることの出來たのは、何等の淫猥なものでなく、——曾つてさう思つたことはない——寧ろ滑稽なものだつた。それを彼女等の目に觸れさせると云ふ、私の馬鹿な樂みは、何とも說明のつかないものだ。渴望されたる交涉に與るのも、僅かに一歩をあましたばかりである。それを待受ける勇氣が私にあつたなら、通りすがりにその樂みを與へてくれた者のあることを疑はぬ。この愚かなる振舞は私に、まるで滑稽な、しかし少々不愉快な結末を來した。

或る日私は庭の奥の井戸のあるところへやつて來た。その井戸へその家の少女共が、折々水を汲みに來たものである。この庭の奥には小さな坂があつて、幾つもの窖へ續いてゐる。私は暗がりに窖の中を探つて見た。そしてそれが長く且つ暗澹としてゐるので、私はそれが果てがないやうに思ひ、自分の人に見附かつたとき、安全な避難所にならうと考へた。これを力に私は、井戸へ來た少女共に、誘惑的と云ふよりも、滑稽な一幕を演じて見せた。賢い少女共は見ない風をした。他の者等はくつ〳〵と笑ひ出した。愚弄はれると思つて騷ぎ立つたものもある。私は避難所へ逃げ込んだ。そしてあとから追駈けられた。意外にも男の聲が聞えたので、私は心配になつて來た。窖の中へだん〳〵と深く入り込んで、道を失はうとする危險に迫つた。騷々しい物音が、人聲が、男の聲が、絶えず追うて來た。私は暗闇を突拔けて、明るいところへ出てしまつた。身慄ひして、尙ほ深く進んで行つた。障壁が私を食ひとめた。そしてその上進むことが出來ないので、運命を待つより外はなかつた。間もなく私は、長い上髭の、嚴めしい帽子をかぶつた大きな男につかまつた。長い劍をぶらさげた彼の背後には、各自一本づゝの箒を持つた、年の行つた四五人の女が隨いてゐる。その中に、私を密告した小娘の姿も見えた。私の顏を見に出たものらしい。

劍をぶら下げた男が私の腕をつかまへた時、彼は荒々しく、何をしたかと私に問うた。その答がすぐに出なかつたのは想像出來よう。私はそれでも氣を落着けた。そしてこの危險な時に當つて、あらゆる精神力を集中しながら、小說的の物語を工夫した。それがまた、成功を收めたのである。私は彼に歎願するやうな調子で言つた、——私の年齡や、私の境遇に同情して貰ひたいと云ふことを、私が外國

の名門に生れた青年で、精神に異狀があると云ふことを、皆の者が監禁しようとする故に、家を拔出したと云ふことを、彼が無理に私を檢べようとした爲めに、路を失つたと云ふことを、並びに若し彼が釋してくれるなら、その內きつと御禮をするだらうと云ふことを。私の話振りと樣子とが、總ての期待と反對の印象を生じて呉れた。恐ろしい男はそれに動かされて、少しばかり叱責しただけで、その上深く問ひ糺すこともなく私を釋した。私の立去るのを見送つた例の小娘や、年の行つた女共の顏付から考へると、私があんなにまで恐れた男は、大に爲めになつたものである。又もし、あの女共ばかりであつたなら、あゝやすゝと脫れることは出來なかつたに違ひない。何故だか彼女等は頻りにぶつゝと言つてゐたけれど、私は格別心に掛けなかつた。あの男とあの男の劍とさへ出なければ、敏捷な血氣壯な私の事とて、彼等の棒切や彼女等自身を遁れるくらゐは、何でもなかつたからである。

一日晩く、近所の若い僧侶と、街中を歩いてゐた時に、劍をぶらさげた男が、突然私の眞前に突つ立つた。彼は私を認めて、からかふやうな調子で、私を眞似ながら私に言つた、「私は公子だ、私は公子だ、その癖下司だ。殿下が二度と來られぬように。」彼はその上に何にも加へなかつた。そして私は頭を垂れて、巧みに彼をはづしたが、心中神樣に彼の沈默に對して感謝した。私の見たところでは、あの憎い女共は彼の輕信を笑つたやうだ。何は兎もあれ、純粹のピエモン人ながら、彼は善良な人間で、彼を思ひ出す度毎に感謝の念を起さない事はない。何故なら、實は、唯人を笑はせたいばかりにやつたことなので、さうでなく考へられるなら、私は非常に迷惑するのであつた。右の冒險は、私が恐れなければならない結果を、招致することのないやうに、長い間私を細心にした。

ド・ヴェルセルリイ夫人の許に滯在中、二三の知り合が私に出來た。それを私は利益になるかも知れないと思つて交はり續けて行つた。中にも私はメラレエド伯爵家の家庭教師で、ゲエムと云ふサヴォア生れの僧侶を折々訪ねた。彼はまだ年も若く交際も廣くなかつたけれど、健全で、正直で、聰明で、私のこれ迄附合つた人間の中最も品性の高い一人であつた。私の期待したものは彼になかつた。彼の勢力はまだ、私の爲めに職業を拵へて呉れるに足りなかつた。その代り私は、私の生涯を通じて利益した、より貴重なる資財を彼に見出した。眞正なる道德上の訓誡を、健全なる理性の指導を見出した。私の性癖や觀念は上り過ぎたり下り過ぎたりするのが常で、アヒレウスになつたり、テルシテエスになつたり、勇者になつたかと思へば、無能漢になつた。ゲエム氏は置くべきところへ私を置いて、用捨するこ

ともなく、失望させることもなく、私自らを見させようとするのに骨折つた。彼は私の性格や才能を、大に認めたけれど、尙ほそれに加へて言つた、――その中から厄介な物も出來て來て、それを利用するのを妨げる、それ故にそれ等のものは、私に幸福への階段を上らせるよりも、幸福なしにやつて行かせるのであると。彼は私が唯だ、間違つた觀念しか有たなかつたところの、人間生活の眞の形を描いて見せた。賢い人は逆境にあつても好運を追求し、風向きの惡い時にも漕ぐ手を止めないと云ふことを、智慮のない處には眞正の幸福がないと云ふことを、また智慮は如何なる境遇にゐても入用であると云ふことを示した。外觀の壯大に對する私の歎賞を、少からず減殺して呉れて、他人を支配する者が、支配される者よりも賢くなく、幸福でないことを敎へて呉れた。彼の言つた言葉を私は、その後度々考へた。卽ち彼はかう言つた、各人皆他人の心を讀むことが出來たなら、今よりも遙かに多くの人が、昇るより降るを願ふであらうと。事實の眞相を穿つた、何等の誇張なきこの觀察は、私の生涯を通じて、自分の天命を樂ませる上に、大に役立つたものである。私の誇大な空想が極端にのみ見てゐたところの、正直と云ふものゝ本當の觀念を、始めて彼は與へて呉れた。彼は崇高なる德操の感激が、社會上それほどの役に立たないことを知らせた。餘りに羽を延し過ぎる者は、落ち易いと云ふことを知らせた。些細な義務を缺かさず盡して行くと云ふのには、總ての豪壯な行動よりもより多くの力がいると云ふことを知らせた。又それが我々の名譽や幸福を獲る上に、遙かに有効であると云ふことを、並びに人間をいつも尊敬してゐる方が、折々歎賞するよりも、どんなにましだか分らないと云ふことを知らせた。

人間の義務を確立する爲めには、その根本になる所のものに溯つて見なければならぬ。その上私の取つた進路は、私を現在の境遇に置いたあの進路は、自から我々を導いて、宗敎を談ずるに至らしめた。正直なるゲエム氏が、少くとも大部分に於て、私の書いた『サヴォアの司祭』のモデルである事は、すぐに分るであらうと思ふ。彼をして一層控目に語らしめた細心だけが、或る點に關して打ち明け方の足りないところを彼に殘した。けれども他の點に關しては、彼の主義や、彼の意向や、彼の見解や、皆同じで、鄕里へ歸れと云ふその忠告に至るまで、すつかりもう、その後私が公にしたと寸分違はないものだつた。その內容の誰にでも知れるやうな對話に深入りするのは止めにして、私は唯だ言はうと思ふ、彼の思慮深い敎訓は、始めの內効果もなかつたが、心の中に於て道德宗敎の萠芽となり、いつまでも枯れないでゐたと云ふことを。またその實を結ぶ爲め、

より愛らしき手の培養をのみ待つたと云ふことを。

その時分私の改心は、本當の改心とも言ひ難かつたけれど、兎に角私は動かされた。私は彼の談話を面倒臭がるどころでなく、寧ろその明快なのと、簡易なのと、また特に全體に漲る溫情のあるとによつて、快いものにそれを思つた。私は元來人懷こい性分で、實際に善くして呉れた人よりも、善くしようと思つて呉れる人に愛着した。又それに就いて、私の判斷にあやまられたことは滅多にない。それゆゑ私はゲエム氏を眞實愛した。謂はゞ彼の第二の弟子だつた。そしてそれはその當時、私の懶惰が誘ひさうな惡事の傾向を取除く上に非常に役立つたのである。

一日私は思ひも掛けず、ラ・ロック伯から呼び寄せられた。幾度も〳〵無駄足を踏んで、一度も話すことが出來なかつた爲めに、私はいやになつて、それきり行かないでゐたのである。忘れられたか、それでなければ、惡く思はれたものと取つてゐたのである。所がそれは取違ひであつた。彼は一度ならず二度ならず、その伯母に對する私の誠意を見た人で、それを彼女に知らせもしたし、今亦私自身がもう考へなくなつた時、繰り返してそれを私に話した。彼は懇ろに私を迎へて、色々の事を言ひきかせた。その言葉によるとつまらない嬉しがらせをいはないで、彼は私の口を捜してくれたのだ。それがうまく見附かつた。彼は今、何物かになるべき道を開いてくれた。あとは私の力量一つだ。彼が周旋してくれたのは、勢力もあり名望もある家で、將來の方針を確立する上に、他の保護者はなくてよい。初めの内は前通り、只だの召使として取扱はれようけれど、何も心配する事はない。私の性情や行ひがこの身分には惜しいものだと思はれるなら決してその儘にはしないと云ふのだ。話の結末は發端がひき起した華やかな希望に對し、思ひ遣りなく矛盾をしてゐた。やれ〳〵、いつまで經つても從僕か。——いま〳〵しさに、私は腹の中でかう言つた。それでも間もなく自信がそれを一掃し去つた。いつまでもかうした身分に打遣つて置かれることを氣遣ふのには、自分の生得が不適當過ぎると思つたからである。

彼は私を女王の主馬頭で、著名なるソラアル家の家長たる、ド・グウヴォン伯のところへ連れて行つた。尊敬すべきこの老人の嚴な風采は、その待遇の溫かさを愈々痛切に思はせた。彼は熱心に私の身の上を問ひたゞし、私はそれに包まず答へた。私はラ・ロック伯に言つた、私の顏が心持のいゝ才のありさうな顏だと云ふことを。才は全くありさうに見えるが、尙ほ他のものも追々に知れようと云ふことを。それから彼は、再び私の方へ向いて言つた、「何に限らず、始めの内は大抵骨の折れるものぢや。しかしお前のはそんなでもあるまい。よく氣をつけて、皆の者の氣に入るように

にする。それだけが差當つてのお前の役目ぢや。餘の事は心配するな。こちらで世話をしてやるからの。」それから直ぐに、彼は私をその娘分なるド・ブレイユ侯爵夫人の屋敷へ連れて行つて、彼女に私を紹介し、それから彼の息子なる、ド・グウヴォンの僧院長にも紹介した。この第一歩は、好ましいものに思はれた。私はこれまでの經驗で、奉公人を抱へる場合、かうまで仰々しくするものでないくらゐのことは知つてゐた。事實私は奉公人として遇せられたものでない。私は執事と並んで食事をした。制服を着ないでもよかつた。年の若い輕卒な、ド・ファヴリア伯がその馬車の脊に私を乘らせようとしたときに、その祖父は私がどんな馬車にでも、從僕として陪乘するのを禁じてしまつた。固より私は食卓に侍して、家では給仕人のするやうな事をしたけれど、それもまづ自分の勝手からしたことで、特定の人に奉公しなければならぬと云ふのではなかつた。口授される手紙を四五本書くのと、ド・ファヴリア伯が命ずる物を折々刻るのと、その外には何の用事もなく、私は殆んど終日を心の儘に暮して行つた。何の氣も附かずにゐたこの誘惑は、たしかに危いものだつた。全くむごたらしいものだつた。なぜと云つて、かうした懶惰の生活が、それでなければ陷らないやうな不品行に、私を陷らし得たからである。

けれども、幸ひに私は陷らなかつた。ゲエム氏の教訓は私の胸に殘つてゐた。そしてその後も好んで、折々こつそり脫け出しては、また話を聞きに行つたほどである。私があしてこつそり脫け出して行くのを見た人は、そも〳〵何處へ行つたのか、見當がつかなかつたことだと思ふ。私の行爲に對して彼の加へた忠告くらゐ、合理なものはあり得なかつた。私の最初の踏出しは誠にめざましいものだつた。私の示した勤勉や、注意や、熱心は、全然一同の者の氣に入つた。ゲエム氏は、後になつて人の目に立つやうな頓挫をせぬやうに、初めの中の熱心を程々にせよと氣をつけた。「お前の最初の踏出しは、お前の上に加へられる總ての期待の標準になるであらう」と彼が言つた。「後になつて、馬力がかけられるようにすることだ。しかし、働きを少くせぬように氣を附けるがよい。」

私は唯だ私の才能を僅かに認められたばかりで、自然に與へられたより以上のものを、何一つ豫想されなかつた故に、グウヴォン伯のあの言葉にも拘らず、自分の腕を揮はして貰へさうな樣子はなかつた。さうかうしてゐる中に他の事件が持ち上り、私は殆んど忘却された。グウヴォン伯の息ブレイユ侯は、當時維納に大使をしてゐた。その宮廷に於ける意外の珍事が、家族の者に知らされて、それから二三週間と云ふもの、こちらは大騷動で、私の事を考へてくれる暇がなかつた。しかし私はそれまで私の熱心をあまり弛め

ないでゐたものだ。今や一つの事情が私の爲めにもなり、不爲めにもなつた。その事情は各種の外的放心から私を護つてくれながら、私の義務に關して、聊か放心の度を加へしめたのである。

ド・ブレイユ孃は、私と同年ぐらゐの人だつた。發育がよく、容貌は美しく、色白で、黑い髮で、髮の黑いのにかゝはらず、ブロンドの女によく見るやうな、柔かな心持を顏に有つてゐた。その心持に私の心が克ち得なかつた。若い人々に非常によく似合ふ大禮服が、彼女の秀麗な姿を示し、その胸や肩を露はし、その時分着けてゐた喪服によつて、一層きらびやかな樣子にして見せた。奉公人として、そんな事に目を留めるのは、宜しくないと言はれるだらう。全くのところ宜しくない。が、兎に角私はそれに目を留めた。そして、それに目を留めたのは私だけでない。執事と侍僕とは卓上で折々、野鄙な言葉で噂をした。それが私は堪らなくいやだつた。しかし私の頭は、忽ちに戀着してしまふほど、取逆上せてはゐなかつた。私は自分を忘れなかつた。自分の距りを保つて行つた。そして私の願望すらも解放しなかつた。私はたゞ、ド・ブレイユ孃の顏を見るのが、才氣だつた。私の野心は彼女の言葉を耳にするのが樂み限られて、一歩も權利の外へ踏み出したことがない。食事の時分はその權利を利用すべき機會をねらつた。彼女の侍僕が一寸でも椅子を離れると、直ぐに私はその背後に立つた。それでなければ私は彼女の向うに立つてゐた。彼女の目にその願望を讀まうとつとめた。彼女の皿を取換へるのを待受けた。何か云ひつけて呉れるなら、唯だの一度でも振り向いて呉れるなら、言葉をかけて呉れるなら、何を私がしなかつたらう。けれども私は、全然無視されるのを免れなかつた。彼女は私が其處にゐることさへも氣附かないでゐた。所が、食事の時折々口を利く彼女の兄弟が、一日何かの餘り有難くない事を私に言つた。それに對して私が、如才のない、氣の利いた受答へをした時に、彼女は始めて意を留めて、私の方へ振り向いた。この短い一瞥が私の胸を躍らせるのに十分であつた。翌日二度目の機會があつた。それを利用せずには置かなかつた。その日盛なる會食があつて、初めて、私の少からず驚いたのは、執事が腰に劍を佩び、頭に帽を戴いて、給仕をしたといふことだ。どうかした拍子に、武器と一緒に壁上に揭げられてゐるところの、Tel fiert qui ne tue pas と云ふ、ソラアル家の家訓が話題となつた。ピエモンの人々は概ね佛蘭西語に通曉しない爲め、この格言の中に正字學上の誤謬を見出した者がある。そして fer と言ふ言葉には ff の字がいらないと言ひ張つた。

ド・グウヴォンの老伯がそれに答へようとした時に、ゆく

りなく私の姿が目に附いた。そして、私が何も言はないで、微笑してゐるのを彼は見た。彼は早速私の考へを述べさせた。そこで私は、ff が餘分のものではなく、ferir が古い佛蘭西語で、名詞の ferus, fier（偉大なる、威嚇するところの）から來たのでなく、動詞の ferir（彼は打つ、彼は傷つく）から來たのであると云ふことを、それ故に右の格言は、「威嚇するだけで」ではなく、「打つだけで殺さない者が多い」の意味らしいと云ふことを言つた。

會衆一同私を見て、互に顏を見合せて、只だ一言をも出さなかつた。今までこんなに驚いたことはないのである。しかし、それよりも私に嬉しかつたのは、ド・ブレイユ孃の顏に滿足の樣子が歷々と見えることだつた。あゝまで高ぶつてゐた彼女が、少くとも最初のに劣らない、二度目の一瞥を私に惠んだ。それから目を彼女の祖父に振り向けて、彼の私に拂ふべき賞讃の辭を待遠しげに見えた。その辭を彼が實際に、誠に遺憾なく、誠に滿足さうに述べたので、一同口を揃へて合槌を打たうとした。これは唯だ瞬く間の事ながら、色々の點から見て悅ばしかつた。それは物事を本來の順序に復し、蹂躙せられたる功績に就て、非道の運命に復讐して呉れる、あの稀な、めづらしい場合の一つであつた。二三分經つて後ド・ブレイユ孃は、またもや私の方へ目を擧げて、極りの惡さうな、親しげな聲で、飲み物を持つて來て呉れるようにと云ひつけた。私が彼女をして待たしめなかつたことは想像出來るであらう。しかし彼女に近づいた時、ぶる〳〵戰慄をした爲めに、私は盛り過ぎた洋盃の水を、彼女の皿の上にこぼし、彼女自身の上にもこぼした。彼女の兄弟は迂濶にも、どうしてそんなに慄へるのかと訊いた。この問は私の氣を取り直さすに役立たなかつた。そしてド・ブレイユ孃は耳の根まで眞赤になつた。

この話はこれだけだ。諸君はこの場合、バジル夫人との場合の如く、また全生涯の經過の上に、私の戀の終りに於て幸福でない事を知られるであらう。ド・ブレイユ夫人の前房に控へて見たのも無駄だつた。私は彼女の娘からそれきりもう一顧の徵證をすら獲ないでしまつた。彼女は出入に見向きもしてくれず、私は私でそちらを見るのを憚つた。そして私の頓馬さ加減は、一日彼女が手袋を落して行つたとき、いきなり摑み上げて接吻したいやうなのをさうはせず、ぼんやりと立つてゐたので、喉首をしめてやりたいやうな、無骨漢の侍僕に拾はせてしまつたほどである。ド・ブレイユ夫人の氣に入らないと分つては、私は全く沮喪した。夫人は唯だに用を云ひつけて呉れないのみならず、私が御用を聞くのを斥けた。そして二度ばかり、彼女の前房に私を見出した時に、非常に冷かな調子で以て、何にも爲る事がないのかと私に訊いた。そこで私はこの好きな前房

を去らざるを得なかつた。始めはそれが辛かつたけれど、他の出來事に取りまぎれて、間もなくさうも考へないやうになつてしまつた。

ド・ブレイユ夫人の輕蔑は、舅の溫情によつて埋合はされた。舅は遂に私を認めて呉れたのだ。例の會食の後の晩、彼は半時ばかり私と話して、滿足を感じたらしく、私も非常に嬉しく思つた。この善良な老人は隨分解りの好い方であつたけれど、ド・ヴェルセルリイ夫人には及ばなかつた。その代り一層同情があつて、一層私に氣を附けて呉れた。彼は私にすゝめて、私を最眞にしてくれる、息子のド・グウヴォンの僧院長につかせた。この最眞をうまく用ゐるならば、彼の助力によつて身を立てる上に、利益にならうと云ふのであつた。翌朝直ぐに私は僧院長の處へ駈けつけた。彼は私を召使のやうに待遇しないで、煖爐の前にかけさせて、誠にやさしく問ひながら、やがて私が、色々の學問をかじつたばかりで、一つも物になつてゐないと云ふことを洞察した。特に彼は、拉丁語の知識の貧弱なのを見て、もう少し教へ込まうと企てた。毎朝彼の處へ通つて行くといふ話がきまつて、私は直ぐに翌日から始めた。斯樣に、私の生涯に於て屢々見られる、奇癖の一に基いて、本來の自分より上に出で、同時にまた下へ出た。即ち同じ家に門弟でもあり從僕でもあつた。そして奉公人の身分であるのに拘らず、王樣の子弟でもなければ就かれないやうな、立派な家柄の師匠に就いた。

ド・グウヴォンの僧院長は、家族の者から監督職に割り當てられた、若い方の息子であつた。それ故に彼は、名門の子弟が普通にやるよりも、ずつと深い學問をしなければならなかつた。シエンヌの大學へ送られて、幾年月をその地に過し、歸るとき少からざる練語癖を齎らしたので、前にド・ダンジョオの僧院長が巴里に於て占めてゐたと同樣の地位を、チュランに於て占めてゐた。神學の嫌ひな彼は、美文學の方へ心をむけた。伊太利では、教長の生涯に入らうとする人々に於て珍しくない事なのだ。彼は好んで詩を讀んだ。拉丁語や伊太利語で、可なり上手に詩を作つた。一口に言へば、彼は私の趣味を拵へ上げ、私の頭に詰込まれたがらくたに多少の整理をつけるのに、必要なだけの趣味を有つてゐた。私のお喋りが彼に私の知識を買ひ冠らせたのか、拉丁語の手解を彼が面倒がつたのか、彼は最初から隨分むづかしい物に取り掛らせた。少しばかりファイドルスの物語を讀ませて見て、いきなりヴェルギリウスへ連れ込まれたので、何が何だか分らなかつた。後になつたら知れるであらうが、幾度となく拉丁語をはじめて、どうしても物にならぬと云ふのは、蓋し私の運命であつた。それでも私は可なり熱心にやつて見た。そして僧院長が盡して呉れた親切は、今思ひ出しても感動を覺える。私は自分の勉強

の爲め、並びに彼の用を足す爲めに、朝の內大部分を彼の處で費した。もつとも彼の周りの用を足す爲めでない——それは決してしなくともよかつた——寧ろ私は、口授される物を筆記したり、寫物をしたりするのであつた。そして、祕書官としてのこの仕事が、門弟としてのそれよりも、より多く私に有利であつた。かうして私は、啻に純粹の伊太利語を學んだばかりでなく、文學に對する趣味も出來、作品に對する可なりの鑑賞力をも養つた。それは自分獨りで獲られるものでなく、また私が、自分獨りで著作を始めた時に、大に役立つたものである。

この時分こそ私が、小說的の空想を離れて、堅實に榮達の望みを抱くことの出來る時分であつた。僧院長は私が氣に入つてゐる事を誰にも隱さず、彼の父は、ド・ファヴリア伯の言ふところに依れば、私の事を王樣に話して呉れたほど、私に好意を有つてゐた。ド・ブレイユ夫人まで、これ迄の侮蔑的態度を改めた。一口に言ふと、私は家族のお氣に入りとなつて、少からず朋輩共の嫉みを受けた。彼等は私が主人の息子から教を受けると云ふ名譽をわかたれるのを知つたとき、この上長く自分達と同じ身分には止まらないものと見て取つた。

不用意に漏らされた言葉から、後でやつと考へたやうな言葉から、私に對する家の人達の見込を私が判斷し得る限りに於て、大使の職に就きたがつてゐる、また恐らくはやがて大臣の椅子をも占めたがつてゐるソラアル家にとつては、將來有爲の人才を養成し、全然その家に倚賴させながら家門の信任を得させるようにし、爲めになる事をさせるようにすると云ふのが、甚だ望ましい事であつたと思はれる。ド・グウヴォン伯のこの企圖は、立派な、分別のある、落着きのある企圖で、先見あり、大なる抱負のある紳士には全くふさはしいものだつた。が、私がその時分全範圍を見渡さなかつたと云ふ事實は措いて、それは私の頭にとつて、餘りに理窟に合ひ過ぎた、餘りに長い拘束が必要だつた。私の愚かなる功名心は冒險の途上にのみ、幸福を求めた。そして、何等の婦人も干與してゐないのを見た時に、かうした榮達の方法が、もどかしく、煩はしく、つまらなく私に思はれた。婦人が干與してゐなければ、いよ〳〵以て立派な事、確實な事と思ふべきではあるのに。婦人の助けて呉れるやうな功績は、私の上に豫定されてゐたものと、到底比較し得られないからである。

萬事がうまく進行した。私はあらゆる人から尊敬された。いや殆んど尊敬されたのだ。試驗はもう濟んでしまつた。最も望みある青年を以て家中の人から目された。未だその正當の地位に達しないけれど、どの道達するものと思はれた。けれどもその地位は人から任命せられるものでない。

全く異つた道を經て、それに行くべきものだつた。今やかの、私に固有なる特色の一つへやつて來た。それは何等の考察を加へることなく、讀者諸君の前に提供するだけで澤山なのである。

チユランには私のやうな改宗者が隨分大勢ゐたけれど、私は厭で、つひぞ誰にも會つて見ようと思はなかつた。之に反して、宗旨換をせぬ數人のジュネエヴ人とは懇意になつた。とりわけ、兎唇と綽號のついた密畫家の私の遠緣に當るミュサアル氏と云ふ人と懇意になつた。このミュサアル氏は私がド・グウヴォン伯の許に逗留してゐるのを探りあて、私の徒弟時代の同僚でバアクルといふ、今一人のジュネエヴ人を連れてやつて來た。このバアクルは誠に面白い、誠に陽氣な青年で、その口を突いて出る諧謔も、その若々しさに手傳はれて快かつた。忽ち私はバアクル氏に溺れてしまつた。しかも遂に離れることが出來ないほどに溺れてしまつた。彼はほどなくジュネエヴへ歸ることになつてゐた。それが私に取つてどんなに殘念であつたらう。私は全く堪らなく思つた。せめてはそれまでの時を、精一杯利用しようと云ふので、私は彼を離れなかつた。或は寧ろ彼は私を離れなかつた。最初は私も、勝手に外へ出て彼と遊ぶほど無分別でなかつたからである。しかし間もなく、いつも私につき纏つてゐると知れた時、彼は出入をとめられた。私はバアクルの外のあらゆるものを打忘れ、僧院長へも伯爵へも伺候せず、家から拔け出して行くほど逆上せてしまつた。譴責を受けても徹へなかつた。暇を出さうとまで嚇かされた。この威嚇が私の破滅となつた。それが私に、バアクルの道連れになり得られると思はせたからである。その後私は、旅行をすると云ふより外に、何の樂みをも、何の境遇をも、何の幸福をも考へなかつた。その場合たゞ、その旅行の言ひ盡し難い面白さをのみ私は見てゐた。その上又、旅行の終るところには、限りもなく遠方の事ながら、ド・ワレンス夫人の姿が見えた。ジュネエヴへ歸らうなぞとは夢にも思はなかつたからである。山や、野や、森や、小川や、村々が、果てしも知らず打ち續いて、常に新しい趣きを加へて私の目の前にちらついた。斯くも樂しいこの旅行は、私の生活全體に代へても惜しからず思はれた。私は前にこちらへ來た時の同じ旅行が、いかに樂しかつたかを回想して飛立つやうに感じた。獨立不羈と云ふことに伴ふ總ての面白さにかて〻加へて、同じ年頃の、同じ趣味の、同じ氣質の仲間と共に、何に累はさるゝこともなく、何に惱まさるゝこともなく、歩きたいときに歩き、休みたいときに休めるなぞは、どんなに樂みな事だらう。こんな樂みを、容易な事では實現されないやうな、實現されるかされないかも分らないやうな、功名心の犧牲にするなぞは、馬鹿々々しい

話だ。さうした功名心は、よし物になつたとしたところで、外觀の華々しい絶頂に於てさへ、眞正の悅樂の、また青年の自由の、十分間十五分間をも値しないものではないか。

この怜悧な考へに充たされて、いよ〳〵暇を出される事になるまで振舞つた。そしてそれは、實際を云ふと厄介な事だつた。或る晩外から歸つて來ると、伯爵の名で解職の事を、執事の口から云ひ渡された。それは丁度私の望むところであつた。何故と云つて私は、自分の無法なる振舞を十分に意識してゐた故に、それを辯解する爲めに、更に不義理と忘恩とを重ねた。即ちこの解職によつて、責を他人の上に歸し、止むを得ざるの行爲と云ふので、自分自身の良心を誤魔化し了せようとしたものだ。ド・ファヴリア伯からは、明朝早く、私が家を出る前に、もう一度話したいと言つて來た。そして、頭の變になつた私の事故、その申出でをも無視するかも知れないと云ふので、私が伺候したそのあとで、どれだけか私に渡される筈の金を拂ひ渡さうと執事は言つた。それはもとより正當に貰ふべき金でない。召使の身分にされなかつたので、一定の給料を割當てゝ呉れなかつたからである。

年少輕躁のド・ファヴリア伯も、この時だけは最も解りのいゝ、思ひ切つて言へば最も親切な話をして呉れ、非常にやさしい同情のある調子で、その伯父の好意や、その祖父の考へを說き聞かせた。彼は私が、自分の破滅を招く爲め、犧牲に供した總てのものを、まざ〳〵と目の前に思ひ浮べさせたそのあとで、若し私が唯だ一つの條件をさへ容れるなら、和解者にならうと云ふのであつた。その條件とは他でない。つまりあの、私を誘惑したやくざな奴と、交際をやめてしまふことなのだ。

彼自身の利害關係を、全く離れてゐることが明白なので、お先眞暗になつてゐながらも、私は老主人の溫情を身に沁みて嬉しく思つた。けれども、あの面白い旅行は、私の空想に餘りに深く根差を下して、何物もその興味を壓倒することが出來ない。私は全く正氣でなかつた。强情になり無情になつて、尊大らしく構へ込み、生意氣千萬にも答へて言つた。——一旦解職を云ひ渡されて、それにお受けをした以上、もう已に後の祭と見なければならぬ。行末どんな目に遭はうとも、同じ家から二度出されるやうな、不見識な眞似はしないと言つた。この若い人が憤然としたのに無理もない。彼は私に相應した形容詞を浴せかけ、肩をつかまへて室から押出し、あとへぴしやりと扉を閉めた。私は大勝利を獲たかのやうに、意氣揚々として立ち去つた。そして、二度目の爭ひをするのがいやさに、僧院長の所へ行つて謝辭を述べることもせず、その儘立ち去ると云ふ墮劣を敢へてした。

この場合私の妄想が如何に甚しかつたかを理解する爲めには、先づどうしても知らなければならぬ、如何ばかり私の心が極小の事件によつて熱せられ得るかを、又それを誘引する事物の觀念に、如何なる程度まで耽溺するかを――その事物が如何ばかりくだらなきものであらうとも。愚劣極る、幼稚極る、お話にならない企てが、私の氣に入りの考へに諂つて、それを實行することの不可能にあらざるを思はせた。そろ〳〵十九にもなつた若者で、將來に對するその希望を、風船球の上に繫けることが出來るとは、そもそも誰が信じよう。しかし、聞き給へ。

ド・グウヴォンの僧院長は、私の出て行く二三週間程前に、一の小さな見事なヘロンの噴水器を私に呉れた。それが嬉しくてたまらなかつた。怜悧なバアクルと私がそれを玩びながら、我々の旅行を語つてゐた時、ゆくりなくも思ひ浮んだのは、それを利用して旅行を長くすると云ふことだつた。何が珍しいと云つて、ヘロンの噴水ほど珍しいものがあらうか。この考へを基礎にして、我々の好運を夢想した。我々はそれ〴〵の村の農夫等をこの噴水器の周圍に呼び集めさへすればよかつた。さうすると、より澤山の御馳走が我々の處へ齎されるに違ひなかつた。糊口の料を儲けるのは何でもない事のやうに思はれたからである。そして人々を寄せ集めた通りがゝりの我々二人に、人々が腹一杯食はせないならば、それは正に彼等の惡意に外ならないと信じられたからである。我々は肺臓の氣息と、噴水器の水とさへあるならば、ピエモンや、サヴォアや、佛蘭西や、全世界を旅行するにも困らぬと考へて、到る處に唯だ祭禮や婚禮をのみ想像したのだ。我々はそれからそれへと果てしなく旅行の計畫を立て、先づ北の方へ道を取らうときめた。どこかでまた引留められるといふ心配よりも、アルプスを越えると云ふ樂しみからである。

これは私が惜氣もなく、保護者を棄て、教師をすてゝ全くの浮浪人となるべく、勉强を、希望を、ほゞ確實な幸福の期待を擲つたとき、出陣の始めに立てた計畫であつた。私は首府に別れを告げた。宮廷に、功名心に、虚榮心に、戀愛に、美人に、またその見込に私がそれまで導かれて來た總ての大なる冒險に別れを告げた。私は噴水器と、友人のバアクルとを携へて出で立つた。財布は輕かつたが、胸は悦びで一杯だつた。私の華々しい計畫を立所に限定したところの、この幸福な放浪生活の享樂をのみ考へながら。

この風變りの旅行は、ほゞ豫想通りの滿足を來したが、旅行その物は決してさうは行かなかつた、なぜと云つて我々の噴水器は、宿屋のお神さんや女中を一寸の間悦ばせることは悦ばせたが、立つ時は當り前に拂はせられた。しかし我々はそれほど氣にもしなかつた。金が足りなくなるまでは、この財源に依賴しようとしなかつた。不慮の出來事がその煩勞を省いて呉れた。ブラマンへ近く來て噴水器が壞れてしまつた。そしてそれが好い時に壞れた。口に出してこそ言はなかつたけれど、二人とも面倒臭くなりかけたと思つたからである。この災難が我々を前よりも一層陽氣にした。我々は呑氣にも、噴水器の見世物によつて新調出來ると夢想して、着物や靴の破れるのをも忘れてゐた事を、心からをかしく思つた。我々は出立の時同樣に元氣よく我々の旅行を續けた。しかし、だん〳〵と財布が輕くなつたので、止むを得ず目的地の方へ急いで行つた。

シャンベリイへ來て私は氣になり出した。犯した過ちが氣になるのでない。過ぎ去つた事に對して私くらゐ思ひ切りのよいものはないのだけれども、ド・ワレンス夫人が私をどう迎へて呉れるかゞ氣になり出した。彼女の家は自分の生れた家のやうに思はれてゐたからである。私は彼女にド・グウヴォン伯の處へ這入り込んだことを書き送つた。彼女は私がどんな立場にゐるかを知つた。さうして私を祝しながらも、伯爵家の人達の溫情に如何にして報ふべきかの教訓を與へた。彼女は私の幸福を、私自身の落度によつて破壞しなければ、確實なものと思つてゐた。私を見て彼女は何と言ふだらう。まさか逐ひ返されようとも思はなかつたが、私は彼女に心配をかけるのを恐れた。叱られるのを恐れた。それが私に取つて、困窮にゐるよりも辛かつた。私は默つて總ての事に堪へ、彼女を宥める爲めにあらゆる手段を盡して見ようと覺悟した。私は全世界に唯だ彼女一人を見た。彼女の機嫌を惡くしては、生きようとしても生きられなかつた。

何よりも氣掛りなのは、私の伴侶の事だつた。私は彼の待遇を彼女に賴まうと思はなかつた。そして容易に彼から脫れることが出來なかつた。私は最終の日によそ〳〵しくして別れることの用意をした。奴さんは私の心持を呑込んだ。彼はぼんやりと云ふよりも無鐵砲であつた。私は自分の輕薄なやり方が彼を怒らせると豫想した。ところが意外にも、愛するバアクルは一向に怒らなかつた。アヌシイの市に足を踏入れるや否や、「さア、君は歸つた、」と言つて、彼は私を抱擁し、私に別れを告げ、踵を返して消え去つた。その後彼に關しては、何の消息をもきかないでしまつた。我々の交際と友誼とは、六週間ばかりの事であつたけれど、その結果は私の最後にまで及ぶであらう。

ド・ワレンス夫人の家に近づいたとき、私の心臓はどんなに動悸を高めたか。足がわな〳〵と震へた。目には霧がかゝつた。私は何物をも見ず、何物をも聞かず、誰が誰だか分らなかつた。息づいて正氣に返るべく、幾度となく立ち止まらざるを得なかつた。こんなにまで私を昂奮さした

のは、必要な補助を得ることが出來ないと云ふ心配であつたか。私くらゐの年頃で、饑外をすると云ふ心配が、このやうな不安を呼び起すであらうか。否、否。私は眞實と同じ程の自尊心とを以てこれを言ふ、一生の中曾て一度も私の上に及んだ安寧や窮乏が、私の胸を寛がせたり抑へ附けたりすることはなかつた。風變りな、浮沈の著しい生涯に於て、動もすれば定職をなくし、衣食の料をなくしながらも、私は富裕と困窮とを常に同じ目で見てゐたものだ。せつば詰まれば乞食もしたらう、泥棒もしたらう、さうした身の上になるのを嘆きはしなかつた。私ほど溜息をついた者は少く、私ほど生涯に涙を流した者は少いが、貧乏も、貧乏になると云ふ心配も、唯だの一度も私の溜息を、私の涙を誘ひ得なかつた。運命の打撃に感じがなくなつて、私の魂は唯だ外形上の浮沈と別物の、眞の幸福と不幸とをのみ認めた。そして私が自分を人間の中最も不幸なものと思つたのは、總ての缺くべからざる物の十分に備はつてゐた時である。

私の妻がド・ワレンス夫人の目にとまるや否や、彼女の樣子が直ぐに私を落着かせた。その聲の最初の響が私の胸を躍らせた。私はその足下に身を投げて、前後を忘れた悦びに唇を彼女の手につけた。彼女が既に私の方の事件を聞かされてゐたかどうかは知らないけれど、その顏色に驚いたらしいところは見えず、不機嫌らしいところは尙更見えなかつた。「可哀相に、」と彼女は物柔しい調子で私に言つた。「それであなたは歸つて來たの。私もあなたにかうした旅をさせるのを早過ぎるとは知つてゐました。でもまあ、思つたほど惡い結果にならないで、ほんとに善かつた。」それから私は自分の身の上を語らせられた。手短かに、しかも飾らず語つた。二三點語り殘したばかり、その他は自分をいたはることもせず、辯解することもしなかつた。

偖て、私を何處に寢かすべきかゞ問題になつた。夫人は侍婢と評議をした。この評議の間私は息を吐くことをもしなかつた。しかしその家へ寢かされると聞いたとき、自分で自分を抑へるのが容易でなかつた。そして私の小さい荷物が宛てがはれた部屋に持込まれるのを見たときは、殆んどサン・ブルウがその馬車をド・ウォルマル夫人の車房に曳込まれるのを見た時と同じであつた。のみならず私は、この恩惠が一時のものでないと聞いて悅んだ。そして私がまるで別の事に氣を取られてゐると見えた時、私は夫人の言ふのを聞いた、「言ひたい人は、何とでも言ふがいゝわ。神樣の思召しで歸つて來たんだもの、私は見捨てないことにきめました、」と。

それから私は遂に彼女の處に落着くことゝなつた。もつともこの後を直ぐに、生涯の最も幸福なる時分として數へるものでない。寧ろその準備として役立つたと云ふに過ぎない。我々をして眞に我々の存在を樂しめる、胸中のこの敏感は、自然の賜物であり、體制の所產でもあらうと思ふけれど、なほ且つそれは發展し來るべき境遇を必要とする。このやうな偶然的動機がないならば、生れつき非常に敏感な人間も、何物をも感じないであらう。そして自分の本質を知ることなくして世を去るであらう。私はそれまでさうだつた。又若しド・ワレンス夫人を識らなかつたならば、彼女が私に吹き込んだ柔かな感情を取りかはさうとするまで彼女と一緒にゐなかつたならば、恐らくはいつ迄もさうだつたらう。私は思ひ切つて斷言する、唯だ愛をのみ感ずる人は、人生の最も甘きものを感じないのだと。激しさは及ばないだらうが、百層倍千層倍も味のいゝ、別の感情を私は知つてゐる。その感情は、時として戀愛に結び附くけれど、離れて存在することも隨分とある。この感情は單なる友情のやうなものでない。より縱な、より柔かなものである。私はそれを同性の人同志感得することの出來るものと思はない。少くとも私は、男子が友人である場合、友人であつて、しかも友人の誰からも、曾てそれを感得しなかつた。この議論は今十分に明白でないけれど、その內明白になるだらう。感情はその影響によつてのみ說明し得られるものだ。

夫人の家は古い家だつたけれど、かなり廣くて、彼女が化粧室に使ふに綺麗な一間を殘してあつたので、そこへ私は置かれることになつた。その部屋は我々が最初に會つた場所として述べた、例の通路へ張出してゐて、小川や花園の向うには田舍の景色が見渡される。この景色は年の若い私に取つて無頓着でゐられるものでない。それはボッセエ以來私の窓から見た初めての靑いものである。これ迄絕えず目に映じたのは、周圍の壁と、屋根と、灰色の通りとだけだつた。さればこの珍らしい眺望が、私の上に如何ばかり快き、樂しき影響を及ぼしたことぞ。それは少からず私の感動し易い性癖を强めた。私はこの面白い景色を親愛なる保護者の恩惠の一と考へた。彼女がわざ〳〵私の爲めに、それを置いて呉れたかのやうに思はれたのだ。私は穩かな、幸福な心持で彼女の側にゐた。いつも綠と花との間に私は彼女の姿を認めた。彼女の床しさと春の眺めとが、私の目の中に入り亂れた。それまで押し附けられてゐた私の胸は此處へ來てのんびりとした。私の歎息はこの花園へ這入つて爽かな呼吸となつた。

ド・ワレンス夫人の家にはチュランで見たやうな華かなところはなかつたが、しかも尙ほ、虛飾では得られない淸楚なところや、適宜なところや、族長的の潤澤があつた。金銀の皿小鉢が少く、磁器がなく、その豪所には獵獸がな

く、その窖には外國の酒がないけれど、其處には誰彼の差別なくもてなされるやうな、十分の貯へがしてあつた。そして彼女は土燒の茶碗で、上等の珈琲を人々にすゝめた。來たほどの人は總て皆食卓を共にするか、それでないまでも食事をさせられた。勞働者でも使の者でも、乃至は旅の者でも、飲み食ひをしないで去ることはなかつた。奉公人はフリブウル生れの小綺麗な侍婢のメルスレエと、同鄕の侍僕のクロオド・アネエ（この男に關してはあとで又話すこともあるだらう）と、料理番と、稀ではあるが、外出に用のある二人の輜夫とであつた。年額二千リイヴルくらゐで濟まさうとするには多勢過ぎる。もつとも、土地の善い金の少い處ゆゑ、僅かそれだけの金でも切り詰めてやればどうにかやれたであらう。ところが生憎と、節儉は彼女の得意な藝でない。彼女は借金を拵へて、あとから〳〵拂はせられた。金はいつも手から手へ梭のやうに飛び去つた。

家政のやり方は註文通りのものだつた。その中へ這入つて、私の滿足をしたことは想像出來よう。たつた一つ、いつまでも食卓に就いてゐるのがいやだつた。夫人はスウプや肉などの最初の匂を嗅ぐのが嫌ひで、殆んど氣が遠くなるくらゐであつた。そしてその不快が長く續いた。だんだんと元氣を囘復して來ながらも、食べることをせずにお喋りをした。半時間も經つてからやうやく食べ出した。私はその間に三遍も食べられる。彼女の食事の始まるよりも、ずつと前に私のは濟んでゐた。お附合に私はもう一度始めた。かうして私は二度食べたけれど、格別具合が悪くもなかつた。一口に云ふと、私は彼女の側に經驗する幸福の甘い感情に身を委ねた。何の氣兼ねもいらないのが、愈々その感情を甘くした。私はまだ彼女の經濟を詳しく知らなかつたので、その收入が支出の間に合ふと考へた。私はその後も彼女の家に於て、同樣の賑ひを見たけれど、その實狀を審かにし、その收入が支出よりおくれることを知つた時、同じやうな落着いた心でゐられなくなつた。豫想がいつも享樂をさまたげた。それにも拘らず、私は徒らに豫想をしただけだ。それを豫防することは、私の力に及ばなかつた。

初めからして我々の間には、最も親密なる愛着があつた。それは彼女の全生涯を通じて、同じやうに持續されたものである。「坊や」と云ふのが私の名であつた。私は彼女に、「お母さん」と呼び掛けた。そして我々は年の數が二人の距りを殆んどなくした時までも、引續き「坊や」であり「お母さん」であつた。この二つの命名は、我々の交際振りを、我々の行爲の潔白を、また特に我々相互の感情を、うまく表示してゐるやうに思ふ。彼女は、私に取つて最もやさしい母親で、自分の快樂なぞ念頭になく、私の幸福をのみ心

に掛けた。彼女に對する私の愛着に、肉感的なものがあつたとしても、なほ且つその本性を變へるものでなく、むしろそれにより高い趣きを添へたに過ぎぬ。切愛することの嬉しかつた、若い綺麗なお母さんを有つてゐると云ふ、大なる悅びに私を醉はせたに過ぎぬ。私は切愛を文字通りの意味に用ゐる。なぜと云つて、彼女は、最もやさしい母親の接吻を、切愛を、私に惜しまうとしたことがなく、私はまたそれを濫用しようとしたことがない。しかし我々はその中別の關係になつたと云ふ人もあるだらう。それはさうだけれど、待つて貰ひたい。直ぐには總ての事を話されぬ。

最初の會見の數分時が、私の經驗させられた、唯一の實際の熱情であつた。そしてそれは、主として驚愕の勞作であつた。私の目は無遠慮に彼女の頸布の下をのぞき込むことをしなかつた。包み殘されたその肉付が、隨分引寄せないものでもなかつたけれど。私は嬉しさに逆上せることもなく、願望を抱くこともなかつた。喜ばしき安息の中に、何を享樂するとも知らず、甘き享樂の中にゐた。私はかうして一瞬の間も倦怠することなく、全生涯を、永久をすら過したであらう。彼女は私に談話のつまらなさを覺えさせなかつた唯一の人である。そのつまらない談話を止めなければならないのが、拷問されるやうに辛かつた。差し向つての我々の談話は、嚴密に談話と云ふよりも、寧ろとりとめのないお喋りで、邪魔の這入るまで續いたものだ。私は話をするよりも、沈默することを強ひられなければならなかつた。彼女はその計畫に思ひ耽つて屢々茫然自失した。私はその儘にして置いて口を利かず、只だ彼女を眺めて、最も幸福なる人間であるやうに感じた。私にはもう一つ妙な癖があつた。差し向ひになつて吳れと云ふやうな顏はしないで、私は絕えず差し向ひになりたがり、それが出來れば非常に悅び、妨げられゝば狂氣の如く激した。人が這入つてくれば、男でも女でも同じ事だ、私はぶつ〳〵と言ひながら出て行つた。彼女の側で第三者となるには堪へなかつたからである。で、彼女の前房に分秒を數へながら、幾度となくこの永久の訪問者を呪つた。そして彼等にそれほど澤山の話があると云ふことを怪しんだ。自分の方により澤山の話があつたからである。

私は顏を見ないでゐる時に限つて、自分の熱情の全體を感得した。顏を見るとたゞ、滿足の感情を覺えるばかりであつた。しかし彼女がゐて吳れないと、不安の念は苦痛になつた。一緒にゐたいと思ふ心が、ともすれば涙ぐまれるやうな感動を私に與へた。いつまでも忘れることはなからう、或る大祭の日に、彼女が午後の祈禱式に列してゐた時に、私は彼女の面前で、一緒に暮したいといふ熱望で胸が一杯になり、町の外へぶら〳〵と出た。その熱望が現在に

於て無理だと云ふことは、今享けてゐるやうな幸福が、長く續かないと云ふことは、私にも見えてゐた。それが私の空想に哀愁を添へた。けれども、何等の陰鬱なところもなく、甘い希望で以て和らげられた。何時も不思議に私を動かす鐘の音や、鳥の歌や、晴やかな天氣や、好い景色や、我々共同の隱家として空想した、とび〳〵に見える山莊や、それらのものが私の上に非常に生々とした、柔かな、沈んだ、身にしみるやうな印象を齎らしたので、私はさながら恍惚とした心持になつて、憧憬の標的であるところのあらゆる幸福に到達したやうに思つた。肉體上の快樂だけは念頭に置くことなくして、何とも名狀すべからざる有頂天の悅びを獲たやうに思つた。私はこの時より力强く、この時より大なる幻想を以て未來に沒頭したことがない。そしてこの夢の實現された後それを回想したときに、最も私を驚かしたのは、事實が私の想像と寸分違はないものであつたと云ふことだ。若しも覺醒の狀態にゐる人の夢が、豫言的幻覺になつたとしたら、これはたしかにそれである。只だその時間の想像に於てのみ私は謬まつた。幾日も幾日も、幾年月も、全生涯にわたつても平和であるやうに想像されてゐたけれど、實際は、それがたゞ一瞬の間續いたに過ぎないからである。嗚呼、私の最も確實な幸福さへが、束の間の夢に過ぎなかつた。結ばれたかと思へば、直ぐに破られた。

親愛なる「お母さん」のゐない時、それを思ふ心が、私にさせたいろ〳〵の馬鹿げた擧動を、一々述べ立てたらば際限があるまい。彼女がねてゐたことを思つては、幾度私の寢臺を接吻したか。帳帷や、室內の諸道具が、彼女のものであり、彼女の綺麗な手に觸られたことを思つては、幾度それを接吻したか。床板すらも、その上を彼女の歩いたことを思つては、幾度身を投げてそれを接吻したか。時としては彼女の前でも、最も激烈な熱情だけがさせさうな、馬鹿々々しい事を私にさせた。一日食事の時、彼女が一片をその口へ入れた時、突然に私は、一筋の髮の毛がそれに着いてゐると叫んだものだ。彼女はそれを皿の上に吐き出した。私はいきなり引攫つて、自分の口へ投り込んだ。一口に云ふと、私とかの夢中になつてゐる戀人との間には、たつた一つの相違があつた。しかもそれが非常に大切な相違で、私の境遇を理性の上からは、殆んど了解しがたいものにしてゐるのである。

私は伊太利へ行つた時と、全く同じでは歸つて來なかつた。その癖、私くらゐの年頃の者が一般に變つて來るやうには變つて來なかつた。童貞の心はなくしたけれど、肉體上の純潔は保存してゐた。私は年と共に加はつて來る成熟が感ぜられた。私の不安な肉感は遂に顯はれた。そしてその

第一の、全く無意識的な發出は、私の健康に關して不安を抱かせた。その不安が何よりもよくそれまでの私の純潔を承認させる。しかし又、間もなく不安が取り除けられて、私はかの自然を枉げるやうな、私に近い若者共を、その健康や、その力や、時としてはその命を犧牲にしていろ〳〵の淫佚から保護するやうな、恐ろしい方便を會得した。內氣者や小心者が誠に便利だと思ふこの不德は、活潑な想像者にとつて、今一つの大なる妙味を有つてゐた。精しくは意の儘に女性の全體を片附けてしまふ上に、又彼等想像者が渴望してゐる如何なる美人をも、その同意を必要とする事なくして、彼等の悅樂に役立たせる上に、大なる妙味を有つてゐる。この恐ろしい便宜に誘はれて、私は自然が與へてくれたところの、また私が自分で養ひ來つたところの健康な身體を壞すのに努めた。この惡傾向の外に、私の境遇を考へて見るがよい。美人の家に宿つてゐて、その面影を心の底に抱きしめてゐた。晝間は絕えず彼女を見た。夜は彼女を想はせるやうな、色々の物に取り卷かれ、彼女自身も寢たことがあらうと思はれる床に寢た。何といふ刺戟であらう。これを想見するところの讀者諸君は、私を已に半ば死したるものとして見るかも知れない。ところが全く反對だ。私を滅ぼした筈のものが、一時の事ながら私を救つた。一緒にゐられると云ふ悅びに醉ひ、終日をその側に暮したいと云ふ熱望に醉つて、側にゐても離れてゐても、私はいつも彼女の上に、やさしき母を、なつかしき姉妹を、樂しき友人の影を見た。そして、その他のものを見なかつた。いつもさうして彼女を見た。いつも同じの彼女を見て、彼女より他のものを見なかつた。常に私の心を占めてゐる彼女の面影が、爾餘の何物をも這入らせなかつた。彼女は私に取つて、世上唯一の婦人であつた。そして彼女から吹き込まれた高雅な感情が、肉感の發動を許さなかつた故に、彼女自身からも、婦人全體からも私を保護して呉れた。一口に云ふと、私は彼女を愛したが故に純潔であつた。私が只だざつと記して置く事實によつて、私と彼女との關係が如何なるものであつたかを、如何樣にでも判斷するがよい。私自身それに就いて言ひ得るのは、これまでも已に變に見えたとしたならば、これからさき愈々變に見えるであらうと云ふことだけだ。

私はこの上もなく樂しく暮して行つた。もつとも隨分いやな仕事もやつてゐた。彼女の設計に仕上げをしたり、書附を淨書したり、領收書を寫し取つたりさせられた。更に私は藥草を選り分けたり、藥種を搗き碎いたり、蒸餾を使つたりしなければならなかつた。かう云ふ仕事の半ばにも、旅人や、乞食や、いろ〳〵の訪問者が引きも切らずやつて來た。軍人や、藥劑師や、本山の役僧や、美人や、講中の者

などゝ、同時に口を利くのであつた。私は舌打ちをしたり、ぶつ〳〵言つたり、かうした連中を呪詛したりした。かうした連中を一人殘らず惡魔に與へたのだつた。萬事を快活に觀た彼女は、反對に、胸が苦しくなるまで私の怒りを笑つた。そして私自身笑ひたくなるのを堪へることが、むづかしくなればなるほど苛立つて來るのを、彼女は愈々興がつた。一寸の間かうして、ぶつ〳〵と言ふのは面白かつた。口爭の半ばに構はず人が這入つて來ると、彼女はそれを利用して、更に新しい興を添へようとした。即ち彼女は、意地惡く客を引留めながら私の方を見返した。それに對しては全く、打つてやりたいくらゐであつた。私が禮儀の爲めに束縛されて、いま〳〵しさうに彼女へ目をくれながら、心の奧底には、やつぱり面白がつてゐると云ふ事を見て、彼女は笑はないでゐられなかつた。

これ等の事は何れも皆、本來快いものではなかつたけれども、私の好きだと思ふものに附屬してゐたので面白かつた。私の周圍に起るあらゆる出來事が、私のさせられるあらゆる事が、私の趣味には適はなかつたけれども、しかも尙ほ私の心持を惡くはさせなかつた。思ふに若し、醫術に對する私の反感が、狂亂の場を演じさせなかつたならば、私はきつと醫術を好きになつたであらう。その狂亂が我々の間に絕えず座興となつた。この技術がこの效果を來したのは、恐らく始めての事だらう。私は醫者の書物を嗅ぎ當てると言ひ張つた。そして妙にそれを誤らなかつた。彼女は私に最もいやな藥種を舐めさせた。私はそれを逃げようとしても、拒まうとしても駄目だつた。抗拒したり澁面を作つたりするに拘らず、喧嘩腰になつて齒を食ひしばつてゐるに拘らず、彼女の綺麗な膏賦つた指が、私の口に近づくのを見ると、私は遂に口を開いて、その藥種を舐めざるを得なかつた。彼女の小さな家族を擧げて、悉くその室に集まつたとき、我々が駈けたり、叫んだり、笑つたりするのを聞く者は、そこに痲醉劑やエリキシイルが調製されてゐると思ふより、寧ろそこに茶番でも演じられてゐると思つたに違ひない。

しかし私の時間は、かうした茶番にばかり費されたものでない。私の部屋に『スペクタトウル』『ブッフェンドルフ』『サン・テヴルモン』『アンリ物語』など云ふ數種の書物が見出された。私はもう從前ほどの讀書狂でもなかつたが、閑な時それを少しづゝ讀んで見た。とりわけ『スペクタトウル』は、面白くもあり、利益にもなつた。ド・グウヴォンの僧院長は、貪るやうにではなく、省慮を多くして讀むことを敎へて呉れた。その結果として、今は讀書がより多く役立つた。私は文體や、優美な句法に注意を拂ふのが常だつた。純粹の佛蘭西語と方言俗語とを區別することを稽古した。

一例を擧げれば、我々ジュネエヴ人一同の犯す正字學上の一の誤謬を次ぎに揭げる『アンリ物語』の二行の文章が正して呉れた。

Soit qu'un ancien respect pour le sang de leurs maîtres
Parlât encor pour lui dans le coeur de ees traîtres.

Parlât と云ふ言葉に目の留まつた私は、接續法の第三人稱に t の字がいることを知つた。私はそれまで直說法の過去に於けるが如く、Parla と書きもし、發音もしてゐたのである。

折々私は讀んだ物に關して「お母さん」と話した。偶には彼女の側で讀むのが非常に嬉しかつた。私はうまく讀まうとするのに骨折つた。それがまた私に役立つた。前にも言つた通り、彼女はなか〳〵敎育のある人で、それがその場合申分なく現はれた。前に數人の學問ある人達が彼女へ拜趨して御機嫌を伺つた。その人達が彼女に、優秀なる作者の物を鑑賞することを敎へたのだ。言つて見れば、彼女はやゝ新敎徒的の趣味を有つてゐた。專らベエルを口にした。佛蘭西ではとつくにもう忘れられてゐる『サン・テヴルモン』を恐ろしく尊んだ。けれども彼女は善良な文學を知つてゐて、巧みにその判斷を言ひ現はすのを妨げなかつた。立派な社會に人となつたので、若い時サヴォアへやつて來て、その地の上流と交はつたので、あの鄕里のヴォオ地方の氣取つた調子をなくすることが出來た。彼女の鄕里では、婦人達が一般に才氣と分別とを取り違へ、警句ばかり吐かうとしてゐるのだ。

彼女は宮廷をほんの一瞥したに過ぎないけれど、その一瞥が宮廷なるものゝ概念を作らせるに十分であつた。彼女はいつまでも其處に友人を有つてゐた。そして彼女の行動や負債が招致した、嫉妬や不平に拘らず、遂にその年金を失はなかつた。彼女には世上の經驗があり、それを利用するだけの分別があつた。世間的の活動は彼女の得意の話題であつた。そして私のやうな空想的の人間には、かうした敎訓が何よりも必要であつたのだ。我々は一緒にラ・ブリュイエエルを讀んだ。それが彼女には、ラ・ロシフウコオよりも面白かつた。人間を有りの儘に見ることを好ばない靑年時代に於て讀めば、とり分け陰鬱な氣乘りのしないあのラ・ロシフウコオよりも面白かつた。道德を說く時彼女は、往々にして岐路に這入り込んだ。それでも、私は折々彼女の口や、その手に接吻をして我慢した。そして彼女の長談義をうるさがらないで聞いてゐた。

この生活はいつまでも續くべく甘過ぎた。私はそれを見て取つた。その不安が享樂を妨ぐる唯一のものだつた。諸謔の間にも「お母さん」は私を研究し、觀察し、試驗して、私が御免蒙りたいと思ふやうな、色々の計畫を私の爲めに

立てゝ呉れた。仕合せと私の氣質や、趣味や、小さな才能を知つただけでは足りなかつた。それらの物を利用する機會を見出すか、作り出すかしなければならなかつた。そしてこれは一朝一夕に出來る事でなかつた。のみならず、彼女が私の才能に對して有つところの慧眼が、それを使ふべき時期をおくれしめた。彼女をして必要な方法の選擇に愈々困難を感ぜしめたからである。一口に云ふと彼女が買つてくれたので、何不足なき身分であつた。けれども、彼女の評價は幾許もなく一變せざるを得なかつた。それから以後、私の平和は影をかくしてしまつた。彼女の親類で、ド・オオボンヌ氏と云ふ人が訪ねて來た。彼はなか〳〵才のある、抜け目のない人物で、彼女と同じくいつも計畫を有つてゐた。けれども、その爲めに倒れることのない一種の山師であつた。彼はフルウリイス僧正に富籤の計畫を持出してはねつけられた。で今チユランの宮廷へ持込まうとしてゐたのだが、チユランの方では採用され實施された。彼は暫くアヌシイに逗留したが、そこで經理の夫人に想ひを掛けた。それは甚だ愛嬌のある、私の好きな、そして「お母さん」の家で私が見るのを樂みにした、それこそ唯一の婦人であつた。ド・オオボンヌ氏は私と知り合つた。ド・ワレンス夫人が私の事を彼に話した。彼は私を試驗して、何に適してゐるかを知らうとした。使ひみちがあるならば、使つてみようと思つたのである。

ド・ワレンス夫人はその後二朝か三朝か引續き、好い加減な口實を拵へて、そのもくろみを知らさないで、彼の處へ私を行かせた。彼は巧みに私の口を開かせて、打ち解けた物言ひをして、出來るだけ私を調子附かせて、色々の世間話や、樣々の問題を私と語つた。私を觀察するやうな樣子は少しも見えず、わざとらしいところは更になく、丁度私が氣に入つて、私と打寛いだ話をしたがつてでもゐるやうに思はれた。私はすつかり彼が氣に入つてしまつた。ところで彼の觀察によると、私は見掛倒しに出來てゐて、全然馬鹿でないまでも、少くとも氣の利かない少年であつた。分別のない、殆んど修養のない少年であつた。換言すれば、總ての點から見て淺薄極まるものだつた。そして、他日檀那寺の住職になれるくらゐが、關の山だらうと云ふのであつた。彼はこれをド・ワレンス夫人に向つて言つた。私がかうした判斷を受けたのは、二度目か三度目の事である。それはまた最終の事でもなかつた。マッスロン氏の判斷は幾度となく確證されたのである。

これ等の判斷の原因は、こゝに說明しないでは置かれないほどに、私の性格と關聯してゐる。なぜと云つて、實に讀者も既に感ずる如く、私は衷心からしてそれを承認することが出來ないからだ。またマッスロン氏や、ド・オオボンヌ氏や、その他の大勢の人が何を言つたにしろ、出來るだけ私心を去つても、尙ほ且つ私は彼等の言葉に服することが出來ないからだ。

他の場合ならば一緒になりさうもない二つの物が、どうしてだかは解らないが、私に於て結合した。一は燃え易い氣質、激烈な熱情である。今一は思考作用の緩漫で、いつも分別が手後になる。私の胸と頭とは、同一の身體に屬しないやうだ。感情は電光よりも早く魂に充ちる。けれどもそれは明るくしてくれる代りに、私を燃やし、私の目を眩ませる。私はあらゆる物を感得するが、如何なる物をも了解しない。徒らに昂奮するばかりで、渾沌の狀態を脫しない。思考する爲めには冷靜な血がいる。驚くべきは私が、待つてさへ貰へるならば、かなりの手練を、洞察を、狡猾をすら示し得ることだ。ゆつくりやれば、私も隨分好い詩を作る。しかし即座には、氣の利いたものを何一つ、書けもせず言へもせぬ。西班牙人の將棋もさうだと云ふが、手紙の上でならば、これでなか〳〵才氣に富んだ話も出來る。或る時は、或るサヴォアの公爵の話を讀んで、それがまるで私に似てゐるのに驚いたこともある。

感情の活潑に伴ふこのやうな思考の緩漫は、實に私が話をする時だけでなく、たつた一人でゐるときも、物を書くときもさうだつた。私が自分の考へを纏める場合の困難と云つたらない。考へはあてもなく頭の中をぐる〳〵と廻つて、酒のやうに釀されて、私を昂奮させ、激昂させ、逆上させる。その場合、私は何物をも明かに見ぬ。只だ一言をも書くことが出來ぬ。私は待つてゐなければならぬ。すると、だん〳〵にこの大なる昂奮が靜まつて、混沌が收まつて、あらゆる事物がその處を得るやうになる。しかしそれは徐ろに、長い〳〵不安を經てからの事である。諸君は曾て伊太利で歌劇を見たことがあるか。幕の變る時、舞臺の上に不愉快なかなり長く續く混雜がある。總ての裝飾がごちや〳〵になつて、そこら中をかき廻される。何もかも滅茶苦茶になりさうに思はれる。けれども、追々に物が片附いて來てきちんとすると、あの長い混雜のあとに、醉はされるやうな演劇の始まつたのを見て我々は驚かされる。ほぼ同樣の經過が、物を書かうとするときの私の頭に起るのだ。先づ、その混亂の治まるまで待つてゐて、私の目の前に現はれる、事物本來の美しさを描いたならば、私を凌駕する作者は多くなかつたであらうと思ふ。

私が物を書くのに一方ならず困難するのもこの爲めである。私のきたなく塗りつぶした、澤山の書入れをした、殆んど讀めないやうな原稿は、その骨折を示してゐる。活版所へ送る前、四五遍くらゐ書き直さないでしまつたものはない。筆を手にして、机の上の原稿紙に對へばなんにもか

けぬ。岩のはざま、森の中を逍遥しながら、或は眠られぬ夜に頭の中で私は書いた。とりわけ、物覺えの悪い、生涯に六行と纒まつた文句を記憶し得なかつた人間に取つて、その進行の如何に遲々たるものであつたかは想見されよう。私の原稿には、紙に書かれる前に五六夜くらゐ頭の中で捏ね返されたものがある。だから私には、努力を要する作物の方が、手紙なぞのやうに、手取早く書かされるものよりも向いてゐる。手紙の文章はどうしても手に入れることの出來なかつたもので、それを書かされるのは刑罰であつた。どんなにつまらない用事の場合でも、一時間を費さずして出來た手紙はない。思ひ浮ぶまゝを、その場でかゝせられるならば、始めも知れず、終りも知れぬ、ごた〳〵と長つたらしい贅言になつて、讀む人に何の事だか殆んど分るまい。

私はたゞに思想を表現する上に苦むだけでなく、それを獲得する上にも苦むのだ。私は人間に注意して來たし、世の中を見て來たかなりの觀察者であると自ら思ふ。その癖私は目睹したところの物からして、何物を洞察することも出來ぬ。私はたゞ回想する處の物を洞察するだけだ。回想に於て怜悧なだけだ。現在に於て言はれたもの、現在に於て爲されたもの、現在に於て生じたものは、何一つ心に感ぜず、何一つ洞察しない。單にその外觀のみが私の目の前に現はれる。然しあとでは、總ての物が歸つて來る。私はその時や、その處や、その聲や、その顏色や、その樣子や、一切の事象を想起して、何一つ漏らすことをせぬ。そして、人の爲たこと、言つたことから、人の考へたことを見出して來る。その場合減多に誤つたことがない。

自分獨りでゐても、かくまで自分の思考力をはたらかせかねるとしたならば、會話をする時の私を想像するがよい。會話では輕快に物を言ふ爲めに、同時に色々な多くの事をその場で考へなければならぬ。その場合私の拂ふべき、どれだけかをきつと忘れるやうな、多くの顧慮は、考へたばかりでも身體がすくむ。世間の人達は、どうして大勢の間に物を言ひ得るのか分らない。なぜと云つて、何人をも怒らせないやうに話すには、一語々々に一同を眼中に置かなければならぬ。それ〴〵の人の性格や閲歴をも知らねばならぬ。この點に於て、世間の人達は大なる便宜を有つてゐる。彼等は何に就いて沈默すべきかを、よりよく知つて居り、その言ふところのものにより多く確信を有つてゐる。それでも矢張り、往々にして失敗になることがある。ところで今天から降るやうに、さうした社會へ落込んだ人はどうしよう。彼に取つてはたゞの一分間でも、怪我なしに話せるものでない。二人差し向ひの煩はしさは尙更の事で、絶間なくお喋りをしなければならぬ。人が物を言へば返事

をしなければならず、默つてゐればこちらから口を切らなければならぬ。この堪へ難い壓迫だけで、私をして全然社交生活を遠ざからしむるに十分であつた。私に取つては、立所に、さうして立て續けに喋らなければならぬと云ふことほど辛いものはない。これが總ての束縛を蛇蝎視する、私の性情に基くや否やを知らぬ。兎もあれ、如何なる場合にも喋らなければならぬとなれば、それだけで私はもう、馬鹿な事を言はされるにきまつてゐた。

それよりも尙ほいけない事がある。何を話していゝか分らないならば、沈默を守つてゐるべきだのに、私はついむか〳〵として來て、一刻も早く債務を果したくなる。私は手當り次第に言葉を掴んで投りなげる。それが無意味であれば何よりの仕合せだ。自分の頓馬に打克たうとしたり、それを隱さうと努めた結果、それを暴露せずにすましたことはない。例を引かうと思へばいくらでもある中から、茲には唯だその一つを選んで擧げようと思ふ。それは少年時代と云ふよりも、もう一歩を世の中へ踏み出して幾年も經つてからの事である。その時も、出來れば私は落ちつき拂つつて、樣子ぶつてゐたかつたのである。一夕私は二人の貴婦人と、有名な一人の紳士卽ちゴントオ公との仲間になつた。部屋には他に誰もゐなかつた。他の三人に私の手傳ひはいらないものを、私は一同の話の間に、何がなし言葉を挿まうと骨折つた。その家の夫人は胃の爲めに日に二回づゝ呑んでゐる阿片劑を取り寄せた。もう一人の夫人は、主婦が顏をしかめるのを見て「トロンシャン先生のお藥？」と笑つて訊いた。（トロンシャンは此頃の名醫）「いゝえ、どうして？」同じやうな調子で答へる。「この方にそんな藥は勿體無さ過ぎまさ。」とやつたのが、このルソオ先生だ。一同呆氣に取られた。誰一人口を利く者もなく、笑ふ者もない。暫くして話頭は一轉されてしまつた。この愚劣は他の人に對して可笑しかつただけでない。またかの注目を惹かずに終るべく愛嬌のあり過ぎた婦人に對し、私が決して怒らせようと思はなかつた婦人に對しても、恐るべき打擊であつたのだ。そしてかの男女二人の目擊者は、私に對する反感を包むのに、隨分骨折つたことだと思ふ。話すことのない時話さうとすれば、兎角私はかうした事をしでかすのである。私が右の失策談を容易に忘却しないのは、その事自體が著しいからだけでない。あとで私が、思ひ出し過ぎるほどに思ひ出すところの結果を招致したと思ふからである。

滿更の馬鹿者でない私だけれど、相應に鑑識のあるらしい人々からも、屢々馬鹿者と見做された譯は、これに依つて十分に明白になつたことだと思ふ。彼等の私に對する見解は、私の顏付や眼付に有望らしいところがあればあるほど、私にとつて不利益なものだつた、卽ち豫想のはづれた

と云ふことが、私の馬鹿を一層明かにして見せた。特殊の境遇が私に餘儀なくさせた、この性格の一部分の表現は、次ぎのものを了解する上にも無用でない。その中には私の奇行を解釋する鍵がある。その奇行を人々は、私が有つてもゐない、交際嫌ひの感情に歸してゐる。私は若し、私の損になるだけでなく、全然私と別のものに見えるなどと云ふことがないと信じられたならば、他の各の人と同樣に社交を愛したものだらう。筆を執つて、引つ込んでゐようと云ふ私の企てが、最も私に適してゐる。人中に出ては、私の價値を認められたことがない。推察されたこともない。ヂュバッ夫人の場合だつてさうだ。彼女はあの通りの才媛で、しかも私は多年彼女の家にゐたのだが、彼女もその後幾度となく自分で私にさう云つた。尤も、これには幾分の除外例がある。それは先きへ行つてから、更めて又記述する場合もあらう。

かうして私の才能も、私にふさはしき地位も決定されると、次ぎに問題になるのは、たゞどうして私がこの天職を果すかと云ふことだけであつた。困難は私が僧侶となるだけの神學を修めて居らず、拉丁語をやつてゐないと云ふ點にあつた。ド・ワレンス夫人は暫らく僧侶學校へやつて教育を受けさせようと考へた。僧院長のグロオ氏と云ふのに相談した。ラザロ派の、人の善い、半盲の、瘠せこけた、胡麻鹽頭の、小さい人であつた。あれほど物分りのいゝ、そして物知り顏をせぬ人は、ラザロ派の僧侶にめづらしい、と云ふのは決して溢美の言でない。

彼は度々「お母さん」を訪れた。「お母さん」はねんごろにもてなして、ふざけて、からかつて、折々は紐を結ばせたりなんかする。それを彼はいやな顏もせず引受けた。その間に彼女は、あれをしたりこれをしたり、絶えずあちらこちらの室の中をかけ廻つてゐた。紐に引張られながら僧院長は、「どうか奥さん、さう動かないでゐて下さい」と、こぼし〳〵、彼女の後を追はなければならなかつた。それが隨分面白い光景であつた。

グロオ氏は快く「お母さん」の申し出でを承諾した。彼は極めて少額の俸給で私の教育を引受けた。さてあとに殘つた問題としては、監督の承諾を得ると云ふ一事だが、監督はたゞにそれを與へて呉れたのみならず、その俸給をも自分から支拂はうと言つてくれた。彼はまた、何かの方法で、試してみて、私にものになりさうな前途の光明が見えるまで、在家のまゝの服裝でゐると云ふことをも許してくれた。

何といふ轉變であらう。私は忍從せざるを得なかつた。私は處刑場へ行くやうな心地で僧侶學校へ行つた。僧侶學校は、とりわけなつかしき婦人の家から出て來た者に、情

けなく感ぜられる場所である。私は「お母さん」に頼んで借りた一册の書物だけ携へた。それが私に取つては、少からず散鬱となつた、諸君には、どんな書物であつたか想像がつきますまい。それは樂譜の書物であつた。彼女が開發して呉れた才能の中で音樂だけは忘れなかつた。彼女は好い聲で、可なりに歌ひもしたし、少しは竇琴をも彈いた。彼女は親切にも私に唱歌を教へて呉れたが、本當にいろはから始めなければならなかつた。私はなにしろ讃美歌さへろく〳〵歌へなかつたからである。それを女の手で、間遠に重ねられたる八九回の稽古では、たゞに音階を覺え込んでしまふことが出來なかつたのみならず、音樂記號の第四部だけも碌々知ることが出來なかつた。その癖私は音樂に對するきつい執着があつたので、それを獨習してみようと思つた。私の携へたのは、あまり容易い方の書物ではなかつた。その中にはクレランボオのカンタアタがあつた。私が變調や長短をも知らないでゐて、『アルフェ及びアレチウス』のカンタアタ第一唱をどうやらかうやら、讀むやうになり歌ふやうになつたと言ふならば、私の勤勉と忍耐との如何ばかり大なるものであつたかも想見されよう。尤もこの第一唱はまことに規則正しい拍子に出來てゐて、その文句を音格通り讀みさへすれば、そのまゝ節廻しになると云ふほどのものだつた。

僧侶學校には一人のいやな坊主がゐた。そいつが私を引取つて、私に教へ込まうとする拉丁語を私の嫌ひなものにした。彼は滑らかで脂ぎつた、黑い髮の、竇パンのやうな面の、水牛のやうな聲の、梟のやうな目の、猪の毛のやうな髯の男であつた。彼の笑には惡意があり、彼の手足は傀儡のやうに貧乏搖ぎをした。そのいやな名前は忘れたが、あのいやな、胸の惡くなるやうな顏は記憶に殘つてゐて、それを思ひ浮べる度毎に戰慄を感ぜずにはゐられない。私は今尙ほ彼の姿が廊下へやさしさうに顯はれて、あの垢染んだ四角な頭巾で、監獄よりも恐ろしかつた私の教室へ、合圖をして私を追ひ込むところを見るやうに思ふ。あのやさしい僧院長に比べて何といふ相違であらう。

このけだものの處に二月も託せられてゐたならば、私の頭はきつと駄目になつたであらう。でも仕合せと、私がふさいで、物を食べないで、瘠せて行くのを認めたグロオ氏は、意氣銷沈の理由に感附いた。それは固よりむづかしい事でもなかつたのである。彼はあの畜生の爪牙から私を離して、更に著しい對照をなすやうに、あらゆる人々の中で最もおとなしい人に私を委ねた。それはガアチエエと云ふ、フォオシニイ出身の年若い僧院長で、この僧侶學校に修業を積んでゐた。そしてグロオ氏に對する好意から、また一つには人情からでもあらう、快く自分の勉强する時間を割い

て、私を指導することに用ゐて呉れた。私はかつてガアチエエ氏の容貌よりやさしい容貌を見たことがない。髪はブロンドで、髯は胡蘿蔔色に近い。彼の風采は無骨な外貌の下に、澤山の分別を包藏する、あの地方の人々に普通のものだつた。しかし、眞に彼の特色をなすものは、わかりの可い、懇ろな、溫かな心であつた。その大なる靑い眼にはやさしさと、なつかしさと、かなしさとが混つてゐて、如何なる人の心をも動かさなければ措かぬ。このあはれなる靑年の顏を見、聲を聞いた人々は必ず認めたに違ひない、彼がその運命を豫知してゐると云ふことを、自ら不仕合せに生れついたものと心附いてゐると云ふことを。

彼の性格はかうした外貌と矛盾しなかつた。十分な忍耐と好意とを以て、彼は私を教育するよりも、私と勉强してゐるやうに見えた。さうまでしなくとも、私は彼になづくことが出來た。彼の先驅者がそれをまことにたやすくしてくれたからである。しかしながら、彼が私にさゝげた時間の莫大なのに拘らず、我々の互ひに示し合つた好意にも拘らず、彼の遣りかたの正しきを得たにも拘らず、私は非常に努力して、僅かな進歩をしたに過ぎない。不思議な事に、私は父とラムベルシエ氏との場合を例外として、どんなに決心をして先生に就かせられても、何一つ覺えることが出來なかつた。その後覺えた僅かばかりのものは、いづれお分りになることだが、私ひとりで覺えたものだ。あらゆる種類の束縛に反抗する私の精神は刹那の法則に服從することが出來ぬ。覺えられないと云ふ心配すらも私の注意を妨げる。教へる人を怒らせることを恐れた私は、分つたやうな風をする。彼はずん〳〵と進んで行くが、私はなんにも分らない。私の精神は特殊の時間を必要とする。他人から定められた時間に甘んずることが出來ないのである。

僧職授任式が來たので、ガアチエエ氏は補祭としてその鄕里へ歸つた。私の悲哀や、私の愛情や、私の感謝が彼に伴つた。私が彼の爲めに籠めた祈願は、私自身の爲めに籠めた祈願よりも、より多く聽かれなかつた。二三年經つて聞いたのに、彼は或る教區で牧師の職に居りながら、一人の少女をはらませた。それは、彼の熱情の燃え易きに拘らず、彼の戀した唯一の對手である。それでも、嚴重な支配にある寺領のことゝて、恐ろしい誹謗の材料とせられた。當り前から云へば、僧侶は唯だ結婚した婦人にのみ子供を產ませることが出來た。彼はこの法規を犯したが故に、牢獄に投ぜられ、凌辱せられ、放逐せられた。私は彼が後日に至つて、再びその身を立て直すことが出來たかどうかを知らぬ。けれども私の心に、深く刻まれた彼の悲しい運命に對する私の考へは、『エミイル』を書く時再び目覺めて、ガアチエエとゲエムとを結び附け、この二人の尊敬すべき

200522

僧侶からサヴォアの牧師のモデルを作つた。私はあの模倣がそのモデルを汚さなかつたものと自惚れてゐる。

私が僧侶學校にゐた間に、ド・オオボンヌ氏はアヌシイを立ち去らなければならなくなつた。經理のコルヴェチイ氏はド・オオボンヌ氏が自分の妻に想ひをかけるのを不快に思つた爲めである。『園丁の犬』のやうな話であつたのだ。なぜと云つてコルヴェチイ夫人は可愛らしい婦人だけれど、夫婦仲は甚だ面白くなかつた。伊太利人的發作は彼女を彼に不用なるものにした。そして、彼の酷らしい仕打の果ては、別れ話さへ持ち上がつた。コルヴェチイ氏はむぐらのやうに黑い、ふくろふのやうに惡さうな、風采の上らない男であつた。そして結局いろ〳〵の橫暴を働いた爲め、その職を解かれてしまつた。プロヴァンス人は歌でもつて復讐すると云ふことだつたが、ド・オオボンヌ氏は喜劇でもつて復讐した。彼はこの喜劇をド・ワレンス夫人の處へ送つてよこした。夫人がそれを私に見せた。それは私の氣に入つて、私が果して右の作者に宣告されたやうな馬鹿者であるかないかを檢する爲めに、同じく又一篇の喜劇を作つて見ようと云ふ考へを起した。併しこの計畫を初めて實行したのは、シャンベリイへ來てから、『彼自らの愛人』を書いた時の事である。從つてその喜劇の序文に、「十八歲の時書きたり」と言つたのは、二三年誤魔化して言つたのだ。

おほよそこの時分の事である、それ自體はつまらないけれど、後で私に影響を及ぼし、私が忘れてしまつた後、世間を驚かすやうな事件の起つたのは。私は毎週一度外へ出て行く許可を得た。何の爲めに出て行つたかは言ふに及ばぬ。或る日曜日に丁度私が「お母さん」の處にゐたとき、その直ぐ隣の聖フランシス教會の人の住む建物から火事が出た。竈のついたこの建物には、乾いた薪が一杯に積込まれてゐた。見る〳〵全體が火になつた。「お母さん」の家は風下の焰に包まれて甚だ危い。人々は急遽其處を立ち退いて、前に話した窓の向うの、小川のあちらの花園へ家財を運び出さうとした。私はひどく狼狽へて、手當り次第に窓から投り出した。平時ならば、容易なことで持ち上げられさうもない石臼をさへ投り出した。人が來てとめなかつたならば、大きな鏡をさへ、投り出さうとした。その日「お母さん」を訪ねて來た、例の善良な監督もぢつとしてはゐなかつた。彼は彼女を花園へ連出して、そこで彼女や、居合はした人々と共に祈禱をしはじめた。少しおくれて來た私も、皆の者が跪いてゐるのを見て跪いたものである。祈禱の間に風が變つた。しかもまことに突然に、まことに具合よく變つた結果、「お母さん」の家に押被さつて、既に窓へ這入つた程の焰が、庭の向うへ逐ひやられた。さうしてその家は無事に助かつた。それから二年經つて、ド・ベルネエ氏

の死後、その教友達が彼の冥福に資するやうな逸事を蒐集し始めた。ブウデエ教父の望みにまかせて、私はそれらの記錄に前述の出來事の證言を附け足した。それは宜しい。その場合宜しくなかつたのは、私がこの事實を奇蹟に數へたことである。私は監督が祈禱するのを見、その祈禱の間に風が變つたこと、また實に折善く風が變つたことを認知した。それを私は言ひ得た、證し得た。けれどもこの二つの事實の一方が他の一方の原因であるとは、私が證據立て得べきでなかつた。私はそれを知ることが出來なかつたからである。兎もあれ、私がその當時の自分の考へを回想し得る限りに於て、私はその當時誠實なる加特力教徒であつて、善き信仰を有つてゐた。人間の感情に自然な、奇蹟に對する愛着と、有德の高僧に對する私の畏敬と、自分自身もこの奇蹟に貢獻したかも知れないと云ふ、内々の誇りとが、一緒に働いて私を證言に誘つた。そして若しもこの奇蹟が熱誠な祈禱の結果であつたとするならば、全くのところ私はその一部分を、自分自身の力に歸してゐたものかも知れない。

三十年以上經つて後、私が『山からの手紙』を出版したとき、フレロン氏はどうしてかこの證言を見出して、彼の頁にそれを用ゐた。それは、幸福な發見であつたと云はなければならぬ。そしてそれがあんな時宜を得たと云ふことは、私自らにさへ非常に面白かつた。

私は總ての境遇から追放せらるべき運命を有つてゐた。即ち、ガアチふエ氏は私の進歩に關して、精一杯好都合な報告をして呉れたけれど、人々はそれが私の努力に相應しないことを看破した。そしてこの上私に勉强を續けさせるのがつまらなく思はれた。そこで監督や僧院長は見切りをつけて、私を僧侶にもなれない人間として、ド・ワレンス夫人へ送り返した。他の點に於ては善良な、惡氣のない若者であると云はれた。そしてこれが爲めに私は、あゝまで不利益な批判を加へられたに拘らず、夫人からは棄てられなかつた。

私は自分に隨分役立つたところの樂譜を携へて、勇み立つて夫人の許へ歸つた。『アルツェ及びアレチウズ』の歌は全く、私が僧侶學校に於て覺えた唯一のものだつた。この技術に對する私の著しい好尚は、私を音樂家にしようと云ふ考へを彼女に起させた。幸にその機會もあつた。少くとも一週に一度、彼女の家で音樂會が開かれた。そしてその小音樂會を指揮する本山の樂長が、屢々彼女を訪れた。彼はル・メエトルと云ふ、巴里兒の作曲家で、まことに元氣な、まことに陽氣な男だ。年も若く、風采もかなりで、才氣は乏しいが、要するに全くの好人物であつた。「お母さん」は私を彼に紹介した。私はすつかり彼が氣に入つた。

彼も私をいやでなかつた。俸給の話もきまつた。やがて私は彼に引取られて行つた。その家が「お母さん」の處から二十歩と距つてゐなかつたので、一層樂しくその多を過した。私共は直ぐに彼女の處へ行つた。そして隨分度々彼女と晩餐を共にした。

いつも師匠の家で、音樂家や合唱の少年等とつきあつて、陽氣に歌ひ暮す生活が、サン・ラザアルの教父達と一緒に暮した僧侶學校の生活に比べて、ずつと面白かつた事は想見されよう。しかし今後の生活は、一層自由ではあつたけれど、一層規律のないものではなかつた。私は獨立を愛するやうに、決してそれを濫用しないやうに生れ附いてゐた。まる六ヶ月の間に私は、「お母さん」を訪ねるのと教會へ行くとの外、唯だの一度も出なかつた。そして出ようと思ひもしなかつた。これが私の最もおだやかに暮した時、また私が最も樂しく思ひ起す時である。私の置かれた種々な境遇の中、或るものは隨分幸福に感ぜられたもので、それを想ひ起せば今でも同じやうな滿足が覺えられる。私はたゞにその時、その處、その人々を想ひ起すのみならず、それにつらなる總ての小事項や、空氣の溫度や、匂や、色や、そこでなくては受けられないやうな局部的印象を想ひ起し、それを想ひ起す時私は再びそこへ連れて行かれるやうに感ずる。例へば樂隊に於て練習された總てのものや、合唱に於て歌はれた總てのものや、その場合爲されたすべてのものや、本山の僧侶の立派な美しい法衣や、司祭の外袍や、唱歌者の鉢卷や、音樂家の容貌や、コントラバスを奏した跛の老大工や、提琴を彈いた小柄のブロンドの僧院長や、ル・メエトル氏が劍を佩くや否やその俗服の上にかけたぼろ〳〵の袈裟や、合唱に行くために彼がそのぼろ〳〵を包んだ美事な白い法衣や、私が小さな笛を手にして、ル・メエトル氏のわざ〳〵拵へて呉れた獨奏曲をやる爲めに、オルケストラの下に席を占めた時の誇りや、そのあとに我々を待つてゐた御馳走や、そこへ我々の運んで行つた空腹や、これ等のものが鮮かに想ひ浮べられる時、その回想の中に幾度となく、現實に於ける同樣に、或はより多く私を悅ばせた。私はいつも短長格で進行する Conditor alme siderum の或る一曲を特別に好んだ。アヌシイの教會堂のたらはしで、夜明けの前に教會堂の石段の上に歌はれるこの讃美歌を、待降節の或る日曜日に床の中から聞いたからである。「お母さん」の侍女のメルスレエ孃は僅かばかり音樂を解した。私はル・メエトル氏が私に彼女と一緒に歌はせた、さうして彼女の主人が非常に面白く聞いてゐた、アッフェルトの小和讃を忘れることはあるまい。一言すれば、あの感心な下女であつたベリイヌ、合唱隊の少年等からさんざからかはれてゐたベリイヌに至るまで、あの幸福な、無邪氣な時

代のあらゆるものが幾度となく回想されて私に歸り、私を浮き立たせたり沈ませたりする。

私はアヌシイで何の非難をも受けず、一年ばかりを過した。誰も私を惡くは思はなかつた。チュランから歸つて以來、私は何等の馬鹿な眞似をもしなかつた。又「お母さん」とゐた間は何等の馬鹿な眞似をもしなかつた。彼女は私を指導し、いつも善い方へ指導した。彼女に對する愛着が私の唯一の熱情となつた。そしてそれが愚かな熱情でなかつたことの證據としては、私の愛情が私の理性を作つたと云ふことを言はなければならぬ。事實、或る意味に於て、私の總ての能力を呑み盡してしまふところの唯一の感情が何物を覺える力をもなくさせた。精一杯努めて見たが、音樂さへも覺えられなかつた。けれどもそれは私が惡いのでなかつた。やらうと云ふ意志は十分にあつたし、勉強も亦同樣であつた。私はぼんやりとして、物思ひに耽つて、幾度となく太息をついた。私はそれに對してどうすることが出來たか。私の進歩に對しては私一身の上に何等の碍げにもならなかつたのである。しかしながら、新しき愚を演ずる爲めには、私をしてそれを演ぜしむるところの一人の人物が必要であつた。その必要な人物は舞臺へ出て來た。偶然がそのさきを受持つた。そしてあとでお解りになる通り、私の輕卒な頭がその好機會を利用した。

二月の或る非常に寒い晩に、我々が爐を圍んで坐つてゐたとき、我々は道に面した入口の戸を叩く音を耳にした。ペリイヌは提灯をさげて下りて戸を開けた。一人の若い男が這入つて、彼女と一緒に上つて來て、物慣れた樣子で名乘りを擧げた。そして、ル・メエトル氏に手短かな、氣の利いた挨拶をしながら云ふのを聞けば、彼は佛蘭西の音樂家であるが、金に困つて寺院かなんぞに傭はれたいとの事である。「佛蘭西の音樂家」と云ふ言葉を聞いて、ル・メエトル氏の同情ある心臟が躍り上つた。彼はその祖國とその藝術とを熱愛してゐた。そこで彼はその若い旅人を迎へ入れ、彼の非常に必要を感じてゐるらしい宿を貸し與へ、隔心なくもてなした。私は彼が身體を煖めて、食事の運ばれるまで立て續けに喋つてゐるのを觀察した。彼は脊丈の小柄な男で、横幅の廣い、何處が不具と云ふでもないが、妙に畸形な體相をしてゐた。平べつたい肩をした、謂はゞ傴僂の方だつた。少々はびつこを引いてゐたかも知れぬ。彼は黑い、ぼろ〳〵になつた、古いと云ふよりもすり切れた上着、洟蘇の美しい袖口のついた、上等の、ひどく汚れた襦袢を着、兩足が一度に這入りさうな脚絆を穿き、雪を凌ぐ爲めにとて、脇挾むのにいゝくらゐの、小さな帽子を有つてゐた。しかし、かうした變挺な旅裝の中にも、どこか高貴な所を有つてゐた。彼の態度がまたそれに相應してゐた。容貌にも華

奢なところ、上品なところがあつた。彼はすら〳〵と巧みに話したが、儀禮に拘泥するのでもなかつた。一體の樣子が彼を教育のある道樂者、物乞ひとしてよりも道化として物乞ひをするやうな、道樂者であると思はせた。彼の言ふところによると、その名はヴァンチュウル・ド・ヴィルヌウヴで、巴里から來る途中、道に迷つたものである。そして一寸、音樂家であると云ふ先刻の名乘りを忘れて、國會に出てゐる親類の者を訪ふ爲めに、グルノオブルへ行く途中だと附け足した。

晩餐の間、音樂が談話の題目になつた。そして彼は巧みに談した。彼はあらゆる名手や、あらゆる名曲や、あらゆる俳優や、あらゆる女優や、あらゆる美人や、あらゆる貴族を知つてゐた。彼は談の中に出て來る總てのものを熟知してゐるやうに見えた。けれども、或る一つの話題が持出されるや否や、輕快な諧謔で以て進行を喰ひとめ、一同を笑はせ、彼等の話しかけた事を忘れさせた。それは土曜日の事だつた。翌日は會堂で音樂の演奏があつた。ル・メエトル氏は彼にその時歌つて貰はうとした。「歌ひますとも」と云ふ返事であつた。どこを歌つて呉れるかと云ふ問に對しては、「中音部」と云ふ返事であつた。そして別の話をした。教會へ出掛ける前、一同は彼にその受持の部分を通覽させようとしたが、彼は見向きもしなかつた。この倨傲なる態度がル・メエトル氏を驚かした。彼は私の耳に囁いて、「ねえ、あの男は一音譜も知らないんぢやないかしら？」と言つた。「さうかも知れません、」と私は答へて、少からず心配しながら彼等に從つた。愈々演奏が始まつた時、私の胸は恐ろしく鼓動を高めた。彼がうまくやつて呉れるようにと一心に念じたからである。

間もなく私は落着くことが出來た。彼はその二つの獨吟を無難に、手際よく歌つてのけた。しかもその聲はなかなか良い聲であつた。私はこの時程心持よく驚かされたことがない。彌撒祭の後、ヴァンチュウル氏は役僧や音樂師から非常な讃辭を呈された。それに對して彼は洒落まじりに、しかも尙ほ禮儀正しく擧動つた。ル・メエトル氏は眞心より彼を抱き締めた。私も同じやうに抱き締めた。彼は私が非常に悅んでゐるのを見た。そしてそれを悅んでくれたらしかつた。

私がかの、要するに一野人たるに過ぎないバアクルにのぼせた後、今又この、教育もあり、才能もあり、分別もあり、世間的の經驗もあり、好個の粹人として通用するヴァンチュウルに、すつかり惚込んでしまつたと云ふのは、諸君の成程とうなづいて呉れる事に違ひない。そして、これは實際私の上に起つたことだ。私のやうな地位に置かれるならば、如何なる青年の上にも起る事だらう。その青年に人の

特長を認めることが出來れば出來るほど、その特長に惹きつけられゝば引きつけられる程、いよ〳〵彼の上に起る事だらう。なぜと言つてヴァンチュウルは爭ひ難き特長を有つてゐた。別してその年齡に不似合な、その知識を衒ふのに急がないと云ふ、一の特長を有つてゐたのである。全くのところ彼は、知りもせぬ多くの事物に知つたかぶりをしたけれど、實際に知つてゐる數多くの事物に關しては何も言はなかつた。彼はそれを示すべき機會を待つた。わざとらしくないやうにその機會を利用した。そしてこれが最も大なる效果を齎した。彼が何時でも物を言ひ殘すやうにする故に、その知識の底は測られなかつた。面白可笑しく、巫山戲散らして、才氣縱橫に人を誘ふやうな話をして、いつも微笑して、哄笑することのない彼は、上品な調子で以て、隨分際どい話をもしてのけた。非常に堅い婦人でも、どうしてあんな話を聞かされたかを怪んだ。彼女等が怒らなければならぬと思つても駄目だつた。怒ることが出來なかつたのである。彼は賢女の外に求むるところがなかつた。彼は婦人によつて出世すると云ふ方の人であつたとは思はれぬ。彼は寧ろ出世してゐる人々の社會に、味をつけるのが役目であつた。あれだけ澤山の面白い才能を有つてゐて、それが十分に了解され愛玩される國にゐて、長い間音樂家の範圍内を出ることが出來なかつたとは不思議な話だ。

私のヴァンチュウル氏に對する愛着を、パアクルに對する愛着に比べると、より善き理由をも有つてゐたし、より少き弊害をも有つてゐたが、しかしより激しいもの、より長く續いたものだつた。私は彼を見たり、彼に聞いたりするのが好きだつた。彼の爲たことは總て皆私の氣に入つた。彼の言つたことは總て皆神託のやうに思はれた。しかし私の愛着は、どうしても離れられないと云ふほどまでにならなかつた。私をして、さうまで極端に走らせなかつたものが、私の近くにあつたのだ。そして私は、彼の格言が彼自身にとつていくら結構であらうとも、私に役立たないと云ふことを思つた。私は彼の全然氣附かない、別種の恥樂を要求してゐた。その恥樂については敢て彼に漏らすことをしなかつた。彼が私をひやかすに違ひないと信じたからである。しかし私は彼に對する愛着を、私を支配してゐる愛着に結び附けようと願つた。私は彼の事を「お母さん」の前に、口を極めて讃め立てた。ル・メエトルも、熱心に彼を推奬した。そこで彼女は彼を連れて來させた。けれどもその會見は全然失敗に終つた。彼は彼女をいやにかたつくるしい矯飾家だと思ひ、彼女は彼を遊冶郎だと見て取つた。そして、私がこんな惡い知り合を拵へるのを心配して、再び彼を連れて來ることを禁じたのみならず、この青年と交際する上の危險を懇々と私に說き聞かせた結果、私も少々

警戒して附き合ふやうになつた。そして、私の品行上にも思想上にも仕合せと、我々は間もなく別れてしまつた。

ル・メエトル氏はその仲間の人々と同樣に酒が好きだつた。食卓の上ではやらなかつたけれど、その書齋へ這入つて仕事をする場合、盛に盃を傾けずにはゐられなかつた。その下婢はよく知つてゐた、彼が作曲の原稿用紙を用意して、大提琴を手に取るや否や、直ぐに酒德利と盃との運ばれることを、幾度も幾度もその德利のお代りになることを。全く然醉ひ潰れると云ふことのない代り、彼は殆んど常に微醉機嫌でゐた。そしてそれが全く氣の毒な事だつた。何故と云つて彼は本來まことに善い人で、「お母さん」が「小猫」とばかり呼び馴れてゐたくらゐ、快活な人であつたからだ。生憎彼はその仕事が好きで、大に働き且つ大に飲んだ。これが彼の健康を害し、その性情を傷つけた。彼は折々疑ひ深いことがあり、怒り易いことがあつた。無作法や無遠慮の出來ない彼は、合唱隊の少年共にさへ荒い言葉を浴せなかつた。けれども又、彼自らに對して無作法な事や、無遠慮な事をされるのを好まない。それは正當な事だ。その場合困るのは、洞察の不十分な所から、妙な勘違ひなぞになり、度々愚にもつかない事に向腹を立てると云ふことだつた。

以前あれほど多くの王公や監督等が列席するのを光榮としたジュネエヴの僧會は、配流の中に舊い光彩をなくしたけれど、尙はその誇りを殘してゐた。それに這入れるのは、今でもソルボンヌの紳士か博士でなければならぬ。若しその場合、個人的勳功に基くやうな誇りが許されるとするならば、それは生誕によつて獲らるべきものだつた。そして、在家の人々を使つてゐる出家等は、隨分威張つて彼を取扱ふのが癖である。本山の僧等が憐れなル・メエトルに對するのも矢張りさうだつた。とりわけ唱首のド・ヴィドンヌの僧院長は、他の點ではまことに鄭重な人だけれど、身分と云ふ事を重く視過ぎる質なので、ル・メエトルに對していつも相當の敬意を拂はなかつた。そしてル・メエトルはその輕蔑を甘受し得なかつた。この年の苦難週に、監督が本山の僧共を呼び集め、ル・メエトルをもきまつて招待した饗宴に於て、二人はつねよりも激しい口論をした。即ち唱首は彼に對する禮儀を失して、何か亂暴な言葉を用ゐ、彼が勘忍袋の緒を斷らせたのだ。彼は即座に、翌晩そこを立ち退いてしまはうと決心した。そして何物もその心を飜へさせることが出來なかつた。暇乞ひに來たド・ワレンス夫人の家でも、百方なだめようとしたけれど駄目だつた。彼は別して、自分を必要と感ずべき復活祭の眞中に於て、彼等暴君共をまごつかせてやらうと云ふ、その復讐の快感を斷念することが出來なかつたのである。ところで荷厄介なのは、彼が持つて行かうとする曲譜であつた。それを持つて行く

のは容易なことでない。それを詰込んだ箱は、大きくもあり重くもあつて、なか〳〵提げられるものでない。

「お母さん」は、私も同樣にするだらうと思はれることをした。尙ほその上をもしたかつたらう。彼女は色々に手を盡して、彼を引留めようとしたけれど、どうあつても去ると云ふ決心であるのを見たときに、出來得る限りの助力をしようと考へた。忌憚なく言へば、彼女にはそれだけの義務があつたのである。ル・メエトルは謂はゞ、獻身的に彼女に仕へてゐた。單にその藝術上のことのみならず、その外のあらゆる問題に關しても、彼は全然彼女の希望に從つた。そして彼の、唯々として彼女の命令を奉ずる態度が、その禮讓に一層の價を加へた。だから彼女は、その友人が三四年來彼女の爲めにつくして呉れたのを、必要な場合に臨んで報いたと云ふに過ぎない。けれども彼女には、かうした義務を義務として、意識することなしにでも遂行するやうな心があつた。彼女は私を呼びつけて、ル・メエトル氏に少くともリヨンまでついて行くように、また用のある間はその傍についてゐるようにと命令した。後日彼女は打明けて言つた、私をヴァンチュウルから引離さうと云ふ彼女の願ひが、私にこの任を負はせた事に少からず關係してゐたのだと。彼女は荷物の運搬に就いて、忠實な僕のクロオド・アネエに相談した。彼の意見に從へば、若し我々がアヌシイで駄馬を傭つたら、きつと見附かつてしまふに違ひない。だから暗い中にどれだけかの里程をかついで行き、それからどこかの村で驢馬を傭つて、セエイッセルまで運ぶのだ。セエイッセルはもう佛蘭西領だから何の心配もないのである。この提言は採用された。我々はその晩七時頃に出立した。そして「お母さん」は、私の費用を出すに假託けて、それが何かの爲めにもならうと、氣の毒な「小猫」の輕い巾着を重くした。園丁のクロオド・アネエと私とは、兎角して寄附の村まで荷物を運んだ。更にその村で驢馬を傭つて、同じ晩にセエイッセルへ行きついた。

私は前にも言つたと思ふが、私自身に全く似ないで、全然別樣の性格を有つた人間と思はれるやうな場合がある。ここにその一例がある。セエイッセルの牧師レエドレエ氏は、サン・ピエエル院の僧會員で、從つてル・メエトル氏と相識の間であり、彼が骨折つて避けなければならぬ人々の一人であつた。私の忠言はそれと反對に、わざ〳〵彼の所へ伺候して、僧會の同意を得て來たやうな假託で、宿をして貰ふやうに賴むのであつた。ル・メエトルはこの思ひつきが氣に入つた。それが彼の復讐を皮肉な面白いものにしたからである。そこで我々は大膽にも、レエドレエ氏を訪ねて行くと、彼は誠に快く我々を迎へた。ル・メエトルは、監督の希望によつてベレエへ行き、復活祭の音樂を指揮するのだと言ひ、

數日の中に歸つて來るのだと言つた。この虛言を支へる爲めにもいろ〳〵の虛言を言つた。それがなか〳〵誠しやかに聞えたので、レエドレエ氏は私の利發を悅び、精一杯の好意を私に注いで呉れた。我々はよく歇待され、よく泊められた。レエドレエ氏はどうして我々に御馳走をすればいゝかを知らなかつた。我々は歸りにもつと逗留すると云ふ約束をして、世の中の最も親しい友達のやうに袂を別つた。我々は我々だけになるのを待ち兼ねて、どつと噴き出した。そして全くのところ、今尙ほ思ひ出す度毎に私は噴き出す。なぜと云つて、あれよりうまく、あれより手際よく演ぜられた誤魔化しは、到底想像し得られないからである。それは若しル・メエトル氏がのべつに酒を呑んで手數をかけないならば、殘りの旅行全體を面白くしたに違ひない。彼は癖癇によく似た、その後癖になつたやうな發作に二三度襲はれた。私はそれが恐ろしかつた。そして、何とかして彼から離れたいものだと考へ出した。

我々はレエドレエ氏に言つた通り、復活祭をしにベレエへ行つた。そして待設けられてはゐなかつたけれど、樂長始め總ての人々から、非常に歡んで迎へられた。ル・メエトル氏は音樂者仲間に評判のよかつた人で、又實際にそれだけの技倆を有つてゐた。ベレエの樂長は、自分の傑作を演奏して敬意を表し、あゝ云ふ立派な批判者の賞讃を博しようと努めた。なぜと云つてル・メエトルはたゞに鑑識があるばかりでなく、また公平な頭を有つてゐて、嫉妬の心もなく、意地の悪い批評をもしなかつたからだ。彼はそれらの地方の音樂者よりもずつと秀でゝゐた。そして彼等もよくそれを認めてゐるので、彼を目するにその同輩を以てするよりも、寧ろその頭領を以てした。

我々はベレエに於て、まことに愉快な四五日を送つたあとで、再びまた旅行を續けたが、前に述べたより外の出來事とても格別なかつた。リヨンへ着いて我々はノオトルダム・ド・ピチエへ宿つた。そして、今一つあの世話をして呉れたお人好しのレエドレエ氏を誤魔化して、ロオヌ河の船便で送り出させた荷物の着くまで、ル・メエトルはその知己の人々を訪れた。その中にはフランシス派の教父カトンがある。彼に就いてはあとで話すこともあるだらう。またリヨンの伯爵、僧院長のドルタンがある。二人ともまことに快く迎へたが、しかし彼を看破した。その顚末は次ぎに述べよう。彼の運はレエドレエ氏の處で盡きたのである。

我々がリヨンに着いてから三日目に、丁度二人で宿に近い小さな通りを歩いてゐるとき、ル・メエトルは例の發作に襲はれた。それが餘りに猛烈なので、私は恐ろしくなつて來た。私は大聲を擧げて助けを求め、宿の名を言ひ、彼をそこへ連れて行くように賴んだ。所で今、街の眞中に正體も

なく、泡を吹きながら倒れてゐる男を取卷き、多くの人々が集まつた間に、彼はその杖とも柱とも頼むべき唯一の友から棄てられた。私は誰も氣が附かないのを幸ひと、街の角を廻つて、姿を匿した。やれ〳〵私は、この第三の辛い懺悔をも爲おほせた。この上尙ほかうした懺悔がいくつもいくつもあるならば、私はとてもこの述作をつゞけていけさうにない。

私がこれまでに告白したものは、いづれも皆、私の住んでゐた場所に痕跡を殘した。しかし、次ぎの章に述べようとするものは、殆んど何處の事だつたか見當が附かぬ。それは私の生涯に於ける最も亂脈な時期である。あれくらゐな結果で濟んだのは仕合せだつた。しかし他人の樂器に調子を揃へられた私の頭は、その本來の心持や考へ方を失つてゐた。それが再び囘復されて來て、私も自分の馬鹿な眞似をやめた、或は本來の氣質にもう少し近い事をした。私この青年時代のこの時期は、記憶の最も曖昧な時期である。私の心を動かすやうな事件がなかつた。そして、色々の變遷や推移の間に、時間と場所との取り違ひが起らないで濟んだならば不思議であらう。私は專ら心覺えの儘を書くので、何の手控もなければ、據所になるやうな事實もない。私の生涯には、今尙ほ目前見るやうに思ふ事件もあるが、しかし又、空虛な穴になつてゐるところもある。その穴をふさぐには、私の記憶同樣にごた〳〵としたお話を以てするより外はない。だから私は隨分間違ひを書いたかも知れぬ。尙ほこれからも、本當に確實な手引の出て來るところまで、些細な事柄に關した間違ひは書かないものでない。しかしこの題目に對して眞實大切なものだけは、私がいつもあらゆる事物に就いてさうありたいと思ふ通り、正確であり眞實である。それは信用され得る事だ。

私はル・メエトル氏を棄てるや否や、アヌシイへ歸らうと決心した。我々の出立した理由や、內々で出立したことが、我々の退却の安全と云ふことをのみ考へさせた。そして私の全身を支配したこの考へは、二三日の間アヌシイへ歸る事よりもなほ外のことを私に考へさせた。けれども、それも靜かに落ち着くと、例の感情が再びその力を囘復して來た。何物も私を悅ばさなかつた。何物も私を誘はなかつた。私は「お母さん」の處へ歸つて行くより外に、如何なる願望をも有しなかつた。彼女に對する熱烈な私の愛着が、私の胸から一切の空想的計畫を、愚劣な野心を拔き取つてしまつた。私は彼女と共にゐるより外に、何等の幸福をも見なかつた。そして、私がこの幸福から遠ざかつてゐると云ふことを思はずには、たゞの一歩をも轉じ得なかつた。だから私は、出來るだけ早く彼女へ歸つた。その歸りがあまりに早く、私の精神もぼんやりとしてゐたからだらう、他の旅行は皆それ〴〵に面白く思ひ出すに拘らず、この旅行は全然覺えてゐない。私はたゞリヨンを立つたのと、アヌシイへ着いたのとを覺えてゐるだけだ。アヌシイへ着いた時の事が、どうして忘れられようぞ。歸つて見るとド・ワレンス夫人はもうゐなかつた。巴里へ向けて出立したあとだつた。

私は遂にこの旅行の祕密を明かされたことがない。私が迫つたならば、彼女もそれを漏らしたに相違なからう。けれども私くらゐ友達の祕密に好奇心を向けなかつたものはない。私の胸は專ら現在を相手にして、現在で一杯になつてゐる。そして、嘗て私の唯一の享樂であつたところの、過去の歡樂を外にして、私の胸の一隅も、現存せざるものに貸されはしない。彼女が私に與へた貧弱な材料から考へて見ると、彼女はサルディニュ王の讓位によつてチュランに起つた革命で、自分の忘れられることを憂慮した。そして、オオボンヌ氏の陰謀を利用して、佛蘭西の宮廷から同樣の扶助を得ようと考へた。佛蘭西の宮廷から扶助されるのが、好都合であるとは彼女自ら、幾度も私に話したことだ。なぜと云つて、佛蘭西の宮廷にはいろ〳〵の大切な事件があつて、彼女の上に不愉快な監督をするだけの餘裕がないからである。若しもかうだとしたならば、彼女の歸つて來たとき、格別以前より冷淡にされることもなく、引續きその年金を受けてゐたのは不思議な話だ。多くの人々の想像に依れば、彼女は當時佛蘭西の宮廷に用事のあつた、自分も出て行かなければならなかつた監督からの、祕密の使命を帶びてゐた。或は彼女の歸來を豐かに酬いようとする、一層有力な人からの使命を帶びてゐた。もしさうだとすれば、使節の選定は宜しきを得てゐたに違ひない。年も若く、容色もまだ衰へない彼女が、うまく談判を纏める上に、總ての必要な才能を有つてゐたのは確かなことだ。

（四）

私は來て見たが彼女はゐない。私の驚きと悲みとを想像して貰ひたい。その內ル・メエトル氏をあゝも卑怯に棄て去つたと云ふ後悔の念が萌し始めた。その後悔の念は、彼の遭遇した不幸を聞いた時、愈々募つた。彼の全財產を包括する曲譜の箱は、あの大切なあゝまで骨折つて救ひ出された曲譜の箱は、リヨンに着くと本山僧會から我々の逐電を報道されたドルタン伯の欲望に任せて强奪された。ル・メエトルはその資產を、その生業を、その全生涯の勞作を取返さうとしたけれども無駄だつた。この箱の所有權は少くとも論爭せらるべきものであつたが、何等の訴訟も起ら

なかつた。事件は立ち處に强者の法律によつて決定された。かくして哀れなル・メエトルは、彼が才能の成果を、彼が壯年の勞作を、また彼が晩年の扶持をなくしてしまつた。

私の受けた打擊は、全く抵抗することの出來ないものだつた。けれども私は、大きい苦勞も割合に徹へない年頃だつたので、間もなく氣休めになるものを見出した。私はド・ワレンス夫人の住所を知らず、彼女は私の歸つたことを知らずにゐたけれど、なほ且つ私は遠からず彼女からの消息が得られるやうに思つた。そして、私の不實に關しても結局それほど咎むべき事のやうにも考へなかつた。私はル・メエトル氏が逐電の際入用の人間だつた。それは私が彼の爲めに盡し得べき唯一のものだつた。よし私が彼と共に佛蘭西に留まつたとしても、彼の病氣を治すことは出來ず、彼の箱を强奪されないようにしてやることは出來ず、何の役にも立たずに、唯だ徒らに彼の費用を嵩ませたばかりであらう。その時分はさう思つた。今はさう思はない。恥づべき行爲の我々を苦しめるのは、その行爲のなされた時でなく、寧ろ程經て後の事である。それに對する記憶が消滅しないからである。

「お母さん」からの消息を得る爲めには、唯だ待つてゐるより外に方法がなかつた。なぜと云つて、巴里のどのあたりに彼女を搜さうぞ。どうしてその旅費を拵へることが出來ようぞ。遲かれ速かれ彼女の居所を知るのには、アヌシイが最も都合のよい土地だつた。それ故に私はアヌシイに留まつた。けれども私は隨分よろしくない事をやつてゐた。その爲めに何かと世話を燒いて呉れた監督を、この上とも世話を燒いて呉れたらしい監督を訪問しなかつた。私の保護者たる「お母さん」は彼の傍になく、また私は我々の逐電に對する彼の譴責を恐れたのである。僧侶學校へも以前のやうに行かなかつた。グロオ氏がゐなかつたからである。私は知り合の誰をも訪ねなかつた。經理の夫人を訪ねたいとは思つたが、訪ね得なかつた。それよりも宜しくないのは、ヴァンチュウル氏を再び訪ねたと云ふ事だ。私は彼があんなに好きであるにもかゝはらず、出奔以來唯だの一度も彼の事を考へなかつた。彼はアヌシイのどこでも大持に持てゝゐた。貴婦人連の間に引張り凧になつてゐた。この成功が私の頭を顚倒させた。私はヴァンチュウルの外に何者をも見ず、殆んどド・ワレンス夫人をも忘れてしまつた。彼の教導を受くるに便利なやうに、彼と同宿したいと申し出た。彼はそれに同意した。彼は或る靴屋の家に宿つてゐた。その靴屋は剽輕な、面白い奴で、そのお神さんを、方言で「女郎」とばかり呼んでゐたが、全く「女郎」呼ばはりされるだけのものだつた。彼等がよく犬も喰はないやうな喧嘩をすると、ヴァンチュウルは仲裁するやうな顏をしながら、いよ〳〵募らせた。彼の土音を帶びた嶮しい物言ひ振りは、まことに著しい效果を奏したのである。それこそ腹を抱へて笑はせるやうな光景であつた。かうして午前中は、氣の附かない中に經過した。二時か三時頃に我々は點心のやうな物を少しばかり食べた。それからヴァンチュウルは會食へ出掛けて行つて晩餐をやつた。私は一人で散歩きながら、彼の長所や、才能を嘆賞羨望し、あゝした幸福の生涯を送らせない私の運勢を呪つたものだ。自分で自分を知らなかつたにも程がある。私の運命は、私が今少し馬鹿でなかつたならば、今少しそれを享樂する道を知つてゐたならば、十倍も百倍も立派なものであつたらう。

ド・ワレンス夫人は、唯だアネエだけを連れて行つた。前に話した侍女のメルスレエはあとに殘されて、夫人の部屋にゐた。彼女は私より一つ二つ年上で、綺麗と云ふでもないがかなりに愛嬌のある、純粹のフリブウル生れであつた。時々主人の命令に從はぬと云ふことのほか、格別の缺點をも見出さなかつた。私はかなり度々彼女を訪ねた。彼女は舊い知り合であつた。そして彼女の姿は、他のもつとなつかしい者を思はせ、その爲めに彼女をいとしがらせた。彼女には數人の友達があつた。その中の一人なる、ジュネエヴ生れのジロオ孃は、私の罪惡に對する刑罰のやうに、私に言ひ寄らうと考へて、私を連れて來るようにメルスレエにいつも賴んだ。メルスレエに對する愛情から、並びに又、私の好きな若い人達がそこにゐるところから、私は行くことに同意した。一方私の氣に入らうとしたジロオ孃が、私に起させた反感と云つたらない。彼女がその乾いた、西班牙煙草で黑くなつた口を、私の顏に近く持つて來るとき、私は辛うじて唾を吐きかけるのをこらへてゐた。しかし私は我慢した。そしてこの一事をほかにしては、少女等の間にゐて面白かつた。ジロオ孃に對する好意からか、それとも私自らの爲めにか、彼等は皆競うて私の御機嫌を取つた。私はそれを唯だ友情とのみ思つてゐた。後になつて考へれば、友情以上のものを見なかつたのは私の落度だ。しかし、その時分には全く氣附かないでゐた事だ。

そして、お針の女や、小間使の女や、賣子の女なぞはさほど私の心を惹かなかつた。私は上流の若い婦人を目當てにしてゐた。人はそれ〴〵に特有の趣味がある。そして右のやうなのが私の趣味であつた。この點に關しては、私はホラチウスと見るところを異にする。しかし、私を引きつけるのは、立派な身分とか地位とか云ふものでなく、上品な顏色や、綺麗な手や、優美な衣裳や、全體の華奢な風や、趣のある着こなしや、物言ひ振である。品の良い上衣や、上等の履物や、紐や、笹緣や、手入の行屆いた髮である。これ等のものが秀でゝ居れば、少しくらゐ美しさが劣つて

ゐても、私はいつもそれを取るだらう。私は自分でもこの選擇を非常に滑稽なものだと思ふ。それにも拘らず、私の心はその方へ牽かれて行く。

偖て、この選擇が今一度出て來た。そしてそれを利用するのは、私の心一つであつた。時々青年時代の樂しい經驗を回想するのは、何と云ふ嬉しい事だらう。あの時代はあんなに面白かつた、あんなに短かつた、あんなに珍しいものだつた。そして私は、あんなに易々とあれを享樂した。あゝ、あれを想起したゞけで、私の胸に純なる悅びが一杯になる。その悅びがないならば、私の元氣を回復し、殘生の惱ましさに堪へることが出來ないのだ。

一日朝早く、曙紅があまりに美しかつたので、私は手早く着物を着て、日の出を見る爲めに野外へ出た。私は快活な心を以てこれ等を享けた。それは夏至の後の週だつた。裝ひを凝らした地は、草や花を以て被はれた。鶯は唱歌の終りに近づいて、互にその快い音色を競うた。聲を合せて逝く春に別れを告げた百鳥は、美しき夏の日の來るのを迎へた。あゝした美しい日は、私のやうな齢になつては見られない。私の現に住んでゐるやうな、陰氣臭い土地では見られない。

私は知らず識らず市を遠く離れた。暑氣はいよ〳〵加はつた。そして私は小川に沿うた小さな谷陰を歩いて行つた。背後の方で蹄の音と少女等の聲とが聞えた。その少女等は屈託してゐたらしいけれど矢張り笑つた。私は振返つて見た。私の名が呼ばれる。近づいて見ると、私の知り合の少女で、ド・グラッフェンリイド孃と、ガレヱ孃とだ。彼女等は乘馬に熟達してゐないので、どうして小川を横ぎるべきかを知らなかつた。ド・グラッフェンリイド孃はベルヌ生れの、非常に愛嬌のある若い婦人で、若氣の無分別から故郷を棄て、ド・ワレンス夫人の眞似をした。夫人の家で私も折々會つた。しかし、夫人のやうに年金を貰へなかつた彼女には、ガレヱ孃の世話になるのが大なる仕合せであつた。ガレヱ孃は彼女に對する友情から、別に世話をしてくれる人の出來るまで、彼女を客分にして置くやうに自分の母を說得したのだ。ガレヱ孃は彼女よりも一つ年下で、容色も勝つてゐた。どれだけかより可愛らしく、華奢なところを有つてゐた。可愛くて、しかも十分に發育を遂げてゐた。それが少女の、最も美しい年頃であつた。二人は互にやさしくしあつた。そして雙方の溫良なる性格は、戀人かなんぞが攪亂者として出て來ない限り、相互の和合を長持ちさせたに違ひない。聞けば彼等はガレヱ孃の所有になつてゐる舊い城、ツウヌの方へ行くのだと云ふ。彼等は自分達の手に合はぬから、馬を渡す手傳を是非にと求めた。私は鞭を加へようと思つたが、婦人等は私の蹴られるのを、自分達の投

げ飛ばされるのを恐れた。そこで私は他の手段に訴へた。私はガレヱ孃の馬の手綱を取り、私の背後に引き附けながら小川を渡つた。その時水は腓までついた。今一つの馬はたやすく後からついて渡つた。この大役をつとめた後、私は婦人等に挨拶して、馬鹿者のやうにその場を立去らうとした。すると彼女等は二口三口互に囁き合つて、それからド・グラッフェンリイド孃が私に向いてから言つた。「ねえ、そんなに逃げるもんぢやありませんよ。さつきあなたは濡れたでせう。あれを乾かして上げなくちや、私達の氣が濟みませんもの。ねえ、一緒にいらつしやいな。さア、もう私達の捕虜ですよ。」私の動悸は高まつた。私はガレヱ孃を見た。

「さうよ。」と彼女は、周章いた私の顏を笑ひながら言葉を添へた。「私達の捕虜ですよ。ド・グラッフェンリイドさんの後へ乘るんです。私達が責任を負ひますから。」——「でもあなた、私はお母樣にお目にかゝつたこともないんですもの。あちらへ行つたとき何と仰しやるでせう。」——「ガレヱさんのお母さんは。」とド・グラッフェンリイド孃が答へた。「ツウヌにいらつしやらないんです。私達だけですの。私達は今晩歸ります。あなたも、御一緒にお歸りになつたらいゝでせう。」

これ等の言葉は、電氣よりも速かな影響を私の上に及ぼした。ド・グラッフェンリイド孃の馬に飛乘つた時、私は悅ばしさに戰慄を感じた。そして身を支へる爲めに、彼女に抱きつかなければならなかつた時、私の胸は彼女にも聞き取れるほど鼓動を高めた。彼女は自分の胸も、落ちはしないかと云ふ心配から、鼓動を高めたと私に言つた。その場合の私の姿勢から云へば、事實を確めて見よと云ふ、挑發的の言葉のやうなものだつた。私にはそれをする勇氣がなかつた。乘つてから降りるまで、私の兩腕は彼女に帶の役をした。しつかりと引締めたなり、少しも動かない帶の役をした。これを讀む婦人達の中には、私の耳を打つ人があるかも知れぬ。打たれても文句は云はれない。

遠乘りの樂しさと、少女等のお喋りとが私をもお喋りにして、日の暮れるまで、皆と一緒にゐる間、絕間なく我々は話したものだ。彼等は私をまことに快くしてくれたので、私の舌は私の目ほどに話をした。もつとも私の舌と目は、別々の話をしたけれど。私が二人の中の誰かとたつた二人になるときだけは、多少會話がまごつくけれど、間もなくもう一人がやつて來て、そのまごつきの原因を明かにするほどの餘裕もなかつた。

ツウヌに着いて、私の着物がすつかり乾いた時、我々は朝餐を認めた。それから午飯の用意をすると云ふ、大切の仕事に取り掛らなければならなかつた。二人の婦人は料理

をしながらも、折々小作人の子供等に接吻をした。憐れな料理番の若者が、唇を嚙みながらそれを見てゐた。彼等は前以て市から、晝餐の御馳走の材料になるべきものを送つたが、どうした事か酒を忘れた。このてぬかりは、酒を飲まぬ少女等には不思議な事でもなかつたが、私に取つては殘念だつた。酒の力をかりて元氣をつけようと思つてゐたからである。彼女等も同じやうに殘念がつた。同じやうな理由であつたかも知れぬ。それを信ずるのではないけれど。彼女等の浮々と面白さうにしてゐるのは、無邪氣その物であつた。そして、彼女等二人の間で私をどうすることが出來たであらうぞ。彼女等は方々へ使を走らせて酒を求めたが得られなかつた。この地方の百姓は非常に謹直でもあり、貧乏でもあつたからだ。少女等がその當惑を打ち明けたとき、私は彼女等に、そんな事を氣にして臭れるな、私を醉はすのには、酒なぞ出さなくたつていゝからと言つた。これはこの日私が示すことを敢てした唯一の禮節であつたけれど、あの人の悪い少女等は、それが單なる禮節でなく、むしろ私の眞情を述べたものであるのを洞察し得たに違ひない。

我々は小作人の臺所で食事をした。二人の友達は長い食卓の兩側にベンチを据ゑ、そのお客樣は彼女等の間なる三本脚の腰掛に掛けた。何と云ふ食事であつたらう。何と云ふ嬉しい思ひ出であらう。かくも純潔にして眞實なる悅樂が、かくもたやすく獲られる時、何の爲めにか人はこれより他の物を求めよう。巴里のプティット・メエゾンに於ける晩餐すらも、これには比較することが出來ぬ。私は單に面白いとか樂しいとかを言ふのでなく、官能上の快感に就いても言ふのである。

食事の濟んだ後、我々は經濟の手並を見せた。朝餐の時に殘つた珈琲を飲まないで、婦人達が持つて來たクリイムや菓子なぞと共に、それを夕方の點心に貯へた。そして我我は食慾を働かす爲めに、果樹園に這入つて尾食の櫻實を取つた。私は樹に上つて房ごと彼女等の上に投げ附ける。彼等はその種を取つて、枝の間から私に砲火を開いた。一度ガレエ孃が前垂をひろげて、頭を後へ引きながら、すらりと品よく立つた時、私はうまく狙ひをつけて、一房を彼女の胸に投げつけた。その時の笑聲を想像して貰ひたい。私は自分の心に言つた、「何故私の唇は櫻實でないのか。私はどんなに悅んで私の唇を投げたであらう。」

かくしてその日は種々の樂しい諧謔に暮れたけれど、あらゆる氣儘な振舞の中にも、禮節を失はなかつた。裏表のあるやうな言葉は一つもなく、無作法な話は一つもなかつた。そしてこの禮節を故に守らうとしたのではない。それは寧ろ自然に守られたものである。我々は感情の導くまゝに振舞つたのだ。一口に言へば、私の控目は——他の人達は私の愚劣と言ふだらう——容易ならぬもので、私の敢てした最上のなれ〳〵しさが、私をしてガレエ孃の手に接吻させたくらゐのものである。その時の事情がこのつまらない恩寵に値を加へた。我々はたつた二人でゐた。私は息がつまるかと思つた。彼女は伏目になつてゐた。私の唇は言ふべき言葉を求める代りに、思ひ切つて彼女の手に押しつけられた。その手は私に接吻された後、徐ろに引込められた。私の方を見た彼女の顏は、怒つたものゝやうには見えなかつた。私は彼女に何を言ひ得たかを知らぬ。そこへ彼女の友達が這入つて來た。その時その女は私に醜く見えた。

遂に彼女等は、餘りに遲くなると、市の門がしまると云ふことを想ひ起した。今や、辛うじて日のある間に歸れるだけの時間があつた。そして我々は來た時と同じやうな割り當てをした後、急いでそこを出て立つた。若しも勇氣があつたらば、私はこの順序を變更したゞらう。なぜと云つてガレエ孃の目が烈しく私の心を燃え立たせたからだ。しかし私は何も言ひ得なかつた。彼女も流石にその動議を提出することを憚つた。道々我々は日の暮れかゝつたことを悲しんだ。けれども我々は、日の短いのを嘆くどころでなく、いろ〳〵の娛樂を工夫して日を長くすると云ふ、祕密の法を心得てゐると思つたのである。

私は彼女等が私を乘せて臭れた邊で彼女等に別れた。その別れの如何に殘り惜しかつたことぞ。如何ばかり樂しく我々の再會を約したことぞ。共に過した十二時間は、百年の交遊に値した。この日の甘き追憶は、此等の愛らしき少女の胸を少しも傷つけなかつた。我々三人の間を結んだやさしい感情は、肉感的の悅樂よりも値があつた。そして肉感的の悅樂に伴ふことの出來ないものだつた。我々は互に隱すところなく、恥づるところなく相愛した。いつまでも相愛しようと思つた。純潔な品行には、他の如何なる享樂にも劣らない享樂がある。それは決してなくなることがなく、如何なる場合にも感得せられるからだ。私は少くとも知つてゐる。かくも美しき日の追憶は、私の生涯に味つたどの悅樂の追憶よりも、より多く私を動かし、より多く私をよろこばせることを。私はそも〳〵これ等の優しい少女をどうしようと思つたのか分らない。兎に角いづれもが少からず私の心を惹いた。私は、よしや私の思ふ儘になつたとしても、自分の心が平等に分けられたらうと言はぬであらう。僅かの相違ではあるが、一方の少女に傾いてゐたのは、自分でも意識してゐたものだ。私はド・グラッフェンリイド孃を戀人とするのを幸福と思つた。けれども〳〵自分の好きになる事ならば、私は彼女を戀人とするよりも、親友としたかつたに違ひない。いづれにせよ、彼女等に別れる

時、私はその何れもがゐなくては、生きられないやうに思はれた。私が二度ともう彼女等に逢はなかつたとは、我々の果敢なき戀が、かくして終るべきであつたとは、何人がこれを言ふものぞ。

これを讀むところの人々は、非常に無鐵砲な者すらも、いろ〳〵の準備をしたあとで、單なる手の接吻に我慢したと聞くとき、私の慇懃なる冒險を笑ふに相違ないだらう。しかし、讀者諸君は大に誤つてゐる。私はかうした、手の接吻に終つた情事に於て、諸君等が、少くとも手の接吻に始まつた情事に於て感得したよりも、大なる悦樂を感得したのである。

前夜非常に遲く床に這入つたヴァンチュウルは、私より少し後に歸つて來た。この時は彼の歸りが常の如く嬉しくないと思つた。少女等は彼の事に就ては甚だよそ〳〵しく話してゐた。私があゝした人とつき合つてゐるのを悦ばぬらしくも思はれた。これが彼に對する私の敬意を少くさせた。そして、私の考へを少女等から引離さうとするものは、何一つ面白くなかつた。けれども彼は、私の境遇に就て話しかけ、私を私自らに歸らせ、彼自らに歸らせた。私の境遇は、長く續けて行けさうもなかつた。隨分つゞましくしてゐたけれど、私の小さな巾着は大方空になつて來た。私には何處からも金の入つて來る當てがなかつた。「お母さん」からは何の消息もない。私はどうしてよいか分らない。そしてガレエ孃の友人が乞食にまで成り下るのかと思へば、胸が張り裂けるほどだつた。

ヴァンチュウルは私の爲めに大判事に話をしてくれた事、私を明日そこへ食事を共にすべく連れて行く考へであることを言ひ聞かせた。聞けばその大判事は、その友人によつて或る地位を私に世話をしてくれさうだつた。又彼は賴み甲斐のある人間で、譯の分つた、學問のある人物で、話の面白い人で、才藝に富んだ、才藝を愛する人だつた。彼の癖でつまらない話と大切な用事とをごつちやにして、彼は巴里から屆いたと云ふ小曲を私に見せた。その頃屢々演ぜられたムウレエの歌劇から譜をかりたものであつた。その小曲がシモン氏即ち大判事にひどく氣に入つた爲め、その大判事は同じ譜で以て、今一つ返しの小曲を自分で作らうとした。彼はまだヴァンチュウルにも同じものを作らせた。するとヴァンチュウルは醉狂な男で、私にも今一つ作らせようとした。彼に言はせると、次ぎの日小曲が滑稽小說の筋のやうに續出するのを人々に見せたいからだつた。

夜眠られなかつたので、私は出來るだけよく小曲を作つた。處女作の詩としてはかなりであつた。と云ふよりも上出來であつた。そして、一日前に作られたならば、少くと

もあんなに趣きのあるものは出來なかつたに違ひない。なぜと云つて、あの詩の中には、私の心が已に焦がされ始めた、熱烈な題目を歌つてあつたからである。あくる朝私はその小曲をヴァンチュウルに示すと、彼は結構だと言つてポケットに捻込んだなり、自分の分を作つたとも、作らないとも言はなかつた。午餐に我々がシモン氏を訪ふと、彼は歡んで我々を迎へた。會話は生々と面白かつた。分りのいゝ學問のある二人の間には、會話の面白くなからう筈もないのだ。私の役目は、默つて聽いてゐるだけだつた。二人とも小曲の話をしなかつた。私も固より話さなかつた。そして、私の知れる限りに於ては、私に關して何の話もなかつた。

シモン氏には私の立居振舞が氣に入つたらしかつた。この會見の際私に就いて、それ以上の事は見てくれなかつたやうだ。以前已にド・ワレンス夫人の家で度々會つたこともあるけれど、彼は格別心に留めても呉れなかつた。それ故この午餐を共にしたのが、私の彼と知り合になつた始めである。この知り合になつたのは、當初の目的に役立たなかつたが、後になつて他の便宜を來した爲め、快い感情を以て私は彼を追憶するのだ。

私は彼の外貌を語らずに置かれない。役人としての地位、文人としての自信を考へたのでは、その實際を想見することがむづかしい。大判事シモン氏は全くのところ五尺に足らぬ身長であつた。彼の足は眞直で、痩せてゐて、相當に長かつた。そして垂直に立てたらば、可なり脊丈を高くしたかもしれぬ。けれどもそれは思ひきりコムパスを擴げたやうに斜めにはだかつてゐた。彼の胴體は、單に短いのみならず、細くもあつた。そして如何なる意味にでも、想像の出來ないほど小さいものだつた。裸にして見たら蟋蟀のやうなものであつたに違ひない。彼の頭は人並の大きさで、恰好のいゝ、上品な顏で、可なり美しい眼で、さながら斷株の上に接樹をしたやうに思はれた。彼は服飾の費用を大に節約し得たかも知れぬ。その大きな假髮だけで、頭から足のさきまで蔽ひ隱すことが出來たからである。

彼は二つの全く異つた聲を有つてゐた。それが話の中にたえず入りまじつた。そのコントラストが初めのうちには非常に快かつたけれど、後にはまことに聞き苦しくなつた。一は重々しくよく響く聲だつた。名づくべくんば、その頭の聲だつた。今一つは甲高い、刺すやうな聲で、彼の身體の聲だつた。徐に話をする時は、落着いてゐる時は、せき込まない時は、その幅のある聲で續けられたけれど、少し調子づいて來ると、昂奮し始めると、その聲ががらりと變り、口笛を吹くやうな鋭い音になり、再びもとの低い調子にかへるのは容易でなかつた。

私がこゝに何の誇張もなく描き出したやうな外貌であるに拘らず、シモン氏は粋人で、色氣たつぷりで、餘程のおめかしやでもあつた。自分でも得策と思つたのか、朝の間彼はよく床の中で人に會つた。あの立派な頭を枕の上に見るときは、まさかあの外に何もないと思はれないからだ。そんな事からして折々、アヌシイ人達が今に記憶してゐるやうな騷ぎが起つた。或る朝、薔薇色のリボンで結び目を拵へた立派な白い寢帽子を被つて、床の中に、と云ふよりも寧ろ床の上に、訴訟當事者の來るのを待つてると、或る百姓が來て扉を叩く。生憎と女中がゐなかつた。二度び叩いた時に、大判事殿は「お這入りなさい」と叫ぶ。やゝせき込んだので、例の鋭い聲だつた。百姓は這入つて來て、どこからあの婦人の聲がしたかと見廻す。そして床の上に綺麗な結び目のついた寢帽子を見たときに、あまたゝび貴婦人へのお詫びをしながら退出しようとする。シモン氏は胸糞を悪くして、いよ〳〵甲高い聲を張り上げる。百姓はてつきりさうだと思ひ込んだのでもあるし、自分が侮辱されると取つたのでもあるしして、シモン氏を淫賣婦に相違なからうと言ひ返し、大判事の家は風儀が悪いと言つて罵り返す。たまらなくなつた大判事殿は、他に手頃の物もなかつたので、便器を取上げて百姓の頭に投げつけようとする。そこへ仕合せと女中が歸つて來た。

自然から、肉體上かくも閑却されたこの侏儒は、精神上かなりにそれを賠償されてゐた。そしてその立派な天分を開發するのに心を用ゐた。彼は法律家としての大名を博してゐたけれど、人の噂によると、その職業が好きでなかつた。純文學に首を突込んで、多少物になつてゐた。とりわけその皮相な華かさや、交際上に、婦人との交際上にさへ悦樂を與へるやうな香ばしき藥味を有つてゐた。アナの奇談を、あの有名な、面白い譚を殘らず、尚ほその他の色々の譚を諳誦してゐた。そしてそれをいかにも巧みに、いかにも人の心を誘ふやうに取次ぐことを知つてゐた。六十年も前に起つた出來事が、昨日の話でゞもあつたかのやうに。彼は音樂の趣味をも解し、その男聲で以て面白く歌つた。一口に言へば、お役人としては多藝多能の人だつた。始終アヌシイの貴婦人達に媚びるので、彼女等の中に持て囃された。貴婦人達は小猿のやうに彼を引廻した。彼は剩へ戀愛の上に好運兒であるやうに吹聽した。それが一方ならず彼女等を面白がらせた。エパニイ夫人と云ふ人に云はせると、結局彼が無上の幸福は、婦人の膝に接吻をし得ると云ふことだつた。

彼は名著傑作を知り、好んでそれらの話をしてゐた故に、彼との會話はたゞに樂みになつたゞけでなく、また實に教訓的の意味あるものだつた。私はその後勉強が好きになつ

た時、彼と親密な仲になり、それを利益になる事だと思つた。私は、その當時ゐたシャンベリイから折々彼の處へ訪ねて行つた。彼は私の熱心を讃め、いよ〳〵それを煽り立て、私の勉強に關してよき注意を與へて呉れた。その注意が屢々私に役立つた。不幸にも、このやうな薄弱な肉體のうちに、非常に熱烈な精神が宿つてゐた。二三年の後、何かしら厄介な事件が持ち上り、その心配がもとで彼は死んでしまつた。これは全く氣の毒な事だつた。彼はまことに善い人で、最初のほどは笑はれても、結局は可愛がられた。彼の生涯と私の生涯との間には、格別の深い關係もなかつたが、彼から授けられた有益なる教訓の故に、私は彼を記念する場合、感謝の意を表すべきものだと思ふ。

私は身儘になるや否や、ガレエ孃の街へ駈けつけた。誰かの這入るところか、出るところか、少くとも窓のあくのが見えるであらうと樂んだのだ。なんにも、猫一つ見えなかつた。そして私のそこにゐた間、まるで空家でゞもあるやうにしまつてゐた。街は小さく、人足も稀で、立留つて居れば直ぐに目に立つた。折々通り過ぎる者があり、近所の家へ這入る者、それから出る者があつた。私はそこにゐることが氣になつた。そこらに來てゐる目的をさとられるやうに思つた。そしてこの考へが私を惱ました。私は自分自身の快樂よりも、自分の愛する人々の名譽や面目を尊重してゐたからである。

遂に、西班牙の戀人を演ずるに疲れて、殊にギタア一つ持つてゐなかつたので、私はド・グラッフェンリイド孃へ、手紙を書かうと決心した。實を云へば、彼女の友達へ宛てゝ書きたかつたのだけれど、私は敢てしなかつた。そして先づその友達を私に紹介してくれた彼女、私にとつてより心易き彼女へ宛てるのが、宜しきを得たものだつた。書き終ると、私はそれを、別れる時あの婦人達に約束した通り、ジロオ孃の處へ持つて行つた。彼女等自らこの方法を授けたのであつた。刺繍を職業にしてゐるジロオ孃は、折々ガレエ夫人の家で仕事をする故、その家へ行くのに便利であつた。けれども私には、この使者があまりに適任者らしく思はれなかつた。さればとて、その事をかれこれと言ひ出せば、どんな代りをも無くするやうにならうかと恐れた。それにまた私は、彼女が私に心があるとは思ひたくなかつた。私は私が彼女をも異性として思つてゐるやうに、彼女からして思はれるのを辛く思つた。が結局、その使者をも全くないよりはましだと思つて、一か八か消息の取次ぎを依頼した。

一言聞いただけでラ・ジロオは私の心を見ぬいた。それはむづかしい事でもなかつた。若い婦人に渡さるべき手紙が、それ自ら語らなかつたところで、私のおど〳〵とした周章

た顔付が十分に裏切りをしたことだらう。彼女に取つてこの使のありがたくなかつたことは想像出來よう。けれども彼女は引受けて、忠實にその任務を果した。翌朝早く、私は彼女の處へ駈けつけて、私への返事を見出した。如何に急いでそこを出て、私はそれを讀みかへし讀みかへし、心の儘に接吻をしたことぞ。これはわざ〳〵言ふまでもない。ジロオ孃の取つたその時の態度は、言つて置かなければならぬ。彼女は思つたよりもディリカシイのある、控目なところのある婦人であつた。彼女はその三十七と云ふ歳と、小兎のやうな目と、嗅煙草の鼻と、とげ〳〵しい聲と、黒い皮膚とを以てして、花のやうな輝きに滿ちた二人の少女に對抗することの、難役なるを知るだけの分別があつたので、彼女等に裏切らうとも、彼女等の爲めに盡さうともせず、私を彼女等に獲させるやうに骨折るよりも、いつそ私を失ふ方をよろこんだ。

女主人から矢張り何の消息をも聞かないメルスレエは、少し前からフリブウルへ歸らうと云つてゐたが、今ジロオは彼女を勸かしてその決心を實行させた。その上に尙ほ、誰かに父の家まで送つて行つて貰ふのがよからうと說き、私をそれに推薦した。私を嫌ひでないメルスレエは、喜んでこの提案に同意した。その同じ日に二人は、ちやんと決定した事柄の如く私に話した。私はかうしたお伴をするのがいやでもなかつたから引受けた。この旅行を高々八日くらゐのものと思つたのである。しかし一切の事を取り極めたジロオの考へは別だつた。私は自分の懷の都合を告白せざるを得なかつた。彼女等はそれを心配してくれて、メルスレエが私の旅費をもつことになつた。そしてその入用を償ふ爲めに、私から迫つて、小さな荷物を送り出したあと、徒步でぼつ〳〵とやることに定められた。定められた通りに實行された。

こんなに多くの少女が、私に戀をしたと言ふのは心苦しい。けれども、此等の戀愛が齎らした利益を、自ら誇りとして居らぬなら、十分眞實を語ることが出來ると思ふ。ジロオよりも若く且つ、技巧に短なるメルスレエは、格別進んで誘惑するやうなこともしなかつた。たゞ彼女は私の聲や、私の調子をまねたり、私の物言ひ振りを繰返したり、私が彼女に對して拂はなければならなかつたやうな注意を却つて私に拂つた。そしてまことに氣の小さい性分で、我我二人が同室に寢るやうになりはすまいかとびく〳〵してゐた。二十歳の若者と二十五歳の娘とが一緒に旅行する場合、まづ〳〵起り勝ちの事であるからだ。

けれどもこの時は起らなかつた。單純なる私の事とて、メルスレエが氣に入らぬではなかつたけれど、旅行中曾て浮氣らしい誘惑を經驗しなかつた。いやそれ處ではない、それに近いやうな考へは兎の毛ほども起さなかつた。よし又そんな考へを起したとても、私はそれを利用すべく餘りに無知だつた。私は若い男女がどうして同衾するやうになるものか、まるで想像もつかなかつた。私はこの恐ろしい結合に百年も準備のいるものと思つてゐた。メルスレエも私の旅費を負擔して、その報酬を豫期したとするならば、すつかりあてが外れたものだ。なぜと云つて我々は、アヌシイを發足したときと同じ純潔で、フリブウルへ到着したからである。

ジュネエヴを通る時、私は誰をも訪れなかつたが、橋の上では氣が遠くなるやうだつた。この幸福なる市の外壁を見て、その内へ足を踏み入れて、腸を斷たれるやうな、激烈な感動を經驗せざるを得なかつた。自由の高貴なる形象が私の魂を高めた間に、平等や、一致や、優しい風習の形象が、落涙するまでに私を動かして、總ての此等の幸福を失つたと云ふ、深い哀みを私に起させた。何と云ふ誤謬の中にゐたことぞ。さあれ又、何と云ふ自然なる誤謬ぞや。私はこれ等の物を私の心の中に有つてゐた故に、私の祖國に於ても見られるやうに思つたのである。

我々はニヨンをも通らなければならなかつた。我が肉親の父にも逢はず行き過ぎるとは。若し、逢ふことを敢てしなかつたらば、死ぬよりも辛い悔恨を殘すであらう。私はメルスレエを宿へ殘して置いて、思ひ切つて私の父を訪れた。嗚呼、彼を恐れてゐたのは何たる心得違ひぞ。私の姿を見るや、久しく抑へつけられてゐた父としての情が、彼の胸を一杯にひろがつた。我々が相抱いた時にいかに夥しき涙を流したことぞ。彼は初め、私が彼の處へ歸つたものと思つた。私は自分の閲歷と、現在の決心とを彼に語つた。彼はそれに對して少しく不同意を唱へた。私の遭遇するかも知れないと云ふ危險を說き示し、あまりに無分別はせぬものだと諭した。爾餘の點に關しては、無理にも私を引留めようと云ふやうな氣は更になかつた。それは全く當を得てゐたと思ふ。しかしまた、彼は私を引留める爲めに、彼の爲し得る總てをなしたのでもない。それはあゝした私の出方から、到底改まらないものと判斷したのかも知れぬ。或は私のやうな年頃の者をどうしてよいか、分別がつかなかつたのであるかも知れぬ。後になつて聞けば、彼は私の道連れに對して、甚だ不都合な、甚だ間違つた見解を下してゐたさうだ。しかし、それも無理のない見解だつた。私の繼母は、人の善い、少々甘つたれた婦人で、晩餐に私を引留めたいやうに言ひたてた。私はそれに從はなかつたが、歸りにゆつくりする積りだと告げ、船で送らせてゐた私の包を、荷厄介でもあつたから、彼等の處へ預けて置いた。翌朝早く私は再び出立した、父に會つたのを、私の義務を

果し得たのを、この上もなく悦んで。

我々は恙なくフリブウルへ到着した。旅行の終りに近づいてメルスレエ孃のなれ〳〵しさが聊か減じた。到着の後彼女は私に對して冷然たる態度をのみ取つた。あまり豐かに暮してもゐなかつた彼女の父は、格別のもてなしをもして呉れなかつた。それ故に私は宿屋へ行つた。次ぎの日私は彼等を訪ね、私の爲めに備へられたる晝飯を食べた。我我の別れる時には一滴の涙もこぼされなかつた。夕方私は宿へ歸つた。そして、到着の後二日目にその地を去つた。どちらへ行かうと思ふのかを十分に知ることもなく。

これも亦、私の生涯を幸福に過すべく、私に必要なるものを攝理が與へた一例である。メルスレエはまことに人の善い、たいした美人でないまでも、決して醜くはない少女であつた。おとなしやかな、まことに分りのいゝ少女で、時偶心持を悪くするやうな事があつても、たとへ涙を流しても、格別あとを引くではなかつた。彼女は實際私に戀をして居つた。私はやす〳〵と彼女と結婚し、彼女の父の職業を襲いだかも知れぬ。音樂に對する私の嗜好が私をして彼女を愛させたであらう。さうすれば私はフリブウルに、小さな、あまり立派でもないあの市に、しかし誠に善良なる人々のゐるあの市に落着いたことだらう。いろ〳〵の大きな樂みはなくなつたに違ひない。その代り私は最終の時まで安らかに暮したことだらう。私はこの交易に躊躇するものではなかつたことを、誰よりもよく知らなければならぬ。

私はニヨンへ歸らないで、ロオザンヌへ歸つた。私は其處で、最も廣く見渡されるところの、美しい湖水の全景を心行く限り見たいと希つた。知らぬ間に私を導いたところの、私の動機の大部分は、より堅實なものではなかつた。遠大なる目的は、減多に、私を働かせるだけの力がなかつた。未來の不定と云ふことが、いつも私をして、久しく斯かる計畫を、油斷の出來ない餌のやうに思はせた。もし希望がわけもなく抱き得られるものならば、私も他の人々同樣、それを依頼しただらう。しかしながら、長い間辛抱しなければならぬとすれば、私は御免を蒙つてしまふ。自分の手が屆けば、どんなつまらない快樂でも、天國の悦びよりも心を惹く。尤も、苦痛の從つて來るやうな快樂は例外だ。さうした快樂は私を誘惑せぬ。なぜと言つて、私はただ純粹の享樂をのみ愛するからである。また人は自ら悔恨の備へをなすと知るとき、純粹の享樂をなし得ないからである。

私は何處でもよいから、行き着くところがなければならなかつた。そして最も近いところが、最も善かつた。なぜと云つて、私は道に迷つたあと、夕方ムウドンへ來てゐたが、そこで遣ひあましの金を大方つかひ捨て、僅かに殘した十クロイツァは次ぎの日の晝飯にあてられた。その日の夕方ロオザンヌに近い小さな村へ來た時に私は宿錢一文も懷に持たず、どうなることゝも知らないで、とある宿屋へ這入つて行つた。私は隨分お腹がへつてゐた。それでも落着き拂つて食事を命じた。金に困つてゐるやうな樣子なぞ少しも見せないで、私は氣にかゝることもなげに床へ這入つて、やすらかに寢た。あくる朝食事をすませ、主人を呼んで計算をさせてから、私の拂ふべき七バッツのかたに私の胴衣を取らさうとした。殊勝なる主人はそれを斥けて、自分はこれまで、一度も人の着物を剝いだことがないと言つた。そしてこの七バッツを手始めにする氣にもなれぬから、胴衣は兎に角着てゐてくれ、金は都合のいゝ時に拂へと言つた。私は彼の溫情に動かされた。しかしその動かされやうは十分ではなかつた。そして、その後想ひ起す度毎に、より多く動かされたものである。私は信用の出來る人間に託して、厚く謝意を表して、その金を彼に送り屆けることを忘れなかつた。けれども十五年ばかり後、伊太利からの歸りみちに再びロオザンヌを通つた時、右の宿屋の名前をも、主人の名前をも忘れてゐたのが、私は非常に殘念だつた。どうにかして私は彼を訪ねたかつたのだ。眞の悦びを以て彼の善行を想起させ、その善行の甲斐あつたことを證明してやりたかつたのだ。ずつと大切なる盡力でも、より大なる虚飾によつてなされたものは、この殊勝なる人の純朴なる陰德に比べて、それほどありがたくないやうに思はれたのである。

ロオザンヌへ近くなつた時、私は自分の陷つてゐる窮境を思ひ、それを繼母に知らせないで脱却する方法はあるまいかと思ひ沈んだ。そして私は、かやうに徒歩で遍歷してゐる私の身を、アヌシイへ來た時の友人ヴァンチュウルに比較した。私はこの考へに夢中になつて、彼のやうな禮儀作法も才能もない事を思はず、ロオザンヌで小ヴァンチュウルを演じ、自ら知りもせぬ音樂を教へ、行つたこともない巴里の人間だと吹聽しようと云ふ氣になつた。私が宿をして貰へさうな樂師長の家も見當らず、且つ又、本職の藝人仲間にも這入りたくなかつたので、私はこの立派なる計畫を實現するに、どこかよさゝうな、安上りの宿屋はないかと云ふ質問を以てはじめたものだ。私は下宿人を世話してゐるペロテエと云ふ人の處を教へて貰つた。このペロテエは私にとつて、世の中の最も善い人のやうになつた。そして私を快く迎へた。私は前以て考へて置いたやうな、可い加減な身の上話をした。彼は私を推奬し、私の門弟を拵へるやうに盡力しようと約束した。そして私が儲けるやうになつたらば、その時はじめて金を貰はうと言つた。宿料として

支拂ふべき五エキュウは、誠に何でもない事だけれど、私に取っては容易ならぬ額だつた。彼はそれ故、半賄で我慢するやうに忠告した。半賄と云へば、お晝にはスウプ一杯きりだけれど、夕飯にはいろ〳〵と食はせてくれる。私はそれで我慢した。この憐れなペロテエは出來る限りの好意を以て、かうした便宜をはかつてくれ、尙ほその上にも私の爲めになる事は、少しも骨を惜しまずしてくれた。

若い時分には、あんなに澤山の善い人に會ひながら、なぜに私は年を取つてから、かうも善い人に會ふことがまれだらう。あゝした人達はなくなつたであらうか。さうではない。唯だ、私が今あゝした人達をさがさうとする社會は、あの時分に彼等を見出したところの社會でない。激烈な欲情がたまに出て來るだけな人々の間には、自然な感情がより屢々現はれる。上流の社會に於ては、その自然な感情が抑壓されてゐる。そして、感情の假面の下に、利己心または虚榮心のみが物を言つてゐる。

ロオザンヌから私は父の處へ書面を出した。父は私の包を送つてくれ、爲めになる忠告をしてくれた。私は今少しよくそれを利用すべきであつた。私が折々、前後忘却の情態に陷ると云ふことは、前に旣に述べたと思ふ。私は今一つ、最も著しい例證を擧げて置かなければならぬ。如何なる程度まで私の頭が變になつて、如何なる程度まで私がヴァンチュウル化されたかを想見する爲めには、私が如何に多くの馬鹿な眞似を同一時にしてゐたかを聞けば澤山だ。私はメロディイ一つ讀めない癖に歌の先生を以て自ら任じた。なぜと云つて、ル・メエトルの處で過した六ヶ月が、よしたためになつたところで、こんな大それた事を思ひ立たしむるには足りないものだ。ましてや私の習つた先生は、私をして勉强をいやがらせるのに十分であつたのだ。ジュネエヴ生れの巴里人で、新教國に於ける加特力教徒の私は、自分の宗教や自分の祖國と共に自分の姓名をもかへなければいけないやうに思つた。私は出來るだけ近く大なるお手本を眞似ようと思つた。彼がヴァンチュウル・ド・ヴィルヌウヴと云つたから、私はルソオと云ふ名前をヴォッソオルともぢり、自らヴォッソオル・ド・ヴィルヌウヴと名乘つたものだ。ヴァンチュウルはそれに就ては默つてゐたが、作曲が出來た。私は何にも分らない癖に、よつぽど上手のやうに誰にでも吹聽した。俗曲一つ作れもしないで、作曲家のやうな顏をしてゐた。そればかりではない。法律學の教授で音樂の好きな、自分の宅で音樂會を開くこともある、ド・トレエトラン氏と云ふ人に紹介された後、私は自分の技倆を見て貰はうと思つた。そして、實際に解つてでもゐるかのやうな厚かましさで、彼の家の音樂會に用ふべき、曲譜を拵へてやらうと云ふことにした。私はこの面白い製作に二週間を努力する

だけの根氣があつて、それを淸書したり、音部を指定したり、それがハアモニイの一大傑作でゞもあつたかのやうなすばらしい確信を以てそれを區分したりした。結局、この崇高なる作品を立派にすべく、――まるでうそのやうな話だが――その頃街中で歌はれてゐた、一つの面白いミヌエットオを終りにくつゝけた。それはあの頃名高かつた、

浮き者だよ！
したゝか者だよ！
あのクラリスが
お前の心を裏切るよ！

の言葉で、今に尙ほ人々が想ひ起すであらうと思ふ。

ヴァンチュウルは、このメロディイを低音で、もつと外の猥褻な文句で私に教へた。それで私は覺えてゐた。それ故私は、自分の作曲のお終ひにこのミヌエットオを低音で、文句を削つてつけたのだ。そして私は月世界の人々にでも信じさせようとするかのやうに、あつかましくそれを自分の製作物として持出した。

人々は私の作曲を演奏する爲めに集まつてゐる。私は各の人に音律や、演奏のしかたや、各部の注意を說き示す。私は大に努めてゐる。彼等の調子を整へる五六分間は、五六世紀のやうにも思はれた。すつかり準備の出來た時、私は綺麗な紙の卷物を以て、注意を喚ぶ爲めに二三度指揮臺を叩く。しいんとする。私は、おごそかに拍子を取りはじめる。一同が演奏し始める。……佛蘭西のオペラと云ふものが出來て以來、誰もこんな恐ろしい音樂を聞いたものはない。私の自慢の技倆は、どれほどのものと考へられたか知らないが、兎に角、實際の成績は、豫想されたらしいものよりも惡かつた。奏樂者は噴き出したいのをこらへた。聽衆は目を見張つた。そして耳に蓋をしたがつた。けれどもそれは出來なかつた。伴奏者のやつは、ふざける氣になつて、聾者の鼓膜の破れるまで搔き鳴らした。私はやつぱり我慢して、大粒な汗を流しながら續けて行つた。流石に氣が咎めて、逃げ出してしまふことも出來ずに立ち盡してゐた。私の絕望を申分なくする爲めに、そこにゐる人達が互に、さては私の耳にさゝやく。「こいつは全くたまらない」とも聞えた。「何と云ふ無法な音樂だらう」とも聞えた。「何と云ふ亂痴氣だらう」とも聞えた。――憐れなるジャン・ジャックよ、汝はこの恐ろしき刹那に於て希望しなかつた、汝の聲音が他日佛蘭西王とその全宮廷との前に、歎賞のつぶやきを惹起すべきことを。また汝の周圍なる棧敷に於て、最も愛らしき貴婦人達が、「何と云ふいゝ聲でせう。何と云ふ面白い音樂でせう。あの音が一つ〳〵胸に徹へるんだもの」とさゝやき合ふべきことを、汝は希望しなかつた。

しかし、皆の者を上機嫌にかへしたのはかのミヌエットオであつた。それを一拍子か二拍子ほど奏するや否や、四方から一度にどつと笑ひ出すのが聞えた。誰も彼も私の音樂趣味に祝辭を述べた。彼等はこのミヌエットオが有名になるべきことゝ、私の作品が普く歌はれるだけの値あることを受合つた。私の胸中の苦みを說明するのも、それが正當の報いであつたことを告白するのも無用であらう。

翌日伴奏の一人なるリュトオルと云ふ男がやつた來た。彼は私の成功を祝するほどにも皮肉でなかつた。自分の愚劣に對する痛切な意識や、自分の陷つた境遇に關する羞恥と悔恨と失望や、胸中の心配を隱して置けないと云ふことが、私を動かして、それを彼に打明けさせた。私は止度もなく涙を流した。そして私の無知を白狀するだけに止めて置かず、祕密を守つて貰ふことに賴んだ上で、一切の事を彼に話した。固より、彼は祕密を守ることを約した。そして彼は、何人にも想像し得られる如くそれを守つたのである。同じ日の晩にロオザンヌ中の人々殘らず、私が何者であるかを知つた。しかも不思議と、私に對しては知つてゐるやうな風をしなかつた。あの人の善いペロテエさへも。彼はこんな事があつても、引續き私を泊め、私を賄ふことをやめなかつたのだ。

私はまことに悲しい日を送つて行つた。かうした初舞臺の結果は、ロオザンヌを餘り心持の善い逗留地にしてくれなかつた。門人が群をなして來なかつた。女弟子は尙更のこと、市からはたつた一人も來なかつた。私は僅かに二三人の無器用な獨逸人を弟子にしてゐたが、彼等は私の無知に劣らないほどの薄野呂で、死ぬかと思ふまで退屈がらせた。さうして、私の下に附いてゐて、格別偉い音樂家にもならなかつた。私の呼ばれて行つた唯一の家では、小ざかしい小娘が面白がつて、少しも私に讀めない曲譜を澤山出して見せたり、どんなに演奏さるべきものか意地惡くそれを先生の前で歌つて聞かせたりしたものだ。私は前の華々しい演奏會に於て、自分の前にある自作の曲譜が、うまく演奏されてゐるや否やを判斷する爲めに、唯だの一瞬間もついて行けなかつたほどに（まして初めて手にした曲譜を讀むことなどは尙更の事だ）まるで無能力であつたのである。

こんなに情けない思ひをしてゐる間にも、私は二人の優しい友から折々受取つた消息に、甘き慰めを得たのであつた。私はいつも女性に於て、大なる慰藉の力を見出した。そして如何なる厄難の場合にも、一人の愛すべき人間がそれに同情してゐてくれると思ふほど、私の懊惱を和らげるものはない。しかしながらこの消息は間もなく絕えて、再び囘復されなかつた。その責任は私にある。私は自分の住所を變へたとき、それを彼等に通知することを怠つた。そ

して常に自分の事ばかり考へさせられて、間もなく私は彼等をすつかり忘れてしまつた。

私はだいぶ久しく「お母さん」の事を話さない。しかし私が彼女を忘れてゐたと思ふのは大間違ひだ。いつも私は彼女を思ひ、彼女に會ひたいと考へた。それはたゞに困つて居たからばかりでない。それよりも一層、感情の要求からだつた。彼女に對する愛着は、隨分熱烈なものであつたけれど、私が他の人々を愛することを妨げなかつた。勿論その愛しやうは別でもあるが。雙方ともにその美しさで以て私を引きつけたのは爭はれぬ。けれども、他の者に對する私の熱情は、その美しさだけに根差を置いたので、美しさがなくなれば自然となくなつた。「お母さん」の方は年を取つても、醜くなつても、私の熱情を減じさせるやうな心配がない。私がはじめ彼女の美しさに拂つた尊敬を、私の心は全然彼女の人格に移してしまつた。そして彼女が彼女自身である限り、如何なる外貌の變化も、彼女に對する私の感情を動かし得なかつた。私は自分が彼女の恩を受けたと知つてゐる。しかも實際にはそれを考へなかつた。彼女が私の爲めに盡してくれたと、盡してくれなかつたとは同じであらう。私は義務の念からして、もしくは利害關係からして、彼女を愛したのでない。私が彼女を愛したのは、彼女を愛するやうに生れてゐたからだ。私は他の婦人に戀をした時に、正直に言ふが、彼女を離れた。從つて彼女を思ふことは稀だつた。けれども彼女を思ふ私の悅びは、いつも一つであつた。そして戀であると戀でないとに拘らず、私が彼女を思ふとき、彼女を離れて眞の幸福はあり得ないと、感じないことは一度もなかつた。

隨分長い間消息を聞かなかつたけれど、私は彼女を全く失つたとも思はなければ、彼女が私を忘れ得るとも思はなかつた。私は私自らに言つてゐた、早晩彼女は、私が漂泊してゐることを聞き、私の處へ樣子を知らしてくれるであらう、私は彼女を再び見出すであらう、それは大丈夫であると。さうしてゐる間も、彼女の鄕里をさまよひ歩き、彼女の足の踏んだ街をぶらつき、彼女の住んだ家の前を通るのは、私にとつて樂しい事だつた。もつともそれは私の當推量たるに外ならなかつた。なぜと言つて私の妙な性分から、私は彼女の事を問ひたゞすだけの勇氣がなかつた。或はたゞ彼女の名前を口にするさへも、よく〳〵でなければなし得なかつたのだ。その名前を口にするさへも、彼女が私に抱かした感情を裏切るやうに、胸中の祕密を暴露するやうに、且つ又彼女に迷惑を及ぼすやうに私は思つた。そして、人が彼女の事を惡しざまに言つてきかせはしないかと云ふ心配も、その中にあるやうに私は思つた。彼女の出鄕に關して種々の噂があり、その行爲に關しても噂があつ

た。私が聞き度くもないことを話されることの恐ろしさから、私は寧ろ全然彼女に關して話されないことを希つた。

弟子の方も格別世話の燒けることもなく、彼女の生地もロオザンヌから僅か四里ばかりの處にあつたので、私は二三日をその地へ行つて見た。その二三日の間私が猛烈な感興の中にゐたのは言ふまでもない。ジュネエヴの湖水の景色と、その壯麗な岸邊とは、絶えず私の目に一種の名狀しがたき美しさを見せた。それは啻に形象の美からばかり來たのでなく、何かしらもつと力强く私の興味を惹きつけるやうなものから來たのである。私はヴォオの地方へ來る度毎に、そこに生れたワレンス夫人や、そこに住んでゐた私の父や、始めて私の心を燃え立たせたヴュルソン嬢や、私の少年時代に於てなされた種々の樂しい旅行を想ひ起した。そして、これ等のものゝ總てよりも更に神祕な强烈な、何等かのものを想ひ起したやうに思ふ。追うても追うても捕へることの出來ぬやうな、その爲めに私の生れて來た、平和な幸福な生活に對する欲求が、私の想像を煽り立てるとき、私はいつも湖水に近きヴォオの地方へ、あの邊の樂しい景色へ連れられて行く。私は全くこの湖水の岸邊に果樹園が欲しかつた。それより他にはなんにも要らなかつた。私は一人の信賴すべき友人と、一人の愛すべき婦人と、一頭の牝牛と、一艘の小舟とが欲しかつた。それらの物が獲られる迄は、この世の中に完全なる幸福を享受しないであらう。私は單にこの夢想されたる幸福を見出さんが爲めにのみ、度々この土地へやつて行つたあどけなさを笑ふ。私はいつもその土地の人々が、別して婦人等が、私の豫想したと全然異つた性格であるのに驚いた。それが私に如何なる矛盾と思はれたことぞ。その土地とそこを占めてゐるその住民とは、どうしても、相互の爲めに造られたものと思はれなかつた。

この美しい岸邊傳ひに、かうしてヴェヴェエへ行く道すがら、私はこの上もなく甘い憂愁に耽つた。私の心は數々の無邪氣な悅樂を望んで燃え立つた。私は感動して、歎息して、幼兒の如く啼泣した。足を留めて、岩の上に坐し、心行く限り泣かうとしたことも幾度ぞ。我が涙の水に落つるを見て嬉しがつたのも幾度ぞ。

ヴェヴェエでは「鍵」に宿つたが、その市に誰をも訪ねないで逗留した二日の間に、私はその市がすつかり氣に入つた。その愛着が始終私の旅行につきまとひ、遂には私の小說の主人公をまでそこへ連れて來させた。私は世の趣味より感情ある人々にすゝめたい。ヴェヴェエへ行き、その土地を見、その風景を賞し、舟を湖上に浮べて、自然がこの美しき土地をジュリイの爲めに、クレエルの爲めに、サン・プルウの爲めに作らざりしや否やを思へと。けれども彼等を

そこに捜さうとするな。——私は今自分の閲歷に歸つて行かう。

私は加特力であり、加特力として身を獻げた故に、何の祕密もなく何の不安もなしに、自分の歸依する宗教の儀式に連つた。日曜には、天氣さへよければ、ロオザンヌを二里ばかり離れたアッサンの彌撒祭へ出掛けて行つた。通例他の加特力の人々が、とりわけ巴里兒の縫箔師が私の連れだつた。名前は忘れたが、私のやうな農物の巴里兒でなくて、彼は正眞の、巴里生れの巴里兒で、最上の巴里兒だつた。しかも尙ほシャンパアニュ人のやうに親切であつた。彼は隨分とその故郷が好きで、私の故郷を同じうすると云ふことを疑ふまいとした。疑へば、それに就いて語るべき機會がなくなると恐れたからだ。副知事ド・クルウザス氏の處にも巴里兒の僕丁がゐたけれど、彼はあんまり交際のしやすい方でなく、巴里兒の資格もない奴が巴里兒だと稱しては、その故郷の光榮を汚すものと考へてゐた。彼は私の尻尾を押へてゐると云ふやうな顏付をして私に問をかけ、惡意のある笑を漏らした。彼は曾つて、マルシェ・ヌウフで有名なものは何かと訊いた。その時私が見苦しい逃げを張つたのは、想像の出來ることだらう。もつとも、その後私は二十年間も巴里に暮した故、今はよくこの市を知つてゐる筈である。しかしながら、今日同樣の問をかけられゝば、同樣に答にまごつくことだらう。そしてそんなことから、私が巴里へ行つたことのないものと推定されないものでもない。かくの如く我々人間は、立派な眞實を握つてゐるときすらも、まちがつた論據の上に依賴するやうになりがちのものである。

私はロオザンヌにどれだけ逗留したのか、精密に言へない。私はこの市で記憶に留まるほどの事件に遭遇しなかつた。唯だ知つてゐるのは仕事のない爲めに、そこからヌウフシャアテルに行き、その冬を過したと云ふことだ。ヌウフシャアテルでは少々成績がよかつた。そこでは弟子も出來、親切な友人のベロテエに借りをなくするだけの儲けもあつた。彼は少からざる貸しがあるにも拘らず、忠實に私の小荷物を送り屆けてくれたのであつた。

いつの間にか私は、教授しながら音樂を覺えた。私の生活はかなり幸福であつた。わけの分つた人ならば、それで滿足したかも知れない。けれども私の不安なる心は更に他の物を欲求した。日曜や、休みの日には、默想に耽つたり嘆息を漏らしたりしながら、近傍の野や森をぶらつき廻り、市を出ると日の暮れるまで歸つて來なかつた。一日ブウドリイで、晝飯をたべる爲め、とある宿屋へ入つた時、そこに一人の、髯の長い希臘風の紫の上衣を着て、毛皮の帽子を被つた人がゐた。風采なり態度なりには、なか〳〵品のあ

るその人も、その方言の言葉が殆んど通用しない爲め、どうした人なのか見當がつかなかつた。それは他の如何なる言葉より、伊太利語に近いものだつた。私には彼の言ふことがおほよそ呑込めた。そしてそれは私一人であつた。彼は僅かに手眞似で以て、宿屋の主人や土地の人達と交渉してゐた。私は伊太利語で彼に話をしかけた。すると彼には十分に通じた。彼は起ち上つて、嬉しさの餘りに私をかき抱いた。お互にかうして知己となり、その時以來私は彼の通辯人となつた。彼の食事は立派であつた。私のはあたりまへとさへも言ひにくかつた。彼は私を招いて一緒に食べさせた。私も遠慮なく御馳走になつた。飲んだり話したりする間にすつかり親密になり、御馳走の濟む時分には離れられなくなつてしまつた。彼の言ふところに依れば、彼は希臘正教の教長、エルサレムの管長で、今尼聖墓再建の爲め歐羅巴諸國へ淨財募集に來たのであつた。彼は露國女皇や皇帝からの立派な免許狀を私に見せた。尙ほその他にも數多の君主からの免許狀を持つてゐた。彼がこれまでの募集はらくだつた。けれども、獨逸へ這入つてはとても信じられない程の困難に遭遇するのだ。なぜと云つて彼は一言の獨逸語も、拉丁語も、佛蘭西語も話せない。そして專らその希臘語と、土耳古語と、リンガ・フランカ（數ケ國混合語）とに依賴せざるを得ない。それが今這入り込んだばかりの地方に於て甚だ役に立たなかつたからである。彼は私をその祕書官として、通辯人として連れて廻らうと言ひ出した。私はこの新しい地位に釣合はぬこともないくらゐの、新しく買つた紫の上衣をきてゐたけれど、尙ほ且つその外貌のみすぼらしさは彼をしてその提案の通過を豫想せしめた。その豫想はあやまらなかつた。契約は直ぐに成り立つた。私は何物をも要求しなかつたが、彼は多くを約束した。擔保もなく保證もなく、認知者もなくして私は彼の指導に身を委ね、翌日直ぐにもエルサレムへ向けて發足したのだ。

我々はフリブウル郡から遍歷を始めたが、そこでは格別の仕事をしなかつた。高僧としての品位が彼をして、乞食の眞似をさせ、一私人に訴へさせることをしなかつた。それ故我々は彼の任務を元老院に知らせて見るばかりで、その元老院は彼にまことに少額を與へたゞけだ。そこから我我はベルヌへ行つた。そこでは色々と手續が面倒臭く、彼の身分檢べだけでも一日では濟まなかつた。

我々の泊つた「鷹」と云ふ、その頃上等の宿屋には、いつも立派な人達がゐた。大勢の人達の向ふ食卓には、いつもなか〳〵の御馳走があつた。私は長い間まづい食物で我慢して來た故、その償ひを取らねばならぬと思つた。今その機會に遭遇してそれを利用した。管長閣下自らもなか〳〵の交際家で、大の御馳走好きで、陽氣な人で、話のわかる

者にはよく話した。隨分種々の事に通じてもゐたし、その希臘學に於ける造詣を歡談の間にうかゞはせることも出來た。一日食後の胡桃を割るとて、彼は過つてその指を深く傷つけた。そして夥しい血が流れ出た時に、彼はその指を列座の人々に示して笑ひながら言つた、Mirate, signori, questo è sangue Pelasgo と。

ベルヌでは私の斡旋が無駄でなく、豫期したより以上の好結果を奏した。私は私自身の爲めになら、到底あれだけ大膽になり、雄辯になれたと思はない。事件はフリブウルに於けるが如くたやすく進行しなかつた。（政府の重立つた人達との、長たらしい度々の商議も必要であつたし、彼が資格の檢定もたつた一日では濟まされなかつた。）遂に一件の落着したとき、彼は元老院へ入場することを許された。私も通辯人として彼に從つた。そして演說をさせられた。この時ほど意外に思つたことはない。一人々々とあんなに長い談判をしたあとで、何一つ話してなかつたかのやうに、今また別の挨拶を全體の人々に對してしなければならぬと云ふのは、思ひもよらぬ事だつた。私の當惑を察して貰ひたい。こんなはにかみやが公衆の前で、しかもベルヌの元老院で、不意に一分間の支度もなしに演說すると云ふ、——これはどうしても私を殺さなければならない筈だ。けれども私は尻込をしないでやれた。私は教長の任務を簡單明瞭に說明した。彼が目的とするところの淨財募集に、助力してくれた君主等の心掛を褒めた。元老院諸氏の競爭心を刺戟する爲めに、彼等の平生の善根から推して見て彼等にまけないほどの助力が豫期されると言つた。この博愛的の事業が、宗派の差別を問はぬ善行であることを言つた後、これに參與する人々の上に神寵のゆたかならむことを望んで結末にした。私は强ち、私の演說が注意を惹いたとは言ふまい。が兎に角それは好意を以て迎へられ、退場に際して教長は大層立派な贈り物を受け、更にその祕書官の才を祝せられた。それを通譯するのは、愉快な役目であつたけれど、言葉通りに取次ぐことはなし得なかつた。これは私が公衆の前で、主權者の前で演說した唯一のものだ。又恐らくは、大膽に且つ上手に演說した唯一のものでもあらう。同じ人間に於ける何と云ふ相違であらう。三年ばかり前、イヴェルドンに友人のロガンを訪れた時、私はその市の圖書館に寄贈した書物に對して、謝辭を陳ぶべきその市の委員を迎へた。瑞西人は辯舌に長じてゐる。これ等の紳士は私に向つても改つた挨拶をした。私も答辭を述べなければならぬやうに思つたけれど、それが思ふやうにやれないで、言ふ事がしどろもどろになつて、遂に行き詰つて　一同の笑を買はざるを得なかつた。本來內氣な性分ながら、若い時分は折々大膽であつた。年を取つてからは、すつかり駄

目だ。世間を知れば知るほど、私は世間を見習ふことが出來なかつたのである。

我々はベルヌを去つてソルウルへ赴いた。教長が獨逸の方へ這入つて行き、それから匈牙利、もしくは波蘭を經て歸路に就かうと思つたからだ。隨分長途の旅行であるけれど、彼の財布がだん〳〵と輕くならないで、むしろ重くなつて來る爲めに、彼はかうした迂回を格別氣にもしなかつた。徒歩でも馬上でも同樣に面白い私に取つては、かうして全生涯を旅行しつゞけるといふのが、この上もなく願はしい事だつた。けれども運命は、そんなにさきまで行かせなかつた。

ソルウルへ着いて第一にやつたのは佛蘭西の公使に挨拶すると云ふことだつた。我々の教長にとつて氣の毒なことには、その公使がド・ボナック侯であつた。土耳古の朝廷に管である。教長は十五分間ばかり謁見を許されたが、私はそれを許されぬ、公使にはリンガ・フランカも解り、伊太利語も、少くとも私くらゐに話せたからだ。我が希臘人が退出したときに、私は彼に從はうとしたけれど、引留められた。私の番が來たからだ。巴里兒と云ふ觸れ出しであつたので、私は巴里兒として公使の審判の下に立たされた。彼は私が何者であるかを問ひ、眞實を告白するように勸めた。私はそれを約束するとともに、内々の謁見を願つて聽かれた。公使は私を自分の書齋に導き、入口の戸をしめきつた。そこで私は彼の足下に身を投げて白狀した。私はよし約束をしてゐなくとも、あれくらゐの事はしたゞらう。なぜと云つて、胸中を打明けようとする不斷の要求が、刹那々々に私の思ひを唇に力で押し出してゐたのだから。そして音樂家のリュトオルに構はず自分を暴露したからは、今更ド・ボナック侯に隱し立てをすべき理由がなかつた。私の身の上話を聞き、それに伴ふ私の正直を見た彼は、非常に悅んで私の手を取り、公使夫人の處へ連れて行き、私の物語の概略を取次いで紹介した。ド・ボナック夫人は、懇ろに私を迎へ、私をあの希臘僧に連れさせてはならぬと言つた。そこで私は、私の身の振り方のきまるまで、公使館に引留められることゝなつた。私は自分に好意を有つてゐる教長の處へ行き、暇乞ひをしようと思つたけれど許されなかつた。人々は私の引留められたことを、彼に告げ知らせた。そして物の十五分と經たない内に、私の小さい行李が運ばれて來た。公使の祕書官ド・ラ・マルチニエエル氏が何くれと世話を燒いてくれることになつた。彼は私にとて定められた一室に案内して言つた、「この室はド・リュック伯の下に、君と同姓の名士がゐたものだ。君も心掛け次第では、ルソオ第一世に對してルソオ第二世と云はれるやうになれるんだぜ。」その時分夢想もしなかつたこの類似は、その目的を達するのに、どれだけの價を拂はなければならぬかゞ知れてゐたならば、あゝまで嬉しく聞えなかつたものだらうと思ふ。

ド・ラ・マルチニエエル氏の言葉は、私の好奇心を刺戟した。私は自分の前にこの室にゐた人の著作を讀んだ。そして人に言はれたお世辭から、自分に詩人的天分があると自惚れて、試みにド・ボナック夫人の頌歌を作つた。しかしこの天分は怪しいものだつた。私は折々、まあ〳〵可なりの詩を作つた。詩作は優美な言葉遣ひを練習したり、上手な散文を稽古するよすがともなるのであつた。けれども私は佛蘭西の詩に於て全我を沒入するほどの面白味を見出さなかつた。

ド・ラ・マルチニエエル氏は私の文體を見たがつた。そして私が公使に話した事を筆にするようにと求めた。私は彼に長い手紙を書いた。聞くところに依れば、それをド・マリアンヌ氏が、――久しい以前からド・ボナック侯の下にゐて、ド・クウルテイユ氏の公使になつたとき、ド・ラ・マルチニエエル氏の後を襲うたド・マリアンヌ氏が貯藏してゐるさうだ。私はド・マルゼルブ氏にこの手紙の寫しを一通拵へて貰はうと賴んだ。彼によつて、或は他の人によつて獲られるならば、私の『懺悔錄』の補遺として出版さるべきものの中にそれを收めて置かうと思ふ。

私の積み始めた經驗は、だん〳〵と私のロマンティックな希望に制限を加へた。一例を擧げれば、私はたゞにド・ボナック夫人に戀をしなかつたのみならず、彼女の良人の家にゐたところでつまらないと云ふことを直ぐに覺つた。ド・ラ・マルチニエエル氏が現職に居り、ド・マリアンヌ氏がそのあとに控へてゐる以上、私はたかだか祕書次官にしかなれない。それは少しも有難くなかつた。そこで私は、どうする積りかと問はれたとき、巴里に行きたいと云ふ切望を漏らした。公使にはこの考へが惡くなかつた。少くとも厄介拂ひが出來るからである。公使の通譯官なるド・メルヴェイユ氏に聞けば、彼の友人で佛蘭西の大佐なる瑞西人のゴダアル氏は、大層若いうちから役に就いたその甥の爲めにお相手になるべき人物をさがしてゐる。そして私が適任であらうと云ふ。かく無造作に出來上つた考へで、私の出立は決定された。私は再び旅行を思つて、しかも巴里までの旅行を思つて、たまらなく悅ばしかつた。私は種々の教訓と共に、二三通の書面と、百フランの旅費とを與へられて出立した。

私はこの旅行に二週間ばかりを費した。それを私の生涯の幸福なる時として數へることが出來る。私は若々しさと、健康と、十分なる金と、多くの希望とを有つてゐた。そし

て徒歩で、たゞ一人で旅行したのである。この最後の條件を好都合のものに數へたのは、私の性質を熟知せざる人々に奇異の感を抱かせるかも知れぬ。私はいつも樂しい幻像に伴はれた。そして私の想像の溫熱が、徒歩でたゞ一人で旅行する時より面白い幻像を生んだことはない。若し人から車上の空席をわかたれるならば、或は途上に話し掛けられるならば、私は自分が歩行の間に築き上げた蜃氣樓の倒壞せられむことを恐れて機嫌を惡くした。今回は私の考へも武張つたものだつた。私は軍人に仕へ、また自ら軍人にならうとしてゐた。私の軍隊的生涯を士官候補生として始むべきことが決定されてゐたからだ。私は已に士官の制服を着け、美しい白い羽の制帽を戴いてゐるやうに思つた。私の胸はこの誇らはしい考へで一杯になつた。私は少々ばかり幾何學と築城法とをかじつてゐた。私は伯父に技師を有つてゐたし、また少しは軍人の血も引いてゐた。近眼はやゝ厄介だけれど、それでも深く意に介するに及ばない。その缺點は沈勇と大膽とで補足されると考へた。私の讀んだところでは、シォンベエル元帥は非常な近眼であつた。して見るとルソオ元帥が近眼であるのも不都合はない筈だ。私はこの馬鹿な考へにのぼせてしまひ、たゞ軍隊や、城壁や、堡壘や、砲臺や、私自身を硝煙砲火の間に見た。自分が雙眼鏡を手にして、しづかに命令をしてゐるところを見た。しかしながら、心持のいゝ野原へさしかゝるや否や、森や小川を見るや否や、私はその著しい光景に嘆息を促された。かうした華々しい戰場の夢を見ながらも、私の心はそんな騷々しい事にむかないと思つた。そして、何故とも知らず私は、まもなく軍神の功績を斷念して、再びまた好きな羊小舍へ歸つて行つた。

ところで巴里へ這入つた時、如何ばかり私の豫想に反したことぞ。私がチュランで見た立派な外觀や、市街の美しさや、家並の規則正しく統一のついてゐる事が、巴里に對してはまるで異つた物を豫想させたのだ。私の幻の描いたのは、大きいだけに美しい市で、目を丸くして見るやうな、まぶしいほどの通りと、大理石や黃金の宮殿との外には何物も見えないやうな處であつた。ところがサン・マルソオあたりの場末へ這入つて行つたので、たゞ小さな、むさくるしい、惡臭を放つ街や、いやな穢い家や、山の神連のべちやくちやや、ふれ賣りや、車ひきや、立坊や、乞食なぞばかりが目に留まつた。これ等のものが始めに强烈な印象を私に與へたので、その後巴里で見た如何なる壯觀もその甲斐なく、爾來常に、この首都に滯留することのいとはしさを內々に感じてゐたものだ。その後巴里で過した月日は、すべて皆、その市を離れて生活すべき方法を講ずる爲めに費されたものだとも云へるであらう。人間の誇張をさらに

張誇して、人が彼に告ぐるところより多くを見るは、靈活に過ぐる想像力の結果である。私は素晴らしい評判を聞いて、古へのバビロンのやうに巴里を想像した。そのバビロンに對して描いた想像も、實際にそれを見たならば、同樣に割引をしなければならなかつたであらう。私は到着の翌日すぐに駈けつけたオペラに於ても同じ事を經驗した。その後ヴェルサイユに於ても經驗した。更にその後海を見た時にも經驗した。そして無闇と稱揚された事物を見る度毎に、いつでも私はこれと同じ經驗をするだらう。なぜと云つて、私の想像よりも豐富な物を見せると云ふのは、人力の及ばざるところ、自然力すらも困難とするところであるからだ。

私が紹介狀を貰つて行つた先き先きで、私の受けた待遇から、これならば出世が出來ると私は思つた。私がとり分けたよりにして行つて、とりわけ冷遇されたのはド・シュルベック氏と云つて、退職後バニュウに哲學的生活をしてゐる人だつた。私は度々そこへ訪ねて行つたけれど、水一杯すすめてくれた事はなかつた。それに比べると、通譯官の義妹のド・メルヴェイユ夫人や、甥の近衞士官なぞは親切にして呉れた。母子共に懇ろにしてくれただけでなく、その食卓にさへ招いてくれた。そして私は巴里にゐる間、屢々御馳走になつたのだ。ド・メルヴェイユ夫人は、綺麗な人のやうに思はれた。その髪は澤々として黑く、古風に縮らして額顳に垂らしてゐた。彼女には、外貌の美しさと共に滅びないものが、愛すべき性格が殘つてゐた。彼女には私の性格が氣に入つてゐるらしかつた。そして彼女は氣に入つてゐると云ふことを示す爲め、出來るだけの事をしたものだ。けれども誰一人彼女の手傳をするものがなかつた。間もなく私は、人々の同情が、單に表面上のものに過ぎないことを覺つた。しかしながら私は、佛蘭西人に對して公平の批判を下さなければならぬ。彼等は、屢々言はれてゐるやうに、そんなに約束を反古にするものでない。彼等がなすところの約束は大抵の場合誠實になされるのである。たゞ彼等の、如何にも同情を有つてゐると云ふやうな樣子が、言葉よりも餘計に人をだますのだ。瑞西人の粗末な追從は、たゞ愚者を欺き得るに過ぎぬ。佛蘭西人の態度は、それが單純である爲めに却つて人を誘惑する。普通に世間では佛蘭西人がしようと思ふ事を悉く言はないのを、一層面白く驚かさう爲めだと信じられてゐる。しかし私は更に進んで言ひたい。彼等は決して、好い加減な事を言ふ人間ではない。彼等は本來まめやかで、親切で、慈悲心があつて、その上人が何と云はうとも、他の如何なる國民よりも率直である。たゞし彼等は、氣輕でそして移氣だ。彼等は實際、口にするだけの心持を有つてゐる。けれどもこの心持は出

て來ると同時に引込んでしまふ。彼等は向き合つて話をする間は、本氣に人の相手をする。相手がゐなくなればけろりと忘れる。彼等は何物に對しても拘泥しない。總てが刹那々々のものである。

私は澤山の表面上の好意を示され、僅かなる實際上の世話をして貰つた。ゴダアル大佐は、私をその甥のお相手にする筈であつたが、とう〳〵その年とつたけちん坊として正體を暴露し、金はうなるほどあるにも拘らず、私の窮迫につけ込んで、只奉公をさせようと思つた。私は彼の甥に、實際の先生となるよりも、寧ろ無給の侍僕とならなければならなかつた。いつも彼の用向きを仰せ附かつて、その爲めに兵役を免ぜられて、しかも士官候補生としての手當で、言ひ換へれば軍人の給料で生活しなければならなかつた。彼が制服を臭れるとなつたのも、やつとの事であつた。彼のつもりでは聯隊から支給されたもので我慢させようと云ふのであつた。かゝる提言に對して、ド・メルヴェイユ夫人は、腹を立てゝそれを拒絶するようにと私に忠告した。彼女の息子も全く同意見であつた。他の口をさがして貰つたが、しかしなんにも見つからなかつた。さうかうする中に私はだん〳〵と困つて來た。旅費にとて持つて出た百フランももうこの上長くは續かなくなつた。ところで、仕合せと公使から少しばかりの送金が來たので、大きに助かつた。そして私がもう少し辛抱してゐたならば、彼は私を棄てなかつたに違ひない。けれども、うんざりしながら、ぢつとして待つと云ふこと、哀願すると云ふことは私に取つて不可能事である。私は元氣がなくなつて、それつきりの事になつてしまつた。この間にも私は憐なる私の「お母さん」を忘れないでゐた。けれどもどうして彼女を見附ける物語をきかされて、いろ〳〵と捜索の手をかして呉れたけれど、なか〳〵目的が達せられなかつた。最後に彼女の告げ知らせたところに依ると、ド・ワレンス夫人は二ヶ月ばかりも前に立去つたさうだが、サヴォアへ行つたのか、チュランへ行つたのか分らない。瑞西へ歸つたといふ噂もある。これだけでもう、彼女を追ふべく私をして決心せしむるに十分であつた。彼女が何處にゐるにもせよ、巴里で見附けるよりも、田舍で見附けるのを容易であると確信したからだ。

出發に先だつて私は、ゴダアル大佐にあてた書簡に於て私の詩人的才能を發揮した。その書簡に於て精一杯彼を罵倒したのである。私はこのなぐり書きをド・メルヴェイユ夫人に見せた。夫人は叱責すべき處であるのに叱責もせず、むしろ痛快な皮肉を讀んで腹を抱へて笑つた。息子も同樣に笑つた。ゴダアルに對して何等の好意をも有つてゐなかつたやうだ。一體ゴダアルと云ふ人物は人に好かれなかつたものだと見える。私は右の作品を送り屆けたかつた。彼等はそれをけしかけた。そこで一つの小包を拵へて、それに彼の名宛をかいた。そして當時巴里にまだ市内郵便がなかつたので、私はポケットに押込んで置き、通り掛りにオオクセルからそれを送つた。彼があの、精密に彼を描き出した讃美歌を通讀して、どんな顰面をしたかと思ふとき、今でも私は可笑しくなつて來る。その書き出しにはかうあつた。——

そも〳〵、汝毫祿爺さんよ、如何ならむ醉狂より、余をして汝の甥御をば教育せんとぞ思はしめたる……

この小さな一篇は、謂つて見れば拙惡な詩作ながら、多少の辛味もあり、諷刺の才をも見せてゐて、兎に角、私の筆から出た唯一の諷刺的述作である。私はかう云ふ才能を傾倒すべく、餘りに憎惡の情が足りなかつた。けれども、折々自分の辯解として書いた論爭的述作の或る物を見た人は、或は推定するかも分らない、——私がもしも喧嘩好きの性質であつたらば、私の攻擊者等がその味方に嘲笑者を有つことは稀だつたらうと。

私が已に記憶の外に逸し去つた、生涯の小事項に關して最も殘念だと思ふのは、私の旅行に就いて日記を附けて置かなかつたことである。私は自分獨りで、徒歩で旅行する場合ほど、多く考へ、生存し、生存を意識し、私自身であることは曾つてなかつた。歩行には私の考へを呼び醒し、元氣附けるものがある。靜止してゐては殆んど考へられぬ。私の精神が動き出す爲めには、私の身體が動き出さなければならぬ。田舍の見晴しや、なつかしき光景の連續や、新鮮なる空氣や、大なる食慾や、十分なる健康を私は歩行によつて獲得する。旅籠屋の自由なことや、自分の屈從を思はせる一切の物から、自分の境遇を想起させる一切の物から離れることや、それらの事が私の魂を釋放し、大なる思考の勇氣を私に與へ、幾分か無限なる事物の中に私を投じて、それを整理させ、選擇させ、拘束もなく恐怖もなく、心の儘に同化させようとする。私は傲然として全自然の上に君臨する。事物から事物へ渡り歩いて、私の胸はそれに快く觸接する物を結びつけ、またそれと一つになり、美しい影像に包まれ、甘い感情に醉うて來る。私はそれを保存する爲めに、それを心の中に描いて自ら樂む場合、如何に壯なる筆致を、如何に鮮かなる色彩を、如何に力强き表情を與ふることぞ。讀者諸君は言ふだらう、我々は、晩年に至つてはじめて書かれたものであるが、兎に角お前の著述の中に見たことだと。嗚呼若し諸君にして私の青年時代のそれを、私の旅行中に拵へたそれを、趣向を立てただけで、遂に書かずにしまつたそれを見たならば。……抗議して諸

君は言ふかも知れぬ、何故にそれを書かなかつたかと。併し、何故にそれを書くのかと私は答へるだらう。何故に私は、私が享樂したと云ふことを他人に知らす爲め、實際の享樂を殺ぐものぞ。私は自分が有頂天になつてゐるとき、何の讀者を、公衆を、否この全世界を頓着するものぞ。且つ又その場合紙や筆なぞを持つてゐるものか。若しこんな事に考へ及んだならば、何の價値ある感動を受けられようぞ。私は自分が觀念を有するに至る時を豫想しなかつた。觀念は自らにして來たので、私の求めたものでない。それは、或る時は絶えて來ることなく、或る時は群をなして來た。それはその數とその强さとを以て私を壓倒した。毎日十册づゝ書いても足りなかつたであらう。どこにそれを書く時間があるか。そして到着するや否や、私は腹一杯食べたいとのみ思つた。再び出掛ける時には、唯だ快い歩行を思つた。私には新しい天國が戸口に待つてゐるやうに感ぜられた。私はたゞ一刻も早くその中に駈け込まうとばかり考へた。

私も今話してゐるところの旅行の場合ほど、明瞭にこれを感じたことはない。巴里へ行つた時は、そこで始めなければならぬ用事ばかりを考へた。私は自分が這入らうと思つた進路へ飛込んだ。そして可なりの成績を擧げて行き着くところまで行き着いた。然るにこの進路は私の心情の愛

着するものでなく、現實の存在は空想の存在をくもらせた。ゴダアル大佐とその甥とは、私のやうな勇者にぶッつかつてみじめな役廻りとなつた。有難い事に私は今すべてのこれ等の障碍を取除かれた。私は思ひの儘に幻想の國に進み入ることが出來た。なぜと云つて、幻想だけが目の前に殘つてゐたからだ。又私はひどく幻想に耽つた結果、實際幾度となく道に迷つた。そして遂に迷ふことなしにゐたならば、餘程殘念がつたことだらう。なぜと言つて、リヨンで再び地面に足がついたと知つたとき、私はそこへ來なかつたことを喜んだに相違ないのである。

特に或る日の事、氣に入つた風景を近づいてよく見る爲めに、わざ〳〵本道を離れたところが、あまりの面白さにそこら中をぶら〳〵とやつてゐるうちに、今度は本當に路を失つた。幾時間か空しく彷徨したあとで、くたびれて、飢渴の爲めに死ぬやうになつて、とある百姓家へ這入つて行つた。見たところ一向に立派でもないけれど、私がその近くに見出し得た唯一の家だつた。私は此處だつてジュネエヴや瑞西に於けると同樣、慈善心のある人達は、旅人を懇ろにすることが出來るに違ひないと考へたのだ。私はその家の主人に、金を出すから食事をさせてくれと賴んだ。彼は酥泡を取り去つたあとの牛乳と粗い大麥パンとを出して、この他に何もないと私に言つた。私はがつ〳〵してその牛乳を呑み、そのパンやその他のつまらない物を食べた。しかしながら、そんな物では、へと〳〵に疲れ切つた私を元氣づかせるのに不足であつた。胡散らしく私を見てゐた農夫は、私の食慾からして身の上話の眞實なる事を推定した。彼は私が善良な、正直な若者であつて、彼を裏切りするやうな考へのないと云ふことを、十分に見ぬいた。そして直ちに豪所のそばの小さな墜戸を開き、中へ這入つて行き、間もなくまじり氣のない裸麥の黑パンや、已に切れ目は這入つてゐたが、非常にうまいハムや、一壜の葡萄酒をさげて歸つて來た。その葡萄酒を見ては、他の何物を見たよりも私の精神が引立つた。それに彼はかなり厚いオムレツを加へた。そして私は歩行者でなくては食べられないやうな貴食を食べた。私が代を拂はうと云ふことになると、彼の不安と心配が再び現はれた。彼はお錢を取らうとしない。妙に昂奮しながら押し返した。そして何よりも可笑しいのは、何故に彼が恐れたかを、私の想像し得なかつたことである。遂に彼は身慄ひしながら、「お役人」、「穴藏鼠」と云ふ恐ろしい言葉を口にした。聞いて見ると、彼は官吏の爲めに葡萄酒を、課税の爲めにパンを匿してゐたのだ。そして飢渴に瀕してゐるやうに思はれてゐないなら、財產殘らず召し上げられてしまふと云ふのであつた。こゝ題目に關して彼の語つたのは、思ひもかけなかつた事ばかりで、

つまでも消えないやうな印象を與へた。これがその後、不幸なる人民の被る災厄に對して、その壓抑者に對して私の心に生じた、驅逐しがたき憎惡の萠芽であつた。その男は可なり有福であるに拘らず、その額に汗して儲けたパンを食べることを敢てしなかつた。そしてその近所の人達と同樣の窮迫を裝ふより外に、破滅を免れる方法がなかつたのである。私は氣の毒に思ふと共に憤慨しながら、自然の豐かなる惠みを受けても、殘忍なる收税吏の獲物になつてしまふところの、この美しい田園の運命を悲みながらその家を立去つた。

これは私がこの旅行中に經驗した事柄の中、明瞭なる記憶として殘存する唯一のものである。今一つ思ひ出すのは、私がリヨンへ近づいた時、リヨンの岸を見る爲めに、道を延ばしたくなつたと云ふことだ。なぜと言つて、私が父と共に讀んだ小說の中、『ラストレエ』が忘れられなかつた。そして最も屢々想ひ起されるものだつた。私はフォレエズへ行く道筋を尋ねた。そして宿の主婦と話をしてゐる中、その地方には勞働者にとつていくらも口のあること、そこに澤山の鍛冶場のあること、そこで立派な鐵器の出來ることを聞かされた。この推奬が私の浪漫的な好奇心を忽ちに減殺した。私は鍛冶屋の群へ這入つて、ヂアヌやシルヴァンドルをさがすのでもあるまいと思つた。斯樣に私を落膽さ

せた正直なる婦人は、きつと私を錠前屋とでも思つたものらしい。

私は全く目的なしにリヨンへ行つたものでない。到着すると私はシャソットにド・シャアトレエ孃を訪ねた。ド・ワレンス夫人の友人で、私がル・メエトルと一緒に行つた時、夫人から添書を貰つたことのある人だ。だから私の知り合なのである。ド・シャアトレエ孃にきけば、彼女の友人は實際リヨンを通り過ぎたのであるが、ピエモンまで旅程を續けたかどうかは分らない。出發の際、サヴォアに逗留しなければならぬかどうかをきめてゐなかつたからである。ド・シャアトレエ孃は、何ならば手紙で問合してやらうと云ひ、リヨンでその知らせの來るのを待つのが何よりの上分別だと云ふ。私はこの提言に從つたけれど、流石に、大至急にして返事を聽かなければならぬ、貧弱な私の財布が久しく待たして呉れないとは、打ち明けて彼女に言へなかつた。私にこんな遠慮をさせたのは、彼女が私に對して冷淡であつたからでない。寧ろ彼女は非常にねんごろに私をもてなし、同等の者として私を取り扱つた。それが私の境遇を打ち明けて、友達附き合の身分から憐れなる乞食の身分に落ちる勇氣をなくさせたのである。

私はこの章に記された總ての閲歴の順序を、可なり明白に見渡せるつもりだ。然るに私は同じ頃今一つのリヨン行きをしたやうに思はれる。どんな場所でだつたかは忘れたが、兎に角大に困つたものだ。言葉では十分に述べられないやうな一小事件が、私の記憶の中にいつも蘇る。或る晩私は安飯屋で貧しい食事を濟ました後、どうしてこの窮境を脱却することが出來ようかなど思ひ耽つてゐた時、頭巾を冠つた一人の男が私の傍へ來て腰を下した。それは、リヨンではタフタチエ（織物師）と呼ばれてゐる絹織工かなんぞのやうな樣子をしてゐた。彼は私に話しかける。私は彼に答へる。そんな風に話が初まつて、十分か十五分ばかりお喋りをしてゐる中に、同じやうな態度でもつて、聲の調子を改めることもなくして、彼は一緒に樂しめることをしようと言ひ出した。私はその樂しみの性質を説明することゝ思つてゐた。しかるに一向そのあとをつゞけもしないで、彼はその實例を以て私に倣はせようとした。我々は殆んど摩合ふばかり近くにゐた。そして夜陰は、如何なる淫樂を彼が望んでゐたかを私に隱すほど暗くなかつた。彼は私の身體を犯さうとしたのでない。少くとも私にはさう見えなかつた。第一場所の都合も惡かつた。彼はたゞ、丁度彼の私に言つた通り、自ら樂しまうとしたのだ。そして私は私自ら樂しむと云ふやうに、各自で樂しむことを欲望したのである。これが彼に取つては極めて當然の事らしく、私も同樣に面白がるものときめてゐた。私はこの無恥にひどく驚

かされて、彼に返答もせず、いきなり起ち上つて、一生懸命に駈け出した。その男が追跡して來るかと恐れたからである。私の周章やうは一通りでなく、サン・ドミニク街をぬけて宿の方へ歸るべきところを、岸についてひた走りに走り、木橋のむかうへ來てはじめて停まつた。そして犯罪人でゞもあつたかのやうにがた〳〵と震へてゐた。私も亦その惡癖をもつてゐたのであるが、この記憶がその後ふつつりと私をそれから遠ざけてしまつた。

私はこの旅行に於て、ほゞ同じやうな、より危險なる今一つの出來事に會つた。嚢中剩すところ幾許もなしと知つて、私は非常にきりつめてやつてゐた。宿では、だん〳〵食事をしなくなり、やがて全くしなくなつた。飲食店へ行けば、宿で二十五スウもとられるところを、五六スウで濟ませたからだ。もう食事をしなくなつたので、寢ることも出來ないやうに私は思つた。費用が澤山にかゝるからでない。主婦さんの儲けになるだけのものをやらないで、一室を占領することをきまり惡がつたのである。時候は丁度よかつた。或る晩非常に暖かつたとき、私は街中で夜を明かさうと決心した。そしてとあるベンチに陣取つてゐたとき、一人の僧が通り掛りに私の寢入つてゐるのを見、近づいて來て、宿がないのかと私にきいた。私は彼に身の上を打ち明けた。彼はそれに動かされたらしかつた。私の側に腰を下した。そして我々はお喋りをした。彼は快く語つた。彼の語つた總ての事は、私に彼はまことに善い人だと思はせた。私が彼を善く思つてゐると認めた時彼は私に言つた、――彼の住居は廣くない、たつた一室しかない。けれども彼は私を往來に寢さして置けるものでない。さればとて別に宿を索さうにももう遲い。だからこの一夜を彼の床の半ばを私に分たうと。私はその提言を容れた。私の爲めになりさうな友人を一人得られると云ふ希望を有つたので。我々は彼の宿へ行く。彼は灯を點ける。その室は小さいながらに清楚としてゐる。彼はまことに鄭重にもてなして呉れる。玻璃の瓶からブランデエに漬けた櫻實を取り出した。それを二つづゝ食べて、それから寢床へ這入つた。

この男は救護院に於けるあの猶太人と同じ性癖を有つてゐた。けれども彼はあんなに露骨に示さなかつた。私が彼の目的を覺るかも知れないと云ふ心配から、私に防衛させることに躊躇したのであるか、それとも實際、その目論見の遂行に熱心でなかつたのか、彼はそれを正面から私にきり出すことをしなかつた。そして私が不安を感ずることのないやうにして、私を挑發しようと努めた。もはや初めての事でもなし、私は直ぐに彼の目論見を感附いて戦慄した。如何なる家に、如何なる人の手の下に置かれてあるかを知らぬ故、下手に騒ぎ立てたりなんかしては、どんな事にな

るかも知れぬと恐れたのである。私は彼の願望を會得しないやうな風をした。けれども、彼の愛撫が非常に煩はしかつたかのやうな、この上やられてはたまらぬと云ふやうな顏付を見せたとき、彼も遂にまた私を苦めることをしないやうになつた。そこで私は、出來るだけの柔和と決心とを以て、彼に對して惡意あるやうに思はせないで話をし、自分の前の經驗を持ち出し、現在の不安を辯解した。その前の經驗を、私は率直なる反感と嫌惡とに充ちたる表情を以て語つた。それが彼の心を動かしたやうに思ふ。彼は全くその不潔な目論見を斷念した。我々はそれからあと安らかに夜を明した。彼はいろ〳〵の面白い事や、氣の利いた事を私に話した。彼は賤劣ながらも、決して才のない男ではなかつた。

翌朝、格別いやな顏を見せない僧侶は、朝飯の事を話して、宿の娘に、一人の綺麗な娘に何か持つて來て貰はうとかけて見たけれど、まるで頓着して貰へなかつた。我々は待ちに待つたが、何も持つて來ぬ。遂に我々はその少女達の室の方へ行つた。彼等は僧侶をまことに無愛想な顏で迎へた。私は一層無愛想に迎へられた。年上の少女は私の方に脊をねぢ向けて、その際尖つた踵で以て、肉刺の爲め靴をぬいでゐた私の趾を踏みつけた。もう一人の少女は、私のかけようと思つた腰掛を、後からだしぬけにひつたくつた。彼等の母は、窓から水をこぼすとき、私の顏へ飛沫をかけた。私が腰を下すところは何れも皆、物を捜す爲めに逐ひのけられてしまふ。私は生涯の間、あんな光景と云ふものは曾つて見た事がない。私は彼等の侮蔑的な眼付の中に、憤怒の焰の燃えてゐるのを明かに見た。私は何が何だかさつぱり了解しなかつた。私が驚愕して、當惑して、彼等一同を氣がふれてゐるんぢやないかと思つて、眞面目に薄氣味わるくなりかけたとき、見も聞きもしないやうに見えながら、朝飯の物にならぬことを洞察した僧侶は、その室を立去らうと決心した。そして私も急いで彼に從つた、この狂人共から逃れる事を大に喜んで。出掛けに彼は、カフェエへ行つて朝飯を喫べようと申し出た。私は隨分腹も減つてゐたけれど、格別繰り返しても呉れなかつたその申し出でを、承諾することをしなかつた。そして我々は第三か第四の街角で別れてしまつた。私はあの忌々しい家に屬する總ての物が、目の前になくなるのを嬉しく思つたし、彼はまた、そんなに容易くもう一度あの家を想ひ起せないくらゐ、私を遠くへ連れ出したことを非常に滿足に感じたことだらう。私は巴里でもその他の市でも、上述の二つの場合の如き經驗をしなかつたので、リヨンの住民に對して、有利ならざる印象を得た。そして、私はいつもこの市を、

歐羅巴の中最も風儀の惡い市として見たのである。

私がその土地で陷つたところの災厄の記憶が又、この市に對して快い感じを有たせない。私が他の人達のやうであつたなら、私に借金する才が、宿へ借りを拵へる才があつたなら、私はたやすく自分の窮境を脱したであらう。けれどもそこに、私の嫌惡と相讓らないほどの、大なる拙劣があつた。その二つのものが如何に大きかつたかを想像するには、私が殆んど全生涯を窮迫に過ごして、その日その日のパンにも差支へるやうになつた後も、なほ且つ債權者に催促された金ならば、即座に拂つたと云ふ事實を知れば、十分である。私は遂に彌縫的借財をすることを知らなかつた。そしていつも、借りを拵へるよりも寧ろ、窮迫をそのまゝに苦んでゐた。

私がリヨンで度々やらなければならなかつたやうに、街中で夜を明かすなんぞは、窮迫をそのまゝに苦んだと云へるであらう。私は僅かばかりの殘つた錢で、宿料を辨ずるよりも必要なパンを買はうとした。眠くて死ぬると云ふ危險は、飢死ほどの危險でなかつたからだ。かうした悲しい境遇に居りながら、不思議と私は呑氣であつた。將來に對しては何の心配もなく、ド・シャアトレエ孃が受取るべき報道を待ちながら、靑天井の下で、地面の上に、或は腰掛の上に横たはつて、薔薇の床にでも這入つたやうに安らかな夢を私は結んだ。特に記憶してゐるのは、市をはなれて、ロオヌ川かサオヌ川かに添うた街道で、そのどちらだつたかは思ひ出せないが、樂しき一夜を過したと云ふことだ。片側には高臺がかつた花園が街道を縁取つてゐた。それは隨分暑い日であつた。夕暮は涼しくて、露は萎びた草を活きかへらせた。そよとの風もない、靜かな夜で、空氣は冷たくないほど鮮しかつた。太陽は沒落のあとへ深紅の雲を殘し、それを照り返して水が薔薇色に燃え立つた。數知れぬナイティンゲエルは高臺の樹にとまつて鳴きかはした。私は恍惚たる悅びを抱いて彷徨いた、その總ての享樂に全精神を打ち込んで、たゞ聊か、私ひとりで享樂しなければならぬことを殘念に思ひながら。甘い空想に沈湎した私は、夜遲くまで歩き廻つて疲勞を覺えなかつた。しかしながら遂には足がくたびれて來た。私は眞の樂しさを以て、壁龕みたやうになつてゐるところの石段に身を横たへた。樹梢は私のベッドを覆うた。丁度私の上に一羽のナイティンゲエルがゐた。その歌を聞きながら私は眠つた。私の眠りは甘かつた。甘い眠りはより甘く覺された。それは朗かな明るい日であつた。目を開けて見ると、川や、綠の草場や、美しい景色が見えた。私は身を起して眠氣をふりすてた。私は空腹を感じた。そして極く〳〵陽氣に市の方へ向つて歩いた。まだ殘つてゐるシイブラン二枚で、うまい朝飯に有り附かうと

決心して。私はまことに快活で、途上ずうつと歌ひ續けた。私の諳誦してゐた『トムリイの溫泉』と云ふバチスタンの小曲を歌つたことをさへ記憶する。善きバチスタンとその善き小曲とに祝福あれ。それは豫想したよりも結構な晝飯を食べさせ、全く豫想しなかつたところの、更に結構な晝飯を食べさせた。私が夢中になつて歌ひながら歩いてゐる最中に、私の後ろから誰かゞ來るやうに思はれた。振り返つて見ると一人のアントナン派の僧が、私の後ろについて來て、面白さうに私の歌を聞いてゐたらしい。彼は私の方へ近づいて、私に挨拶して、音樂が出來るかと私にきいた。私は「少々ばかり」と答へた、「大に」出來ると云ふやうな顏をしながら。尙ほ問ひ續けられたとき、身の上話の一部を彼に語つた。彼は、曲譜を寫したことがあるかと尋ねた。「度々」と私は答へた。そしてそれは本當だ。私は何よりも、謄寫によつて音樂を學んだのである。「ぢや」と彼が私に言つた、「それぢや、私と一緒にお出でなさい。三四日ばかり賴みたい事がある。若し私の室を去らないでゐて呉れるなら、その間は不自由をさせますまい。」私はそれを承諾して彼に從つた。

この僧はロリションと云つた。音樂が好きで、解つて、友人達と拵へた音樂會で歌つた。それだけならば差支へのないことだ。けれどもこの趣味は、幾分隱蔽しなければならないやうな熱情となつたと見える。彼は私を私の居るべき小さな部屋へ導いた。そこで私は彼自身の寫した澤山の曲譜を見出した。彼は私に謄寫すべき他の物を、別して私の歌つた小曲を與へた。その小曲は彼自身近々の内に歌はうとするのであつた。私はそこで三日か四日を過した、食事の時間を除いては寫し通しに寫して。もつとも私の食事には時間がかゝつた。生涯の中あれほど空腹を感じたこともなく、あれより以上に賄はれたこともないからだ。彼は私の食物を彼自身臺所から運んだ。平生の食卓にあれだけの物が陳ぶとすれば、なか〳〵御馳走をたべてゐるものである。私は生涯の中あんなに食事を樂んだことはない。そしてこの御馳走が非常に時を得たものであつたことも承認されなければならぬ。私は、殆んど骨離れがしさうになつてゐたからである。私は食事をする時と丁度同じほど本氣になつて働いた。そしてこれだけ言へば澤山だ。なぜと言つて私は、勤勉なだけそれだけ注意深くなかつた。數日の後、ロリション氏と街上に會つた時彼は私に言つた、私の寫した曲譜が演奏し得られなかつたと、その中に澤山の遺漏や、重複や、轉倒があつたと。私がその後この職業に身を投じたのは、たしかに柄にない事だつた。それは私の曲譜が宜しくなかつたといふわけでない、私が手綺麗に寫さなかつたと云ふわけでない。たゞ長い勞作の煩はしさが私の心を散らせて、私は曲譜をかくよりも書きつぶしをするのに餘計に時間を費すやうになる。餘程氣を附けてゐないと、演奏の出來ない物を寫し上げるやうになるのである。斯樣に私は、うまくやらうと思ふ事をまづくした。そして急いでは事を仕損じた。それにも拘らず、ロリション氏は、最後まで同樣の溫情を以て私を待遇し、別るゝに臨んで、呉れるにも當らない一エキュウをさへ呉れた。それで以て私は、再び身を立てた。なぜと言つて、それから數日の後、シャンベリイに逗留してゐた「お母さん」からの消息もあり、そこへ行くべき喜ばしい旅の費用も來たからだ。その後も私は幾度か、隨分金錢上の難儀をしたけれど、ひもじい目をしなければならぬほど困つたことはない。私は攝理の加護に對する感謝の情を以て、この時期を記錄する。これが私の生涯に於て、貧窮と飢渴とに苦しんだ最終である。

「私はお母さん」がド・シャアトレエ孃に託した用向の濟むのを待ちながら、尙ほ七八日ばかりをリヨンに留つた。その間私は前よりもしげ〳〵と、ド・シャアトレエ孃を訪れた。なぜならば、私は今や彼女の女友に就いて話し得られると云ふ樂みがあつたし、もはや、これ迄隱さなければならなかつた自分の境遇を、省みなくともよかつたからである。ド・シャアトレエ孃は若くもなく美しくもなかつたが、やつぱり人好きのする處はあつた。彼女は交際ひ易く、氣の置けない人で、またその才氣が一層の光彩を添へた。彼女には、人間の研究に資するやうな觀察の嗜好があつた。私がさうした嗜好を有つやうになつたのは、そも〳〵彼女の賜物である。彼女はル・サアジュの小說を、とりわけ『ジル・ブラス』を愛讀した。それを私に話しても聞かせ、貸しても呉れた。私はそれを面白く讀むには讀んだが、あゝした種類の讀物に適當するほど成熟してゐなかつた。私にはもつと大袈裟な感情を取扱つたものが向いてゐたのだ。かくの如く私は、ド・シャアトレエ孃の客間で、まことに面白く且つ有益なる時間を費した。才氣のある婦人と氣の利いた會話をすると云ふのは、靑年の分別を養ふ上に術學的な讀書よりも、まさつたものであるに相違ない。シャソットで私は他の塾生や、その女友と、別してセエル孃と云ふ十四歲の少女と知り合つた。當時その少女に對して格別の注意をも拂はなかつたが、八九年經つてから熱烈に纏着した。それは非常にチャアムのある少女であつたから無理もない。

間もなくまた、「お母さん」に會へると云ふ望みに身を打込んで、私は一時おはこの幻想に耽ることを控へてゐた。私を待つてゐる實際の幸福が、空想の中にそれを求めるの愚を學ばせなかつたからである。私はたゞに彼女を再び見出すと云ふだけでなく、彼女のそばで、彼女の力で、愉快な境遇に置かれると云ふわけなのだ。なぜと言つて、彼女

の報道するところに依れば、彼女が私の爲めに見附けて呉れた職業は、きつと私に向いてゐるだらうし、また彼女から私を離れさせもしないだらうとあるからである。私はその職業が、どんな物であらうかを、いろ〳〵に想像して見たけれど、また想像しなければならなかつたが、容易に見當がつかなかつた。私は樂々と道中をするだけの金を有つてゐた。ド・シャアトレエ孃は馬を用ゐさせようとした。私はそれを斥けた。それは宜しきを得たものだつた。若し馬を用ゐたならば、私の生涯に於ける最終の徒歩旅行の樂みを失つたことだらう。なぜと言つて、モチエエにゐた間、度々その近郊に試みた遠足は、旅行と云ふほどのものでなかつたからだ。

私の空想が、順境より逆境に於て活躍すると云ふのは妙な事だ。周圍の物が微笑するやうになると、不思議に空想が働かなくなつて來る。私の頑強な心情は事實の前に屈することをせぬ。修飾することが出來なければ創造しようとする。實際の事物は、高々ありのまゝにしか現はれて來ぬ。私の心情は想像の形象をのみ粧ふことを知る。私が春を描く爲めには、それが冬の事でなければならぬ。私に美しい風景を寫させようとするならば、壁を以て私を取り圍まなければならぬ。そして度々自分でも言つた通り、私が若し、バスチイルに禁錮せられるならば、最も善く自由を畫き得るだらう。私はリヨンを去るとき、唯だ愉快なる將來をのみ前途に望んだ。私はまた滿足を感じてゐた。それは私が巴里を去るとき不滿足を感じたと同樣に理由のない事でない。もつともこの旅行に於ては、あの旅行に於て恥つたやうな樂しい夢想には恥らなかつた。私は朗かな心持でゐた。が、たゞそれだけであつた。私は再び見るべき優れたる女友に胸を慄はしながら近づいた。彼女の側に住むと云ふ悦びを、豫め享受したけれど、夢中になつてしまふやうなことはなかつた。私は絹間なくそれを待ち設けた。それは私にとつて何等の新しいチャアムを有つてゐないかのやうに思はれた。私は私に割り當てられた仕事を、それだけが大切な事でゞもあつたかのやうに心に懸けた。私の考へは穩健着實なものであつて、架空なものでなく、突飛なものでなかつた。私の通り過ぎるありのまゝなる事物が私の目を惹いた。私は周圍の景色に注意を拂ひ、樹木や、家屋や、小川などを打眺めた。四辻に立つてはいづれに行くべきかを考へた。迷ひはしないかと恐れたが迷はなかつた。一口に言ふと、私はもはや天上界をうろ〳〵してゐないで、私のゐる所にゐたり、私の行くべき所にゐだりした。そしてそれより先きへは出なかつた。

私の旅行を細說するのは、旅行その物をするのと同じだ。私はなか〳〵行き着くことが出來ぬ。愛する「お母さん」

に近づけば近づくほど、私の胸は悦びに波立つた。しかも私はより速かに行くのではなかつた。私はゆる〳〵と歩くのが好きで、氣の向いたところには歩みを止めた。漂泊的生活は私にとつてなければならぬものである。美しき天氣に、美しき地方に、急ぐこともなく、行き着くところに樂みなものを待ち設けながら、徒歩で以て旅行をするのは、いろ〳〵の生活の中で最も自分の趣味に適つたものだ。そして、私の美しい地方と云ふのは例の通りのものである。平坦な土地は、いくら他の美しさがあつても、美しい土地のやうに思はれなかつた。私には谷川や、岩や、樅の木や、暗い森や、山や、登るにも降るにも骨の折れる嶮しい山路や、膽を冷させるやうな兩側の斷崖がなければならぬ。私はシャンベリイに近づいた時、この悦びを遺憾なく經驗した。バア・ド・レシェルと云ふ斷崖から遠からぬ所に、シアイユと呼ぶところの岩を切通した道路の下に、何十萬年かかゝつてその河床を穿つたらしい小さな河が、ぐわう〳〵と渦を卷いて流れてゐる。道路のわきには怪我をさせぬようにと欄干を設けてある。それ故私は下をのぞいて見て、快く眩暈を感ずることが出來た。なぜならば、嶮しい所が好きなのにも拘らず、私はそれに對して眩暈を感ずる、而も私はその場合安全であると意識するや否や、眩暈の感じをこの上もなく悦んだからである。欄干の上にずつと乘出して、下をのぞきながら私は、幾時間も〳〵そこにゐた。そして白い泡の湧き立つのを見たり、靑い水の流れるのを見たりした。そのざわ〳〵と云ふ音が、私より百尋も下に、岩から岩へ、灌木から灌木へ飛ぶ鴉や、肉食鳥の叫びの間に聞えた。傾斜の規則正しい、藪が石をくゞらせる位にまばらな處に、私は手頃の石を集めて來て、欄干の上に積み上げた。それから一つ〳〵投げ下して自ら樂しんだ。石が絶壁の底へ屆くまでに、轉がつたり、跳ね上つたり、片々に碎けたりするのを見て樂しんだ。

シャンベリイへより近くなつて、別の種類の同樣の面白い光景を見た。道路は私の目に映じた最も美しい瀑布の下を通つてゐる。山が無暗に出張つてゐるので、水は弓狀をなして落ちかゝる。しかも岩壁との間を通りぬけられるほどに離れてゐる。隨分身體をぬらさないで通られる。しかしよつぽど氣をつけないと、私のやうに騙され易い。なぜと言つて、恐ろしく高い處から落ちるので、水が分れて霧雨のやうになる。うつかり、その霧雨に近寄り過ぎると、忽ちにして、づぶ濡れに濡れるのだ。

遂に私は到着した。私は再び彼女に逢つたのである。が、彼女はたゞ一人でなかつた。私の這入つて行つた時、經理監督が彼女の側にゐた。彼女は私には一言葉も掛けず、私の手を取つて、總ての心を悦ばすところのあのしとやかさで、

私を彼に紹介せた。「これがあの、お話した青年でございます。お役に立ちますれば、どうか何分とも。さうすれば私はもう何にも心配してやらなくともよいのです。」それから私の方へ向いて彼女は言つた。「あなたはこれから王様の下に仕へるのです。經理監督さんに御禮を仰しやい。あなたの職業を拵へて頂いたんですから。」私はなんにも言はず、何の事だか分らないやうな心持になつて目を圓くした。再び蘇つた功名心が私の頭を混亂させ、夙くも自ら小さな經理監督を以て任じさせたものだらう。私の地位は、話をきいた時に想像したほど立派なものでなかつた。しかしながら差當つて衣食の料が豐かに得られた。私にとつてはそれがなか〳〵有難かつた。その職業は、次ぎのやうなものだつた。

ヴィクトル・アメデ王は、先年の戰爭の結果に考へ、その家督地の位置に考へて、それが他日掠奪されずには濟むまいと判斷したので、いつその事、自分から出るだけの甘い汁を搾りだしてしまはうと思つた。そこで貴族共に增稅しようと決心した王は、先年その全領土を通じて一體に石盛の改正を命令した。かうして收稅をより公平にし、より多額にしようと云ふのであつた。父の時代に着手されたこの事業は、子の時代になつて成就した。測量師と書記とを合せて、二三百人の者がこの事業に用ゐられた。そして右の書記の中に「お母さん」は私の地位を拵へてくれたのだ。それはたいして儲けにもならなかつたが、兎に角その地方で暮すのには樂だつた。たゞ困るのは、この仕事がいつまでもないと云ふ事だ。けれども、それより氣の利いたものに進むべき踏臺にならぬことはない。そして「お母さん」はそれを考へて、經理監督に特別の引立を賴み込み、現在の地位のなくなつた時、もつと永續的の職業に轉じさして貰ふようにと骨折つた。

到着後數日にして私はその役に就いた。仕事は骨の折れるものでもなく、容易く私は呑込んだ。かくして私は、ジュネエヴを去つてから定めなき漂泊生活の四五年を、馬鹿馬鹿しくも苦しくも過したあと、始めて眞面目な方法で衣食することを始めたのである。

私の少年時代に關するこれ等の長たらしい記事は甚だ子供らしく見えるであらう。それは何とも殘念なことだ。或る點では、もと〳〵大人びて生れながらも、私は長い間子供であつた。そして、或る點に於ては今日も尙ほ子供である。私は讀者諸君に、大人物を描き出してお目にかけると云ふ約束をしなかつた。ありのまゝに私自身を寫し出さうと約束したのだ。そして、大人になつてからの私を知るには、青年時代の私を知らなければならぬ。一體に實際の事物がその回想ほどに深い印象を與へず、すべての觀念が影像の形を取る故に、私の頭腦に印刻せられた第一の形狀は、そのまゝに保存されてゐて、あとから這入つて來た印象も、それを拭ひ消すと云ふより、寧ろそれに結び附いたものである。そこには情緒と觀念との或る連續があつて、各々次のものを制限してゐる。そして後のものを正當に判斷する爲めには、前のものを知ることが必要だ。私は結果の連續を示す爲め、到る處に第一原因を明かにしようと努める。私の心を、謂はゞ赤裸々にして、讀者の眼前に提供したい。從つてあらゆる見地から見えるやうにし、常に明白に見えるやうにし、如何なる運動をも漏らさず見えるやうにして、讀者諸君自ら、それを招致したところの、第一原理に對して、批判を下させることに心を用ゐるのだ。

若し私が單に結果をのみお目にかけて、「これが私の性格である」と申したならば、諸君は恐らく、私が諸君を欺くものとお考へにならないまでも、少くとも、私自らを欺くものとお考へになるだらう。けれども私の遭遇した總ての事を、私がしたり、考へたり、感じたりした總ての事を樸直に解剖說明する場合、ことさらにたくらまない限り、私は諸君を誤謬に陷らせることが出來ぬ。よしたくらんでも、こんなやりかたではたやすく成功しないであらう。それらの個々の事實を結合し、その結合からして生ずるものを判定するのは、諸君の權限內にあることだ。歸結は諸君自身のものでなければならぬ。その場合諸君が誤るならば、その誤りは諸君自身のものだらう。もつとも私の報告が正直だと云ふだけでは十分でない。それは同樣にまた精密でなければならぬ。事實の輕重を批判するのは私の任でない。私はたゞ一切を暴露してその選擇を諸君に委せなければならぬ。この事に關して私は、從來大膽に出來るだけの努力をした。これからも同じ態度を續けよう。けれども中年の回想は兎角少年時代のそれのやうに潑剌としてゐない。私はこれまで少年時代の回想を出來るだけ利用して來たが、中年時代の回想に這入つてから、また同じやうな事を續けてゐるのでは、氣短かな讀者諸君は退屈するかも知れぬ。しかし私自身はその爲めに、私の勞作をつまらなく思はないだらう。私はこの企てに於て唯だ一つの事を恐れる。それは多くを言ひ過ぎるとか、僞りを言ふとかのやうなことでない。むしろ、總てを言はないでしまふこと、眞實に關して沈默すると云ふことだ。

（五）

私が前述の通りシャンベリイへ着いて、王樣の石盛改正に從事しはじめたのは、たしか一七三二年のことである。私は二十一の年を迎へてゐた。年の割合に、智力の方は發達

してゐたけれど、是非の判斷はおくれてゐた。そして然るべき指導者が必要であつた。なぜならば、數年間の經驗も尙ほ根本からして私の浪漫的な空想癖を癒さなかつた。そして隨分苦しみもしたけれど、まるでそんな月謝を拂つたことがないかのやうに、世の中をも人間をも知らなかつた。

私は自分の家に、——卽ち「お母さん」の家に起臥した。けれどもアヌシイにあつたやうないゝ室はなかつた。花園もなく、小川もなく、田舍の景色もない。彼女の住つてゐた家は、暗い陰氣な家で、私の室は最も暗い陰氣な室だつた。障壁は眺望を妨げる。街は袋になつてゐる。風はぬけず、日は當らず、場所は狹くるしく、蜻蛉や、鼠や、腐つた床板や、これ等のものはすべて、住心地をよくするものでない。しかし私は彼女と共に、彼女の側にゐた。いつも寫字臺に向つてゐるか、彼女の室にゐるかして、私自身の室のいやなのに氣が附かなかつた。それを考へる時間がなかつた。彼女がこんないやな家に住む爲めに、シャンベリイへ居所を定めたと云ふのは、不思議に思はれることだらう。しかし、そこに私が紹介せずに濟まされない彼女の聰明がある。彼女はチュランへ行くのをひどくいやがつた。つい近頃の變革と、宮廷に於ける激昂との中へ姿を現はすことの、得策でないのを洞察したからである。それにもかゝはらず、彼女の用事はそこへ出掛けて行くことを要求した。彼女は忘却され、或は閑却される事を恐れた。殊に財政總監のド・サン・ロオラン伯が好意を有つてくれぬ事を知つてゐた。ところで伯はシャンベリイに、古い壞れかけた家を持つてゐた。場所も惡いのでいつも空屋になつてゐるのを彼女が借りて住居にした。それは旅行をするよりも有效だつた。年金は停止されず、伯はそれ以來常に彼女の味方をした。

彼女の家內はほゞ從前と同じであつた。忠實なるクロオド・アネエもやつぱり彼女と共にゐた。彼は前にも述べたと思ふが、ムウトリュウ生れの百姓で、子供の時分ジュラで、瑞西の茶を拵へる爲めに草を摘んだものである。本草の心得があるとて彼女に使はれた。彼女が奉公人の中に本草家を置くことを便利と思つたからである。彼は植物の研究が非常に好きであつたし、彼女がまた大にそれを奬勵したので、彼は本當の植物學者になつた。そして天死をしなかつたらば、正直者として得ただけの評判を、この學問に於ても得ただらう。彼は生眞面目なくらゐ眞面目な男で、且つ又私よりも年長であつたので、私にとつて一種の家庭教師になり、いろ〳〵の愚劣から私を護つてくれた。彼に敬意を抱かせ、私が彼の前に自らを忘れることを敢てしなかつたからである。彼の分別や、正直や、彼女自身に對する不變の愛着を知り、同じ愛着を以てそれに報いた女主人にさへ、彼は敬意を抱かせた。クロオド・アネエは正しく珍しい男

であつた。そして、あゝした種類の人間は他に會て見たことがない。沈着な、慎重な、考へ深い、冷靜な態度の、行ひに於て慎み深く、簡潔な物言ひをする彼は、激烈な感情を有つてゐたけれど現はさなかつた。さうしてその感情は內部から彼を害し、生涯を通じて愚劣な眞似をさせなかつた代り、一つの恐ろしい事を行はせた。彼自ら毒を呷いで死んだからである。この悲劇は私が來てから間もなく演ぜられた。この事がなければ、この若い人と女主人との親密なる關係を、私は全く知らなかつたに違ひない。なぜと言つて、彼女自身が言つてきかせない限り、私は遂に忖度しないでゐたゞらう。若し愛着や、熱心や、忠實が斯かる報償を値し得るとしたならば、それはたしかに彼に與へらるべきものだつた。そして、彼が如何にそれに値してゐたかは、それを濫用することのなかつたのでも證明される。彼等は滅多に爭はなかつた。偶ま爭つても常におだやかに收まつた。たゞ一度面白くない結果を來したことがある。彼女が怒りに委せて浴せかけた嚴しい言葉を、彼は忍耐することが出來なかつた。彼はたゞ、絕望の聲にのみ耳を傾けた。そして、阿片劑のフラスコを手近に持つてゐた彼は、それを呑み干してから、二度ともう目覺めない考へで、安らかに身を床の上に横へた。幸ひと、ド・ワレンス夫人が、不安で、激昂して、家の中をうろ〳〵しながら、その空罎を見附けてその餘の事を推量した。彼の救助に急いで、彼女の擧げた叫びの聲が、私をその場へ呼び寄せた。彼女は一切を告白して、私の手傳ひを求め、いろ〳〵に骨折つた擧句、彼にその魔睡劑を吐かせることが出來た。この光景の目擊者として、私は彼女が知らして呉れた關係をこれまで少しも氣附かないでゐたと云ふ、私の間抜けさ加減に驚いた。もつともクロオド・アネエは、どんなに慧眼な人でもだまされるくらゐ用心深かつたのである。彼等の和解は少からず私を動かした。そして私はこの時以來彼に對して、多大の敬意を加へ、その弟子見たやうになつた。それは私にとつて不利益でなかつた。

しかし私は、他の人が彼女と私よりも親密にしたと云ふことを、心持よく聞き得なかつた。私自らがその地位を希望したわけでもないけれど、それを他人によつて占められるのは辛かつた。それは不思議もないことだ。その癖私をだしぬいた人間に對して、憎惡の念を抱きはしないで、むしろ彼女に對する愛着心が彼の上にまで及ぶやうに思はれた。何よりも私は彼女の幸福なることを願つた。そして彼女が幸福なる爲めには、彼を必要とした故に、私は彼の亦幸福なることを喜んだ。彼は彼で彼女の感情を尊重して、彼女の選んだ友人を眞情からの友人とした。私に對しても、その地位が許す限りの權力を振廻すと云ふのでなく、只普

通に判斷して、私に立優つてゐるやうに振舞つたゞけである。私は彼に非難されさうな事をしなかつたし、彼はたゞ非難すべき事をのみ非難した。かく我々は相互に睦じくして日を送つた。その結合は死の外に破壞することの出來ないやうなものだつた。この愛すべき婦人の優秀なる性格は、彼女の愛したる人々が相互に愛し合つたことによつても證據立てられる。嫉妬心や、競爭心すらも、彼女の吹き込んだ中心の感情に讓歩した。そして、彼女を取卷く人々の間に、他の人に對して惡感情を抱くやうな人を見たことがない。この著作を讀む人々は、この讃辭に會して少時休息して貰ひたい。そして同じ讃辭を値するやうな他の婦人を回想し得たならば、その生涯を安らかにする爲めに、たとへ最も劣つた賣笑婦であらうとも、さうした婦人に執着せられむことを希望する。

茲に、シャンベリイへ着いてから、一七四一年巴里へ去つたまでの、前後八九年に亙る一時期が始まる。その間は語るべき事件が多くない。私の生活が愉快なものでもあり、單純なものでもあつたからである。そしてこの單純さが、この絶間なき不安に妨げられてゐた、品性の陶冶を修了する上に、甚だ必要なるものだつた。この樂しい時間に、いろ〳〵の要素によつて聯絡なき發達をさせられた私の品性が、はじめて堅實なものとなり、その後さま〴〵な波風に揉まれても、變らないでゐられるやうなものに私をしてくれた。その發達は著しからぬ、遲々たるもので、それに伴ふ大きな出來事と云つてはいくらもなかつた。けれどもその發達の次第を述べるのは無用の業でない。

最初は、私は專ら自分の仕事にばかり沒頭してゐた。勤人生活の束縛がなんにも他の事を考へさせなかつたのである。聊かの自由なる時間を、私は善き「お母さん」と一緒に過した。そして讀書すべき寸暇もなかつたが、讀みたいと云ふ氣も一向になかつた。けれども、だん〳〵と仕事に親しんで、それほど心意を勞しなくなつて來るにつれ、何か空虛なものに感ぜられ、再び讀書が必要なものとなり出した。そしてこの欲望が、思ふ儘にならぬ爲め一層刺戟さ熱情になつたかも分らない——その間へ割り込んで來た別の傾向が、それから離れさせてくれなかつたならば。

我々の計算にはそれほど難かしい算術もいらなかつたけれど、私のまごつくことは折々あつた。これを免れる爲めに私は、算術の教科書を買求めた。そして、自分ひとりでやつたから善く覺えた。實用算術は、その精密を期するならば、通常考へられてゐるよりもずつと遠くへまで及ぶ。計算には恐ろしく長いのがあつて、立派な測量師すら折々迷ふのを見た。實習に助けられる考察は、明瞭な概念を與へ、

簡潔な方法を案出させる。その方法の案出が、自愛心を悅ばせ、その方法の正確が理性を滿足させ、もと〳〵氣乘りのしない仕事を面白いものにする。熟練の結果私は、算術でとける問題ならば、何物にも惱まされないやうになつた。そして、私の知つてゐた總ての物が、日毎に忘られて行く今日ながら、この藝能だけはいくらか尙ほもとのまゝでゐる。三十年間もはたらかせないで置いたのだけれど。四五日前タヴァンボオルへ行つて、その宿の子供等の算術の課業に居合せたとき、私は非常に込み入つた問題を、何の間違もなく、不思議なくらゐ樂しく解いたのである。數字をかきながら、私はやはりシャンベリイで、あの幸福な日を送つてゐるやうに思つた。さて〳〵長の歲月の經つたことかな。

測量師等の地圖の彩色が、圖畫に對する趣味をも私に與へた。私は繪具を買つて、花鳥や山水を畫き始めた。自分がこの技術の上に才能の乏しいことを知るのは情けなかつた。私はそれを熱愛してゐたのであるから。私は畫筆や刷毛の眞中に、幾月も悅んで閉ぢ込められてゐただらう。あんまり凝り出したので、人々は私を打つちやつて置かれなくなつた。なんでも趣味を有ちだすと必ずかうなのだ。その趣味は嵩じて熱情になる。そして沒頭してゐる樂しみの他の物は、一向に見えなくなつて來る。歲月もこの病弊を癒さなかつた。衰へさせもしなかつた。そして今、この書物をかいてゐる現在も、老耄の私はもう一つの無益な研究に熱中してゐる。その研究に就いて私は何の知るところもない。そしてそれは、青年時代からやり始めた人すらも、私がやり始めるやうな年頃になると、ぼつ〳〵やめかゝるべき研究なのである。

あの時分はこの研究をするのに適當してゐたやうだ。好機會でもあつたし、私はそれを利用したかつた。新しい植物を携へて歸つた、アネエの目から輝く滿足は、二三度も私を彼の植物採集に連れ立たせようとした。たゞの一度でも連れ立つて行つたなら、植物學はすつかり私を虜にしたであらうと思ふ。そして今は恐らく大植物學者になつてゐるだらう。なぜと言つて、私は植物の研究ほど私の天性に合してゐるものを知らない。またその後私がこの十年ばかりを田舍に送つた生活は、不斷の植物採集に外ならぬ。もとよりそれには、目的もなく進歩もなかつたけれど。然るにその時分私は全然この學問に關する概念を有しなかつたので、それに對する一種の侮蔑が、のみならず、反感が私の心を支配した。私はそれを藥劑師のすべき研究とのみ考へた。それを好きだつた「お母さん」は、他の事に用ゐようとせず、その藥種に使ふ爲め、有りふれた植物ばかりを集めさせた。そこで植物學や、化學や、解剖學は、醫學と云ふものゝ中に總括されるやうに私は思つた。そしてそれを終日

悪口の種にばかりして、度々頬邊を叩かれた。その上私には、まるで異つた、正反對な趣味がだん〳〵成長して來て、他の趣味を悉く壓倒してしまつた。それは音樂である。私はこの藝術の爲めに生れたものに違ひない。子供の時分から好きはじめたし、生涯を通じて好きだつた唯一のものであるからだ。その爲めに生れたと云ふほどの藝術が、あゝまで難かしかつたのは、あゝまで進歩の遲かつたのは、不思議な事でなければならぬ。私はこの一生を稽古し通したあとで、尙ほ且つ大丈夫曲譜から歌へると云ふまでに至らなかつた。その頃音樂の勉强をとり別け面白くしたものは、「お母さん」に一緒にやつて貰へると云ふことだつた。他の趣味ではだいぶ異つてゐたが、音樂が我々二人を一つにした。それを好んで私は利用した。彼女もよろこんで私に應じた。私はその時分ほゞ彼女くらゐに進んでゐたので、二三度試みをやつたあと、我々はどうかかうか一曲を歌つたものだ。折々彼女が爐邊に奔走してゐるのを見れば私は言つた、「お母さん、面白い二聲曲がありますよ、あなたの藥種を出來損ひに焦がさなければ承知しないやうなのが。」すると彼女の答は大抵かうだ、「焦げつかしたりなんかすれば、それをあなたに食べさしてやるんだから。」かうした口を利き合ひながら、私は彼女を竇琴へ引つ張つて行つた。我々は爐の上の物なぞ忘れてしまつた。社松や、にがよもぎの越幾斯がぼろ〳〵に焦げた。彼女はそれを私の顏になすり着けた。こんな事がすべて樂しかつた。

讀者諸君も御推察の通り、私は僅かなる閑で以て、いろいろの事をやらなければならなかつた。しかし今一つの新しい娯樂が加はつて、その他の物を悉く壓倒した。

我々のゐた地下室は、餘りに鬱陶しかつたので、折々外へ出て鮮しい空氣を吸はなければならなかつた。アネエは「お母さん」を勸めて、市外に植物培養の花園を一つ借入れさした。その花園の附屬の凉亭には、必要な家具さへ具はつてゐた。寢臺もそこに据ゑ附けられてゐた。我々は度々そこで中食をした。私は折々そこで寢た。知らず識らず私はこの小さな隱所が好きになつた。私は二三の書物と數多くの版畫とを持込んだ。そして「お母さん」がやつて來るとき、快く驚かすことの出來るやうに裝飾する爲めに時を費した。私は彼女の事を考へる爲めに、より大なる悦びを以て彼女を思ふ爲めに彼女を離れた。これがまた、辯解することも説明することも出來ない私の病的性情だ。けれども實際さうだつたから告白する。ド・リュクサンブウル夫人が、曾つてその戀人に手紙をかきたい爲めに別れてゐたと云ふ男の事を、笑ひながら話してきかせたのを憶ひ出す。私はそれに答へて、私もやりかねないと言つたのだが、むしろ、私もその通りの事をしたと言ふべきだつた。もつとも、よ

り激しく彼女を愛する爲めに、彼女と離れる必要はなかつた。差向ひでゐてもひとりでゐる時と同じやうに、何の拘束をも受けなかつたからである。そしてこれは男女を問はず、如何に私が愛着してゐても、他の人に對して經驗することの出來なかつたものだ。しかし彼女は屢々、私に取つて面白くない人達に押し掛けられるので、私は腹立たしさと煩はしさとから隱所へ逃げ込んで、彼女を思ひの儘にした。流石に、そこまでは、つきまとうて來る者もなかつたので。

かく私は、仕事と娯樂と修養とにまことに穩かな日を送つてゐたが、歐羅巴は私の生活のやうに穩かでなかつた。佛蘭西と皇帝とは互に戰ひを宣した。サルディニユ王もこの爭に與つた。そして佛蘭西の軍隊はミラノの領分を侵す爲めピエモンへ這入つた。その一部隊がシャンベリイを通過した。中にもシャンバアニユの聯隊の長、ド・トリムイユ公に私は紹介はされた。彼はいろ〳〵の事を私に約束したが、あれつきり私を忘れたに違ひない。我々の花園は丁度その部隊の通過した郊外の高みにあつたので、私は彼等の行進を見て樂むことが出來た。そして自分の身の上に關る事でゞもあるかのやうに戰爭の結果を心に懸けた。それまではかつて公の問題を思ひ煩つたことがない。始めて新聞を讀み出した。但しそれは佛蘭西方へのみ好意を有つての事で、その軍隊に少しでも利益があれば胸を躍らして悦びもしたし、その不利益には自分自身がやられたやうに、悲みもした。かうした熱狂が一時の物であつたらば、私もわざ〳〵書きはしないであらう。しかしそれはどうしたものか、非常に深い根柢を私の心に下したので、その後私が巴里に於て、專制君主政の敵として尊大なる共和黨として立つた時にも、尙ほ且つ、私に卑劣と見えた人民に對し、私が彈劾を加へた政府に對し、祕密の偏愛を私は有つてゐた。面白い事には、私は自分の主義に反する傾向を恥ぢて、誰にもそれを打明けず、佛蘭西の敗北に際して彼等を嘲笑したけれど、私の心は彼等の心よりも餘計に苦んだ。自分にやさしくしてくれ、自分からも崇拜するやうな人民の間にあつて、彼と共に住んでゐる限り、それを侮蔑する如き風を裝ふと云ふ、さうした人間の隨一であつたに相違ない。要するに、この傾向は餘程私のない、餘程力强い、餘程保のいい、打ち克ちがたいものだと見えて、私が佛蘭西を去つた後、その政府や、その役人や、その操觚者などが競うて私を敵視するやうになり、また私の身に虐待侮辱を傾注することが流行となつた後も、私はやはりこの熱狂から脫却し得なかつた。私は彼等から虐待されても、無意識の間に彼等を愛するのだ。私は嘗て既に、英國が勝利の最中にある時に、その衰頽の兆を看破してこれを豫言した。次には佛

蘭西が、その勝利の運にめぐり合つて、やがて他日、今日私の蒙つてゐる羈絆から、私を解放する時が必ず來るだらうと、あてのない希望を樂しく抱いてゐる。

私は長い間この偏愛の理由を明かにしようと努めたが、それを生じさせた機會の中にのみそれを見出し得た。文學趣味の增進が私を佛蘭西の書物に、その書物の著者に、その著者の故鄉に愛着させた。佛蘭西の軍隊が通り過ぎた時、私はブラントオムの『名將』を讀んでゐた。私の頭の中は、クリッソンや、ベイヤアルや、ロオトレエクや、コリニイや、モンモランシイや、ラ・トリムイユなどで一杯になつてゐた。そして私は彼等の子孫を、彼等の勳功や彼等の勇氣の繼承者として愛してゐた。各聯隊の通過する毎に、かつてピエモンに於てあのやうな武勳を輝かした、あの有名な黑部隊を見るやうに私は思つた。換言すれば、私が書物から獲た觀念を悉く、目擊したものゝ上にあてはめたのだ。佛蘭西の書物を引續いて讀むと云ふことが、佛蘭西の國民に對する私の愛着を養ひ育てゝ、遂には何物にも打ち克たれないやうな熱情とした。その後旅行中に氣附いたのは、私だけがこの印象を受けたのでないと云ふこと、並びに、その印象が何處でも文學を愛好する人々の上にはたらいて、佛蘭西人の浮誇なる性情から惹起される、一般的憎惡を和げたと云ふことだ。佛蘭西の小說はその男子よりも以上に諸國の婦人を惹附ける。そして佛蘭西の立派な脚本は、その劇場に對して靑年の心をあくがれさせる。巴里の劇場の評判は、外國人の群を誘きよせ、感激興奮して歸らせる。言ひ換へれば、その文學の傑出したる趣味が、趣味ある人の心を捕へる。そして丁度濟んだばかりのあの不幸な戰爭があつたに拘らず、その文人と哲學者とは、その軍人によつて曇らされたる佛蘭西の光榮を保持したものだ。

かく私は熱烈なる佛蘭西人だつた。そしてそれが私を新奇なる物の追求者にした。私は新しい報知に渴した閑人の群と共に、市場へ出掛けて郵便の着くのを待つた。そして寓話の中の驢馬よりも愚かに、この次は誰の荷を負はされるのかを知る爲めに胸を騷がせた。なぜならばこの時、サヴォアがミラノと交換されて、我々は佛蘭西に屬するやうになると噂されたからである。しかし私は自分が不安を感ずべき二三の理由を有つてゐた事を白狀しなければならぬ。なぜと言つて、若しも戰爭が同盟國に不利益な結果を來したならば、「お母さん」の年金が危くなるからだ。けれども私は全然佛蘭西方に信賴した。そして、ド・ブログリ氏の襲擊にも拘らず、この信賴は、私の思ひもかけなかつたサルディニュ王のお蔭で無駄にならなかつた。

伊太利に於て戰つてゐるとき、佛蘭西に於ては歌つてゐた。ラモオのオペラは注意を喚び出して、晦澁の爲めに解

する者の少かつたその理論的述作を再び持上げた。不圖私は彼の和聲論の話をきいた。そしてその書物を買ふまで落着いてゐられなかつた。不圖また私は病氣になつた。それは激衝性の急激なもので回復期が長く續いた。外出の出來るやうになつたのは一月も後の事である。その間に私は、例の和聲論に一わたり目を通した。けれどもそれがあまり長たらしく、ごた〳〵としてゐるので、その研究と理解とには少からざる時間が必要であると思はれた。そこで私は勉强を中止して、曲譜を見る目を取返した。私の歌ひ慣れたベルニエのカンタアタは遂に私の頭を去らなかつた。私はその四つ五つをすつかり諳記した。中にも『眠れる愛の神』なぞは、その後ついぞ見たこともないけれど、殆んどそのままに記憶してゐる。ほゞ同じ頃に覺えた、『蜜蜂に刺されたる愛の神』と云ふ、クレランボオルの非常に面白いカンタアタも同じである。

私を本物に仕上げる爲めに、アベ・バレエと云ふ年若い風琴手がヴァル・ドオスからやつて來た。なか〳〵の音樂家で、面白い人物で、非常に巧く竇琴の伴奏をやつた。私は彼を識つた。そして、二人は忽ちにして離れられなくなつた。彼は伊太利の僧で、立派な風琴手である人の弟子だつた。彼はその音樂論を私に聞かせた。私はそれをラモオのと比較した。私の頭の中は伴奏や、諸音や、和聲で一杯になつた。總てこれ等の物に對しては、耳を馴らすことが必要だつた。そこで私は「お母さん」に、月々一回づゝの小音樂會を開くようにと提議した。彼女はそれを承諾した。さて私はこの音樂會に夢中になつて、晝も夜も他の事に頓着せず、實際に時間の大部分を、曲譜や、演奏者や、樂器を集めたり、音部を書き取つたりすることに費した。「お母さん」は歌ふ方だつた。教父のカトン（この人の事は前にも記したが、なほさきへ行つてからもちよい〳〵記さなければなるまい）も同じく歌つた。ロオシュと云ふ舞踏の教師とその息子とはヴァイオリンを彈いた。私と一緒に測量の方に勤めてゐて、後に巴里で結婚した、ピエモンの音樂家カナヴァスはヴァイオリンセロを彈いた。アベ・バレエは竇琴の伴奏を受持つた。そして、指揮棒を携へて、全體を指導するの名譽は私に歸した。これが如何に樂しいものであつたかは想見されよう。それがまるでド・トレエトラン氏の許でやつたときのやうにではない。なか〳〵そんなものではなかつたのである。

新しい改宗者でもあり王の保護を受けてもゐるド・ワレンス夫人の小音樂會は、信心深い連中の氣を惡くしたけれど、なほ且つ多くの上品な人々に取つて面白い物だつた。私は彼等の第一位に、一寸想像のつかないやうな人物を置いた。それは僧侶だけれど、非常に天分に富んだ、愛すべ

き僧侶で、その不幸が後に少からず私の心を惱ました。彼の記憶は、私の樂しかつた頃の記憶と結びついて、今でも懷かしく思はれる。私の謂ふのは敎父カトンの事だ。彼はフランシス派の僧侶で、ドルタン伯と相謀つて憐れなるル・メエトルの曲譜をリヨンの地に押へさせたことがある。――これは彼が傳記の光彩ある頁と云はれない。彼はソルボンヌ大學の卒業生であつた。長らく巴里で立派な社會に出入してゐた。別して當時サルディニユの公使ド・アントルモン侯に氣に入つた。彼は脊の高い、眉目秀麗な男で、その黑い髮は、自らなる捲毛をなして額の兩側に垂れた。彼の樣子は上品で、わだかまりがなくて、控へ目で、その單純な、やすらかな態度には、僧侶の僞善的な、厚かましいところもなく、艶粧子のきざなところもなかつた、實際はなかなかの艶粧子であつたけれど。寧ろ、その衣裳を恥づることなくして、己自らを尊敬し、貴紳の間にあつて臆するところなき、かの貴紳の毅然たる風を具へてゐた。敎父カトンは、學者として多くの知識を有してゐたのでないけれど、世俗の人としてはなか〳〵の博識であつた。そしてわざとらしくそれを吹聽することをせず、いつも宜しき時に於てそれを用ゐた爲めに、實際よりも以上に買はれた。長らく社交の人となつたので、彼は堅くるしい學問よりも面白い技藝を好んだ。才人なる彼は、詩も作つた。上手に話をした。より上手に歌を唄つた。聲もよかつたが、オルガンをも彈き、竇琴をも彈いた。こんなにまで出來ないでも引張り凧にはされるであらう。彼は全く引張り凧にされてゐた。それにもかゝはらず、自分の職分を等閑にすることはなかつたので、隨分嫉妬深い競爭者もあつたけれど、位階も高くなり、その管轄地の長に選ばれることが出來た。

この敎父カトンはド・アントルモン侯のところで「お母さん」と知り合になつた。我々の音樂會の事を聞いて、仲間に這入りたくなり、彼が仲間に這入つた爲めに會は盛なものになつた。お互に於て激烈な熱情となつたところの、音樂に對する共通の趣味が、我々二人を友達にした。勿論彼は已に本物の音樂家であり私はたゞの野次馬に過ぎなかつたけれど。我々はカナヴァスやアベ・バレエと彼の室へ音樂をやりに出掛けた。そして祭日には折々彼のオルガンを使つた。我々は度々彼の貧しい食事に列つた。なぜと云つて彼は、僧侶には珍らしく物惜みをしないもてなし好きの、出鱈目ではなかつたが、食道樂の男であつたからだ。音樂會の日には彼も「お母さん」の家で夕飯をたべた。この夕飯はまことに陽氣な愉快なもので、みんな遠慮なくお喋りをしたり、二聲曲を歌つたりした。私は矢鱈に面白くなつて、洒落を言つたり警句を吐いたりした。敎父カトンは人を醉はせた。「お母さん」は人に判まれた。そして牡牛のやうな聲

をするアベ・バレエは、惡意のない嘲笑の的に立たされた。縱なる靑春の行樂よ、汝が一たび去つてから如何に久しいことぞ。

これから先きこの憐なる敎父カトンに就いて語るべき機會もあるまいから、玆に一言の悲しき物語にその局を結んで置かうと思ふ。同僚の僧侶共は彼が僧侶に似げなく技倆あることゝ、樣子の上品なことゝを嫉ましく、或は腹立たしく思つて、激烈に彼を憎惡した。彼が彼等ほどに憎惡を値してゐなかつたからである。彼等の中の重立ちたる者は、彼に反對の同盟を結び、かね〴〵彼の地位を羨みながら、目を擧げ得なかつた小坊主どもを煽動した。彼はさま〴〵な罵詈讒謗を被り、その職を解かれ、質素ながらも嗜みよく裝飾してゐたその室を奪はれた。そして何處へともなく追放された。一口に言ふと、それらの奴がさん〴〵に彼を凌辱したので、彼の正直な氣高い魂は、それに堪へることが出來なくなつた。そして最も愛すべき社交界の悅びであり香料であつた後、彼はどつかの暗い窖の中或は牢屋の中で、きたない寢床の上に悶死した。彼を知つてゐたところの、彼が僧侶であつたと云ふことより外に、何等の缺點をも見出さなかつたところの、總ての立派なる人々に哀まれ、悼まれて。

かうして暮す內、まもなく私は、すつかり音樂に沒頭してしまひ、他の事を考へられないやうになつた。不快の念を抱かずしては事務室へ行くことが出來なくなつた。其處で受ける束縛と不斷の作業とが、堪へがたき苦痛となつた。遂に私は辭職して、全然音樂に身を捧げようと云ふ考へを起した。こんな無鐵砲な思ひ附きが反對されるのは知れ切つたことだ。定收入のあるちやんとした地位を棄てゝ、あてのない修業に身を投ずると云ふのは、「お母さん」の氣に入るべく餘りに思慮のない決心であつた。私の進歩が見込通りに捗どるものと想像してからが、一生涯音樂家の身分に甘んずると云ふ事の中に、矢張り私の功名心に對することに情けない制限があつたのだ。いつも華々しい計畫ばかりを立てる彼女は、またもはやオオボンヌの意見に從つてのみ私を判斷しない彼女は、私がつまらない才藝に耽るのを心配しないでゐられなかつた。そして度々あの田舍には當てはまるが、巴里ではあまり通用しない諺を、――「うまく歌つたり、うまく踊つたりする人間は、うまい飯に有りつけない」を繰り返して私にきかせた。一方では、彼女は、私が抵抗しきれない欲求につかまつてゐるのを見た。私の音樂熱は狂暴に近づいた。そして怠慢の爲めに職を免ぜられさうだつた。それに免職になるのを待つよりも、自分から辭職する方がよかつた。私はまた彼女に、私の仕事の長く續かぬといふこと、永續的の生活方法をさがさなけ

ればならぬといふこと、自分の趣味にも適ひ、彼女からも賛成される技術の方がよいと云ふこと、いつまでも人の厄介になつてゐるのも駄目だし、この年になつて全然新しい事に取りかゝるのも心細いと云ふことを話した。結局私は、彼女の滿足するやうな道理を以て說くよりも、しつこく切望し哀願することによつて彼女の承諾を得た。早速私は、何か非常にめざましい手柄をたてたやうな氣になつて、測量部長のコッセリイ氏へ駈け附けた。そして何の原因もなく理由もなく口實もなしに自ら辭職した。その悅びは、まだ二年にもならぬ就職の時同樣、或はそれより以上であつた。

かうした馬鹿々々しい踏出しであつたけれど、それがその地方で私に獲させた尊敬は、私に有益なものだつた。或る人々は、私の有つてもゐない財源を有つてるやうに思つた。他の人々は、私が一身を音樂に投じたのを見、私の拂つた犧牲によつて私の才能を批判し、あんなにまで熱心である以上、餘程の名人でなければならぬときめた。自ばかりの國では、めつかちも王樣だ。私は立派な先生で通つた。他のものが皆駄目であつたから。そして、唱歌に對する趣味もあつたし、私の年配と外貌ともそれを手傳つて、私はまもなく、書記の給料を補充するよりも、より多くの女弟子を拵へた。

生活の愉快を增すために、これより早く、一の極端から他の極端へ走ることは、到底出來るものでない。役所では毎日八時間も、面白くない仕事を、より面白くない連中とやつてゐた。大抵は頭に櫛も入れず、お湯にも碌々這入らない連中の息やら汗やらで、むつとするやうな事務室に閉ぢ籠められて、私は折々その心遣ひや、惡臭や、束縛や、煩はしさの爲めに眩暈がするほどに感じた。それとは異つて、今や流行の社會へ飛込んで、一流の家庭へ出入した。まるでお祭騷ぎで到る處に歡迎され優遇される。美裝した若い美人が私を待ち受け、悅ばしげに相手をして呉れる。私は只だ華やかな物ばかりを見、薔薇やオレンヂの匂ばかりを嗅ぐ。我々は歌つたり、喋つたり、笑つたり、いろ〳〵の遊びをしたりする。そこを去つてよそへ行くのも、やつぱり同じ事をするのである。便益の點から見て、私の少しも選擇に躊躇しなかつたのは當然だらう。私は自分の選び出したものに對して、十分に滿足もしてゐたので、その後ついぞ後悔したことがない。現在だつて後悔しない。今では私も、自分の生涯の行動を理性で以て判斷してゐるし、從前私を支配してゐた反理性的な衝動から、すつかり解放されてゐるのだけれど。

これは恐らく私の傾向に聽從して、期待に欺かれなかつた唯一の場合であらう。やさしきもてなしや、人好きのする性格や、その土地の人々の快活な氣質やが、世の中との交渉を樂しいものにして呉れた。そしてその時分私が社交を好きになつたと云ふことは、私が社交を嫌ふとき、その責の、私よりもより多く世間に存すると云ふ事實の證據である。

サヴォア人が富裕でないのは氣の毒だ。或は彼等が富裕でなかつたならば、氣の毒なことだらう。なぜと云つて彼等はあの通り、私の知る限りに於て最も善良な、最も交際好きの人民であるからだ。若し世の中に、人生の歡樂を樂しい眞摯な社交の上に經驗する市があるならば、それはやがてシャンベリイである。その地方の貴族等は、たゞ樂に暮すだけの財產があるだけで、その上を望むことが出來ぬ。そしてその野心を充たすことが出來ない爲めに、止むなくキネアスの助言に從ふ。若い時分に彼は軍隊へ這入る。年を取つてから彼は歸つて來て、平和な晩年を鄕里に送る。こんなに生涯を二つに分けることは名譽と理性とからして同じやうに規定されるのだ。婦人は美しい。が、美しくなくともよかつた。彼等はその美を高めさせるものを有つてゐる。或はその缺乏を補ふことをさへする。私が職業上の必要から多くの少女と交際した中、シャンベリイに於て私の心を惹かない唯だの一人をも見なかつたと云ふのは珍しい。私がさう考へたがつたのだと言ふ人もあらう。それはさうだ。けれども私は、わざ〳〵努力を用ふるに及ばなかつた。私は實際悅樂を覺えることなしにあの若い女の弟子達を思ひ出し得られない。今私がその最も愛する人々の名を口にする時、あの樂しくもあり、無邪氣でもあつた時代に、彼女等と、そして私自身とを連れ歸ることが、どうして出來ないのであらう。第一は隣人ド・メラレエド孃で、しかもグエム氏の門人の姉妹であつた。髮の褐色な非常に活潑な女で、しかもその活潑さにはまことに品の好いところと、優しいところとがあり、輕卒なところがなかつた。彼女はその年頃の大抵の少女のやうに、やゝ痩せてゐたけれど、輝く目や、華奢な體樣や、人を牽きつける樣子が、愛くるしく肥えてゐるのに代つてゐた。私は朝の間に彼女の處へ行つた。そして彼女はまだ常服でゐるのが通例だつた。無雜作に束ねられた髮は、何かの花で飾つたばかり、それも私の來たときにつけ、それからまた髮を結ふために、私が出て行くときに取るのであつた。世の中に常服の儘の美人ほど恐ろしいものはない。盛裝して居れば少しも恐るゝに及ばぬ。私が午後行つてゐたド・マントン孃はいつも盛裝してゐた。そして同じくらゐに快い印象を與へたけれど、その與へ方がちがつてゐた。彼女の髮は亞麻色がゝつてゐた。恐ろしくやさしい內氣な性分で、恐ろしく色が白かつた。その聲はきつぱりとした、淸らかな笛のやうな聲であつたけれど、

思ひ切つて張り上げたことがない。胸に煮湯で燒いた傷痕があつた。それを青い編物の頸巾で隱し切れなかつた。折折この傷痕に引き寄せられた私の注意は、まもなくまた傷痕より他のものへ引き寄せられた。今一人の隣人なるド・シャアル孃は、もうすつかり發育しきつた少女で、脊も高く、肉付きもよかつた。今はもう美しいとも云へないけれど、その愛嬌のあることや、いつも同じやうに陽氣なことや、心持のやさしいことが、近づく人を悅ばせた。その姉妹のド・シャルリイ夫人は、シャンベリイ第一の美人だが、自分自身音樂はやめてゐたけれど、そのまだほんの小さな娘にそれを習はせた。その娘の蕾のやうな美しさは、もう少し紅毛でさへなかつたならば、母親に讓らないほどのものとなつたであらう。訪問院にゐた一人の佛蘭西婦人も、その名前は忘れてしまつたが、好きな弟子の一人に數ふべきものだつた。彼女は尼僧達のゆつくりしたものうげな調子で、柄にないと思はれるやうな、すばらしく氣の利いた事を言つた。他の點は無精で、その才を示さうと努力するのを好まなかつた。そしてその努力を誰の爲めにもしなかつた。私が一二ヶ月も怠けながら教授した後、始めて彼女は、私をもつと几帳面にする爲め、右の手段に訴へた。私はそれまでどうしても、几帳面になれなかつたからである。教授してゐる間は面白いのだけれど、時間割に束縛されるのがいやなのだ。束縛と服從は如何なる場合に於ても堪へ難い。それは快樂その物さへ厭はしく思はせる。回教徒の間では、黎明に一人の男が街を歩いて、夫の夫たる義務を妻に盡すべきことを命ずるさうな。さう云ふ時私は、心掛けの善い土耳古人にはなれないだらう。

町人の間にも二三の女弟子があつた。とりわけその中の一人は、私の境遇の變化する間接の原因とまでなつた。それを私はお話しよう。一切を言ふと約束したのであるから。彼女はラアルと云ふ名で香料商の娘であつた。希臘の彫像にモデルとしても申分のないやうな少女で、もしも命と魂とのない眞正の美と云ふものがあるならば、私のこれ迄に見た中の、第一の美人と言ふだらう。その魯鈍と冷淡さと無感覺とは信じられないくらゐで、喜ばすことも、怒らすことも同樣に不可能であつた。もし男子が彼女を自由にし得たならば、それは彼女の心が動かされたからでなく、單にぼんやりとして締りがなかつたからだらう。母は心許ながつて一寸の間もその側を離れなかつた。母は彼女に唱歌を習はせ、その爲めに若い先生に就かせた以上、彼女を陽氣にする爲めに精一杯を盡したわけである。しかしそれも駄目だつた。先生が娘に秋波を送つたとき、母もいたづらに先生に對して秋波を送つた。ラアル夫人はその活潑な性情の外に、娘の有つべきあらゆるものを有つてゐた。きびきびとした、少し皺のよつた、しかし、心持の惡くない顏には、目立たないほど痘痕が撒かれてゐた。小さな、きつい目は、殆んどたえまなく病んで赤味を帶びてゐた。毎朝行つて見ると、私の爲めに牛乳の這入つた珈琲が用意されてゐた。そして母は、唇にキスして私を迎へることを怠らなかつた。それを私は娘に返して、娘がどんな樣子をするかを見たかつた。これは誠に無頓着に、無邪氣にされることなので、接吻も秋波も、ラアル氏のゐる前でも平氣で遠慮されなかつた。正直で人の善い彼はその娘の本當の父で、その妻も彼を欺かなかつた、欺くに及ばなかつたからである。

私はかうした寵愛を、平生の間抜けな考へから、全く友情の表示とばかり思つて受けてゐた。しかし折々はそれがうるさくなつた。なぜならば、活潑なラアル夫人はだん〳〵と猛烈になり、晝間私が店前を通つて寄らないと、やかましい事を言ひ出すほどになつて來た。それで私は急ぎの時なぞ、他の街から迂回をしたものだ。彼女の家から出て來るのは、それへ這入るよりもむづかしいと云ふことを、十分に知つてゐたからである。

ラアル夫人があまりに私に附き纏ふので、私も打つちやつて置けなくなつた。彼女の私に對する氣の配りやうが、ひどく私を動かした。私は何の祕密もなかつた物を話すやうに、「お母さん」に話した。よしや祕密があつたとて、やつぱり話したに相違ない。何に限らず彼女に隱すと云ふことは出來なかつたから。私の心は、神の前に赤裸々であるやうに、彼女の前にも赤裸々であつたから。彼女は私のやうに單純に事件を考へなかつた。私が友情だけと見たものを、それ以上のものに考へた。彼女の考へたところに依ると、ラアル夫人が私のぼんやりを少くするやうにしてゐる中、何等かの方法で彼女の意中を私に酌ませることになるかも知れない。また、他の婦人が彼女の弟子を教育することの不都合は暫く措き、私くらゐの年頃や身分にありがちの誘惑から、私を保護する上に、より多く彼女にふさはしき理由を彼女は有つてゐた。同じ時今一つの危い誘惑に私は會つた。それも免れるには免れたが、かうして絕え間なく危險の押寄せて來るならば、その力に及ぶ限りの保護策を講じなければならぬと彼女に思はせた。

私の女弟子の母なるド・マントン伯爵夫人は、なか〳〵才のある婦人で、噂によれば、その才に讓らぬほどの意地惡なところを有つてゐた。また噂によれば、彼女は種々の不和を惹起したが、その中にはアントルモン家へ致命傷を與へたのさへある。「お母さん」は親密に交際してその氣質をも知つてゐた。彼女が何等の邪氣もなく、ド・マントン夫人の意中の紳士を動かしたとき、夫人はそれを不都合な事と

して非難した。彼女が言ひ寄られたわけでもなく、受け入れられたわけでもなかつたけれど。そしてド・マントン夫人はそれ以來、競爭者に對して、色々の奸策をめぐらしたが、一つも物にならなかつた。その一例として最も滑稽な奴を報告しよう。彼女等二人が近所の紳士達と田舍へ行つたことがある。その中に一件の紳士もゐたものだ。或る日ド・マントン夫人は彼等の一人に向ひ、ド・ワレンス夫人はただの見得坊で、沒趣味で、着物の着樣が下手で、商家の內儀みたやうに頸を包んでゐると罵つた。相手の紳士は冗談好きな人間で、「あれや理由があるんです。胸の處に鼠のやうな醜い大きな痣が、ほんとに駈け出しさうに思はれる奴がありますからね」と相槌を打つた。憎惡は、愛情同樣に輕々しく信じさせる。ド・マントン夫人は、この發見を利用しようと考へた。で、一日「お母さん」が夫人の片息ひの相手とカルタをしてゐるのを見、「お母さん」の背後にこつそりと忍び、その椅子を半ば引き倒すやうにしながら、すばやく頸巾をはづしたものだ。しかしながら、右の紳士は大きな鼠を見る代りに、まるで違つたものを見せられたに過ぎぬ。それは、見るよりも忘れることの方がむづかしいやうなものだつた。そして夫人の全く思ひ設けないものだつた。

私はどうしても、立派な人達ばかりを周圍に置きたがるド・マントン夫人の念頭に繫けらるべき人間でない。然るに彼女が私に注意を向けたのは、私の容貌そのものゝ爲めでない。それはたしかに度外視してゐた。むしろ、私が有つてると想像された、且つ又彼女の欲望を滿足させる上に利用出來るかも知れない才氣の爲めだつた。彼女は猛烈な諷刺に興味を有つてゐた。癪に障る連中を詩文で以て嘲弄することが好きだつた。若し彼女が私に於て、彼女の詩作を助けるだけの才分と、それをするだけの素直さとを見出したらば、我々二人は直にシャンベリイを顚倒さしたことだらう。結局この誹謗の出所は知れるであらう。ド・マントン夫人は私を犧牲にして責任を免れるだらう。そして私は恐らく、貴婦人達の傍にアポロンを演ずることを知る爲めに、一生涯禁錮されてしまつたであらう。

仕合せと、こんな事は起らなかつた。ド・マントン夫人は二三度その食卓に私を引きつけて置いてお喋りをさせたが、遂に私の鈍物なることを見出した。私はそれを覺つて、太息をつきながら友人のヴァンチュウルの才氣を羨ましく思つた。私をあんな危險から衞つてくれたのは、魯鈍のお蔭であつたのだけれど。私はド・マントン夫人に對して、遂にその娘の音樂の先生たるより以上に進まなかつた。しかし私はシャンベリイで平和に、いつも歡迎を受けながら暮して行つた。これは彼女の眼に才人となり、他の人々に毒蛇と

なるよりもましだつた。

兎もあれ「お母さん」は、私を若氣の過ちから遠ざからしめる爲め、一人前の男子として取扱ふべき時だと見て取つた。そして彼女はそれを實行したが、凡そ婦人のかうした場合に思ひ浮ぶべき最も異つた方法で實行したのだ。彼女の顏付はいつもより嚴肅に見え、その話振りは常より謹直に聞えた。これまでその教訓に交へてゐた浮々としたところは、馴々しくもきつくもなくて、說明の素地になるやうな、平坦な調子に一變して來た。この一變の原因をいたづらに思索したあとで、私は彼女にそれを尋ねた。これを彼女は待つてゐたのだ。彼女は次ぎの日例の小園へ行かうと申し出た。我々は朝夙くから出掛けて行つた。彼女は終日誰にも來させないやうにして置いた。それは彼女が示さうと思つた好意に準備をしたものだ。しかも他の婦人のやうにいちやつかうとするのでなく、情理を盡した會話をしようと云ふのであつた。で、その會話は私を、誘惑するよりも啓發するに向いてゐたし、私の官能に訴へるよりも胸に訴へた。しかし、いかに優れた有益な話であつたにしても、また少しも冷かなもの、煩はしいものでなかつたけれど、私は全然それに値するだけの注意を拂はなかつた。他の場合のやうに記憶の中に留めても居らぬ。彼女の前置や、際立つた設備は、ひどく私を不安ならしめた。彼女の話してゐるとき、我にもあらず夢見心地になつた私は、彼女の言ふところよりも、言はうとするところに多く思ひを走らせた。そしてやうやくのこと、彼女の言はうとするところを呑込むや否や、これまで一緒に居りながら、ついぞ考へたことのないやうな、新奇なものにすつかりつかまつてしまひ、彼女の話すところに耳をかす暇がなかつた。私は彼女を思ふばかりで、彼女の言葉を聞かうとしなかつた。

話すところの事柄に注意させる爲め、若者等の非常に興味を有するものを標的として示すのは、教育者のともすれば陷り易い過ちである。私も『エミイル』に於てその過ちを避ける事が出來なかつた。若者等は眼前に置かれたものにのみ心を奪はれ、長たらしい道中をぬきにして、ひたすらに、一足飛びに標的へ達しようとする。彼等に注意を拂はさうとならば、こちらの行き着かうとするところを、見透かされないようにしなければならぬ。この點に於て「お母さん」はまづかつた。何事にも順序を立てることの好きな彼女は、いたづらに條件を持出すことに心を用ゐた。けれども私は値段を聞くや否や、條件なぞを顧みるに及ばず、直に總てのことに贊成した。そして、かうした場合それをねぎるだけの淡泊な度胸のある男子や、それを赦すほどの婦人が、たゞの一人でも世の中にあらうか。前にも言つたやうな性分から、彼女は私の贊成にもの〳〵しい形式を加

へて、それを熟考する爲めに八日間の餘裕を私に與へた。私はそれに及ばないと答へたが、それは嘘だつた。なぜならば、彼女のあゝした性分に滿足させてやる爲め、餘裕のあることが嬉しくもあつたし、右の考への新しさがひどく私を驚かし、私を面喰はした爲め、氣を落着けるべき時がほしくもあつたのだ。

この八日間が私にとつて、八百年ほどにも感じられたと思はれるだらう。ところが全く反對で、私は寧ろ、實際に八百年も續く方を望んだのである。私はその時の自分の狀態を如何に說明すべきかを知らぬ。落着きのない性急と混じた一種の恐怖が私を苦しめると共に、私は自分の欲求するところのものを甚だしく恐れて、折々眞面目に私の幸福から脫却する方法を思案した程だ。私の燃え立つところの肉感的な性分を、私のあつくなつた血を、私の戀に醉うた心を、私の精力と健康と年齡とを考へて貰ひたい。私がこの狀態に於て、肉感的享樂に飢ゑながら、まだ一人の婦人にも接しなかつたことを思へ。空想や、自然的衝動や、虛榮心や、好奇心が相助けて、一人前の男にならう、一人前の男として見られるやうにならうと云ふ、熱望を私に起させたことを思へ。とりわけ、私の彼女に對する强烈な愛着が、だん〳〵冷却されるどころでなく、日を追うて高まり來つたことを忘れてはならぬ。また私が彼女の側にゐるときにのみ安易を感じたこと、彼女を思ふ爲めにのみ、彼女を離れたこと、私の心全體が、たゞに彼女の溫情や、やさしき性格の爲めのみならず、その性や、その外貌や、その身體や、彼女その物の爲めに、換言すれば、彼女の私に慕はしき所以なる總ての物の爲めに占領し終られたことを忘れてはならぬ。彼女が十一二くらゐ年上である爲めに、私に比べて老け過ぎてゐたとか、私にさう思はれてゐたとか想像してもならぬ。彼女の第一印象があんなにまで私を悅ばせた五六年此方、彼女は實際にもあまり變らないし、私は全くその變化を認めなかつた。私に取つてはいつも美しい。世間の人達から見ても、その時分はまだ美しかつた。その腰がやゝ厚くなつてゐるだけだ。他の點は依然として同じ目、同じ膚の色、同じ胸、同じ顏立、同じ綺麗なブロンドの髮の毛、同じ快活で、聲まで同じ聲で、あの若々しげな涼しい聲がいつもの强い印象を私に與へた爲め、私は今日に至つて尙ほ、若い女の綺麗な聲を聞くとき、感情を動かされないことがない。

かくも慕はしき人を所有することの期待に於て、私の恐れなければならなかつたものは、それを前以て獲ようとする願望であつた。欲求や空想を支配しきれないで、自制を失ふに至ることだつた。もつと年を取つてからは、自分の愛人から一寸した好意を示されたと思ふだけで、私の血はすぐにあつくなり、彼女との距離を一直線に駈け拔けて、決して私を純潔にして置いてくれなかつたのである。私が花の如き靑年の時に於て、第一の享樂に對してかくも僅かなる欲求を運んだのは何といふ不思議であらう。その時の近づくのを、悅樂よりも多くの苦痛を以て見たのはどうした事ぞ。我を醉はす筈の歡樂の代りに、殆んど嫌惡と恐怖とを感じたのはどうした事ぞ。若し、體好くこの幸福を脫却することが出來たなら、私は心からそれを試みたに違ひない。私は彼女に對する私の戀に、異常なところがあるやうに言つてゐた。これはたゞ、人の豫想しないその一つなのである。

既に氣を惡くさせられた讀者諸君は想像するだらう。他の男子の所有となつた彼女が、その愛情を分つことによつて、私の目に卑しくなつたと。侮蔑の感情が私の愛着を冷却したと。しかしその想像は當らない。この分配は正しく私を苦めた。まことに自然なる敏感からでもあつたし、それを私の爲め、彼女の爲めにふさはしくない事と思ふからでもあつた。けれども彼女に對する私の感情は、さしたる影響を被らなかつた。彼女を所有しようとの心がそれほど强くなかつたこの時分ほど、熱烈に彼女を愛したことがないとも言へる。私のやうに彼女の純潔なる心を知り、その冷靜なる氣質を知つてゐれば、苟めにもかうした肉體の放棄に、肉慾的享樂が含まれてゐるとは思へなかつた。私の思ふに、他の方法では保護することの出來ぬ危險から私を保護し、私をして十分に自制させ、私の義務を全うさせようと云ふ彼女の心遣ひのみが、彼女自らに一の義務を破らせた。その義務を、あとでまた說明もするだらうが、彼女は他の婦人等と同じ目を以て見なかつた。私は彼女をいたましく思ひ、私自らをいたましく思つた。私は彼女に言ひたかつた、「いや、お母さん、それには及ばない。この犧牲なぞなくたつて大丈夫です」と。しかし私はそれを敢へてしなかつた。第一には、言ひ難い事であつたからだ。第二には、心の奧底に僞りらしく感じたからだ。事實一人の婦人のみ他の婦人より私を護り、誘惑から遠ざけ得ると覺つたからだ。彼女を所有したいとは思はぬながらに、彼女が私をして他の婦人を所有したがらせないのを悅んだ。從つて私を彼女から離れさせるあらゆる物が、不幸と考へられた。

一緒に、無邪氣に同棲すると云ふ、長い間の習慣は、彼女に對する感情を弱くせず、むしろ一層强くしたけれど、その方向は少しくかへて來た。その方向が右の感情をより內面的にし、恐らくはより熱烈にすると共に、また、より少く肉感的にした。彼女を「お母さん」と呼ぶこと、いつも息子の親しみを以て彼女に對することにより、私は自ら

を息子のやうに考へる習慣を得た。彼女がどんなに慕はしくとも、その所有を願望することの少かつた原因はそこにある。私はよく覺えてゐる、私の初めの感情は、より多く活潑なものでなかつたくせに、ずつと淫縱なものであつたことを。アヌシイでは私は前後不覺であつた。シャンベリイではもうそんなことはなかつた。いつも出來るだけの熱情を以て愛したけれど、彼女の爲めにより多く、私自らの爲めにより少く愛した。或は、私は彼女の傍に、少くとも私の享樂より私の幸福を求めたのである。彼女は私に取つて、姉妹より以上、母より以上、女友より以上、そして、愛人より以上のものだつた。それ故に彼女は愛人でなかつた。換言すれば、私は彼女を貪り望むべく餘りに愛し過ぎたのだ。これが私の氣持の中の最もはつきりしたものである。

待たれるよりも恐れられた日が遂に來た。私は總てを約束し、その約束を履行した。私の心は報酬を求むることなしに一切の誓約を是認したのである。それにも拘らず私はその報酬を獲た。初めて私は婦人の腕の中に、しかも愛慕する婦人の腕の中に自らを見出した。私は嬉しかつたか。否、私は單に肉感的享樂を經驗したゞけだ。私は如何なる打克ちがたき悲哀がそれの妙味を毒したかを知らぬ。私は近親相姦を犯したやうに感じた。恍惚たる悅びを以て彼女を腕に抱き締めながら、二度三度私は涙を以て彼女の頸を濡らした。これに反して彼女は、嬉しさうにも悲しさうにもなく、美しく、靜かにしてゐたゞけだ。彼女はあまり肉感的でなく、肉慾の滿足を求めなかつた故、その快樂を覺ゆることもなく、それを悔いもしなかつた。

繰り返して言ふ、總ての彼女の過失は謬見から來たもので、その欲情から來たものでない。彼女は育ちもいゝしその心は純潔であつた。彼女は善良な風儀を好んだ。その氣質は正直で有德だつた。その趣味はディリケエトであつた。彼女はその常に愛するところの高潔な道德にむいてゐた。その癖彼女はさうした道德を守らなかつた。彼女を正しく導くところの感情に聽かずして、彼女を迷はすところの理性に聽いたからである。間違つた主義が彼女を邪路に引き入れたとき、その眞實の感情はいつもそれに反對した。しかし悲しいかな、彼女はその哲學を誇つてゐた。そしてそれから引き出した道德が、その心の指示するところを曇らせてしまつた。

彼女の第一の愛人ド・ダヴェル氏はその哲學の先生であつた。彼の吹き込んだ主義は、彼女を誘惑するに必要なものだつた。彼女がその良人とその義務とに忠實であり、いつも冷靜であり沈着であつて、肉感的刺戟の征服し得るところに非ざるを見、彼は詭辯に依つて征服しようと企てた。そして、彼女がそれほど忠實に奉じてゐた義務を、子供ましの御說法に過ぎないと思はせるに至つた。異性の合一は本來何でもない事である。貞操は體面上の義務で、その全體の道德的意義は世上の見解にのみ重きを置くのだ。配偶者の安心が婦人の義務に對する唯一の標準である故に、知られないで濟む不貞は、その良人にとつても、良心にとつても存在しないと同樣である。一言にして云へば、この事は本來何でもなく、噂に上つてはじめて問題になると云ふこと、貞淑に見える婦人はすべてまたその故に實際貞淑であると云ふことを思はせるに至つた。かくしてその惡黨は、この子供の感情を毒し得なかつたけれど、その理性を惑はして自分の目的を達した。彼は非常に恐ろしい嫉妬心に依つて罰せられた。彼女がその良人を取扱ふ事を敎へられた通りに、彼自らを取扱つたと思つたからだ。私は彼がこの點に於て見當違ひをしてゐたかどうかを知らぬ。說敎師のペレエが彼の後釜と思はれた。私の知つてゐるのは、かうした意見から彼女を護つてくれた筈のこの若い婦人の冷靜な體質が、丁度、後日に至つてそれを棄てるのを妨害するものであつたと云ふことだけだ。彼女は自分にとつてつまらない事物に、どうして男達がさうまで重きを置くのか解らなかつた。彼女は自分に苦しくない禁慾を、德の名を以て敬することをしなかつた。

それ故彼女は、是等の間違つた主義を自分自身の爲めに惡用しなかつた。けれども他人の爲めには惡用した。しかも今一つの、同じくらゐに間違つた格言ではあるが、彼女の善良な心により調和した格言から惡用したのだ。彼女はいつも、所有ほど男子を婦人に引き寄せるものはないと信じてゐた。そして彼女はその友人に友情を注いだゞけのことだけれど、その友情は隨分熱烈なもので、彼等を自分に繫ぎ止める爲め、力に及ぶだけの手段を講じた。最も驚くべきは、彼女がいつも成功したと云ふことだ。彼女は全く愛すべき婦人で、彼女と生活を共にして親密になればなるほど、彼女を愛すべき新なる理由を見出すくらゐであつた。今一つの注意すべき事柄は、彼女がその第一の失策の後、殆んどたゞ不仕合せなものにのみ目をかけたと云ふ事である。立派な境遇の人々は、彼女の爲めに徒らに苦勞した。しかし、彼女がはじめに可哀相だと思つた男子で、遂に愛されなかつたならば、餘程愛せらるべきところの少かつたものに違ひない。彼女の選擇が、彼女に不似合のものであつたならば、それは彼女の高尙な心に緣のない、下劣な性情の致すところでなく、むしろ全く、彼女のあまりに寬大な、あまりに親切な、あまりに思ひ遣りのある、あまりに察しのいい心情の結果であつた。さうした心情を彼女はいつも分別を以て支配することをしなかつたのだ。

數個の間違つた主義が彼女を迷はしたとしても、彼女は

如何に多くの愛すべき主義を有つてゐて、いつまでも棄てなかつたことぞ。如何に多くの德を以てその罪過を償つたことぞ——肉慾のあゝも關係しない誤謬を、ひろく罪過と呼び得られるとしたならば。或る一點に於て彼女を違つた見解に連れ來つたその同一の男が、他の種々なる點に於て彼女をうまく教育した。そして彼女の激しくない欲求がいつもその理性に遵ふことを許したので、彼女はその詭辯哲學に惑はされない限り、正しき道を歩いて行つた。彼女の動機は罪過に於てすらも賞讃を値してゐた。誤りによつて善くない事をもしたけれど、なほ且つ惡い事をする心にはなれなかつた。彼女は不正と虚僞とを惡んだ。正直で、公平で、慈悲深くて、無慾で、その言葉と朋友とに忠實で、自ら業務として承認するところの總てのものに忠實で、怨恨や憎惡の感情を抱くことが全然出來ず、容赦することの中に價値があるとさへ考へなかつた。要するに、彼女に於て最も怨しがたかつた性質に歸つて云へば、彼女は自分の愛顧を正當に評價することをしなかつたけれど、それで以て賤劣なる取引をしなかつた。彼女はそれを浪費した。けれども、絶えず生計の心配をしながら、それを賣ることをしなかつた。私は敢へて言はうと思ふ、ソクラテエスがアスパシアを敬重し得たならば、恐らくド・ワレンス夫人を尊敬したことであらうと。

彼女に多感な情意と、冷靜な氣質とを附與すれば、多くの場合に於けるが如く、また同樣に正しき理由を以て、私は矛盾を咎められることだらう。恐らくは自然が惡かつたのだ。かうした配合は當を得てゐなかつた。私はたゞそれが事實であつたのを知つてゐるだけだ。ド・ワレンス夫人を知れる人々は、今日尙ほ少からずあるだらうが、彼等は彼女のさうした人であつたことを知つてゐる。そして私は敢へて言葉を附け添へる、彼女は唯だ一つのこの世の眞の悅びを知つてゐた、それは彼女の愛する總ての人々に悅びを與へる事であつたのだと。もつとも各人が、それに對してそれ〴〵の批判を加へ、さうではなかつたと證明するのも勝手である。私の目的は眞實を語らうとするのであるけれども、彼等を信じさせようとするのでない。

私が今述べたところのものは、我々が一緒になつた後の會話でだん〳〵と聞いたのだ。その會話だけでも我々の結合を樂しくした。彼女がその結合が私に有利なものにならうとあてにしたのは當然の事だつた。私は自分の教育上に少からざる利益を得たのである。それまで、彼女は私にだけは、子供に話すやうに話してゐた。今や一人前の男子として私を取扱ひ、私に自分のことも話すやうになつた。彼女の語る總ての事が私にとつてまことに面白く、私を動かすことは非常なもので、その爲めに自分自身を反省させら

れたが故に、私は彼女の打ち解けた態度を、その教訓よりも以上の利益あるものにした。眞實に相手の胸が物言ふと感ずるときは、我々の胸がその流出物を受け容れる爲めに開かれる。道學先生の教訓なぞは、こちらが愛着してゐる聰明な婦人の、やさしいお喋りに到底及ばないのである。

彼女との生活が親密になればなる程、前よりも更によく彼女に私を判斷させた故、彼女は私を、見たところ氣の利かないらしいに似合はず、世の中へ出る準備をさして見るだけの價値あるものと考へた。また他日一歩でも踏出したらば、出世の道の開けるものゝやうに考へた。かう云ふ考から彼女は、たゞに私の判斷力だけでなく、私の外貌をも私の態度をも立派に作り上げ、愛嬌もあり威嚴もあるやうな人物に仕立てようと企てた。若し世の中に、成功と德とが一致するものならば——私はそれを信じないけれど——少くとも、私を導かうとして彼女が取つた道より外に道のないことを疑はぬ。なぜならば、ド・ワレンス夫人は人間を知り、不正と不注意となくして、欺くこと怒らすことなくして、人間を取り扱ふべき方法を非常によく心得てゐたからだ。しかしこの方法は彼女の教訓よりも寧ろその性格の中にあつた。彼女はそれを教へるより以上に實行することを知つてゐた。そして私はそれを學ぶべく何人よりも不適當であつた。從つて彼女がこの點に關して爲したる一切のものは空しく徒勞であつた。私に舞踏と擊劍とを習はせる爲めに先生を見つけて骨折つたのも同樣である。すらりとした體樣ではあつたけれども、私はミヌエット一つ踊り得なかつた。私は肉刺の爲めに踵で歩く癖がついてゐた。それを舞踏の先生のロオシュがとり去り得なかつたのである。そして身輕なやうに見えながら、一寸した溝をさへ跳び越えることが出來なかつたのである。擊劍の道場へ行つてから尙ほ駄目だつた。三月ばかりも稽古したあとで、私は唯だの一突きをも試みることが出來ず、いつも壁を突いてゐた。そして私の手頸がしなやかでなく、私の力が強くない爲めに、それを先生が叩き落して面白がる、私の試合刀を支へることが出來なかつた。その上私がこの技術その物とそれを仕込まうとする私の先生とに對して、激烈なる反感を有つてゐたことを考へて貰はなければならぬ。私は人を殺す技術に於てあゝまで得意になり得られるものと思はなかつた。彼は彼の大なる天才を了解せしむる爲め、自分の全く知らない音樂に比較を取つて說明した。カルトとかチエルスとか云ふ衝きと、同じ名稱の音程との間に著しき類似を見出した。伴擊をしようとするときは、「このヂエエズに氣を附けろ」と叫んだ。昔はヂエエズが伴擊と云ふ言葉であつたからである。私の試合刀を叩き落したときは、それがボオズだと笑ひながら附け加へたものである。要するに私

は、あの稽古着をつけたあの男ほど、堪へがたき衒學者を見たことがないのだ。

かう云ふ始末だから、私がこの稽古に於て進歩しよう筈はなく、たゞ〳〵嫌ひだと云ふので止めてしまつた。しかし私は、それよりもずつと大切な技術、即ち私自身の運命に安んじて、柄にないと思はれるやうな、輝やかしい野心なぞ起さないやうにすると云ふ技術に成功した。「お母さん」の生活を幸福にしたいばかりだから、私はその側にゐるのを何よりも悦んだ。そして市へ出て行かなければならぬとき、あれほど好きな音樂の爲めであるに拘らず、その教授時間として、潰される時間を惜しがるやうになり出した。

私はクロオド・アネエが我々の關係を聞いたかどうかを知らぬ。まさか聞かないでゐたのでもあるまい。目の鋭い、しかし非常に無口な彼は、心にない事は言はないけれど、その心中を悉く吐露することをしなかつた。口に出してはなんにも言はなかつたけれど、その素振によつて判ずると、我々の關係を知つてゐるらしく思はれた。かうした態度はその精神の賤劣なるが爲めでなく、むしろその女主人の主義を奉戴したもので、彼はその主義の實行を非難するを得なかつたのだ。彼女と同じくらゐの年配ながら、恐ろしく眞面目な落着いた性分で、大目に見なければならない二人の子供を以て我々を目した。我々は彼に對して畏敬の念を起させられた。私は彼女が彼に裏切りした後、始めて彼にみ思考し、感得し、生活することを知つた。私が彼女の爲めにの何に自分が衷心からして彼を愛してゐるかを告げた。これは私をして彼をも同じやうに愛せしめようが爲めだつた。そしてこの場合、彼女は彼に對するその友情よりも、その敬意の上に重きを置いた。それが私の最もよく共にし得べき感情であつたからである。幾度彼女は我々の心を動かし、涙と共に、我々の抱擁するを願ひ求めたことぞ。我々二人が彼女の幸福にとつて、缺くべからざるものであることを言ひながら。これをお讀みになる婦人達よ、意地悪き冷笑を漏らし給ふな。彼女の如き氣質では何等の怪しい要求でない。それは全くその心情の要求であつたのだ。

斯樣に我々三人の間に、恐らくは地上に類のないやうな、親密な關係が成り立つた。總ての我々の願望、我々の心配、我々の感動は共通で、しかも全くこの小さいサアクルの中に限られてゐた。同居の習慣は、いや、世間からすつかり離れて同居することの習慣は、非常に根強いものになつて來て、食事の時分三人の中の一人が缺けるか、別の人が加はるかするならば、それこそ滅茶々々であつたのだ。そして我々には、別の愛着があつたにも拘らず、二人づゝの差

し向ひが、三人揃つた場合ほどに嬉しくなかつた。我々の間に何等の遠慮をも容さなかつたのは、大なる相互の信任であり、何等の倦怠をも容さなかつたのは、我々の間斷なき忙しさであつた。「お母さん」は始終計畫を立てゝ活動してゐて、我々二人になまけさせず、我々は又、我々自身の仕事を十分に有つてゐた。私の見解によれば、閑散は群居にも獨居にも有害である。人の精神を束縛し、無意義と、駄法螺と、惡口と、虚言とを生み出すこと、絶えず差し向ひで一室に閉籠められてゐるより、いつも仕事のない爲めに無駄口を叩かせられてゐるより甚しきはない。仕事のある人は、言はなければならぬ時にのみ言ふ。仕事がないと、のべつに喋つてゐなければならぬ。これは最も苦しい、最も危險な拘束である。私は更に進んで、一つのサアクルを、眞に愉快にするのには、各人が何か仕事に、多少注意の要る仕事にかゝつてゐなければならぬと主張する。編物の如きは何もしないでゐるやうなもので、編物をしてゐる婦人と談話をするのは、兩手を膝に休めてゐる婦人を相手にしてゐるやうなものである。けれども刺繍をしてゐるなら又別である。これは忙しい仕事だから、話にかまけては居られない。談話の間に閑人どもが立上つたりまた腰をかけたり、行きつ戻りつしたり、踵でぐるりと身を廻はしたり、壁煖爐の上の陶器の置物を幾度となくひねくつて見たり、話の流れを斷つまいとして頭を惱ましたりするのを見ると、非常に厭はしくもあるし可笑しくもある。何と大した仕事ではないか！　かうした連中は何事をしても、いつも人に迷惑をかけ、自分にも迷惑をかける。私がモチエにゐた時、近所の婦人のところに行くと、レエスを編んだものである。他日、私が世間にまた顔出しをしたら、いつも衣嚢の中にビルボケエ（玩具の名）を入れて置いて、何も云ふべき事のない場合に、談話に引きずり込まれないように、終日それを弄んでゐたいものだ。誰も彼もかう云ふ風にするやうになれば、人間は惡意の度を減じ、交際にも蟠りが少くなり、また私の信ずるところでは、一層愉快になるであらう。要するに、馬鹿者は笑ひたければ笑ふがいゝが、然し私はこの世紀に適合する唯一の道德は、このビルボケエ道德であると信ずる。

もつとも我々は退屈と云ふものを全く免れることは出來なかつた。と云ふのは煩さい客が續々としてやつて來て、遂には我々だけになつた時でさへも、矢張りその影響が殘つてゐるくらゐになつたからである。以前これらの客が私の胸に一杯にした焦慮は減じなかつたが、たゞ私の焦慮しく感ずる時間の少くなつたことだけが、その異なる點である。可哀相な「お母さん」はその計畫や企圖に對する昔日の嗜好を失はなかつた。失はなかつたばかりでなく、その

家計の窮迫が甚しくなればなる程、その窮迫を脱しようとて愈々妄想に沒頭した。現在の收入が減ずれば減ずる程、愈々未來の增收に心を向けた。この狂熱的の傾向は年と共に甚しくなるばかりで、遂には世間の喜びや青春の喜びを感じなくなつてしまひ、祕密な喜びや計畫の喜びを以てその補ひにしようとした。家の中は常に山師や製造家や煉金士や各種の事業家によつて充たされてゐた。彼等は何百萬と云ふうまい金儲けの話を並べては、結局差し當つて困つてゐるからとて、一エキュウの借金を申込んだ。一人としてこの家から空手で出て行つた者はない。彼女が財源に窮する事もなく、債主を苦める事もなくしてこんなに長いこと、かくばかりの非常な濫費に堪へて行つた事ほど私を驚かしたものはない。

私が茲に語る時代に、彼女が最も多く從事してゐた計畫は、彼女の案出したもの〻中では左まで愚昧なものではなかつた。それはこのシャンベリイに帝室植物園を設置して、有給の植物學實習教師を附けておかうと云ふ企である。この地位が誰の爲めに作られてあるかは前以て分つてゐた。アルプスの中央に位してゐるこの市街は、植物學の研究には極めて適してゐた。「お母さん」は常に或る一つの計畫を他の計畫によつて容易にしようと試みる人なので、植物園と共に藥學校を附設しようと目論んだ。それは藥劑師が唯一の醫者であるところのこの貧弱な土地に取つては、實際頗る有用なもの〻やうに思はれた。ヴィクトル王の崩御の後、侍醫のグロッシイがシャンベリイに退隱することになつたが、それがこの計畫の實行に、甚だ有利であるやうに彼女は思つた。或はその事が、彼女の心中にその計畫を思ひ附かせたのかも知れない。それは何方でもよろしい、彼女はグロッシイに取り入らうと努め出した。彼は私の曾て見た最も氣難かしい最も粗野な人間だつたので、取り入るには極めて都合が悪かつたけれども。私が茲に一例として擧げる若干の逸話はその判斷の種にならうと思ふ。

或る日、彼は數人の醫師と共に會議を開いた。その中にはアヌシイから駈け附けて來た或る病人の家庭醫も加はつてゐた。この未だ十分醫者になる修業の積んでない若い男は、侍醫閣下の意見に反對を述べ立てた。侍醫はそれらの言葉には答へないで、何時歸つて行くか、どんな馬車に乘つて、どの道を取るかなど〻訊いた。若い醫師はその返答をしてから、何か御用でもと訊いて見ると、「いや何でもない。私はたゞ君の歸つて行く道筋の窓際に立つて、驢馬が馬に乘つて歸つて行くのを見物したいものだと思つたばかりさ」と、それがグロッシイの答へであつた。彼は金持でもあり冷酷でもあるだけそれだけ貪慾であつた。或る時一友人が確かな抵當を入れて一寸した借金を彼に申込んだ。

すると彼は先方の腕を握つて齒ぎしりしながら、「ねえ君、私は聖彼得が天降つて來て、三位一體を抵當に入れるから十ビストオル貸せと云つたとてまあお斷りするつもりでゐる」と云つた。また或る日、彼はサヴォアの知事の非常に信神深いビイコン伯の招待を受けて、食事前に出掛けて行つた。すると閣下は丁度珠數をもつて祈禱をしてゐる處で、彼にも祈禱をしませんかと勸めた。彼は何と返事をしていいやら分らなかつたので、顏を顰めながら跪づいた。けれども殆んどアヴェ・マリアを二度と唱へぬうちに、もう辛抱が出來なくなつて大急ぎで立上り、ステッキを取つて、一言も云はないで駈け出した。ビイコン伯は彼を追ひかけて後から呼んだ。

「グロッシイさん、グロッシイさん、まあお待ちなさい！ あなたに差上げようとて下でうまい鷓鴣を炙つてゐるところですから。」「伯爵」とグロッシイは振向いて答へた、「よしあなたが天使の燒肉をお出しになつたとて、私は御免を蒙ります。」侍醫グロッシイ氏はかうした人であつた、が「お母さん」はこの人を手に入れようと企て〻、とう〳〵物にしてしまつた。彼は極めて多忙な身であつたけれど、よく彼女を訪ねて來るやうになつた。彼は、アネエに親切を盡して、自分が彼の知識を尊敬してゐる事を分らせて、その知識については感嘆して話して、以前の印象を拭ひ去らうとするやうに、彼にあらゆる敬意を示さうと努めたのは、こんな粗暴な人間としては思ひ懸けない事であつた。それにアネエは最早や下僕と云ふ身分ではなかつたけれど、以前さうであつた事は知れ渡つた事實であり、人をして彼自身へ尊敬を拂はしめるのに、侍醫閣下の手本と尊敬くらゐ必要なものは外に無かつたのである。アネエは黑い着物を着て、揃目正しい假髪をかぶり、眞面目な重味のある樣子に、聰明な思慮深い擧動をしてゐて隨分廣い醫學上植物學上の知識を有つてゐる上に、分科大學長の愛顧を得てゐるから、植物園設置の計畫が實現されたならば、彼が植物學の帝室實習教師の職を滿足に充たすことはなか〳〵確實な望みであつた。そしてグロッシイはその計畫に實際賛成して、それを自分の計畫のやうに思ひなし、平和が克復して、計畫が有用な事物に就いて考へられ、何程かの經費がその實現にまで支出される時機を待つて、それを宮廷へ出願することにした。

ところが、その實現が、私がその爲めに生れて來たと自ら信じてゐたところの植物學に私を專念ならしめるであらうと思つたこの計畫が、かの思ひ懸けない運命の打擊のために打壞されてしまつた。この極めて立派に組立てられた設計さへも打壞されてしまつた。私はだん〳〵と人間の苦艱の一例になるべく定められてゐたのである。私をかやう

な非常なる試練にまで呼んだところの神意は、私がその試練を通過して行くのを妨げるあらゆる物を手づから取り除いたのだとも云つてよからう。あるとき、アネエはジェニピイと云ふ植物を採りに高山に向つて遠足を企てた。これはアルプスの連山でなければ生えてゐない珍らしい植物であつて、グロッシイ氏が欲しがつてゐたのである。その爲めにこの可哀さうな青年は大熱に冒されて、肋膜炎に罹つてしまつた。そして丁度この病氣の特効藥と云はれてゐるそのジェニピイさへも彼を恢復させる事が出來なかつた。確かに卓越した名醫であつたグロッシイの醫術も、「お母さん」と私との誠心籠めた介抱も無駄になつて、彼はその五日目に烈しい知死期の苦惱の後に我々の腕に抱かれたまゝ息を引き取つてしまつた。私だけは彼の死ぬ迄力を附けてやつて、苦痛の呻きのもとに、また心を等しうした信念をもつて、彼と一緒に祈つてやつたのであるから、彼にして尙それを理解する事が出來たならば、私の激勵は彼の慰めになつたに違ひない。かうして私は私の一生のうち最も信頼してゐた友人を失つた。彼は尊敬すべき卓越した人物であつた。天與の才能が教育の補ひをしてゐた。つまらない身分に居ながらも、偉人のあらゆる德に近づいてゐた。然しさうした人物として世間から認められるためには、より長い生涯と適當な身分とが必要であつたらうと思ふ。

その翌日、私は深く且つ打ち解けた哀愁の中に「お母さん」と彼の話をしてゐたが、その話の間に突然恥づべき卑しい考が私に起つた。彼の遺物、とりわけ私の目についてゐた立派な黑い上衣が自分の物になつたと云ふ考である。私はさう考へると直ぐ話してしまつた。彼女に對しては考へてゐるのも口に出して云ふのも私には同じ事だつたからである。利己心を絶した事と精神の高貴な事とが故人の長所であつたゞけに、この私の卑しいさもしい言葉は、彼女の受けた損失を彼女にこの上もなく痛切に感じさせた。可哀さうな婦人は私には何の返事もしないで、顏をそむけて泣き始めた。あゝ得易からざる貴き涙よ！　その涙は私にはよく響いて、悉く私の胸に流れ込んだ。そして殘る隈なく私の胸から賤しい恥づべき考を洗ひ流してしまつた。その時以來、かやうな考へは、またと再び私の胸に起らなくなつた。

この損失は「お母さん」に苦惱と共に不利益を齎した。この時以來彼女の仕事は下り坂になり出した。アネエは細かい事に氣の附く几帳面な男であつて、その女主人の家の整頓を附けてゐた。皆彼のよく氣の附くのに恐れをなして、浪費は輕減されてゐた。彼女自身も彼の非難を恐れて、その浪費の傾向を慎むように努めてゐた。彼女は彼の愛情にのみ滿足せず、また彼の尊敬をも失ふまいと思つたのだ。

彼女は自分の物でも他の物でもどし〳〵費ひ果す自分に對して、彼が時々正當な非難を加へるのが恐かつた。私も彼と同じ考だつたから、口に出して忠告をする事もあつたけれど、私は彼と同じやうな影響を彼女に及ぼすことが出來なかつた。私の忠告は彼程に彼女に對して耐久力を持たなかつた。彼のなくなつた今では、私がどうしても彼の後任にならなければならなかつたが、私はそれには適任者でもなく、又さうなりたいとも思はなかつた。引き受けはしたが至らぬ勝ちであつた。私はよく氣の附く方でない上にあまりに內氣であつた。ひそかに自ら責めながらも萬事したいやうにさせてしまふと云ふ方であつた。尤もアネエと同じくらゐの信用は得てゐたけれど、同じくらゐの尊敬は得られなかつた。私は不秩序に氣が附くと嘆息しては悲しんだけれど耳を傾けられはしなかつた。道理を正してゆく權利を持つにしては私はあまりに若く、あまりに浮々してゐた。私が執事の役目を取らうとすると「お母さん」はそつと私の頰を撫でゝ、私を小さなメントオル（先生）と呼んで、私をまた元の役割りに引戻してしまつた。

私は今執事の職分として收入と支出との不權衡に氣が附いて見ると、かうして不秩序にしてゐる中に、やがては彼女の陷らなければならぬ非常な困窮の豫覺が私に激しい印象を與へた。その後始終私の心中に現はれた吝嗇の傾同はこの時分に得たものである。私は無謀な無駄遣ひはたゞほんの一時の氣まぐれにしただけであつた。それまでと云ふものは、私は金があらうがなからうが、一切お構ひなしであつた。今では私の注意はその方に向いて財布に氣を取られがちになつた。私の吝嗇になつた原因は頗る立派なものであつた。私は實際のところ、自分の先見した破滅の場合にとて、「お母さん」の爲めにいくらかの財產を殘して置かうと考へたばかりであつた。私は債主等が彼女の年金を取り上げてしまひはせぬか、年金が停止されはせぬかと心配をして、そんな場合には私の貯めた小錢が大變彼女の助けになるだらうと自分の狹い量見で思ひ込んでしまつた。けれどもその金を蓄めるのには、彼女に知れぬやうにしなければならなかつた。と云ふのは彼女はいつも金に窮してゐるから、この少しばかりの貯金を見附けられては何にもならないからである。私はそれ故彼處此處と隱し場所を求めては、其處にいくらかの金貨を隱して置き、彼女の足元に投げ出すべき時機まで段々と殖やして行かうと云ふ望みであつた。けれども隱し場所の選擇がへまだつたので、いつも彼女に見附けられてしまつた。彼女は私に、それを見附けたのを分らせようとて、私の隱して置いた金を取つて、その代りに一層澤山の金を置いた。私は酷く氣恥かしくなつてこの小さな

寶を再び共同の金庫に投げ込んで置いた。すると早速彼女はその金を私の爲めに遣つてやるとて、私に肌着やその外銀造りの劍や時計や、さうしたやうな物を買つてくれた。

こつそり貯金なんか、とても出來ないし、また出來たところで彼女にはあまり有難くもない程の金高だし、と固く信じて來たものだから、私は彼女が非常な困苦に陷つて最早私の世話をする事が出來なくなるや否や、自らその不成功を恐れてはゐたけれど、彼女の生計のために骨を折る事の出來る身分になる外には道がないと、とう〳〵考へるやうになつた。私は自分の嗜好にまかせて計畫を立てたので、愚かにも音樂によつて幸福を握り當てようと思ひ立つた。モティイヴとメロディとが頭に一杯になつてしまつて、私は直ぐもうこれを旨く利用する事が出來さへすれば、自分は正しい道を踏んで大家となるであらう、近代のオルフェウスとなつて、その樂聲でもつて祕露のあらゆる寶を吸ひ寄せるであらうと信じてゐた。樂譜はかなり樂に讀めるやうになつてゐたから、今では作曲を學ぶのが最も必要な事であつた。困難なのは適當の教師を見出す一事であつた。私の持つてゐるラモオだけでは自習を續けて行く事は出來ないと思つたし、またル・メエトルが旅立ちしてからは、サヴォアの何處にもいくらか和聲學の知識のある者は一人もゐなかつたからである。

こゝに於て又かの前後撞着が認められる。これは私の生涯に於て屢々現れたものであつて、また屢々私が目懸けて進まうとする目的から私を遠ざけたものである。ヴァンチュウルはよくアベエ・ブランシャアルの事を私に話して聞かせた。この人は彼の作曲の先生で、極めてすぐれた天分を有つた人で、當時ブザンソンの大寺院の樂師であつた。今ではヴェルサイユの殿堂づきになつてゐる。私はアベエ・ブランシャアルに教へを受けにブザンソンへ行かうと思ひ立つた。この考へは愚かならぬ考のやうに思はれたので、到頭「お母さん」をも承知させる事が出來た。其處で「お母さん」は私の一寸した旅立ちの用意を始めて、例の何事にも免れない濫費をやつた。私は彼女の破産を防ぎ彼女の濫費の結果を將來に償はうと始終念頭にかけてゐながらも、こんな具合でまづ八百フランの支出を彼女にさせるに至つた。私はかうして彼女の破滅を防がうと思ひ立つた爲めに、却つてそれを早めたのであつた。かやうにこの行動は愚かなことであつたけれども、「お母さん」も共にもうすつかり眩惑してしまつてゐた。我々は二人ながら、私の辛勞が彼女の爲めになり、彼女の辛勞が私の爲めになるものと信じてゐた。

私はヴァンチュウルがまだアヌシイにゐるものと思つてゐたので、彼にアベエ・ブランシャアルに宛てゝ紹介狀を書いて貰ふ心算であつた。ところが彼はもう其處にはゐなかつた。で、彼の居所を穿鑿する事を止めにして、彼が私に殘して置いた彼が自筆で書いたその作曲四部祈禱歌を紹介狀の代りにしようと思つて、それを持つてブザンソンへ出發した。途中ジュネエヴでは親戚の者を訪ねたり、ニョンでは父に逢つた。父は常時のやうに私を迎へてくれて、荷物を後から送つてやらうと云つた。馬で行くことゝして、荷物は後になつたからである。ブザンソンへ到着した。アベエ・ブランシャアルは私を歡迎してくれて、教へる事を承諾した上で、自分の出來る事なら何でも助けてやると云つてくれた。それで我々は稽古を始める事になつた。その時父から手紙が來た。私の荷物が瑞西の國境のルウスにある佛蘭西の稅關に差押へられ沒收されたと云ふのである。この報知に吃驚して、私はブザンソンでもうこしらへてゐた知人によつてこの沒收の原因を審かにしようと努めた。私は禁制の品物を持つてゐた覺えがないので、この專斷がどんな口實で爲されたか想像も附かなかつた。遂にその原因が分つた。あまり不思議な事だから、此處で話さずにはゐられない。

私はシャンベリイで年寄りのリヨン人でヂュヴィヴィエと云ふ名の極めて性質の善い人と知り合ひになつた。この人は攝政時代に旅行券局の一員になつてゐたが、この椅子を失つてからは土地調査の役目に就いてゐた。彼は上流社會にゐた人の事とて、才能もあり、知識もあり、人柄も親切で丁寧で、且つ音樂の心得もあつた。それに二人は一緒の事務室にゐたから、粗野な人間共の間にあつて、特別の深い交りを結んでゐた。彼は矢張り巴里と聯絡があつたので、それに依つて巴里の一寸した出來事や、その日〳〵の話の種やを耳にした。それは突然何故とも知れず人の口の端に上つた。また何時とも知れず消えて失ひ、その話をしなくなれば、もう再び思ひ出しもしないやうな噂話である。私は、時折彼を「お母さん」の家に食事に連れて行つてやつたので、彼は幾らか私の機嫌を取るやうになつて、氣を晴らす爲めに馬鹿なものを私に讀ませようとした。けれども私はそれに對して常に嫌惡の念を抱いてゐたので、一生の間かうした種類のものを自分一人で讀むやうにはなれなかつた。そして彼の氣を惡くしない爲めに、その紙ぎれを衣囊の中に入れてしまつて、何かの役に立つ時に使つてやらうと思つてゐた。運惡くこの呪ふべき紙片の一枚が、國境で稅關吏に稅を取られまいとて二三度着た新しい上衣の胸の衣囊に殘つてゐたのだ。その紙片の中にはラシイヌの『ミトリダアト』の美しい一段の狂擬詩がジャンセニスト流の見識でもつてかなり無味乾燥に書いてあつた。私はその詩を十行と讀まないで例の健忘性で衣囊の中に入れて置いたのであつた。私の所有物の沒收された原因は、即ちこれであつ

た。稅關吏等は私の荷物の內容の目錄をつくり、それに官吏風に鹿爪らしく文字を使つた調書を附して、この原稿は佛蘭西で印刷し頒布しようとてジュネエヴから持つて來たものだと云つて、神と敎會との敵に對して熱烈な攻擊を加へ、この兇惡な企圖の實行を妨げ得た自分達の敬虔な警戒を自讃してゐた。彼等が私の肌衣までも異敎臭く思つたのは疑を容れない。と云ふのはこの恐るべき紙片の爲めに一切の物は沒收されて、私の荷物についてはその後返還はおろか、消息さへも聞くところがなかつたからである。稅關吏に當つて見ると、報告書や說明書や證明書や請願書やをいろ〳〵と要求したので、私はもう途方に暮れてしまつて、止むを得ず殘らず放棄してしまふ事にした。このルウスの稅關の調書を保存して置かなかつたのはまことに殘念な事であつた。あれを殘して置いたなら、この著の記錄の中に收めて特に光彩を放つたであらうに。

この損失がアベエ・ブランシャアルの敎授も受けないで直ぐにシャンベリイに歸るようにと私を强ひた。私は萬事をよく考へて見て、不運があらゆる私の企圖に附纏つてゐるのに氣が附いたので、只これからは「お母さん」と一緒に居て、彼女と危險を共にし、なるやうにしかならぬ未來の爲めに無益な心配を最早すまいと決心した。彼女はまるで私が寶物でも持つて歸つたかのやうに私を迎へてくれ、私の無くした着物をだん〳〵とまた作つてくれた。そして私の不幸は私にも彼女にも大なる打擊ではあつたけれど、その起つた時と殆んど同樣の速度で忘れられてしまつた。

私はこの不幸の爲めに音樂上の計畫にはより冷淡になつたけれど、例のラモオだけは絕えず勉强してゐた。そして非常な勉勵ののち、遂にそれに對する理解も出來、且つまた幾つかの作曲の試みをするやうになつた。そしてその試みの成功は私を元氣づけた。アントルモン侯爵の令息のベルガルド伯爵がアウグスト王の崩御後ドレスデンから歸つて來た。彼は長らく巴里に居た人で、非常な音樂好きで、殊にラモオの音樂には眞實の熱情を抱いてゐた。彼の兄弟のナンジス伯はヴァイオリンを彈き、彼の姉妹のラ・ツウル伯爵夫人は少し歌が唄へた。その爲めにシャンベリイでは音樂が流行り出し、一種の公開音樂會が開かれて、最初その指揮が私に委ねられる筈になつた。けれども間もなくそれが私の力には餘る事が分つて、他人に委託された。もつとも私は自作の幾つかの小作曲を持ち出す事は怠らなかつた。その中で或る合唱歌は大變皆を敬服させた。それは傑作とは云へなかつたが、人が私に豫期してゐなかつた淸新な頗る效果を有するメロディが一貫してゐたのだ。かの紳士連はあんなに樂譜もよくは讀めない私が兎も角作曲が出來ると云ふ事を信じ得なかつた。彼等は私が他人の作から盜

んで來る事を疑はなかつた。その眞僞を確めようとて、或る朝ナンジス伯がクレランボオの合唱曲を携へて私を訪ねて來て、これを一層うまく歌へるようにと調子を變へて見たところが、それがこの樂器に合はなくなつたので、別の低音を書いてくれまいかとの事だつた。私がこれは大變な仕事で、卽座に出來はしないと答へる、彼は私が當惑して口實をまうけるのだらうと思つたか、ぢやせめて吟朗調の低音でも書いてくれと迫るやうに云つた。それで私は書いては見たが、勿論缺點だらけだ。一體私は何事でも旨くやらうと思へば、無干涉と自由とを要したからだ。けれども規則通りには出來た、それに彼の目前でしたのであるから、彼は私が作曲の初步の原理の知識を有してゐる事を疑ふ事は出來なかつた。かくて私は、自分の女生徒達を失はないですんだ。けれども音樂會を催すのに、私を要しなくなつたのに氣附いたので、音樂に對しては、聊か冷淡になつて來た。

およそその時分に和議が結ばれて、佛蘭西軍は連山を越えて歸つて來た。澤山の士官等が「お母さん」を訪ねて來た。その中にはオルレアン聯隊の大佐で後にジュネエヴの公使になり、最後に佛蘭西の元帥になつたロオトレエク伯爵もあつた。「お母さん」はこの人に私を紹介してくれた。「お母さん」の話を聞いて、彼は私に非常な興味を感じたらしく、いろ〳〵と約束してくれた。けれども彼は私がもうその必要のなくなつた彼の晩年に至つてやつとそれを思ひ出した。同じ時にチュランの當時の公使の息子であつたサンネクテル侯爵と云ふ靑年もシャンベリイを通過した。彼はマントン夫人の許で食事をしてゐたが、その日私も彼女の許で食事をした。食後、音樂の話が出た。彼は非常な音樂通であつた。エフタと云ふ歌劇は當時新しい流行であつたので、彼はその話をして本を取り寄せた。彼がこの歌劇を自分と一緒に唄つて見ようと持ちかけた時、私は身體がぶるぶるッとした。彼が本を開けると、其處は丁度有名な二部合唱にとて書かれた場所であつた。

天も地も地獄さへも、總てみな
その前にわなゝけり、

彼は私に訊いた。「君は幾音部を唱ひますね？ 私はこの六音部とも唱はうと思ふ。」私はまだかうした佛蘭西人の法螺には慣れてゐなかつたので、私も時々種々の音律表をどうかかうか讀んでゐたけれど、同じ人が同時に六部も、いやほんの二部でさへも歌へると云ふのは理解しがたい事であつた。音樂の練習の折りに、易々と一音部から他音部へ移つて行き、同時に全音律表に目を走らせるくらゐ私に困難な事はなかつた。私の樣子によつて、サンネクテル侯は私が音樂には何の心得もないものと思ひ込んだに違ひな